

# 現代ロシア SF 人名事典

宮風 耕治 編著



## まえがき

本来は事典というものは充実した研究の蓄積のうえに、その成果を広く社会に還元するために編纂されるべきものであって、その意味で事典はその時点での研究水準の到達点を示すものでもあろう。しかしながら、日本における現代ロシア SF の紹介の状況を考えると、筆者自身の経験から言っても、現代ロシアの SF 的作品について興味はあるけれども、自分で読みたいとは思っても、現代ロシア SF 界にはどのような作家がおり、どのような作品から読んでいけばいいのかわからないということが多かった。もし、現代ロシア SF のおおまかな輪郭がわかるような簡単な手引書ないし事典のようなものがあれば、こうした人の背中を押すことができるのではないかと考え、無謀にも事典の作成にとりかかった次第である。

ロシア SF については 18 世紀の先駆的な作品も含めればすでに 200 年以上の歴史がある。さらに、20 世紀のロシア SF の歴史はロシア革命前の時代を前史として、その後は大きく 4 つの時代に区分される。まず、ロシア革命後のユートピア的な気分の高揚を背景にした 1920 年代の「第一の波」。スターリン時代の SF への攻撃を経て、1940 年代後半から 1950 年代前半にかけて開花したきわめて特異なプロパガンダ的、生産小説的な作品群の「第二の波」。エフレーモフらが「第二の波」を克服して SF を再興し、ストルガツキイ兄弟らの作品を筆頭にソビエト SF が世界的に注目を浴びた 1960 年代の「第三の波」。そして、「雪どけ」の終わりとともに冷えこんだ 1970 年代の雌伏の時代を経て、ゴーゴリやサルティコフ＝シチェドリン、ブルガーコフらが得意とした、幻想的手法を使って現実の姿を描き出すという文学的伝統を復活させた 1980 年代の「第四の波」である。現在はさらに世代交代が進み、「第四の波」以降の新しい作家も活躍を始めている。ソビエト時代には「SF」は「科学的ファンタスチカ」«Научная фантастика»（略すと«НФ»）と呼ぶのが通例であったが、今では「科学的ファンタスチカ」は過去の言葉となり、単に「ファンタスチカ」«фантастика»と呼ばれるようになった。

本事典ではロシア SF が世界的に注目された 1960 年代の「第三の波」以後を現代のロシア・ファンタスチカが直接に関係している時代として扱い、アレクサンドル・ベリャーエフ、アレクサンドル・グリーン、アレクセイ・トルストイ、ミハイル・ブルガーコフ、エヴゲーニイ・ザミャーチンといった 20 世紀前半の重要な作家については項を立てていない。こうした作家についてはすでに多くの研究が進められており、筆者には力が及ばない。対照的に 20 世紀後半の現代ロシア SF の関係者は日本ではほとんど知られていないため、力を注いだものである。19 世紀や 20 世紀前半の作品に意味がないと考えているわけでは全くないし、実際にそうした古典的作品が現代の SF に与えている影響も絶大なものである。特にブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』は、国内で発表の禁を解かれた 1960 年代にはまさに同時代の文学として受容されたのであって、『巨匠とマルガリータ』抜きの現代ロシア SF 文学史は

存在しえない。しかし、本事典は人物事典ということであるので、20世紀前半に物故した作家や活動の中心が20世紀前半であった人物は除いた。こうした部分については別の仕事として強く待望されるものである。一方で、「第三の波」は「第二の波」を克服する形で興ったため、カザンツェフやネムツォフなど「第二の波」に属する作家については取り上げた人物もいる。

参考文献としては、主としてガーコフ編の《Энциклопедия фантастики》(Минск, ИКО Галаксиас, 1995)に依拠したが、この人名事典は1990年以降にデビューした作家はほとんど取り上げられていないため、多くの現代作家については本やウェブ書評などの著者紹介などから情報を収集して執筆せざるをえなかった。そのなかでもセルゲイ・チュプリニンが編んだ《Русская литература сегодня. Путеводитель》(Москва, Олма-Пресс, 2003)は第一版が刊行された後にも改訂が重ねられてさまざまな内容の版が出ており、今回は改訂版である《Русская литература сегодня. Большой путеводитель》(Москва, Время, 2007)も参照した。同じ著者による《Русская литература сегодня. Зарубежье》(Москва, Время, 2008)は文字通りロシア国外の作家、つまりウクライナをはじめとする世界中のロシア語作家を、かなり無名の作家の伝記的情報まで収録しており、参考になった。また、SF専門誌『イエースリ』《Если》の編集者であるエヴゲーニイ・ハリトーノフによる《Наука о фантастическом》(Москва, Мануфактура, 2001)には、SF研究に貢献した人物の伝記的情報が多数収録されており、結果としてSFファンの情報が充実している。SFファンダムの情報については、《История фэндомов》というサイト(<http://fandom.ruSF.ru/>)があり、ソ連時代の各種SFコンヴェンションの記録や写真などを多数閲覧することができる。ハリトーノフによる著作もこのサイトで閲覧できる。ウェブ上の資料としてはほかに、《Архив фантастики》というサイト(<http://archivSF.narod.ru/index.htm>)が書誌情報や人物の伝記を中心に充実している。また、《Лаборатория Фантастики》というサイト(<http://fantlab.ru/>)は、ファンによって編纂された書誌情報のほか、各作品へのファンの評価などが閲覧できるなど、非常に充実している。ほかにはSF専門誌『イエースリ』の巻末の掲載作家紹介記事や各種アンソロジー巻末の作家紹介記事などが参考になった。

膨大な資料を網羅的にあたることができたわけではないが、現代ロシアSFの背景には思いがけない交友関係があり、広大な世界があることをあらためて認識した。そうした思いから、作家だけではなく、編集者やファンも積極的に取り上げた。作家以外の人物を積極的に収録した事典はおそらく初めてであり、本事典の大きな特色である。

思いあまって作成にとりかかったものゆえに、事実関係等について思わぬ見落としや誤りもあると思われるが、読者の皆様の助言によって、今後も折を見て内容を更新し、改善していくべきと考えている。本事典が日本におけるロシアSFの紹介にとって意義あるものとなることを心から祈っている。

## アイトマトフ チンギス・トレクロヴィチ

Айтматов, Чингиз Торекулович(1928～2008)

キルギス出身のロシア語作家。キルギス共和国のシェケル村で生まれる。父親は1937年に逮捕され、翌年銃殺された。フルンゼのキルギス農業大学に入学し、1953年に卒業。1956年にモスクワのゴーリキイ文学大学に入学した。

小説の発表は1952年から始めた。1958年の中編《Джамиля》(邦題『絵の中の二人』)で認められ、1963年にレーニン文学賞を受賞。キルギスを舞台にした写実主義的作品で知られるが、1980年に発表された長編《И дольше века длится день》(邦題『一世紀より長い一日』)はSF的設定を導入しつつ民族問題を取り上げた、スケールの大きな彼の代表作である。長編《Тавро Кассандры》(邦題『カッサンドラの烙印』)(1994)は比較的ストレートなSF作品である。彼はSF的要素も作品に取り入れたが、その使い方自体は素朴であったと言える。長編《Плаха》(邦題『処刑台』)(1986)にはSF的要素はないが、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』の影響を受けたと思われる、イエスとピラトの対話の場面が有名であり、信仰の問題を正面から取り上げて発表当時は大きな反響を呼び起こした。

ペレストロイカ期には政治活動にも積極的に携わった。1990年からは駐ルクセンブルグ大使を務めた。

## アクションノフ ワシーリイ・パヴロヴィチ

Аксенов, Василий Павлович (1932～2009)

20世紀後半のロシア文学を代表する作家のひとり。カザン生まれ。共産党員の家庭に生まれる。母は、のちに作家となり、収容所体験を綴った《Крутой маршрут》(邦題『明るい夜暗い昼』)(1967)を著したエヴゲニヤ・ギンズブルグである。1937年に両親が逮捕され、苦難の日々を送る。1956年にレニングラード医科大学を卒業し、医師としてカレリアや北部ロシアで勤務する。1960年から専業作家となり、中編《Коллеги》(邦題『同期生』)(1960)で注目を集め、長編《Звездный билет》(邦題『星の切符』)(1961)で、一躍、雪どけ期の新時代の文学の旗手として注目を浴びる。その後も文芸誌《Юность》などを舞台に精力的に作品を発表するが、70年代になると次第に作品の発表の機会を失い、1977年から国外で作品を発表し始める。1979年にビートフやイスカデル、アフマドゥーリナ、ポポフ、ヴィクトル・エロフエエフらと編集した文集《Метрополь》をアメリカで出版した。この文集の刊行でポポフとエロフエエフが作家同盟から除名され、アクションノフも1980年にアメリカへ亡命した。

1960年代半ばからSF的な実験的要素を作品に取りこむ傾向が目立ってきた。そうした傾向の作品として、1965年に執筆された中編《Стальная птица》や1973年に執筆された中編《Золотая наша Железка》などがある。特にSF作品として注目されるのは1979年に執筆された長編《Остров Крым》である。クリミアが半島ではなくて島であり、ロシア革命のあとでも社会主義化されずに独立国家として生き延びて資本主義化したという設定で書かれたこの長編は諷刺色豊かな歴史改変小説の古典的作品とみなされている。《Остров Крым》は1981年にアメリカで出版されたが、ソ連国内では1990年ようやく刊行された。この作品は1990年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞した。

亡命中も執筆活動は旺盛で、長編《Желток яйца》(1989)は英語で執筆された。

1992年にはスターリン時代の知識人の一家を描いた三部作の大河長編《Московская сага》を完成させた。この作品にはSF的要素はないが、2004年にはテレビドラマ化されて大きな人気を博した。ロシア・プッカー賞を受賞した長編《Вольтерьянцы и вольтерьянки》(2004)や長編《Кесарево свечение》(2001)や長編《Москва Ква-Ква》(2006)などの晩年の作品には実験的な要素も強く、ソ連崩壊後も健筆ぶりを示した。

## アシマリナ ヤナ・スタニスラヴォヴナ

Ашмарина, Яна Станиславовна(1963～2015)

サンクト・ペテルブルグ在住のイラストレーター、編集者。バクーに生まれ、エカテリンブルグで絵を学んだ。80年代末から90年代初頭にかけて、ストルガツキイ兄弟や「第四の波」の作家たちの作品の挿絵を数多く描き、ハインラインの『夏への扉』、トールキン、ル＝グウィン、ゼラズニイなどの翻訳作品の挿絵も数多く手がけた。イラストレーター部門でインタープレスコン賞や遍歴者賞を受賞している。

編集者としてはサンクト・ペテルブルグの出版社テラ・ファンタスタカ《Terra Fantastica》の社員として、数多くの企画に携わり、「X-file」のロシア版ノヴェライゼーションを担当した。翻訳家としての活躍もある。

## アスタホワ ナターリヤ・ワシリエヴナ

Астахова, Наталья Васильевна(1953～)

シンフェローポリのSF作家。モスクワ国立大学のジャーナリスト学部を卒業。1988年からは地方紙《Крымская правда》に勤める。マレエフカのセミナーにも参加した。ファンタジー的な作風で知られる。作品集として《Письма с Земли》(1992)がある。

## アドミラルスキイ アレクサンドル・ミハイロヴィチ

Адмиральский, Александр Михайлович(1934~1971)

レニングラードの作家。レーニンコムソモールの50周年記念国際コンクールで第2席となった唯一のSF短編「Последнее превращение Урга」(別題「Гений」)(邦題『天才』)(1968)によって知られる。

レニングラードのゲルツェン記念国立教育大の文学部に学び、文学サークル「Дерзание」で活躍。その後、文芸誌「Звезда」でも働いた。

父は1937年に逮捕されたが、父の生存を信じていた彼は、学生時代にカザフスタンの収容所まで父を探しに行ったが、ついに見つけることはできなかった。母の死も重なり、「Дерзание」を去ったこともあってか、不遇のまま自殺して生涯を終えた。ほかの著作にセルゲイ・ペロフとの共著で、出版人ピョートル・ソイキンの生涯を描いた「Рыцарь книги」(1970)がある。

## アニシモフ セルゲイ

Анисимов, Сергей(1973~ )

レニングラード医科専門学校を卒業し、パヴロフ記念サンクト・ペテルブルグ国立医科大学で学ぶ。第二次世界大戦を舞台にした歴史改変小説の長編「Вариант «Бис»」(2003)を発表し、一躍注目を浴びて2004年のインタープレス賞新人賞を受賞。続編として長編「Год мертвой змеи」(2006)を発表しているが、作品数はあまり多くはない。

## アフアナシエフ ロマン・セルゲエヴィチ

Афанасьев, Роман Сергеевич(1976~ )

SF作家。モスクワ近郊のナロ・フォミンスクに生まれる。現在はシステムアドミニストレーターとして働いている。2000年に短編「Эвелин」がSF雑誌「Порог」に掲載されてデビューした。2003年には「Астрал」で長編デビューを果たし、これがさらに長編三部作となる。さらに2006年からは長編「Знак чудовища」に始まるファンタジー三部作を発表。デビュー当初は短編も多く執筆していたが、現在はアーバンファンタジーの長編を中心とする作家として活躍を続けている。近作に長編「Охотники ночного города」(2009)などがある。

## アフマーノフ ミハイル

Ахманов, Михаил(1945~ )

サンクト・ペテルブルグ在住のSF作家。本名はミハイル・セルゲエヴィチ・ナフマンソン(Михаил Сергеевич Нахмансон)である。レニングラードに生まれる。父は軍医であった。レニングラード国立大学の物理学科に入学し、量子論を専攻する。しかし、大学には職がなくレントゲン機器の製造部門に職を得る。英米のSFに興味を持ち、90年代初めにはアン・マキャフリーのパーンの竜騎士シリーズやファーマーのリバーワールドシリーズの作品を翻訳した。コナンシリーズに影響を受けて、90年代からファンタジーを書き始める。1994年に第一長編「Лотосы Юга」を発表すると、ジェフリー・ロード原作のリチャード・ブレイドシリーズのオリジナル長編を次々と1994年から95年の間に発表した。1995年から96年にかけてはコナンシリーズのオリジナルの続編をマイクル・メンソン(マイкл Мэнсон)名義で次々と発表。ほかにもシリーズものの長編を量産し、2009年までに発表した長編は40作を超え、中堅の作家として活躍を続けている。

## アブラーモフ アレクサンドル・イワノヴィチ

Абрамов, Александр Иванович(1900~1985)

## アブラーモフ セルゲイ・アレクサンドロヴィチ

Абрамов, Сергей Александрович(1944~ )

セルゲイはアレクサンドルの実子。父子共作で1960年代に活躍したSF作家。

父のアレクサンドルはモスクワ生まれ。1924年に中編「Гибель шахмат」を執筆。主に文芸評論家、演劇評論家として活動し、写実主義的な小説もいくつかある。

息子のセルゲイはモスクワ生まれ。1964年から父子での共作が始まり、「Хожение за три мира」(1966)が父子共作の第一作である。初期には自然科学的テーマを主に扱った。銀河系外の文明とのコンタクトテーマを扱った長編三部作「Всадник ниоткуда」(1967)、「Рай без памяти」(1968)、「Серебряный вариант」(1978)が代表作である。父は一種の編集者的な立場で息子に接していたようであるが、70年代に入るとセルゲイ単独で作品を執筆するようになり、作風の幅を広げた。1978年の長編「Серебряный вариант」を最後に父子のコンビは解消された。

その後も、セルゲイは単独で作品をいくつか発表しており、ファンタジー的な傾向の中編「Выше Радуги」(1980)、1980年代から90年代の作品を収録した作品集「Требуется чудо」(1997)などがあるが、ソ連崩壊後はSF作家としてはほとんど活動していない。一方で、80年代末からはビジネスの世界でも活動し始め、1997年からはモスクワ市の通信マスコミ委員会の副議長を務めるなど行政機関にも進出。2000年からは大統領府にも進み、大統領府内政総局の第一次長などを務めるなど出世を重ねた。さらに投資コンサルタントとしても活躍している。

2000年以降、セルゲイは息子のアルチョムと父子で共同執筆している。

## アムヌエリ パーヴェル（ペサフ）・ラファイロヴィチ

Амнуэль, Павел(Песах) Рафаилович(1944～)

バクー出身の作家。アゼルバイジャン国立大学で天体物理学を専攻し、シェマンスキイ天体観測所やアゼルバイジャン科学アカデミー物理研究所で勤務した。中性子星関連の研究者としても活躍した。SFへのデビューは1959年と非常に早く、短編《Икаррия Альфа》が科学啓蒙雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》誌に掲載された。1990年にイスラエルへ移住し、当初はテルアビブの研究所に勤めるなど自分の専門の仕事が続けていたが、1995年からは小説家、科学ジャーナリストとして専業作家となり、クルーゲルとともにロシア語のSF誌《Миры》の創刊にも携わった。クルーゲルなどと並んで、イスラエルで精力的にロシア語でSF作品を執筆する貴重な存在である。2012年のアエリータ賞を受賞。

ソビエトSF界では珍しいハードSFの書き手であり、アリトフの後継者を自認している。1960年代後半からSFの執筆を旺盛に続けていたが、初めて刊行された単行本は作品集《Сегодня, завтра и всегда》(1984)である。その他の作品集に《Капли звездного света》(1990)、《Все разумное》(2002)、《Что будет, то и будет》(2002)、レムの泰平ヨシシリーズを引き継いだ連作集《Странные приключения Ионы Шекета》(2005)などがあり、長編の代表作としては《Люди Кода》(1997)や《Тривселенная》(2000)などがある。ロシア国外でロシア語SFの執筆活動が続けた功績に対して、《Люди Кода》が出版された1997年のファンコン賞を受賞した。

近年も中短編を中心にSF雑誌に精力的に作品を発表しており、中編《Что-нибудь светлое》(2009)は2010年のポルタル賞中編部門を受賞した。

2000年にシニャーキンの中編《Монах на краю Земли》をめぐって、ルキーンとのあいだで激しい論争がSF誌『イエスリ』《Если》誌上でたたかわされた。アムヌエリはシニャーキンの作品のアイデアに科学性がないことを問題とした。アムヌエリは「第三の波」の世代からは少し遅れて登場したが、「第三の波」の一部の作家が持っていた科学への思いを受け継いでおり、そうした立場が現代の状況では逆に希少なものになっている。

## アリトフ ゲンリフ・サウロヴィチ

Альтов, Генрих Саулович(1926～1998)

「第三の波」を代表する作家、発明家。本名はゲンリフ・サウロヴィチ・アリトシュレル(Генрих Саулович Альтшуллер)である。タシケントに生まれ、1931年にバクーへ移る。アゼルバイジャン工業大学を卒業後、1944年に志願して軍務につく。戦後もバクーで勤務を続けるが、1948年にスターリンにソ連の発明の現状を憂える手紙を送ると、1950年に自身は逮捕されて25年の自由剥奪刑を受けた。しかし、1954年には釈放されてバクーに戻り、ジャーナリストとなった。SFへのデビューはヴァチェスラフ・フェリツィンと共作した短編《Зиночка》(1957)である。1990年にバクーで紛争が激化した後、カレリアのペトロザヴォツクに移った。同じくSF作家であるワレンチナ・ジュラヴリョワは妻である。

SF作家としての活躍は1960年代に集中している。科学技術をわが手におさめた人類の宇宙への進出を詩情高らかに謳い上げた作品群は1960年代のソビエトSFの一種の典型でもあった。初期の代表的な作品は作品集《Легенды о звездных капитанах》(1961)に収められている。ジュラヴリョワと共作した中編《Баллада о звездах》(1963)はシリウス星系の惑星での接触テーマを扱った作品だが、60年代初頭のソビエトSFを代表する作品である。中編《Порт Каменных Бурь》(邦題『石の嵐の港』)(1965)や中編《Создан для бури》(1967)も高名な作品である。こうした作品群の主人公像はギリシア神話の登場人物に比されることもある。その作品の真正の高揚感がアリトフを「第二の波」の作家たちと決定的に分かっている。

1970年代に入るとアリトフは創作から遠ざかり、《ТРИЗ-ТРТС-РТВ-ТРТЛ》という科学技術の発達の理論の構想に力を注ぐようになった。SF作品における新しいアイデアと科学技術の進歩の関連を独自の観点から評価したが、この分野ではSF作家パーヴェル・アムヌエリと協力した。

## アリーモフ イーゴリ・アレクサンドロヴィチ

Алимов, Игорь Александрович(1964～)

サンクト・ペテルブルグの東洋学者、小説家。レニングラード国立大学東洋学部を卒業し、中国文学を専攻する。1990年から91年にかけては北京大学歴史学部滞任。1992年に出版社ペテルブルグ東洋学センター《Центр Петербургское Востоковедение》の設立に参加する。ヴァチェスラフ・ルィバコフと共にホルム・ヴァン・ザイチクのパンネームで「ユーラシア・シンフォニー」《Евразийская симфония》シリーズの長編を2000年から発表し、ベストセラーとなる。その後、本名で単独作品として2003年に長編《Арторикс》を発表し、研究のかたわら、小説の執筆を続けている。

## アルビトマン ロマン・エミリエヴィチ

Арбитман, Роман Эмильевич(1962～)

1980年代末から90年代初頭にかけて活躍したSFファン、評論家で、当時は真のSF評論家と目された。サラトフに生まれ、サラトフ国立大学文学部を卒業。学校教師として勤務したり、あるいは大学で校正係として働いていた。ヴォルゴグラードのファンであるボリス・ザヴゴロドニイと親

しく、80年代中頃からは年鑑アンソロジー『エヌエフ』〈НФ〉にも評論を執筆し、ファンの熱い支持を受けた。評論集〈Живем только дважды〉(1991)は1993年のインタープレスコン賞、カタツムリ賞を受賞した。ほかに評論集〈Участь Кассандры〉があるが、当時の評論はいまも色褪せていない。

エル・エス・カーツ(P. C. Кац)の筆名で発表した評論〈История советской фантастики〉(1993)で1994年の遍歴者賞とインタープレスコン賞、カタツムリ賞を受賞した。この作品はノンフィクションの体裁をとっているが、ありえたかもしれないもうひとつのロシア SF 文学史を構想したフィクションであり、賛否合わせて非常に大きな反響を呼び起こした。一種の歴史改変評論として現在でも一部の評論家たちからは評価が高い。

1994年からはレフ・グルスキイの筆名で政治的スリラーの色彩の濃いミステリを執筆。〈Убить президента〉(1995)、「Опасность」(1995)などがある。決して、大衆的な人気を集める作家ではないが、ミステリのジャンル内では異色の、毒を持った作風として玄人筋から高い評価を受けている。1990年代には『文学新聞』〈Литературная газета〉などで活発にミステリ評論を発表した。90年代後半には SF 評論家としての活動が少なくなったが、2000年代になってから、キエフの SF 専門誌『レアリノスチ・ファンタスチキ』誌〈Реальность фантастики〉やビジュアル情報誌〈FANгастика〉に定期的な評論を執筆するなど、評論活動を再開している。1990年代中頃から2006年頃にかけて執筆した書評や評論を収めた〈Поединок крысы с мечтой〉(2007)は非常に高い評価を得ている。

最近作に作者自身がロシアの第2代大統領だったという設定で書かれた偽伝記ものの作品〈Роман Арбитман: Биография второго президента России〉(2009)があり、一部の読者に熱狂的な人気を博している。その一方で、この本の体裁が「偉人伝」シリーズの知的財産権を侵害しているとして、「偉人伝」シリーズの版元であるモロダヤ・グヴァルジヤ社〈Молодая гвардия〉が本を刊行したヴォルゴグラードの出版社〈Прин Терра〉を相手に民事訴訟を起こすなど、周囲も喧しい。

## アレーネフ ウラジーミル

Аренеф, Владимир(1978～)

キエフの小説家、評論家。本名はウラジーミル・コンスタンチノヴィチ・プジイ(Владимир Константинович Пузий)である。本名でも活発に評論活動をおこなっており、書評の執筆も多数ある。キエフ国立大学附属ジャーナリスト研究所を卒業し、SF 専門誌レアリノスチ・ファンタスチキ誌〈Реальность фантастики〉の編集部でも働いた。ファンタジー長編〈Отчаяние драконов〉(2000)でアルマダ社〈Армада〉からデビューした。この作品は続編が書かれて三部作となった。ファンタジーを中心に執筆しており、ほかに長編〈Паломничество жонглера〉(2005)がある。自作のウクライナ語への翻訳もおこなう。2004年のユーロコンの新人賞を受賞。2008年には批評家としてベリャーエフ賞を受賞した。

## アンドレーエフ キリル・コンスタンチノヴィチ

Андреев, Кирилл Константинович(1899?～1967)

ソ連時代の編集者、評論家、小説家。モスクワ生まれ。出版社〈Детская литература〉で長年にわたり編集者を務める。実作者としての観点を生かした丁寧な解説に定評があった。ジュール・ヴェルヌの生涯を扱った評伝〈Три жизни Жюль Верна〉(1960)やステイーヴンソン、コナン・ドイル、アレクサンドル・グリーンについて論じた評論集〈Искатели приключений〉(1968)などがある。年鑑アンソロジー『ファンタスチカ』〈Фантастика〉にも解説の文章をたびたび寄せ、1960年代のソビエト SF の発展に大きな役割を果たした。

## アンドロナチ イリーナ・セルゲエヴナ

Андронати, Ирина Сергеевна(1966～)

サンクト・ペテルブルグの小説家、詩人。オデッサに生まれ、オデッサ大学生物学部を卒業。1991年からサンクト・ペテルブルグ在住。90年代半ばから英米 SF の翻訳にも携わる。1999年から2000年にかけては〈X-file〉のノヴェライゼーションも担当。夫であるラザルチュークと共作でスペースオペラの長編〈За право летать〉(2002)などを執筆。2000年以降のラザルチュークの創作に大きく関わっている。ほかに詩集〈Круговорот〉(1999)などがある。

## イサンガジン マラート・ファウカトヴィチ

Исангазин, Марат Фаукатович(1959～)

1980年代に活躍したオムスクの SF ファン。オムスクに生まれる。オムスク工業大学を卒業し、さらにモスクワ国立大学のジャーナリスト学科を卒業。その後は地方紙の記者などを勤める。オムスクの SF ファンクラブ〈Алькор〉の代表として活躍する。また、ストルガツキイ兄弟のファングループ「リュデヌイ」〈Люденый〉のメンバーでもある。

## イズマイロフ アンドレイ・ナリmanoヴィチ

Измайлов, Андрей Нариманович(1953～)

サンクト・ペテルブルグの作家。バクーに生まれた。1974年にソスノヴィ・ボールに移住。レニ



ングラード国立大学ジャーナリスト学部を卒業。SF へのデビュー作は短編「Холодно-горячо」(1975)である。1979 年からボリス・ストルガツキイのセミナーに参加した。80 年代の新しい潮流を牽引した作家の一人。1989 年にモロダヤ・グヴァルジヤ社 «Молодая гвардия»のユーリイ・メドヴェデーフがストルガツキイ兄弟を誹謗中傷する小説「Протей」を発表した際には、エフレーモフの未亡人らに取材を行い、メドヴェデーフを激しく批判した評論「Туманность」(1990)を発表した。

90 年代に入るとスリラーに転じ、三部作「Русский транзит」(1992~93)の成功で一躍流行作家となった。十五作以上の長編があるが、ファンタスチカ的要素を含んだスリラーとして長編「Покровитель」(1996)、「Шапочный разбор」(1998)がある。

コネツキイやドヴラートブラをはじめとした作家たちの逸話集ともいえるべき回想録「Референт: Все, что вы хотели узнать о писателях, но боялись спросить」(2000)も興味深いが、版元のスク립トリウム社「Скриптриум」が著者の了解なく原稿を勝手に出版したとして裁判に訴え、ロシアの著作権問題に一石を投じた。これは「Русский транзит」のテレビシリーズが 1994 年に放映されたときに自分の著作権が無視されたことが背景にあったとされる。

近年は小説の創作はほとんど行っていないが、中編「Игра в ящик」(2011)で 2012 年カタツムリ賞を受賞した。

## イパトワ ナターリヤ・ボリソヴナ

Ипатова, Наталия Борисовна(1969~ )

エカテリンブルグのファンタジー作家。ウラル国立大学で数学を専攻したあと、プログラマーとして働いている。

その一方で、1995 年に中編「Красный Лис」が雑誌「Уральский следопыт」に掲載されてデビューした後は、次々とファンタジーの長編を発表し始めた。第一単行本は、長編「Большое Драконье Приключение」(1996)である。2002 年頃から相次いで長編ファンタジーを発表し、「Король-Беда и Красная Ведьма」(2002)などの長編がある。

## イワニチェンコ ユーリイ・ヤコヴレヴィチ

Иваниченко, Юрий Яковлевич(1952~ )

シンフェローポリの小説家。本名はユーリイ・ヤコヴレヴィチ・チェルネル(Юрий Яковлевич Чернер)である。最初の SF 作品は短編「Флигелек」(1983)である。SF は 1980 年代にいくつか執筆したただけだが、代表作に中編「Выборные」(1987)、中編「Стрелочники」(1989)、中編「Пик августа」(1990)などがある。90 年代に入ると SF の筆を折った。妻は SF 作家のリュドミラ・コジネツ。

## イワノヴィチ ユーリイ

Иванович, Юрий(1958~ )

スペイン在住の SF・ファンタジー作家。2004 年に長編「Мария Изабель」を発表してデビューした。人気を得たのは、2006 年に「Принцесса Звездного престола」シリーズの長編「Дорога между звезд」など 4 作の長編を発表してからである。さらにファンタジーシリーズ「Невменяемый колдун」の長編を 2007 年から発表し、同シリーズで 2009 年末までですでに 6 作の長編を発表している。執筆活動はきわめて旺盛で、2009 年には長編を 7 作も発表した。

## イワノフ アレクセイ・ヴィクトロヴィチ

Иванов, Алексей Викторович(1969~ )

ペルミの歴史小説家、SF 作家。ニージニイ・ノヴゴロドの造船技師の家庭に生まれ、ペルミで育つ。スヴェルドロフスクのウラル国立大学のジャーナリスト学科に入学したが、芸術史を専攻する。1980 年代末には小説を書き始め、ダブルレティで開かれた 1989 年のセミナーにも参加し、ルキヤネンコやワシリエフと知り合った。中編「Охота на «Большую Медведицу»」(1990)が雑誌「Уральский следопыт」に掲載されてデビューする。しかし、その後は SF 小説の執筆もやめてしまった。大学を卒業してからペルミに戻り、学校教師や記者などいくつかの職を転々とした。

1990 年代には本を刊行することができなかったが、読者の注目を集めるきっかけとなったのが、歴史小説「Сердце Пармы, или Чердынь – княгиня гор」(2003)である。この作品は当初はペルミの出版社から出たが、すぐに高い評価を受けてモスクワの出版社からも出版され、一躍出版界で注目を集めた。SF 的な要素は少なかったが SF 界からも注目を集め、2004 年のアエリータでは新人賞を獲得した。同年に発表した長編「Географ глобус пропил」も SF ではないが、非常に高い評価を受けている。さらに歴史小説の長編「Золото бунта, или Вниз по реке теснин」(2005)が 2006 年のポリシヤヤ・クニーガ賞の読者部門では一位となり、広範な読者層からの注目を集めた。また、この長編で 2006 年のポルタル賞も受賞した。初期の SF 作品を収録した短編集「Корабли и Галактика」(2004)がアーエステー社「АСТ」から刊行されている。

基本的には SF 的要素は薄く、歴史小説家と見られている。長編「Блюда и МУДО」(2007)も評価が高い。現在もペルミ在住。長編「Псоглавцы」(2011) (発表当初はアレクセイ・マルヴィン名義)と長編「Комьонити」(2012)は、カルト的な評価を得る一方で、従来の作品を歓迎する読者からの反発を招いた。

## イワノフ セルゲイ・グリゴリエヴィチ

Иванов, Сергей Григорьевич(1952～ )

ラトビアのリガの作家。モスクワ州のモノノ村に生まれ、ウクライナのニコラエフで育った。モスクワ工科大学を卒業後、リガで働く。リガでミハイロフが主宰していたセミナーに参加する。1983年のマレエフカのセミナーのほか、1985年と1988年のダブルティのセミナーに参加し、才能を認められた。初期の代表作に中編《Пока стоит Лес》(1991)やファンタジー中編《Крылья Гремящие》(1993)がある。また90年代半ばには長編を発表し、代表作として長編《Ветры империи》(1995)や長編《Железный зверь》(1996)などがある。

## ヴァレトフ ヤン

Валегов, Ян(1963～ )

ドニエプロペトロフスク生まれのSF作家。ドニエプロペトロフスク国立大学物理工学部を卒業した。小説は余技で書くだけであり、2005年に長編《Левый берег Стикса》を発表したが、大きな反響はなかった。2008年に立て続けに四冊刊行された戦争SF長編シリーズ《Ничья земля》が2009年のインタープレスコン長編部門を受賞して一躍脚光を浴びた。

## ヴェルシニン レフ・レモヴィチ

Вершинин, Лев Рэмович(1957～ )

ウクライナの小説家、政治家。オデッサに生まれ、カザン国立大学の歴史学科に学んだ。1979年にはスターリンとブレジネフへの不用意な発言がもとで大学を除籍されたが、その後はオデッサへ戻り、工場で働きながらオデッサ国立大学の夜間部へ通った。さらにモスクワ国立教育学部で学び、1982年から89年まで学校教師として勤めた。SFへのデビュー作は1986年に書かれた短編《Баллада о доблестном рыцаре Гуго》である。その後、1989年のダブルティのセミナーに参加した。1992年には第一作品集《Ушелье трех камней》が刊行された。

デカプリストの蜂起が成功して南部ロシアに共和国が成立した世界を舞台にした歴史改変小説《Первый год республики, или Хроника неудавшейся компании》(1995)で1997年の遍歴者賞中編部門を受賞。他の主要な作品に、古代ロシアを舞台とした歴史小説《Двое у подножия Вечности》(1995)や中編《Хроники неправильного завтра》(1992)を発展させた長編《Великий Сатанг》(1996)などがある。宇宙SFの二部作《Сельва не любит чужих》(1999)、《Сельва умеет ждать》(2000)は、1999年のズヴォズヌイ・モスト賞のシリーズ部門を受賞した。

このほかにも中編《Возращение короля》(1991)などの作品があるが、90年代後半から政治活動に力を注ぎ、小説の執筆は少なくなった。2000年から2007年にかけてはイスラエルで生活を送る。2004年のウクライナのオレンジ革命時の大統領選挙では国際監視団の一員となった。2007年からはスペインへ移っている。

## ヴェレル ミハイル・ヨシフォヴィチ

Веллер, Михаил Иосифович(1948～ )

現代ロシアを代表する作家のひとり。軍人の家庭に生まれ、ウクライナで生まれ、ザバイカル地方で育ち、ベラルーシで学校に通い、レニングラード国立大学で哲学を修めた。在学中の1969年にレニングラードからカムチャッカまで無銭旅行。若い頃は森林の伐採や家畜の放牧、鉄道建設などさまざまな職を転々とした。1976年秋から文学に本格的に取り組むようになった。1979年にエストニアのタリンへ移った。1980年から小説が雑誌などに掲載されるようになった。

1977年にボリス・ストルガツキイのセミナーに参加し、才能を高く評価された。マレエフカのセミナーにも参加。「奇妙な味」の短編の名手としてSF界の読者にも作品が歓迎され、1982年のヴェリーコエ・コリツオ賞を短編《Кошелек》(1982)で受賞し、1992年のカタツムリ賞短編部門を代表作《Хочу в Париж》(邦題『パリに行きたい』)(1989)で受賞。90年代初めにはターボリアリズムの潮流を代表する作家のひとりと目された。短編《Кенгавр》(1988)もケンタウルスがソ連の学校に入学して人間たちの中で生涯を送るといってぼけた味わいの作品だが、主人公の名がアレクサンドル・フィリポヴィチとあるように、アレキサンダー大王の姿が重ねられていっそう余韻を残す。他の初期作品では、短編《Тест》(1980)や短編《Все уладится》(1980)、短編《Гуру》(1987)など有名である。初期の短編が収録された第一作品集《Хочу быть дворником》(1983)や、コムナルカなどソ連的な日常生活を素材とし、一種の都市フォークロアの性格を持つ連作集《Легенды Невского проспекта》(1993)は、全体として非常に質の高い作品集である。

俗語を多用する文体はこの世代の作家の中でも際立っており、モキエンコ編の隠語辞典の文献にもヴェレルの作品があげられている。

作家活動を始めて以来、一貫して短編専門の作家であり、本人も第一作品集《Хочу быть дворником》には相当な自信を持っていたらしい。しかし、90年代初頭から長編にも力を入れ始め、第一長編《Приключения майора Звягина》(1991)も発表当時は大きな反響を呼ばなかったが、1994年に話題となり、注目を集めた。作品集《Легенды Невского проспекта》の普及版が1995年に約80万部を売る大ベストセラーとなり、続く長編《Самовар》(1996)も大きな話題を獲得し、90年代半ば頃からは現代ロシア文学を代表する存在と見られるにいたり、一般の読者からも非常に人気のある

作家となった。セルゲイ・ドヴラトフとの確執を軸に 80 年代の自己の周辺などを書いた《Ножик Сержи Довлатова》(1994) は、副題に「亡命者の長編」と記されているが、賛否合わせて非常に大きな反響を巻き起こした。

90 年代半ばからは多方面に渡って才能を発揮し、特に、エッセイ的な文章を収録した《Все о жизни》(1998)、同傾向の《Кассандра》(2002) は読者からの評価も高い。一方で SF 界からは離れて行ったと見る向きも多かったが、幻想的要素の強い長編《Ноль часов》(別題《Гонец из Пизы》)(2000) はファンタスティカへの回帰ととらえる評価もあった。その後の作品としては、中編集《Б. Вавилонская》(2004)、長編《Махно》(2007)、《Легенды Невского проспекта》と同趣向を目指したと言われる作品集《Легенды Арбата》(2009) などがある。

コンヴェンションなど人前に出るイベントにはほとんど姿を見せない作家であるが、自伝的作品《Мое дело》(2006) は生い立ちからエストニアへ移住するまでのことが綴られ、ボリス・ストルガツキのセミナーのことなども記された貴重な文献である。

## ヴェロフ ヤロスラフ

Веров, Ярослав

ウクライナの SF 作家。ともに 1966 年生まれ、グレープ・グサーコフ(Глеб Гусаков)とアレクサンデル・フリストフ(Александр Христов)の共同ペンネームとしてスタートしたが、フリストフとのコンビは解消され、現在はグレープ・グサーコフの単独ペンネームになっている。2006 年からグサーコフはヴェロフ名義でチェリャビンスク州生まれの作家イーゴリ・ミナーコフ(Игорь Минаков)(1966~ )と共作を始め、近年はほとんどの作品がミナーコフとの共作によるものである。

グサーコフもフリストフもともにドネツクに生まれた。グサーコフはドネツク工業大学を卒業し、技術者として働いている。フリストフはドネツク国立大学で理学を専攻し、現在は研究職についている。90 年代末から小説の執筆を開始し、2002 年には短編《Метаморфозы》(2001) でインタープレス賞のショートショート部門を受賞した。しかし、本格的な出版界へのデビュー作は、2002 年に発表された長編《Хроники Вторжения》である。長編《Господин Чичиков》(2005) はゴーゴリの『死せる魂』をもとにした異色の作品として評価を受ける。

フリストフとはコンビを解消したあとも、グサーコフはヴェロフ名義で執筆を続け、2008 年にイーゴリ・ミナーコフと共作で長編《Десант на Сатурн, или Триста лет одиночества》とその続編となる長編《Десант на Европу, или Возвращение Мафусаила》を立て続けに発表し、第 1 作でズヴォズヌイ・モストのシリーズ部門で最優秀賞に選ばれた。2010 年には作品集《Операция «Вирус»》も刊行されているが、その収録作もミナーコフとの共作によるものである。本格的な SF の書き手としてこれからの活躍が期待される作家である。また、2010 年には出版社スネージニイ・コム・エムの設立に関わり、トゥルスキノフスカヤやダニフノフの作品など特色のある作品の出版を続けている。クリミアの SF 大会ソズヴェズディエ・アユ=ダグでも中心的役割を果たしている。

## ヴォイスクンスキイ エヴゲーニイ・リヴォヴィチ

Войскунский, Евгений Львович(1922~ )

## ルコジャンフ イサイ・ボリソヴィチ

Лукодянов, Исая Борисович(1913~1984)

1960 年代に活躍した二人組の SF 作家。ふたりはいとこの関係で、ともにバクー生まれである。

ヴォイスクンスキイは学校を卒業したあとは軍隊に入り、バルチック艦隊に所属して第二次世界大戦にも従軍した。1956 年に退役し、通信教育でゴーリキイ文学大学を卒業した。1950 年代初頭から小説を執筆し、主に戦争小説や海洋小説に手を染めた。

ルコジャンフは空軍に所属して従軍したが、その後は石油技師として働いていた。

ふたりが共作を始めたのは 50 年代末のことであったが、ふたりの SF へのデビュー作は長編《Экипаж «Меконга»》(1962) である。冒険小説的要素を取り込んだ作風は読者の大きな歓迎を受け、作家として順調な滑り出しをした。その後も破滅テーマの中編《Черный столб》(1964) やコンタクトテーマの長編《Незаконная планета》(1966) を書き、《Экипаж «Меконга»》の続編として長編《Ур, сын Шама》(1975) も書いたが、比較的伝統的な SF の枠内にとどまった作家であると言えよう。一方で、イーゴリ・チョールヌイとエレナ・ペトウホワ(Елена Петухова)の研究では、彼らの作品には偽史的な小説の技法が使われていると指摘されている。

80 年代に入るとヴォイスクンスキイはマレフカカのセミナーで講師を精力的に務め、新進作家の育成に大きな役割を果たした。1991 年刊行のアンソロジー『Эсээф』《НФ》の第 35 巻に寄せた序文《Грядет ли «Новая волна»?》は、「第四の波」についての当時の基本的文献として貴重であり、ポクロフスキイやベレレーヴィンを高く評価した。

ルコジャンフの死後もヴォイスクンスキイは作家活動を続けたが、次に SF からは離れ、歴史小説に移行した。第二次世界大戦の英雄であった兵士たちがベレストロイカ期の時代の変容にぶつかる姿を描いた写実主義的長編《Румянцевский сквер》(2007) は、90 年代半ばに執筆されていたものであるが、自分の世代の経験を踏まえた作品となっている。また回想体で書かれた大作《Полвека любви》(2009) は SF 小説ではないが、同時代人として交際した他の SF 作家についても多く触れられている。

## ヴォイノヴィチ ウラジーミル・ニコラエヴィチ

Войнович, Владимир Николаевич(1932～)

スターリナバード(現在のドゥシャンベ)に生まれた。1936年に父が逮捕されるも、1941年に解放され、家族でザポロジエへ移った。1951年から55年にかけては空軍で勤務する。中編《Мы здесь живем》(1961)によって作家として認められた。人権擁護運動などに参加し、1974年には作家同盟から除名される。諷刺的長編《Жизнь и необычайные приключения солдата Ивана Чонкина》(邦題『兵士イワン・チョンキンの華麗なる冒険』)(1975)が国外出版されたことで国内での立場が弱くなり、1980年にはドイツへ亡命し、後にアメリカへ移った。

亡命中に発表した、未来のモスクワへタイムマシンで旅をする亡命作家を主人公にしたアンチユートピア的長編《Москва 2042》(1987)がSF的作品としては有名である。SF的作品ではないが、代表作に短編《Шапка》(1987)がある。

## ヴォロジエヒン ドミートリイ・ミハイロヴィチ

Володихин, Дмитрий Михайлович(1969～)

モスクワの批評家、小説家。モスクワ国立大学で歴史を学びながら、出版活動にも精力的に参加し、1993年からアヴァンチュアブリュス社《Аванта+》に勤めて子供向けの百科事典シリーズ《Энциклопедия для детей》の編集に携わり、文学編ではSFやストルガツキイ兄弟の項目などを多数執筆した。1997年からは出版社マヌファクトウーラ社《Мануфактура》でも編集者として活躍。1997年からSFの評論活動を活発に始めた。2000年の遍歴者賞評論部門受賞者。特に「第四の波」の作家たちの作品を技法的な面からも鋭く分析した評論《Четвертая волна: анатомия творчества》(2004)は興味深い試みである。書評家としても活躍中である。評論集《Интеллектуальная фантастика》(2007)は、上記の評論のほか、主流文学とSFの境界作品、ファンタジーなどを論じた評論などを数多く含む論争的な著作である。

1990年から91年にかけて全ソ新進SF作家創作協会《ВТО МФФ》のセミナーに参加したが、その後は1997年までファンタスティカは何も読まず、書かなかったという。1999年からは小説にも手を染めたが、その多くはファンタジーである。主要作に長編《Убить миротворца》(2003)などがある。

旺盛な評論活動のかたわら、ファンタジーとSFを融合させた作品を中心に収録したオリジナル・アンソロジーシリーズ《Сакральная фантастика》を企画し、2000年から2006年にかけて第6集まで刊行している。しかし、「Сакральная фантастика」という用語自体はSF界にはあまり定着しなかった。

1999年から帝国と伝統をテーマにした文学セミナーであるバステオン《Бастион》をゲヴォルキヤンやロイフェとともに立ち上げ、現在も精力的に運営し、バステオンのメンバーによる論集《Империя. Сделай сам》(2001)も刊行した。バステオンを基礎にしたSFコンヴェンションであるバストコンも2002年から開催している。ロスコンの中心人物としても活躍していた。ほかにフィリグラニ賞の選考委員も務めるなど、現代ロシアSF評論界の中心的人物である。

## ウスペンスキイ ミハイル・グレボヴィチ

Успенский, Михаил Глебович(1950～2014)

「第四の波」を代表する作家のひとり。ユーモア小説の名手として名高く、1996年の「黄金のオスタップ」小賞受賞者。バルナウルに生まれ、イルクーツク国立大学を卒業後、テレビの仕事などをする。1977年からクラスノヤルスクに在住。1967年から地方紙で詩を発表し始めた。SFへのデビュー作は1981年の短編《Соловьи поют, заливаются...》である。

初期にはショートショートを数多く書いたが、いずれも奇天烈でグロテスクなものである。80年代末から中長編の執筆に力を注ぐようになった。第一作品集は《Дурной глаз》(1988)である。1992年のカタツムリ賞長編部門を《Чугунный всадник》で受賞し、この頃からターボリアリズムの代表的作家とみなされた。1995年には中編《Дорогой товарищ король》で遍歴者賞を受賞した。

また、彼の代表作となったアンチヒーロイックなユーモアファンタジー長編《Там, где нас нет》(1995)は1995年の遍歴者賞を受賞したが、トルキン『指輪物語』など欧米のファンタジーが大流行するなかであえて皮肉なアンチヒーロイックファンタジーを創造した点が高く評価される。この小説の主人公ジハーリの冒険はシリーズ化され、続編となる長編《Время Оно》(1997)、長編《Кого за смертью посылать》(1998)などでも人気を博し、ユーモアファンタジーの第一人者となって市場的にも成功を収めた。

しかし、その後は次第に作風の転換を図った。2003年にはアーペーエス賞を長編《Белый хрен в конопляном поле》(2001)で受賞し、健在ぶりをアピールした。ほかに長編《Невинная девушка с мешком золота》(2005)、長編《Три холма, охраняющие край свега》(2007)、核によるカタストロフ後の世界を描く長編《Райская машина》(2009)がある。《Райская машина》は2010年のインタープレスコ賞長編部門を受賞した。現在のウスペンスキイはジハーリのもの作者とはまったく異なる作家であるとの評価を得ているが、2013年には再びユーモアファンタジーの長編《Богатыристка Кости Жихарева》を発表した。

同じくクラスノヤルスクに住んでいたラザルチュークとは非常に親しく、90年代のロシア・ファンタスティカを代表する長編《Посмотри в глаза чудовищ》(1997)やその続編《Гиперборейская чума》(1999)を発表した。2006年にはラザルチューク、イリーナ・アンドロナチと共作してシリーズ第3作《Марш экклезиастов》を発表したが、第1作の出来には及ばないと世評である。

## ウラジーミルスキイ ワシーリイ・アンドレヴィチ

Владимирский, Василий Андреевич(1975～)

サンクト・ペテルブルグを代表する SF 評論家、ファン。レニングラードに生まれ、ゲルツェン記念ロシア国立教育大学を卒業。さらにサンクト・ペテルブルグ大学のジャーナリスト学部の修士課程へ進む。1990 年代前半から『インテルコミ』『Интеркомь』や『ドヴェスチ』『Двести』などのファンジンに記事を書き始めた。サンクト・ペテルブルグの書籍情報誌『ピーチェル・ブック』『Питер book』の SF コーナーを取り仕切っていたが、『ピーチェル・ブック』『Питер book』が廃刊になった後は、その後継であるウェブ書評誌『ピーチェル・ブック・プリュス』『Питер book плюс』で活躍を続けている。また、インターネット書店のオゾンでは毎月、新刊と古書の書評を執筆しており、非常に参考になる。歯に衣を着せぬ鋭さとファン魂があふれる文章はなかなかおもしろい。

1998 年から 2000 年にかけてウラジスラフ・ゴンチャロフとともにファンジン「Анизотропное Шоссе」を発行していたが、これはファンジンとしては最後期のものにあたる。

2007 年からは SF の書評やインタビュー記事のほか、アニメや漫画、ゲームなどの情報を掲載したビジュアル情報誌『ファンタスタチカ』『FANTASTIKA』の編集に携わり始めた。また、ロシア版「The Year's Best」と銘打った野心的なアンソロジー「Лучшее за год 2007」の編集を担当し、ログノフ、ラザルチューク、ルキヤノフ、シチョゴレフなどの作品を収録した。このアンソロジーが本当の意味での「The Year's Best」になりえているかどうかは議論もあるが、ますます活躍の場を広げている。小説も余技的に執筆し、短編「Второй шанс」(2008) で 2009 年インタープレスコン賞ショートショート部門を受賞。

## ヴローチェク シムン

Врочек, Шимун(1976～)

シムン・ヴローチェクはペンネーム。新進の SF 作家。ウラルのクングルに生まれ、ニジネワルトフスクで育った。グブキン記念石油ガス大学を卒業したが、演劇の道に入る。しかし、2005 年には演劇界から足を洗い、小説家となる。

SF 界へは短編「Три мертвых бога」(2001) が新聞「Фантаст」紙に掲載された後、SF 専門誌『ボルデニ・21 世紀』誌「Подлень, XXI век」に転載されるなど反響を呼んで注目を集めた。短編を中心に活躍しており、作品集「Сержанту никто не звонит」(2006) に初期作品が収められている。この作品集で 2006 年のズヴォズヌイ・モスト賞の新人賞を受賞した。2009 年にヴィタリイ・オベジンと共作で第一長編「Дикий Талант」を発表した。

## エシコフ キリル・ユリエヴィチ

Еськов, Кирилл Юрьевич(1956～)

モスクワ生まれ、モスクワ育ちの古生物学者、作家、批評家。モスクワ国立大学で生物学を学んだのちに、シベリアや中央アジアでの調査隊にも随行した。

SF は趣味として書いているだけだが、『巨匠とマルガリータ』を下敷きに、批評と小説のスタイルが混合した「Евангелие Афрания」(1995) で 1997 年のファンコン賞を受賞。また、トールキンの『指輪物語』を下敷きに、エルフとモルドールの戦いなどを再解釈した長編「Последний кольценосец」(1999) は 2001 年に遍歴者賞のジャンル賞を受賞した。この 2 作は非常に高い評価を受けている。

また批評家としての活動も旺盛で、フランシス・フクヤマの議論を取り上げた評論「Наш ответ Фукуяме」(2001) で 2002 年のカタツムリ賞と遍歴者賞を受賞している。

## エトローエフ アレクサンドル・ワシリエヴィチ

Етоев, Александр Васильевич(1953～)

サンクト・ペテルブルグ在住のきわめて特色のある作家のひとり。レニングラードに生まれ、レニングラード機械工科大学卒業後は技師として働き、1979 年から 91 年にかけてはエルミタージュ美術館の経理課に勤めた。1991 年から 2000 年までサンクト・ペテルブルグの出版社テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」に勤め、2000 年から 2001 年にかけてはインターネット書店オゾンにも勤めた。オゾンでは現代文学欄の編集を当初は担当し、のちに古書部門でエッセイ風の文章で健筆をふるった。

SF へのデビューは 1991 年だが、80 年代末にダブルティのセミナーに参加して才能は認められていた。寡作ではあるが、ユーモアとアイロニーを基調とする作品群はプロから高く評価されている。バイオリンの稽古に疲れてエジプトへ逃げたいと夢見るレニングラードの少年とその友だちを主人公にした代表的中編「Бегство в Египет」(1998) は、詩情豊かに子どもの冒険と心理と友情を描き、1999 年の遍歴者賞と 1998 年の黄金のオススタッフ賞の小賞を受賞した。

また、長編としての代表作「Человек из паутина」(2004) は、サンクト・ペテルブルグの SF 専門誌『ボルデニ・21 世紀』誌「Подлень, XXI век」に掲載され、奇病に侵された編集者の姿を描き、マムレーエフに部分的に似ていると評された。この作品はカタツムリ賞にもノミネートされた。

2004 年から児童向けの SF も手がけ、少女ウリヤ・リャビナ Уля Ляпина の冒険物語をシリーズ化し、すでに「Уля Ляпина, супердевочка с нашего двора」(2004) と「Полосатая зебра в клеточку」(2005)、

《Уля Ляпина против Ляли Хлопиной》(2007)の三冊が刊行されている。大人にも子どもにも楽しめるものにしたいと抱負を語っており、献辞には児童文学で活躍したユーリイ・コヴァーリの思い出に捧げると記されている。エトーエフはコヴァーリとも何度か文通をしたことがあり、彼にとっては大切な体験となっている。

マニアックな視点の横溢した文学百科事典風のエッセイ集《Книгоедство》(2007)は毀誉褒貶の激しい著作であるが、ヴェレルやコヴァーリらへの思いを縦横に綴った個性的な著作である。

## エフレモフ イワン・アントノヴィチ

Ефремов, Иван Антонович(1907~1972)

ソ連時代を代表する SF 作家のひとりで、ストルガツキイ兄弟と並んで 20 世紀のロシア SF 史上でもっとも重要な人物である。ベテルブルグ近郊の町に生まれ、学校卒業後は水夫として働き、その後レニングラード国立大学に入学した。大学は卒業しなかったが、地質学の専門家として職につき、のちにはゴビ砂漠への遠征隊に加わったこともある。古生物学にも詳しく、これらの経験は初期の作品に生かされている。SF へのデビューは作品集《Встреча над Тускаророй》(1944)である。

エフレモフが作品を発表し始めた 1940 年代は、ソビエト SF 界においては「第二の波」と呼ばれる時代であった。SF 文学論として、SF は遠未来の理想社会を描くのではなく、実際に目の前で展開されている自然改造計画などの共産主義建設の事業を描かなくてはならないと主張する「近い標的論」《теория ближнего прицела》が展開され、エフレモフの作品はこれらの理論から逸脱するものとして非難された。中編《Звездные корабли》(邦題『星の船』)(1947)はこの時期の代表作である。

特に 1957 年に発表された長編《Гуманности Андромеды》(邦題『アンドロメダ星雲』)は読者の熱狂的な支持を受け、この作品の絶大な影響のもとでストルガツキイ兄弟やワルシャフスキイ、ピレンキン、ガンゾフスキイらの中に「第三の波」と呼ばれる世代の作家たちが SF へと向かうようになった。『アンドロメダ星雲』は最後の共産主義的ユートピア小説とも評されるが、ソ連の公的なイデオロギーから出てきたものではなく、時おり見られる生硬とも思える場面も作者自身の高揚した情熱から生じたものである。『アンドロメダ星雲』で展開されたはるか未来のユートピア社会の姿は、「近い標的論」の作品群とは決定的に異なるものであり、「雪どけ」や人工衛星スプートニクの打ち上げ成功などの当時の社会背景も幸いしたが、読者の支持を受けて「第二の波」を完全に粉砕した。ソ連社会に生きる人々にとって、エフレモフの作品は公式のイデオロギーから私的な領域に未来を取り戻す役割を果たすものであった。

異星の知的生命体とのファースト・コンタクトテーマを扱った有名な中編《Сердце Змеи》(邦題『宇宙翔けるもの』)(1959)はアメリカの SF 作家マレイ・ラインスターの短編『最初の接触』への反論として書かれた小説だが、宇宙へ進出するほど高度に発達した文明の間に武力衝突といった不幸な事態は生じるはずがないという思想が作中では展開されている。

しかし、1960 年代に入ると作風が転換し始める。思想的実験小説《Лезвие бритвы》(邦題『アレクサンドロスの王冠』)(1964)はソ連、インド、アフリカを舞台にした冒険小説的なプロットに心理的、宗教的な問題の探求を合わせた風変わりな小説で、主人公ゲーリンの口舌がかなり長い、ロシア SF の全歴史においてもひととき異彩を放つ作品である。

最後の長編《Час быка》(邦題『丑の刻』)(1968)は『アンドロメダ星雲』と同じ世界を舞台にした作品であるが、ユートピア思想へのアプローチは大きく異なっている。専制体制が支配する辺境の惑星トルメンスを舞台に、干渉と不干渉の間で悩み苦しむ地球人の運命を描いたこの作品では、『アンドロメダ星雲』では見られなかった陰影が前面に押し出され、ユートピア思想そのものが大きく問われている。発表当時、この作品は検閲で大幅に削除された版で刊行された。

エフレモフは自らの共産主義的ユートピア思想を独自に展開させたが、晩年は当局からの監視を受け、その死から 5 日後に家宅捜索が入り、全ての草稿やすでに亡くなっていた妻へあてた手紙などが押収された。

また、エフレモフは歴史小説家としても活躍し、古代ギリシアとエジプトを舞台にした《На краю Ойкумены》(1949)や古代ギリシアを舞台にした《Таис Афинская》(1971)は、ソ連における歴史小説の古典と目され、現在でもよく読まれている。

エフレモフの作品は文芸評論、社会評論の素材としてもよく取り上げられる。ダルコ・スーヴィンの SF 評論『SF の変容』やピョートル・ワイリ&アレクサンドル・ゲニスによる有名な 1960 年代のソ連社会文化評論《60-е. Мир советского человека》においても、『アンドロメダ星雲』や『アレクサンドロスの王冠』などの作品が論じられている。

## エムツェフ ミハイル・チホノヴィチ

Емцев, Михаил Тихонович(1930~2003)

## パルノフ エレメイ・イウドヴィチ

Парнов, Еремей Иудович(1935~2009)

1960 年代を代表する SF 作家のひとり。エムツェフはヘルソンに生まれ、モスクワに出て化学を学び、技師として働いた。パルノフはハリコフに生まれ、モスクワで地質学を学んだ。やがてコンビを結成して SF 小説を発表するようになった。デビュー作は短編《Секрет бессмертия》(1961)である。作風は冒険小説的な要素に自然科学的テーマを加えたごく平凡なものであったが、1963 年から 66 年頃にかけて作品を量産し、一躍、ソビエト SF 界の旗手と評価されるようになった。コンタクトテーマの短編《Снежок》(邦題『雪つぶて』)(1963)などがある。

パルノフは 60 年代半ばにはモスクワの出版社モロダヤ・グヴァルジヤ社(«Молодая гвардия»)内の SF 関係者の懇親クラブのような場所で主導的な役割を果たした。

コンビは 1970 年に解消し、以後はパルノフが単独で作品を発表したが、実作者というよりは外国向けのソ連 SF の公的な代表者という側面を急速に強め、アレクサンドル・クレシヨフとともに、世界 SF 大会などの国際的な舞台に出席していた。次第に発表する作品の SF 色は薄くなったが、その後も冒険小説的な作品をいくつか発表した。冒険小説としての代表作に長編《Ларец Марии Медичи》(1972) などがある。ソ連崩壊後も長編《Сны фараона》(1995)、長編《Секта》(1996) などを発表したが、SF 界では大きな反響を呼ばなかった。

## エメツ ドミートリイ・アレクサンドロヴィチ

Емец, Дмитрий Александрович(1974～ )

ターニャ・グロツテルシリーズで知られるファンタジー作家。モスクワ国立大学ジャーナリスト学部を卒業した。22 歳の若さで作家同盟への加入が認められた。1994 年に児童書《Дракончик Пыхалка》が単行本として刊行されてデビューした。1995 年には長編《Сердце пирата》がエクсмо社《Эксмо》から刊行されるなど、デビュー後は順調に娯楽長編路線を突き進んだが、SF 界では目立った評価は受けなかった。

2002 年に、明らかにハリー・ポッターを意識した、ターニャ・グロツテルを主人公にしたファンタジー長編《Таня Гроттер и магический контрабас》をエクсмо社から刊行し、一躍大きな注目を集めた。その後、2003 年だけでもターニャ・グロツテルシリーズの長編を 5 冊も発表するなど旺盛な創作力を発揮して、2012 年までに発表されたシリーズの長編はすでに 14 作を数える。BBC のインタビューに対して、ターニャはハリー・ポッターに対するロシア側からの返答であり、ロシアのフオークロアや歴史、伝統に基づいた作品であると応じたが、盗作であるとしてローリングの弁護士からオランダで訴訟を起こされ、オランダでの出版は禁じられた。

ほかに 2004 年からはファンタジー長編シリーズ《Мефодий Буслаев》の発表を始め、こちらも 2013 年までにすでに 17 作の長編が発表されている。

## エリセーエフ グレーブ・アナトリエヴィチ

Елисеев, Глеб Анатольевич(1969～ )

モスクワの評論家。モスクワ近郊のジュコフスキイに生まれ、モスクワ国立歴史公文書大学を卒業し、歴史を修めた。1990 年代半ばから SF 評論を手がけるようになり、欧米 SF やファンタジーについての評論を SF 専門誌『イエスリ』《Если》などに定期的に寄稿した。

## エリセーエワ オリガ・イゴレヴナ

Елисеева, Ольга Игоревна(1967～ )

モスクワのファンタジー作家。モスクワ国立歴史公文書専門学校を卒業。エカチェリーナ 2 世時代の歴史を専攻したのち、2001 年に歴史ファンタジーを発表して小説家としてデビューした。その後、続々とファンタジーの長編を発表しているが、長編《Сокол на запыстье》(2002) で 2003 年の遍歴者賞のジャンル賞(ファンタジー部門)、フィリグラニ賞、バストコン賞、ロスコン銅賞を受賞し、一躍名を知られるようになった。

モスクワの文学セミナーバスチオン《Бастيون》に 1999 年の設立当初から参加。ヴォロジーヒンらとともに精力的なメンバーとして活躍している。

## オー＝サンチェス

O' Санчес(1957～ )

サンクト・ペテルブルグの小説家。本名はアレクサンドル・チェスノコフ(Александр Чесноков)である。スリラー的手法を使った長編《Кромешник》(1999) で文名を高め、その後も長編《Нечисти》(2002)、長編《Я люблю время》(2005) を発表している。サンクト・ペテルブルグの SF 専門誌『Полдень・21 世紀』誌《Полдень, XXI век》に掲載された中編《Одна из стрел парфянских》は 2003 年の遍歴者賞にノミネートされた。彼の作品はファンタスティカのジャンルからも少し外れているが、奇妙な味で他に類するものがないとの評がある。

2007 年からは古代世界を舞台にしたヒロイックファンタジー《Хвак》に属する作品群を次々と発表し、好評を得た。

## オシポフ アレクサンドル・ニコラエヴィチ

Осипов, Александр Николаевич(1947～ )

モスクワの SF 評論家、書誌学者。モスクワ文化大学卒業後はプログレス社《Прогресс》に勤める。モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》との関係が深く、主として科学啓蒙雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》を舞台として、1980 年代初頭には当時各地に設立されつつあった SF ファンクラブを全国的に組織する構想を論じた評論を多数執筆した。しかし、SF ファン立場とは相いれない部分も多かった。1991 年から 1992 年にかけては SF 専門誌《Четвертое измерение》を編集。しかし、モロダヤ・グヴァルジヤ社の凋落とともに活躍の場を失った。代表的著作にオシポフがひとりで執

筆したSF百科事典《ファンタстика от А до Я》(1999)があるが、ファンダムの記述をめぐってはファン・ミハイル・ヤクボフスキイに酷評されている。

## オスタペンコ ユリヤ・ウラジミロヴナ

Остапенко, Юлия Владимировна(1980～)

ウクライナのSF作家。リヴィウに生まれる。大学では心理学を学んだ。リヴィウ国立大学付属の施設で教師として働く。2002年に短編を発表してSF界にデビューする。短編を中心に才能を認められ、代表作に短編《Ромашка》(2005)や短編《Я пришла》(2004)などがある。初期の作品は作品集《Жажда снящих》(2006)に収録された。2005年にファンタジー長編《Невисть》や長編《Игры рядом》を発表したが、短編で期待されていたほどの評価は得られなかった。その後も長編を発表しており、ファンタジー《Тебе держать ответ》(2008)は評価が高い。近作にファンタジー長編《Легенда о Людовике》(2010)、長編《Свет в ладонях》(2012)がある。

## オフチニコフ オレグ・ヴァチャスラヴォヴィチ

Овчинников, Олег Вячеславович(1973～)

オレンブルグ生まれの作家。中短編を特に得意とする。モスクワ国立大学で数学などを学んだあと、プログラマーとしてモスクワなどで働いている。SF専門誌『イエスリ』《Если》のコンクールに応募した短編《Глубинка》(1998)でSFにデビューした。レオニード・カガーノフと並んで2000年以降を代表する中短編作家である。

中編《Семь грехов радуги》(2002)が2003年のシグマ=エフ賞を受賞し、この作品の同名の長編版が表題作となった作品集(2004年刊行)が著者初の単行本となった。この本で2005年のズヴォズヌイ・モストの新人賞を受賞した。短編《Звезда в подарок》は2006年のカタツムリ賞を受賞した。他に、殺風景な集合住宅の一室に住んで、麻薬中毒になりながらも広告のコピーライターと思しき職業に携わる男の孤独な創作と苦しみを描いた短編《Креативщики》(邦題『クリエイター』)、2007年のシグマ=エフ賞受賞作である、異星の知的生命体が詩を使って地球人とコンタクトを図ろうとする短編《Педант》(2006)などがある。

SF界での活躍にもかかわらず、なかなか中短編が作品集としてまとまる機会がないが、その中で長編《ПроМетро》(2006)、スリラー長編《Арахно. В коконе смерти》(2006)を立て続けに刊行し、主流文壇からも注目を集めた。

しばらく執筆から遠ざかっていたが、短編《Товар месяца》(2010)で復帰し、以降はエヴゲーニイ・プロシキンと共作でコンピューターゲーム《S.T.A.L.K.E.R.》のシリーズ長編を発表するなどしている。

## オブホワ リジヤ・アレクセエヴナ

Обухова Лидия Алексеевна(1922～1991)

ソビエトの女性作家。グルジアのクタイシで生まれるが、父の死後に国境警備隊の男の養女として引き取られ、各地を転々とする。第二次世界大戦時にはラトビアで捕虜となり、収容所で暮らしていた。1951年にゴーリキイ文学大学を卒業。1946年から新聞にルボや短編を精力的に発表し始める。ガガーリンを扱った小説《Вначале была Земля》(1971)やレールモンツフを扱った歴史小説の長編《Избранник》(1989)を発表している。

SFは1960年代から70年代にかけて少し発表しただけであるが、コンタクトテーマの中編《Лилит》(1966)は60年代を代表する作品のひとつとして高い評価を受けた。SF的作品としてはほかにユーモア短編《Птенцы археоптерикса》(1967)や短編《Диалог с лунным человеком》(1971)がある。

## オホトニコフ ワジム・ドミトリエヴィチ

Охотников, Вадим Дмитриевич(1905～1964)

「第二の波」の傾向をもっとも代表する特異な作家、発明家。レニングラードで映画の音響技術について学び、発明家となった。SFへのデビュー作は《Разговор по существу》(1944)である。

彼の小説の内容は「近い標的論」《теория ближнего прицела》に合致するもので、現在もしくはごく近い未来において十分に達成可能と考えられる範囲に空想を限定し、新型トラクターの開発やエネルギーの発見などを題材にした作品を書いた。その結果、今日の読者からの立場からすれば怪作となってしまう作品が多い。作品集に《На грани возможного》(1947)、《В мире исканий》(1949)、《История одного взрыва》(1953)がある。ほかに長編《Дороги вглубь》(1950)がある。

## オルジ ゲンリ・ライオン

Олди, Генри Лайон

ドミートリイ・エヴゲニエヴィチ・グロモフ(Дмитрий Евгеньевич Громов)(1963～)とオレグ・セミョノヴィチ・ラディジェンスキイ(Олег Семенович Ладьяженский)(1963～)が1990年に結成したコンビのペンネーム。ふたりともハリコフ在住で、ウクライナのSF界を代表する小説家。ペンネームはヘンリー・ライオン・オールドフィーという英語風の名前をロシア語表記したものだという。

グロモフはシンフェローポリに生まれた。1974年からハリコフ在住。ハリコフ工業大学を卒業し、



その後も研究を続けていたが、次第に文学を志すようになった。ラディジェンスキイはハリコフに生まれ、ハリコフ国立文化大学を卒業した後は、劇場「Пеликан」に勤めた。空手も愛好する。

コンビが最初に書いた作品は短編「Кино до гроба и...」(1990)である。1991年にはコンビの単行本として「Витражи Патриархов」と「Страх」の二冊が刊行された。90年代前半は英米のファンタジーの翻訳などに携わっていたが、長編「Дорога」(1994)や中編「Страх」(1994)、長編「Восставшие из рая」(1996)などの長中短編からなるファンタジーシリーズ「Бездна Голодных Глаз」により読者の注目を大いに集める存在となった。

初期にはヒロイックファンタジーやホラー、戦記 SF、東洋趣味などの要素を組み合わせた作風で一世を風靡した。初期作品は当時流行したゼラズニイの影響が濃厚とも指摘される。代表的長編は一種の剣豪小説「Путь меча」(1996)であるが、長編「Герой должен быть один」(1996)とその続編「Одиссей, сын Лаэрта」(2000)など他にも作品が多数ある。中短編からなる連作形式の長編「Песни Петера Сьядека」(2004)もきわめて評価が高く、2005年のシグマ=エフ賞を受賞した。近作に「Кукольник」(2006)、「Куколка」(2007)、「Кукольных дел мастер」(2007)の長編三部からなる「Ойкумена」(2007)などがあり、ファンタジー、スペースオペラといったジャンルで活躍を続けている。ヒロイックファンタジーの長編「Гарпия」(2008)で、2009年のロスコン銀賞、シグマ=エフ賞、アストレヤ賞などを受賞した。ファンタジー短編「Смех дракона」(2010)で2011年のインタープレスコン賞短編部門を受賞。同年代の作家の執筆量が少なくなっていく中で、ゼロ年代後半以降は、もっとも安定して良質な長編を書ける作家となっている。長編「Циклоп」は2014年のロスコン金賞を受賞。

1999年にはマリナ&セルゲイ・ジャチェンコ、アンドレイ・ワレンチノフと共作した大作長編「Рубеж」を刊行し、2004年には同じメンバーで作品集「Пентакль」も発表した。この企画は一種の集団的な創作の試みとして注目を集めた。ワレンチノフとの関係は深く、長編「Гирмен」(2006)や2008年から刊行が開始されたファンタジーシリーズ「Апомен」ものの長編もすでに3冊共同執筆している。

また、彼らが発行するウェブニュース「Old news」は速報性もあり、各種コンヴェンションや新刊情報についても非常に詳しい貴重なロシア SF の情報源である。

ハリコフで開催される SF コンヴェンションのズヴォズヌイ・モストでは1999年の創設時から一貫して中心的存在である。また、1991年からは作家や編集者、翻訳家、イラストレーターなどを集めた出版関係の企画会社「Второй блин」を通じても活動し、出版活動にも精力的に関わった。2000年頃からエージェントとしての活動を開始して成功を収めた。その一方で、以前ほどモスクワやサンクト・ペテルブルグへは出てこなくなっている。近年は評論活動も盛んであり、評論「Десять искушений юного публиканта」(2005)は2005年のズヴォズヌイ・モスト賞、2006年のロスコン金賞、ポルトル賞をそれぞれ評論部門で受賞した。こうした評論を多数収めた「Фанты для фэна」(2008)の評価はきわめて高い。

## オルロフ アレックス

Орлов, Алекс(1964～)

人気長編 SF 作家。本名はワジム・ダリシチェフ(Вадим Дарищев)。バウマン記念モスクワ高等技術専門学校を卒業し、軍需産業の企業に入ったがソ連が崩壊したために働き続けることができなかった。スペースオペラの長編「Тени войны」で1998年にアルマダ社「Армада」からデビューし、たちまちシリーズ化されて人気を博した。2003年までに20冊の長編を執筆した。その後は別のファンタジーシリーズなどに手を染め、一貫して長編を書き続け、2014年までに執筆した長編は50作を超える。

## オルロフ ウラジーミル・ヴィクトロヴィチ

Орлов, Владимир Викторович(1936～)

モスクワの小説家。モスクワに生まれ、モスクワ国立大学のジャーナリスト学部で学ぶ。1959年からは『コムソモールスカヤ・ブラウダ』紙「Комсомольская правда」の記者となり、鉄道建設の現場に派遣される。その後、ルポルタージュ「Дорога длиною в семь сантиметров」(1960)や長編「Соленый арбуз」(1965)を書く。初期作品にはアクションノフの影響もあると言われる。

1980年に長編「Альгист Данилов」(邦題『ヴィオラ弾きのダニーロフ』)が発表されると、一躍、ブルガーコフの再来と騒がれ、注目を浴びる存在となった。人間と悪魔の間の子として生まれた主人公が、どこかうら悲しく、もがきながらも音楽家としてめざめ、恋愛にも向き合っていく姿を描いた作品で、著者の代表作となった。

非常に寡作な長編作家であるが、ほかには長編「Аптекарь」(1988)、長編「Шеврикука, или Любовь к привидению」(1997)、長編「Камергерский переулок」(2008)、長編「Лягушки」(2011)などがあり、老年となっても執筆を続けている。

## カガノフ レオニード・アレクサンドロヴィチ

Каганов, Леонид Александрович(1972～)

2000年以降のロシア SF を代表する短編作家。モスクワに生まれ、モスクワ鉱山大学とモスクワ国立大学の心理学学科で学び、1995年から小説を書き始めた。シナリオ作家として「Ю.С.П.-студия」や「Назло рекордам!」などのテレビ番組にも関わった。SF へのデビュー作は短編「Глеб Альгшифтер」

(1998)である。

2002年の作品集《Коммутация》は非常に優れた内容の中短編が収められており、インタープレスコ賞、スタート賞、ズヴォズヌイ・モスト賞の新人賞部門を受賞した。

2002年に長編《Харизма》が刊行されたが、刊行当初は短編ほどの高評価は受けなかった。しかし、第二作品集《День академика Похеля》(2004)は第一作品集と同様に非常にすぐれた中短編集との評価を受け、SF中短編作家としての名声を確立した。この作品集に収められた短編《Эпос хищника》

(2002)で2003年の遍歴者賞を受賞。代表的短編《Хомка》(2003)はホムカと呼ばれる遺伝子操作で作られた子供の愛玩用生物が流行する社会で、小学生の男の子と女の子が自分たちの遺伝子から赤ん坊を作ろうとする短編で、結末の鋭い切れ味は抜群である。この短編は2004年のインタープレスコ賞、カタツムリ賞、遍歴者賞と短編の主要三賞を独占した。

上記の作品集に収められた短編にはインターネット上のコンクールのために書かれたものも多く、発表媒体という面でも注目される作家である。

近年も精力的に中短編を発表し、《Хомка》に登場する架空のヒーロー、ボグダミル少佐を主人公にすえた中編《Майор Богдамир спасает деньги》(2006)は諷刺色の濃い話題作であり、2007年のロスコ中短編部門の銀賞を受賞した。同じボグダミル少佐ものの中編《Гамлет на дне》(2008)も高い評価を受けている。最近では、あらためて作品集《Дай бог каждому》(2007)や《Дефицит белка》

(2007)が刊行され、ルキヤネンコからの推薦も受けて、いっそう注目度が高まっている。久しぶりに発表した長編《Лена Сквоттер и парагон возмездия》(2010)も大きな話題を集めた。

近年は執筆量が少し減っているが、中編《Магия》(2011)はフィリグラニ賞短編部門を受賞。短編のオリジナルアンソロジーでは欠かせない名前となっている。

## カガルリツキイ ユーリイ・ヨシフォヴィチ

Кагарлицкий, Юлий Иосифович(1926~2000)

1960年代から80年代にかけて活躍した評論家。モスクワに生まれ、モスクワ国立大学文学部を卒業した。ウェルズの特権家として欧米でも名が知られた。1972年にはSF研究者協会のピルグリン賞を受賞。著作として《Герберт Уэллс. Очерк жизни и творчества》(1963)、《Вглядываясь в грядущее. Книга о Герберте Уэллсе》(1989)がある。ほかにSF全般を論じた著作《Что такое фантастика? О темах и направлениях зарубежной фантастики вчера и сегодня》(1974)はロシアのSF研究では引用される頻度の高い重要な文献である。

## ガーコフ ヴル (ウラジーミル)

Гаков, Вл.(Владимир)

もとはミハイル・アンドレヴィチ・コワリチュク(Михаил Андреевич Ковальчук)(1951~)、ウラジーミル・ゴプマン(Владимир Гопман)、アンドレイ・ガヴリーロフ(Андрей Гаврилов)の共同ペンネーム。すぐにコワリチュクの単独ペンネームとなったが、ソ連時代から英米SFの情報紹介に積極的に携わる第一人者である。

コワリチュクはカザンに生まれ、モスクワ国立大学で理論物理学を専攻した後、やがて《Наука и религия》誌に入った。

1976年にガーコフ名義で評論を発表し始め、英米SFの情報を数多く紹介した。90年代以降もミンスクのSF雑誌『Фантаклим・Мега』『Фантаклим-МЕГА』やSF専門誌『イエスリ』『Если』に定期的に評論を寄稿した。

主編著《Энциклопедия фантастики》(1995)は、英米圏はもちろん、ロシアを中心とした非英米圏の情報も非常に豊富な労作のSF人名事典である。その後、増補版がCD-ROMで出ている。600ページを超す巨大アンソロジー《Фантастика века》(1995)の編者としても活躍。このアンソロジーにはウェルズ、カフカ、チャペック、ブルガーコフといった古典的作家のほか、アシモフやクラークら英米SFの黄金時代を中心に、主として1960年代までの中心的な世界のSF作家の作品が収録されており、ロシアの作家でもストルガツキイ兄弟らの後続の世代である、ポクロフスキイやゲヴオルキャンといった「第四の波」の作家の作品まで押さえられている。ジョン・クルートとピーター・ニコルズ編の『SFエンサイクロペディア』の第二版(1993)ではロシア・ソビエトSFの関連項目を執筆するなど多方面にわたって活躍した。

1977年にソ連SFアンソロジー《Весна света》の刊行に対し、スウェーデンのジュール・ヴェルヌ賞を受賞。1982年にはヴェリーコエ・コリツォ賞、1997年にはヴィタリイ・ブグロフ賞を受賞した。

## カザコフ ドミートリイ・リヴォヴィチ

Казакон, Дмитрий Львович

ニージニイ・ノヴゴロド在住のSF作家。生年は公表されていない。ファンタジー、スペースオペラ、歴史改変ものなど多様な作品を書き分け、次々とシリーズ長編を量産する人気作家。ニキーチンやオルジの影響を受ける。1999年から短編を発表し始め、2002年にファンタジー長編《Я, mar!》を発表し、注目を集める。その後、2012年末までに42作の長編を発表。多い年は1年間に6冊というハイペースで長編を発表し続けた。また、長編と並行して中短編の執筆も旺盛に行っている。長編《Охога на сверхчеловека》(2008)で2008年のズヴォズヌイ・モスト賞を受賞。長編《Русские боги》(2009)はSF情報誌『Мирль・Фантастички』《Мир фантастики》が選定するミール・ファンタスティック賞を受賞した。

## カザコフ ワジム・ユリエヴィチ

Казак, Вадим Юрьевич(1959～ )

SF 評論家。サラトフに生まれる。サラトフ医科大学を卒業し、サラトフの企業で医師として勤務する。1980年からファン活動を開始した。ストルガツキイ兄弟のファンとして活躍し、1988年から89年にかけてはストルガツキイ兄弟の創作に特化したファンジン『アーペーエス＝パノラマ』《ABC-панорама》を発行した。ストルガツキイ兄弟のファンクラブ「リュデヌイ」《Люденый》のメンバーでもある。評論《Полет над гнездом лягушки》(1994)で1995年インタープレスコン賞評論部門を受賞。ストルガツキイ百科事典《Энциклопедия Стругацких》(1999)の刊行に対して、アレクセイ・ケルジンやユーリイ・フレイシマンとともに2000年の遍歴者賞評論部門を受賞した。

## カザンツェフ アレクサンドル・ペトロヴィチ

Казанцев, Александр Петрович(1906～2002)

1930年代から活躍したSF作家で、40年代、50年代には「第二の波」の代表的作家として絶大な影響力を発揮したが、彼の果たした役割についてはSF界のルイセンコと評する声もある。アクモリンスクに生まれ、トムスク工業大学を卒業後、機械工として働き、防衛産業の部門に配属された。1936年にヨシフ・シャピロ(Иосиф Шапиро)との共作で書かれた映画《Аренда》のシナリオがコンクールで第1席に入選し、このシナリオのプロットが長編《Пылающий остров》の基礎となった。小説を発表し始めたのは1939年のことであった。

長編のデビュー作にして彼の最良の作品とされる《Пылающий остров》は1940年に発表され、以後、幾度も改稿された。世界を破滅の危機に陥れる帝国主義者の陰謀とソ連の英雄との戦いを背景にした冒険が繰り広げられるというのが彼の作品の基本的なパターンであるが、これはカザンツェフに限ったことではなく、1920年代に流行した「赤いピンカートン」ものの作品に連なる要素であり、ピョートル・バヴレンコが長編《На востоке》(1937)で進めた軍事シミュレーション小説とも共鳴している。1930年代後半からソ連文学に顕著に見られるようになった愛国主義的傾向を、SF小説においても推し進め、この時代の小説の基本的構造として定着させた。

極地探検ものの第二長編《Арктический мост》は1941年に一部が発表された後、1946年に完成され、その後、1958年に改稿された。その後も長編《Мол «Северный». Роман-мечта》(1956)などがあるが、第一長編で見られた冒険小説的な楽しさは次第に薄れ、硬直したストーリーと紋切型の設定が前面に押し出されるようになり、単なるソ連のプロパガンダに近くなった。しかし、未来や宇宙が舞台の前面から退き、SF的要素が薄れたこれらの作品は、1940年代後半に「近い標的論」《теория ближнего прицела》として、まさにSF的作品としての高い評価を受け、同時代のババエフスキイら無葛藤理論の小説や生産小説とともにきわめて特異な作品群を形成することになった。1920年代のSFの隆盛を「第一の波」と呼ぶが、カザンツェフの時代は、それとは全く異なった意味でのひとつの時代として、のちに「第二の波」と呼ばれるようになった。

1950年代末からエフレーモフやストルガツキイ兄弟らがカザンツェフの作品を克服して新しい作品を発表し始めると、カザンツェフはしばらく静観していたが、やがて核戦争ものの長編《Льды возвращаются》(1964)を発表、その後、ネムツォフらとともに60年代半ばからSF界の新しい潮流に対して逆襲を開始し、ストルガツキイ兄弟を攻撃するキャンペーンに力を貸した。エフレーモフとは全く資質も思想も異なるにもかかわらず、エフレーモフの没後は彼の名を最大限に利用し、ストルガツキイ兄弟に反発する勢力を集合してSF界に分断を持ちこんだ。70年代のモロダヤ・グヴァルдия社《Молодая гвардия》の保守化に乗じて出版界に復帰し、1977年から78年にかけては3巻選集が刊行された。80年代も作品を発表し続け、シラノ・ド・ベルジュラックやフェルマーらを素材にとった長編三部作《Клюкочущая пустота》(1983～86)などを発表した。ほかに自伝的作品に中編《Пунктир воспоминаний》(1981)、最後の長編《Фангаст》(2001)がある。

一生をSFに捧げた人物ではあったが、その罪も大きかったと評されている。スヴェルドロフスクで開催された1981年の第1回アエリータでは、SFの発展への功績に対してストルガツキイ兄弟とともにアエリータ賞を受賞した。

1908年にシベリアで生じたとされるツングース大爆発にも関心を寄せ、短編《Взрыв》(1946)は爆発の原因とされる隕石を宇宙船とし、爆発の原因を宇宙船に積まれた核爆弾によるものだったとして、世界的にも大きな反響を巻き起こしたが、これはカザンツェフが原爆投下による衝撃を受けて書かれたものとも言われる。一方でこうしたカザンツェフの歴史上の諸事件に対する解釈の姿勢がいわゆる偽史的な解釈へとつながっており、1990年代にロシアSF界で流行する偽史的世界観の諸作品の原型のひとつとなったと、イーゴリ・チョールヌイとエレナ・ペトゥホワ(Елена Петухова)との共著《Современный русский историко-фантастический роман》(2003)という研究によって指摘されている。

## カシーリン アレクサンドル・ニコラエヴィチ

Каширин, Александр Николаевич(1945～ )

モスクワの編集者、出版人、ファン。モスクワに生まれ、モスクワ経済統計大学を卒業後、プログラマーとして働いた。全ソ新進作家創作協会《ВТО МПФ》の活動にも携わる。ポーランドSFのアンソロジー《Истребитель ведьм》(1990)の編者も務めた。

1989年から書店業へ乗り出し、ロシアで初めてのSF専門店とされる《Стожары》を設立。1994

年から99年にかけてはその書店は一種のサロンの役割を果たした。一方で若手作家の発掘に力を注ぎ、イリナ・スキドネフスカヤらを見出した。

その後、出版社ドロファ社「Дрофа」に勤め、その後はアストレリ社「Астрель」に転じた。2000年からはアルマダ=プレス社「Армада-Пресс」のファンタスティカ部門の編集者も務めた。1996年に遍歴者賞小賞受賞。1997年のファンコン賞を受賞、1998年にはエフレーモフ記念賞を受賞。

## カズメンコ セルゲイ・ワジモヴィチ

Казменко, Сергей Вадимович(1954～1991)

レニングラードの小説家。レニングラード国立大学の理学部を卒業。1985年にボリス・ストルガツキイのセミナーに参加し、その才能を認められたが、重病に長らく苦しみ、50余りの中短編を書き残すも、若くして亡くなった。SFへのデビュー作は「Голос в трубке」(1985)であるが、生前には作品集は刊行されなかった。没後に刊行された作品集「Знак дракона」(1993)の表題作で1995年のインタープレスコン賞を受賞。

さらに1998年に作品集「Contra ideologica」が刊行されたが、きわめて少部数であった。

## カテルリ ニーナ・セミョーノヴァ

Катерли, Нина Семеновна(1934～ )

サンクト・ペテルブルグを代表する作家のひとり。本名はニーナ・セミョーノヴァ・エフロス(Нина Семеновна Эфрос)である。ジャーナリストの家に生まれ、レニングラード工科大学卒業後は技師として働いた。1960年代末から執筆を始め、1973年から作品を発表したが、SFへのデビュー作は1977年の短編「Окно」である。寓意的な作品から出発し、作品集「Окно」(1981)に収められた作品はファンタスティックな傾向が強い。80年代半ばにはボリス・ストルガツキイのセミナーに参加した。他の作品集に「Цветные открытки」(1986)、「Курзал」(1990)、「Сенная площадь」(1992)、「Иск」(1998)があり、さらに、長編「Тот свет」(1999)、長編「Дневник сломанной куклы」(2004)などを発表している。

専門のSF作家ではなく、写実主義的作品も多数手がけるが、科学性はないもののファンタスティカに近づいた散文としての評価を受けている。作家としての自己評価はリアリストであると述べ、一つのジャンルに生涯を捧げたくないと、あるインタビューで答えている。

社会活動でも知られ、1990年代にはボリス・ストルガツキイ、ヴィクトル・コネツキイらサンクト・ペテルブルグの作家たちとともにアピールを出した。反ユダヤ主義の闘士としても知られる。1988年の論説「Дорога к памятникам」も有名。

## カプラン ヴィタリイ・マルコヴィチ

Капран, Виталий Маркович(1966～ )

モスクワの小説家、批評家。モスクワ国立教育大学を卒業後は学校で数学を教え、その後、パフリン国立中央演劇博物館でコンピューターの教師として勤めた。

SFには1997年に短編「В два хода」でデビューした。作者の初の単行本である長編「Корпус」(2002)は2002年のユーロコンで新人賞を受賞し、スタート賞も受賞した。ほかに長編「Последнее звено」(2008)などがある。

また、SF専門誌『イエースリ』「Если」誌上などに評論もたびたび発表し、現代ロシアSFやファンタジーの特徴について論陣を張っている。評論「В поисках чуда」(2003)で2004年のシグマ=エフ賞を受賞した。

## カムシャ ヴェーラ・ヴィクトロヴァ

Камша, Вера Викторовна(1962～ )

人気のファンタジー作家、ジャーナリスト。ウクライナのリヴィウに生まれ、リヴィウ工業大学を卒業後、レニングラードへ移った。1994年からジャーナリストとして活動していたが、ペルモフへのインタビューがきっかけでファンタジーへのめりこんだ。2001年に長編ファンタジー「Несравненное право」でデビューし、さらにこれが「Хроники Арции」というシリーズに発展して読者の好評を得た。他のファンタジーのシリーズに「Отблески Этерны」があり、やはり読者の強い支持を得ている。

ハリコフで開催されるSFコンヴェンションのズヴォズヌイ・モストの精力的な参加者であり、ウェブ上のコンクールに参加した作品を集めたアンソロジー「Новое тысячелетие」(2005)の編者も務めた。このアンソロジーにはロマン・アフアナシエフ、イーゴリ・レヴァ、セルゲイ・チェクマエフ、ドミートリイ・カザコフといった新進作家のみの作品が収められている。

## カラリス ドミートリイ・ニコラエヴィチ

Каралис, Дмитрий Николаевич(1949～ )

サンクト・ペテルブルグの小説家、エッセイスト。レニングラードに生まれ、レニングラード水運大学を卒業。新聞のユーモア記事欄などで健筆を振るった。ペレストロイカ末期にはモスクワの出版社テクスト社「Текст」のレニングラードでの代表者となり、出版活動に精力を注いだ。SF作家

ではないが、自著としては「Мы строим дом」(1988)、「Ненайденный клад」(1992)、「Автопортрет」(1999) などがある。

回想の名手でもあり、1980年代の日記から構成した「Монологи простодушного」(2005)、同じく90年代版の「Хроники смутного времени」(2006) などがある。ヴィクトル・コネツキイとの親交も深く、コネツキイについて触れた文章も数多い。

ボリス・ストルガツキイのセミナーにも参加し、90年代には運営の実務にあたって中心的な役割を果たした。

## ガリナ マリヤ・セミョーノヴァ

Галина, Мария Семеновна(1958～ )

モスクワの小説家、詩人、批評家。カーリニンに生まれ、1968年までキエフで過ごす。オデッサ大学で海洋生物学を専攻したあと、ノルウェーのベルゲン大学などに勤めた。1987年にモスクワに移る。90年代に批評家に転身し、2005年当時には、ダイジェスト誌「Библиоглобус」の編集長を務めた。

SF小説に手を染めたのは1996年からで、冒険SF、ファンタジーの分野で長編を数多く発表している。1997年からマクシム・ゴリーツィン(Максим Голицын)の筆名でファンタジー長編「Время побежденных」を発表。さらに、同名義で長編「Глядящие из темноты」(2004)などいくつかの作品を発表した。ファンタジーについての批評を多数発表し、各種SF大会についての機知あふれるレポートには定評があった。

2005年に長編「Гиви и Шендерович」(2004)でポルタル賞を受賞した。近年ではファンタジーからは離れ、専門の生物学を生かしたSF的作品も手がけるようになってきている。近作にクトゥール神話ものとしても分類される19世紀のアフリカを舞台とした怪奇中編「Даргор」(2006)のほか、2007年のカタツムリ賞短編部門受賞作「Поводырь」(2007)や2009年のフィリグラニ賞短編部門受賞作「Контрабандисты」(2008)、2009年ポルタル賞短編部門受賞作「В плавнях」(2008)などがある。特に、長編「Малая Глуша」(2009)は、ディヴォフらの推薦も受け、SF以外の広範な読者を獲得した著者の出世作となり、2010年のポルタル賞長編部門を受賞した。SF雑誌以外にも文芸誌『ノーヴィイ・ミール』「Новый мир」にも作品を発表するなど、SF界以外でも評価が高い。さらに長編「Медведки」(2011)も広範な読者の反響を呼び、ボリシャヤ・クニーガ賞の読者投票部門を獲得、2012年のフィリグラニ賞も受賞するなど、SFファンと一般読者の両方から注目される存在となった。短編「Добро пожаловать в прекрасную страну!」(2010)で2011年のカタツムリ賞短編部門を受賞。中編「Куриный бог」(2012)と短編「Ригель」(2012)がともに2013年のポルタル賞の中編部門と短編部門を受賞するなど、ポルタル賞とは相性がよい。

翻訳家としても活躍し、スティーヴン・キング、ジャック・ヴァンス、クライヴ・バーカーなどの作品を翻訳しており、ホラー作品を好んでいる。

また、1982年に最初の詩集を出して以来、詩人としても活躍しており、詩の雑誌『アリオン』「Арион」から読者賞を2005年に贈られている。

## ガルキナ ナターリヤ・フセヴォロドヴァ

Галкина, Наталья Всеволодовна(1943～ )

サンクト・ペテルブルグの詩人、小説家、画家、デザイナー。キーロフで生まれ、レニングラード高等芸術学院を卒業。ボリス・ストルガツキイの作家セミナーに古くから参加。セミナー参加者で作ったアンソロジー「Часы с вариантами」には短編「Не верь глазам своим」(1992)を寄せた。ほかに中編「Ночные любимцы」(1995)も高い評価を受けている。

長編「Вилла Рено」は2003年のロシア・ブッカー賞の最終候補となったが、そうでもなければ本が全く出ないと評論家のウラジーミルスキイに嘆かれたほど、出版の機会に恵まれていない。幻想小説的な要素が強い作風で知られる。2000年にはサンクト・ペテルブルグ幻想紀行とも言うべき長編「Архипелаг Святого Петра」を発表した。最近の作品集に「Хатшепсут」(2004)があるが、総じて非常に寡作である。近作の作品集に「Ошибки рыб」(2008)、「Зеленая маргышка」(2012)がある。

詩人としても精力的に作品を発表し、ドミートリイ・ピョコフから高い評価を受けている。

## カルーギン アレクセイ・アレクサンドロヴィチ

Калугин, Алексей Александрович(1963～ )

モスクワの人気SF作家。兵役後に食品製造業技術者専門学校を卒業し、ソ連医学アカデミー医科生化学科研究所に勤めた。1996年に長編「Лабиринт」でデビュー。出版社の勧めもあり、この作品は3部作に発展した。その後も、年に何冊も長編を量産する流行作家として活動していたが、大きなSF賞での受賞はなかった。その他の主な長編に「Темные отражения」(1999)、「Не так страшен черт」(2000)、「Снежная слепота」(2001)、「Игра в реальность」(2001)、「Мир без солнца」(2002)、「Дом на болоте」(2005)などがある。

また、火星テーマの中短編を集めたアンソロジー「Новое марсианские хроники」(2005)の編者をつとめた。

SF関係の賞には縁がなかったが、短編「В саду」(2004)で2005年のカタツムリ賞を受賞した。作品集に「Специалист по выживанию」(1999)、「Патруль вызывали?...」(1999)、「Не сотвори себе врага」(2000)、「Время – назад!」(2005)などがある。

コンピューターゲーム「S.T.A.L.K.E.R.」のノヴェライゼーションにも手を染め、長編「Дом на болоте」(2007)や長編「Мечта на поражение」(2008)でシリーズ初期の成功の礎を築いた。その後もシェアワールドものの企画には頻繁に参加し、職人的に長編を量産している。

シェイクスピアを扱った中編「Дело об архиве Уильяма Шекспира」(2006)をブラシケヴィチが関わっているノヴォシビルスクの出版社から刊行するなど、ブラシケヴィチとの関係も深く、長編「Деграданс」(2007)を共作した。

## ガンソフスキイ セーヴェル・フェリクソヴィチ

Гансовский, Север Феликсович(1918~1990)

「第三の波」を代表する SF 作家。ワルシャフスキイやビレンキンと並んで、短編の名手として知られた。キエフに生まれ、荷役や水夫、電気設備工、郵便配達夫、教師など数多くの職を転々とした。第二次大戦に従軍し、重傷を負う。戦後はレニングラード国立大学で学び、やがて文学に関心を持った。最初の SF は「Гость из каменного века」(1960)である。1960年代は「Шаги в неизвестное」(1960)、「Шесть гениев」(1965)などの作品集が順調に刊行された。

初期の作品では、未知なるものと遭遇した人間の心理的な反応に重点が置かれていると評される。心理的な洞察の重視は 1960年代に活躍した作家の特徴であった。

短編の代表作「День гнева」(邦題『怒りの一日』)(1964)は科学的な実験として熊に理性を与えた集落で起こる悲劇を描いた鮮烈な印象を残す作品であり、映画化もされた。短編「Хозяин бухты」(邦題『湾の主』)(1962)も有名な作品である。ほかの作品に外科的手段によって天才となった人物を描く短編「Голос」(1963)や短編「Полигон」(邦題『実験場』)(1966)、タイムマシンで過去へさかのぼり、生前のゴッホと会って絵を買いつけようともくろんだ男のゴッホとの交流を描く中編「Винсент Ван Гог」(1970)などがある。後期の作品では短編「Человек, которые сделал Балтийское море」(1976)、中編「Инстинкт?」(1988)、中編「Побег」(1988)などがある。

SFの発展に尽くした功績に対して 1989年にはアエリータ賞が贈られている。

戦争で負傷したため、絵筆を握ることができなくなったが、点描画での挿絵がいくつか残っている。特に、ストルガツキイ兄弟の『そろそろ登れカタツムリ』の雑誌掲載時の挿絵はすばらしい出来である。

## キム アナトリー・アンドレエヴィチ

Ким, Анатолий Андреевич(1939~ )

朝鮮系のロシア語作家。カザフスタンのセルギエフカ村に生まれる。サハリンやカムチャッカなどで育ったが、モスクワに出て初めは絵を学ぶ。1971年にゴリキイ文学大学を卒業し、文筆活動に入る。極東やサハリンをテーマにした作品で認められる。初期の作品に短編「Шиповник Меко」(1973)や作品集「Голубой остров」(1976)がある。その後、中編「Луковое поле」(1978)や中編「Лотос」(1980)により、独自の作品世界を切り開く。豊かな抒情性、複雑なメタファー、神話や宗教的な象徴を駆使したその作品世界は他の作家の追従を許さないが、ロシアのファンタジーの歴史を考えると非常に重要な作家である。

代表作である長編「Белка」(邦題『リス』)(1984)は、人から獣へと変身する主人公の物語を、独特の自然観を背景に綴った魅力的な作品で、狭義の SF ではないが、ファンタジックなすぐれた作品である。

近年は長編を中心に精力的に作品を執筆しており、長編「Отец-Лес」(1989)や長編「Онлирия」(1995)、長編「Близнец」(2000)、長編「Остров Ионы」(2001)などがある。

## クジメンコ ウラジーミル・レオニドヴィチ

Кузьменко Владимир Леонидович(1931~2002)

ウクライナの SF 作家。軍医の家に生まれる。ドネツク医科大学に入学したが、一家がリヴォフに移ったため、リヴォフ国立医科大学を卒業。人工神経回路の研究などに携わった。

SFに関心を抱いたのは 80年代後半になってからで、代表作である長編「Древо жизни」は 1986年の2月から9月にかけて書かれた。この長編が 1990年から書評誌「Книжное обозрение」に断続的に掲載され、作家としての経歴が全くない人物の長編がいきなりソ連の全国紙に掲載されるという破格の扱いを受けて SF 界にデビューを果たし、大きな反響を呼んだ。その後もいくつか長編を発表したが、第一作ほどの反響を呼ぶことはできなかった。

## クジメンコ パーヴェル・ワシリエヴィチ

Кузьменко, Павел Васильевич(1954~ )

モスクワの小説家。モスクワ教育大学歴史学部を卒業後、博物館の警備員や荷役労働者として働いた。1987年にダブルティのセミナーに参加し、ヴォイスクンスキイの教えを受ける。1991年から精力的に小説を書き始め、1991年に短編「Экспериментум круцис」でデビューした。さらに、アンチユートピアものの長編「Система Ада」(2002)などを発表した。また、長編「Катабазис」(1995)は 1996年のブッカー賞候補にノミネートされた。

短編「Бейрутский салат」(1995)で 1996年のカタツムリ賞を受賞したが、この受賞は本人にとっても非常に意外であったらしく、掲載された雑誌も見なかったらしい。生計は主としてテレビ関係

の仕事で立てており、小説の執筆は決して多いとは言えない。

## クドリャフツェフ レオニード・ヴィクトロヴィチ

Кудрявцев, Леонид Викторович(1960～)

モスクワの小説家、翻訳家。ウドムルト自治共和国のグラホヴォに生まれる。1981年にクラスノヤルスクへ移り、長く暮らしたのち、1998年にイジェフスクへ移った。2002年にモスクワへ移住。兵役後は各種の編集部を転々とした。

SFへのデビュー作はオレグ・コラベリニコフに激賞された1984年の短編「*Лабиринт*」で、雑誌「*Енисей*」に掲載された。全ソ新進作家創作協会「*ВТО МПФ*」に参加した作家のなかでは非常にすぐれた才能の持ち主として認められ、1990年に刊行された第一作品集「*Дорога миров*」は非常に注目を集めて新しい潮流の作家とみなされた。中編「*Мир крыльев*」(1994)で1995年のファンコン賞を受賞。そのほかの主要な作品として、中編「*Мир крыльев*」(1994)、中編「*Лабиринт снов*」(1995)、中編「*Черная стена*」(1995)、長編「*Клятва крысиного короля*」(1997)などがある。

長編よりもどちらかと言えば中短編に資質のある作家であり、近年もコンスタントに作品を発表しているが、90年代初頭の作品の方を評価する声が多い。近作に長編「*Долг Центуриона*」(2006)や長編「*Меч некроманга*」(2007)、短編「*День рождения кога*」(2004)などがある。ヴィクトル・ドレンコ( Виктор Доренко)名義でミステリも執筆した。

また、ポーランドSFの翻訳も多く手がけている。

## クバチエフ アラン・カイサンベコヴィチ

Кубатиев, Алан Кайсанбекович(1952～)

キルギスタンのビシケク在住の小説家。アルマ・アタで生まれた。アルマ・アタ国立大学文学部を卒業し、モスクワ国立大学でさらに学ぶ。1980年にはイギリスSFについての論文「*Современный фантастический рассказ Великобритании*」を執筆した。1979年に短編「*Книгопродавец*」でSF界にデビューして名前はよく知られていたが、作品が単行本「*Ветер и смерть*」として一巻にまとめられたのは2005年のことであった。ちなみに、この本でインタープレスコン賞の新人賞を受賞している。マレフカのセミナーにも参加し、世代としては「第四の波」に属する。80年代の代表作として中編「*Ветер и смерть*」(1983)がある。

90年代はほぼ沈黙を守っていたが、2000年頃から小説家として再起を果たし、鳥の世界を題材としたアンチユートピア的短編「*Вы летите, как хотите!...*」(2001)は2002年の遍歴者賞を受賞、プーシキンを殺害したダンテスを題材にした中編「*В поисках господина П*」(2002)は2003年のカタツムリ賞を受賞した。さらに、評論「*Деревянный и бронзовый Данте, или Ничего не кончилось*」(2004)でも2005年のカタツムリ賞、アーペーエス賞を受賞した。しかし、全体としては非常に寡作な作家である。

創作講座の講師も務め、インターネット上のコンクールとして著名な「*48 часов*」の初代審査員。近年はインタープレスコンで講師として活躍している。

## クラピーヴィン ウラジスラフ・ペトロヴィチ

Крапивин, Владислав Петрович(1938～)

エカテリンブルグ在住の作家。チュメニに生まれ、ウラル国立大学のジャーナリスト学部を卒業し、雑誌「*Уральский следопыт*」の編集部勤務。SFへのデビュー作は「*Я иду встречать брата*」(邦題「*兄弟に会いに行く*」)(1962)である。初期の作品「*Рейс «Ориона»*」(1962)や「*Брат, которому семь*」(1963)が読者にあたたかく迎え入れられ、その後はしごく順調に作品を発表し続けた。

主として児童向けのSF作品の分野で活躍した。70年代初頭からSFへの関心を深め、1971年から執筆が始まった中編「*Голубятня на желтой поляне*」が1983年に発表され、のちに3部作となった。さらに、60年代から構想をあたためていたとされる「*Великий Кристалл*」のシリーズを80年代後半から執筆し、中編「*Выстрел с монитора*」(1989)、中編「*Гуси-гуси, га-га-га*」(1989)、中編「*Застава на Якорном поле*」(1989)などが発表され、現在も新作が発表されて読者の高い支持を集める彼の代表的シリーズである。「*Великий Кристалл*」シリーズの近作には、中編「*Синий треугольник*」(2005)、長編「*Ампула Грина*」(2006)などがある。2000年以降も長編を中心に意欲的に新作を発表している。近作に中編「*Дагги-Тиц*」(2008)、長編「*Рыжее знамя упрямства*」(2006)、長編「*Гваделорка*」(2009)などがある。クラピーヴィンの世界では異世界への往来が可能な子どもが主人公となることが多く、冒険小説の要素を巧みに取りこんだ寓意的な物語が展開される。

SFファンからの支持も高く、1981年の第1回目のヴェリーコエ・コリツォ賞を長編「*Дети Синего Фламинго*」(1981)で受賞したが、あまり人前には出ない。ルキヤネンコもクラピーヴィンの作品世界から受けた影響を語っている。

## グリゴリエフ ウラジミール・ワシリエヴィチ

Григорьев, Владимир Васильевич(1935～1999)

1960年代から70年代にかけてユーモアSFの分野で活躍した作家。モスクワに生まれ、パウマン記念モスクワ高等技術専門学校を卒業後は技師として働き、ツングース隕石の探検隊にも参加。SFへのデビュー作は「*Ничто человеческое нам не чуждо*」(1962)である。

特に掌編を得意とし、年鑑アンソロジー『ファンタスタカ』《ファンタстика》の常連作家であった。代表作に作品集《Аксиомы волшебной палочки》(1967)、作品集《Рог изобилия》(1977)がある。

## クリメンコ ミハイル・セルゲエヴィチ

Клименко Михаил Сергеевич(1934～)

チェリャビンスクの作家。ケメロヴォ州の町に生まれ、ウラジオストクで学び、後にチェリャビンスクの高圧変電所で電気技師として働く。デビュー作のユーモア短編《Судная ночь》(1968)が高く評価され、年鑑アンソロジー『ファンタスタカ』《ファンタстика》に収録される。さらに中編《Ледяной телескоп》(1970)、中編《Иной цвет》(1974)などを発表して注目された。しばしば、プラトノフとも比較されるが、ユーモアや諷刺的色彩の強い作品を残した。しかし、1970年代末までに10作足らずの中短編を発表した後、ほとんど新作を発表していない。

## グリュコフスキイ エヴゲーニイ・ヤコヴレヴィチ

Гуляковский, Евгений Яковлевич(1934～)

モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》派の作家で1990年代以降も一定の人気を保つ作家。カザンに生まれ、キシネフスキイ大学で地質学を学び、地質学者として活動しながら映画のシナリオなどを書いた。SFへのデビューは《Ошибка》(1964)である。彼のシナリオをもとにした映画には、《Над пустыней небо》や《Горная станция》がある。

スペースオペラの長編《Сезон туманов》(1979)がスヴェルドロフスクの雑誌《Уральский следопыт》に掲載され、人気を博した。この作品はソ連時代には珍しかったスペースオペラの古典的作品と目されている。その後も作品を書き続け、長編《Долгий восход на Энне》(1984)や中編《Чужие пространства》(1990)などを発表してソ連時代は娯楽色の強い作風で独自の地位を築いた。

90年代前半は作品発表の機会を失い苦しんだが、同名の中編を長編化した長編《Чужие пространства》(1994)が商業的に成功し、再び作品発表の機会を得た。ほかにも長編《Игры шестого круга》(1997)など、スペースオペラを中心に多くの作品を発表し、長編作家として復活した。グリュコフスキイの小説は獨創性においてさほどすぐれているものではないが、依然として一定の読者層を持っている。1998年にアエリータ賞を受賞したが、これはモロダヤ・グヴァルジヤ社の残党が依然として一部で勢力を保っていたともとれる。しかし、これに対してはファンからの反発も強いものがあつた。

## クリューエワ ベーラ・グリゴリエヴナ

Клюева, Белла Григорьевна(1925～)

1960年代の「第三の波」を支えた編集者、翻訳家。モスクワ国立大学文学部で学び、さらにモスクワ国立教育大学で外国文学研究を志し、ハワード・ファストをテーマに選んだが、ファストがハンガリー事件後にアメリカ共産党を除名されたために学位論文が合格せず、外国文学の編集を目指して1957年にモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》に入った。そこで、SF部門の編集につくように言われ、セルゲイ・ジュマイチスとともに多くのSF作家の本を手がけるようになった。

当時のモロダヤ・グヴァルジヤ社の社風は、編集者は小説の最初の読者として作品を丹念に読むというもので、検閲をくぐりぬけていくつも作品を世に送ろうとした。編集者としての代表的な仕事は1965年から刊行が始まった叢書「現代ファンタスタカ叢書」《Библиотека современной фантастики》で、ヴォネガットやシマック、ウィンダム、ブラッドベリなどの英米のSFのほか、ソ連の作家にも巻をさいた。ストルガツキイ兄弟ら「第三の波」のすぐれた作家を陰で支えた各編集者のひとりである。

1974年にユーレイ・メドヴェーデフらに追われるようにしてモロダヤ・グヴァルジヤ社を退社したが、同年に全ソ著作権協会に移ってその後も活躍を続けた。アルカージイ・ストルガツキイと親しく、SF専門誌『イエースリ』《Если》に発表した回想録《Здравствуй, я ваша бабушка!》(2003)は往年のモロダヤ・グヴァルジヤ社の雰囲気伝える興味深い文章である。

## クリュトチェンコ マクシム・イワノヴィチ

Крютченко, Максим Иванович(1970～)

サンクト・ペテルブルグの編集者。カザフスタンのパヴロダールで生まれる。兵役後の1990年に印刷会社に勤め、さらにサンクト・ペテルブルグの出版社セヴェロ・ザパド社《Северо-Запад》に入る。1995年にアズブカ社《Азбука》の旗揚げに関わり、ベルモフやセミョーノワらのファンタジー長編を刊行し、ロシアファンタジーブームの火付け役のひとりとなる。さらにSF以外の文芸出版も多く手がけ、アズブカ社をサンクト・ペテルブルグを代表する出版社に育て上げた。

## クルーゲル ダニエリ (ダニイル)・ムセエヴィチ

Клугер, Даниэль (Даниил) Мусеевич(1951～)

シンフェローポリ出身の作家、歌手。シンフェローポリ大学で物理学を専攻。1994年からイスラエルへ移っているが、旺盛な作家活動を続け、イスラエルでロシア語SF作家のコンヴェンション



も開いた。イスラエルに移った後に名の表記をダニエルからダニエリに改めた。1979年から作品を発表している。1983年のマレエフカのセミナーに参加し、その後もシンフェローポリでスヴェトラナ・ヤグボワが主催していたセミナーに参加していた。1989年に刊行された歴史小説《Жесткое солнце》が初めて刊行された自著である。1995年から96年にかけてはロシア語のSF専門誌《Миры》をイスラエルで発行した。

ユーモア作品を得意とするが、主な長編に《Смерть в Кесарии》(2001)、「Дела магические」(2003)、アレクサンドル・リュバルカ(Александр Рыбалка)と共作した《Тысяча лет в долг》(2001)などがある。

90年代に入ってから作品の発表から遠ざかっていたが、2000年頃から評論を中心に活動を再開し、キエフのSF専門誌『レアリノスチ・ファンタстички』誌《Реальность фантастики》によく寄稿している。

ミステリの分野でも活躍し、ビザンツ帝国の謎をからめた長編《Убийственный маскарад》(2001)と長編《Непредсказанное убийство》(2001)はソ連からイスラエルへの移住者である特捜班の捜査員ナタリエリ・ロゾフスキを主人公にした作品であり、2001年にワグリウス社《Вагриус》から刊行された。SFミステリには一家言を持ち、『レアリノスチ・ファンタстички』誌に掲載された評論《Потерянный рай шпионского романа》(2006)が注目される。シャーロキアンでもあり、アムヌエリヤシチェベトネフらとともにシャーロック・ホームズもののアンソロジー《Череп Шерлока Холмса》(2006)に参加した。

## クルサーノフ パーヴェル・ワシリエヴィチ

Крусанов, Павел Васильевич(1961～)

サンクト・ペテルブルグの小説家。ゲルツェン記念国立教育大学卒業。大学卒業後は劇場の照明技師をしたり録音技師をしたりと職を転々とした。1989年から文筆に手を染め、作品集《Одна танцую》(1992)や作品集《Знаки отличия》(1995)を発表するが、さほどの注目は集めなかった。2000年にはアムフォラ社《Амфора》に編集者として入った。歴史改変SFの要素も含む長編《Укус ангела》(1999)が雑誌《Октябрь》の賞を受けて一気に注目を浴びるようになった。中編《Бессмертник》(2000)、長編《Ночь внутри》(2002)、長編《Бом-Бом》(2003)をいずれもアムフォラ社から刊行し、帝國的志向の強い作品群として大きな反響を呼び起こしたが、本人はファンタスティカ自体にはさほどの関心はないようである。

近作として有名なジャズミュージシャンであるセルゲイ・クリョーヒンを主人公とした長編《Американская дырка》(2005)、長編《Мертвый язык》(2009)がある。

## グルホフスキイ ドミートリイ・アレクセエヴィチ

Глуховский, Дмитрий Алексеевич(1979～)

長編《Метро 2033》(邦題『Метро 2033』)でカルト的な人気を誇る作家。1998年から小説を発表していたが、核戦争後にモスクワの地下鉄で生き延びようとする人々の姿を描いた長編《Метро 2033》(2005)がベストセラーになり、カルト的な人気を博す。それまでは記者としてイスラエルやアブハジアに働いたり、ラジオ局《Радио России》の記者をしたりしていた。この作品で2007年にはユーロコンで新人賞を受賞した。その後、この長編を原作としたコンピューターゲームが人気を博した。さらにゲームの人气が土台となり、現在では他の作家も参加するシェアワールドものの小説シリーズも大規模に展開している。グルホフスキイ自身が手がけた続編として《Метро 2034》(2009)も書かれている。ほかに長編《Сумерки》(2007)がある。

## グレーヴィチ ゲオルギイ・ヨシフォヴィチ

Гуревич, Георгий Иосифович(1917～1998)

1960年代初頭に活躍したSF作家。モスクワに生まれ、建築家だった父の影響で建築を学び、第二次世界大戦に従軍。退役後は全ソ工業大学で学び、技師として働いた。SFへのデビュー作はゲオルギイ・ヤースヌイ(Георгий Ясный)と共作した《Человек-ракета》(1946)である。初期作品に中編《Погонщики туч》(1948)、中編《Прохождение Немезиды》(1957)などがある。長編《Рождение шестого океана》(1960)は初期の集大成的作品とみなされている。

初期の作品は技術的な発明や発見を中心とした「近い標的論」《теория ближнего прицела》の枠内におさまるものだったが、エフレーモフの活躍に影響を受け、旧来の枠を破り作家として著しい進境を示した。短編《Первый день творения》(邦題『創造の第一日』)(1960)は天王星を爆発して分割するという壮大な惑星規模での自然改造のテーマを描いた作品だが、「Инфра Дракона》(邦題『竜座の暗黒星』)(1958)などとともに、のちにユートピア的連作長編《Мы - из Солнечной системы》(1965)の一編に組みこまれた。

60年代半ばからは心理的な側面を重視した作風へと移行した。70年代以降の作品集に《Месторождение времени》(1972)や《Нелинейная фантастика》(1978)などがある。また、ユートピア的な長編《В Зените》は1960年代後半から断続的に一部が発表されていたが、最終的に全貌を現したのは1985年のことである。この作品は発表当時から新境地を開いた作品として評価されていた。他の作品に長編《Темпоград》(1980)などがある。

マレエフカのセミナーでは講師も務め、新進の作家の育成に尽力した。SF史の研究者としても活躍し、SF入門書の古典的著作《Карта Страны фантазии》(1967)や《Беседы о научной фантастике》

(1982) などを書いた。

## グレシノフ ミハイル・ニコラエヴィチ

Грешнов, Михаил Николаевич(1916～1994)

モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の系列の作家のひとり。ロストフ州のカーメネツに生まれ、労働者として働くが、戦後にクラスノダール教育大学を卒業する。SF へのデビュー作は短編《Золотой лотос》(1960)である。

長編は執筆せず、80 余りの中短編を残したが、作品の質は高くはなく、評論家のフセヴォロド・レヴィチからは厳しく批判を受けた。他の作品に短編《Сны над Байкалом》(1978) などがある。

## グロムィコ オリガ・ニコラエヴナ

Громыко, Ольга Николаевна(1978～ )

ベラルーシのファンタジー作家。ウクライナのヴィーンニツァに生まれる。ベラルーシ国立大学で微生物学を学び、卒業後はミンスクの研究所で働く。主としてユーモアファンタジーの分野で活躍を続ける。2002 年に短編《Дефеодоризация》でデビューした。2003 年に 2 作の長編《Ведьма-хранительница》と《Профессия: ведьма》を発表して人気を集める。これらの作品はシリーズ化され、《Белорыйский цикл о ведьме Вольхе》というシリーズ名のもとで、中短編も数多く書かれている。近作のシリーズに《Год крысы》(2009～2010)、スペースオペラのシリーズ《Космобиолухи》(2011～ )がある。

## グロモフ アレクサンドル・ニコラエヴィチ

Громов, Александр Николаевич(1959～ )

モスクワの作家。1990 年代にデビューした作家のなかでは、もっとも飛躍を遂げた作家のひとり。ロシアで数少ないハード SF の書き手とされる。モスクワエネルギー大学を卒業後、長年宇宙関係の職場に勤めた。

1991 年に雑誌《Уральский следопыт》誌に載った短編《Текодонт》でデビュー。1995 年には作品集《Мягкая посадка》が刊行され、表題作で 1997 年のインタープレスコ賞長編部門を受賞。非常に完成度の高いデビュー作品集と高く評価された。ファンタジーが大流行するなかで良質の本格的な SF に取り組み、新たな作品世界を切り開いた功績は大きい。それ以後も途切れることなく作品を発表し続け、長編《Год Лемминга》(1997)、長編《Вагерлиния》(1998)、長編《Тысяча и один день》(2000)、《Запретный мир》(2000)などを発表。長編《Крылья черепахи》(2001)で 2002 年のロスコン賞を受賞。特に中編《Вычислитель》(2000)は 2001 年のインタープレスコ賞、遍歴者賞、シグマ=エフ賞を受賞し、SF 界の話題をさらった。短編《Сила трения качения》で 2004 年のシグマ=エフ賞とフイリグラニ賞、中編《Защита и опора》で 2005 年のインタープレスコ賞を受賞。ショートショートでも 1999 年のインタープレスコ賞を《Биль о маленьком звездолете》で受賞している。ほかに中編《Корабельный секретарь》(2003)も評価が高い。

彼の作品は科学的設定もさることながら、論理性を感じさせる作風である。ある惑星に流刑となった四人たちがサルガッソーの沼と呼ばれる多島海で「至福の島」を探す中編《Вычислитель》は特に力強い、ハードな緊張感に満ちている。道徳的な試練に次々とさらされる登場人物の姿から、グロモフはストルガツキイ兄弟の後継者とも目されている。

また、ワシリエフと共作した地理改変ものの長編《АНТАРКТИДА ONLINE》(2004)は 2005 年のカタツムリ賞を受賞。作家として新たな境地を開いている。続編として日本を舞台にとった長編《Русский аркан》(2007)が書かれた。長編《Феодал》(2005)は 2006 年のロスコン長編部門の金賞とインタープレスコ賞受賞。長編《Исландская карта》(2006)も 2007 年のロスコンの長編部門金賞受賞、同年のインタープレスコ賞も受賞。平行世界の地球へ探検して、人間の生存に適した条件かどうかを調査隊に加わった男の冒険をコンタクトテーマ風に取り扱った量子論 SF の中編《Прыткая и Потаскун》(2006)が 2007 年のロスコン中短編部門金賞とインタープレスコ賞中編部門で受賞し、ゼロ年代にもっとも勢いのある作家であった。近作に長編《Ребус-фактор》(2010)、長編《Человек отовсюду》(2010)などがある。

## グロモワ アリアドナ・グリゴリエヴナ

Громова, Ариадна Григорьевна(1916～1981)

1960 年代前半に活躍した SF 作家、評論家。キエフ国立大学の歴史文学部を卒業後、1935 年から執筆活動を始め、文芸評論を精力的に手がけた。1942 年から 43 年にかけてキエフでドイツ軍に対する抵抗活動に参加した。戦後、モスクワへ移り、1950 年代後半から SF に携わるようになった。SF へのデビュー作はヴィクトル・コマロフ(Виктор Комаров)と共作した長編《По следам неведомого》(1959)である。作品数は少ないがすぐれた作品を残した。

アンドロイドものの長編《Поединок с собой》(邦題『自己との決闘』)(1962)が代表作である。ほかに異文明の進歩のための介入というテーマを扱った中編《Глеги》(邦題『グレグ』)(1962)、核戦争後の世界を生きるテレパシストの苦悩を描いた中編《В круге света》(1965)、短編《Дачные гости》(邦題『別荘の客』)(1968)などがある。評論家ラファイル・ヌデリマンと共作した SF 長編《В институте Времени идет расследование》(1973)もある。

英語、ポーランド語からの翻訳家としても活躍し、60年代に書いた英米 SF の紹介は当時のソ連の SF ファンにとって貴重な情報源であった。

## ゲヴォルキャン エドゥアルド・ワチャガノヴィチ

Геворкян, Эдуард Вачаганович(1947～)

「第四の波」を代表する作家のひとりで、モスクワの SF 界の中心人物。ザバイカル地方のチチン州のボルジャ地区のハラノルという町に生まれた。エレバン国立大学理学部とモスクワ国立大学文学部で学んだ後、「Наука и религия」誌の編集部などに勤めながら SF を執筆した。SF へのデビュー作は短編「Разговор на берегу」(1973)である。1980年代にはマレエフカのセミナーに参加し、新しい世代の作風を代表する作家と目された。特に1983年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞した中編「Правила игры без правил」(1983)は1980年代のロシア SF を代表する作品であり、スリルとサスペンスに満ちた力強い作品である。また、カタストロフ後の世界を描いた長編「Время негодяев」(1995)はラザルチュークの作品などとともにターボリアリズムを代表する作品と目され、1996年のカタツムリ賞を受賞した。ほかの代表作に短編「Прошай, сентябрь」(1985)、中編「Черный стерх」(1990)がある。1999年に発表した第二長編「Темная гора」はフィリグラニ賞を受賞している。

90年代にはモスクワの SF 界を牽引し、SF 専門誌「Если」の副編集長も務めた。モスクワの評論家たちのグループであるバステオンの中心的存在であり、ロスコンの設立にも尽力した。

旺盛な評論活動でも知られ、代表的評論「Бойцы террактовой гвардии」(1996)は1980年代からのロシア SF の歩みを機知に富んだ筆致で振り返ったもので、1997年のカタツムリ賞と遍歴者賞を受賞した。

近年は小説の執筆が減っているが、新しい知識と旧来の伝統・慣習との関係をテーマとした短編「Ладонь, обращенная к небу」(2004)で2005年のフィリグラニ賞を受賞した。中編「Чужие долги」(2009)でも2010年のフィリグラニ賞中編部門を受賞した。

著作権問題ではマクシム・モシコフが運営するロシア語小説の巨大サイト「Lib.ru」を、マリーナ、ゴロワチョフ、エレナ・カタソノワとともに2004年に訴えたのが注目される。

## ケルジン アレクセイ・リヴォヴィチ

Керзин, Алексей Львович(1948～)

書誌学者、SF ファン。ストルガツキイ兄弟のファングループ「リュデヌイ」「Люденый」の中心的人物。モスクワ生まれ。モスクワ地質調査専門学校を卒業し、核物理学の分析関係の仕事に携わる。ワジム・カザコフやユーリイ・フレイシマンとともにストルガツキイ兄弟の書誌を1991年に刊行した。ストルガツキイ百科事典「Энциклопедия Стругацких」(1999)の刊行に対し、ワジム・カザコフやユーリイ・フレイシマンとともに2000年の遍歴者賞評論部門を受賞した。

## コヴァーリ ユーリイ・ヨシフォヴィチ

Коваль, Юрий Иосифович(1938～1995)

20世紀後半のロシアの児童文学を代表する作家。モスクワに生まれた。父は警官、母は精神科医。モスクワ国立教育大学文学部を卒業した。在学中に美術に関心を持ち、自らも絵筆をとって展覧会も開くようになった。また、歌手のユーリイ・キムやのちに演出家となるピョートル・フォメンコらとも在学中に知り合う。その後はタタール自治共和国のエメリヤノヴォ村で学校教師として働く。1960年代初めから小説を執筆し始め、ドムプロフスキイに認められるが、文芸誌『ノーヴィイ・ミール』「Новый мир」には作品は採用されずに終わる。その後、サブギルやホーリンの勧めもあって児童詩に手を染め、そうした詩作は雑誌『アガニョーク』「Огонек」に掲載された。

1966年中編「Сказка о том, как строился дом」で小説家としてデビューした。その後、初期の代表作「Алый」(1968)や短編集「Чистый дор」(1970)で注目される。作者の代表作であるユーモアミステリ風の冒険小説「Приключения Васи Куролесова」(1971)で全ソ児童文学賞を受賞して広く認められ、1972年に作家同盟に入る。その後も、「Листобой」(1972)、「Кепка с карасям」(1974)、「Недopesок Наполеон Третий」(1975)、「Самая легкая лодка в мире」(1984)などを発表し、いずれの作品も高い評価を得ている。

最後の中編「Суер-Вьер」(1995)に対し、没後の1996年に遍歴者賞が贈られた。アレクサンドル・エトーフなど SF 界にもコヴァーリのファンは多い。

## コジネツ リュドミラ・ペトロヴァ

Козинец, Людмила Петровна(1953～2003)

キエフの小説家。クラスノヤルスク生まれ、シンフェローポリ国立大学の文学部を卒業後、新聞社や全ソ著作権協会に勤めた。1983年のマレエフカのセミナーに参加し、全ソ新進 SF 作家創作協会「ВТО МПФ」のセミナーの運営にも積極的に参加し、ウクライナの事務局の責任者をつとめた。夫は SF 作家のユーリイ・イワニチェンコである。

SF へのデビューは短編「В пятницу, около семи」(1983)であるが、この短編はセミナー参加者たちの間で話題を呼んだ。女性のファンタジー作家の草分け的な存在。代表作に短編「Я иду!»(1985)、短編「Домовой」(1987)などがある。

1988年に「ВТО МФФ」の活動に参加し、ウクライナでの原稿の管理の事務局を担当した。1991年頃まで精力的に20以上の短編を発表したが、ソ連崩壊後は作品の出版の機会を失い、沈黙を続けた。2002年に、中編「Полеты на метле」（1990）を発展させた長編「Три сезона мастера, или Нормальный дурдом」が発表されたが、これが遺作となった。

## ゴブマン ウラジーミル・リヴォヴィチ

Гобман, Владимир Львович(1947～)

モスクワの評論家、翻訳家。モスクワに生まれ、モスクワ国立大学を卒業後、1973年から文筆活動を始め、ヴル・ガーコフ名義で1979年までミハイル・コワリチュークと活動した。執筆した評論などの文章はおよそ300にのぼる。評論「Zoo, или Письма не о любви」（1991）は1980年代のファンダムに関する重要な文献である。

1970年代から80年代にかけてファン活動を精力的に展開。マレエフカのセミナーや当時のコンヴェンションについて書かれた文章は当時のSF界の姿を知るうえでの基本文献となっている。ストルガツキイ、レヴィチらとともに、保守化したモロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」の派閥に対するもっとも強力な反対派であった。1989年から94年にかけてはテキスト社「Текст」の編集部トップを務めたが、その後は出版活動からは遠ざかり、大学での研究活動に戻った。

英米SFの事情に詳しく、バラードやシルヴァーバーグ、シマック、スタージョンなどの紹介、翻訳などにも携わった。1977年にはコワリチュークとともにスウェーデンのジュール・ヴェルス記念賞を受賞。1989年にはハリイ・ハリスン賞を受賞。2000年にはブグロフ記念賞を受賞した。長年にわたる論考を収めた論文集「Золотая пыль. Фантастическое в английском романе: последняя треть XIX-XX вв.」（2011）は、イギリス文学における幻想的な要素の系譜を論じたもので、ウィリアム・モリス、ヴェルズ、プラム・ストーカー、ホジスン、ダンセイニからトールキン、C. S. ルイス、オールディス、バラードらが論じられている。この著作で2012年のポルタル賞評論部門を受賞した。

## コラベリニコフ オレグ・セルゲエヴィチ

Корабельников, Олег Сергеевич(1949～)

クラスノヤルスクの作家、医師。クラスノヤルスク医科大学を卒業後、医師になり、また、ゴリキイ文学大学で学んだ。SFへのデビュー作は短編「Мастер по свету」（1978）である。

クラスノヤルスク出身ということもあってか、モロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」とのつながりは深かった。作品集「Башня птиц」（1981）、作品集「И распахнутся двери」（1984）、作品集「Прикосновение крыльев」（1986）などに収められた作品はマジックリアリズム的と称されることもあり、モロダヤ・グヴァルジヤ社の派閥の作家のなかでは才能があると見られていた。中編「Башня птиц」（1979）はシベリアの森林に住む人外の不思議な種族との交流を描いた神秘的な作品で、ラストの反科学的な展開も興味深い。当時は非常に評価の高かった作品である。しかし、愛国主義的、神秘主義的な傾向を強め、同じクラスノヤルスク出身のラザルチュークの第一作品集を酷評したりしたが、モロダヤ・グヴァルジヤ社の失墜とともにSF界から去った。1990年にアエリート賞を受賞したが、それが最後のはなむけとなった。

## ゴール ゲンナージイ・サモイロヴィチ

Гор, Геннадий(Гдальий) Самойлович(1907～1981)

「第三の波」を代表する作家。ヴェルフネウジンスクで革命家の家に生まれた。父母が逮捕されたため、出生後すぐは監獄で過ごした。その後もシベリアで過ごした。1923年にペトログラードへ移り、レニングラード国立大学へ進んだ。1925年に文学団体「Смена」のなかで文学活動を開始した。作品集「Живопись」（1933）はフォルマリズム的との批判を受けたが、1930年代後半から、極北の少数民族を扱った写実的な作品群で作家としての地歩を固めた。この時期の代表作に中編「Ланжеро」（1937）、中編「Неси меня, река」（1938）、中編「Синее озеро」（1939）、作品集「Большие пихтовые леса」（1940）、中編「Пашков」（1940）などがある。第二次世界大戦にはレニングラード封鎖の中、義勇兵として抵抗運動に参加した。1950年代には科学者を取り扱った小説に新境地を開き、この方面での代表作に中編「Ошибка профессора Орочева」（1955）がある。

1960年代に入ると次々とSF的作品を発表し始めた。SFへのデビュー作は中編「Докучливый собеседник」（1961）である。近年再評価の兆しもあり、ビートフによる序文つきで初期作品を収めた作品集「Корова」（2001）が刊行された。

ビートフは1960年初めにゴールと知り合い、1920年代のオペリウの活動や詩人ニコライ・ザボロツキイや画家のパーヴェル・フィロノフのことを伝えられたという。

自然科学的テーマではなく、心理学的、哲学的側面を重視した作風で、しばしばストーリーに起伏がほとんどないと評されることもあるが、独自の作風を確立した。中編「Кумби」（邦題『クムビ』）（1963）もよく知られた作品である。ほかに中編「Минотавр」（1967）や「Синее окно Феокрита」（1968）、長編「Извятие」（1972）などがある。

回想記「Замедление времени」（1978）は1920年代のレニングラードの文学の状況を綴ったものだが、フォードロフをツィオルコフスキイの師と位置づけた点が注目される。ほかに自伝的作品「Рисунок Дароткана」（1972）がある。

## コルパエフ ヴィクトル・ドミトリエヴィチ

Колупаев, Виктор Дмитриевич(1936~2001)

トムスクのSF作家。「第三の波」を代表する作家のひとり。現在のヤクーツク自治共和国のネザメトヌイで生まれた。その後、クラスノヤルスクへ移り、1954年からはトムスクに移る。トムスク工業大学で無線技術を学び、シベリア理工科大学などで技師として働く。1966年に最初の作品を発表。SFへのデビューは短編「Билет в детство」(邦題『少年時代行きの切符』)(1969)である。

ハードSFは不得意で、当時のSF作家には珍しくファンタジー的な作品を多く手がけた。連作「Жизнь как год」としてまとめられた短編「Сентябрь」(1972)(邦題『九月』)、短編「Май」(1977)、短編「Июль」(1977)や短編「На дворе двадцатый век」(1974)などが名高い。短編「Зачем жил человек?」(1970)は、自分が小説などを書いていると、なぜか同時に他人によって同じ内容の作品が書かれ、その他人に先に作品を発表されてしまうという不遇な作家を主人公にした作品である。発表される作風は多様であるが、中短編を主戦場とし、時間と空間のテーマを繰り返し取り上げたとされる。ほかにも短編「Поющий лес」(1972)や中編「Качели Отшельника」(1972)、中編「«Тосляк» над миром」(1980)など多くのすぐれた作品がある。

1982年に啓示に打たれて職を辞し、自らの発明のアイデアに夢中となってひたすら研究活動にいそむようになった。1993年までかかって2000ページに及ぶ原稿を仕上げたが、出版はされなかった。この間、小説の執筆も途切れた。

1988年にはその功績に対してアエリータ賞が贈られた。しかし、日常生活の場面や状況を丹念に描く作風はソ連崩壊とともにほとんど姿を消し、コルパエフ自身も作品の発表の機会を失った。ユーレイ・マルシキン(Юрий Марушкин)と共作した長編「Безвременье」(2000)はわずか75部しか印刷されなかった。

## コロダン ドミートリイ・ゲンナジエヴィチ

Колодан, Дмитрий Геннадьевич(1979~ )

レニングラード生まれのSF作家。ゲルツェン記念国立教育大学の生物学部を卒業。広告デザイナーとして働く。SF専門誌『イエスリ』「Если」に短編「Покупатель камней」(2005)が掲載され、さらにカーリーナ・シャイニャンと共作した短編「Затмение」(2006)が高評価を受けて注目される。シャイニャンとはほかにもいくつか共作があり、作品集「Жизнь чудовищ」(2009)は、共作とそれぞれの単独作品も含めて一冊にまとめられたものである。2007年からボリス・ストルガツキイのセミナーに参加している。

2000年以降にデビューした作家の中では非常に期待を集める存在で、もっぱら短編が中心だが、飛び切り間の抜けた展開と会話体の文章に魅力がある。中華料理店で無銭飲食をしたらパンダの着ぐるみを着せられて客寄せをする羽目になる若者の哀愁漂う姿をSFとからめた短編「Скрепки」(2007)で2008年のシグマ=エフ賞を受賞した。初の長編「Другая сторона」(2008)も好意的に受け止められ、2009年のロスコン金賞を受賞した。また、シャイニャンと共作した短編「Жемчуг по крови」(2009)で2010年のロスコン中短編部門の金賞を受賞した。中編「Время Бармаглота」(2010)も非常に評価が高く、2011年のロスコン中短編部門で金賞を受賞した。

## コロリョフ キリル・ミハイロヴィチ

Королев, Кирилл Михайлович(1967~ )

翻訳家、編集者。モスクワ生まれ。モスクワ歴史公文書大学とモスクワ外国語大学を卒業。1992年から評論を書くようになる。もともとSF専門誌『イエスリ』「Если」の編集部にいたが、1997年にモスクワからサンクト・ペテルブルグへ移住し、テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」に入る。1998年に遍歴者賞の翻訳部門で受賞。神話などにも関心が強く、神話事典「Мифические существа」(1997)、「Энциклопедия сверхъестественных существ」(1997)、トールキン事典「Толкин и его мир」(2000)などの各種事典を編纂した。1998年の遍歴者賞の評論部門も受賞した。ほかにゼラズニイやダン・シモンズの翻訳も手がけた。

## ゴロワチョフ ワシーリイ・ワシリエヴィチ

Головачев, Василий Васильевич(1948~ )

ロシアSF界でもっとも商業的に成功した作家のひとり。1990年代にボエヴィク「боевик」というアクションをふんだんに盛りこんだ冒険SFの作風を流行させた立役者のひとりである。ブリャンスク州のジュコフカで生まれ、1972年にリャザン無線工科大学を卒業、1972年から2年間兵役に服した後、1974年にウクライナのドニエプロペトロフスクに移り、その後は長らく無線技師として働いていたが、1989年から専業作家となり、1990年代にモスクワへ移った。SFへのデビュー作は1969年の短編「Эволюция」である。1970年代末から80年代初頭にかけて遠宇宙への人類の進出とコンタクトの問題を扱った「Реликт」シリーズ(1979~91)や長編「Черный человек」(1990)で有名になった。人工知能とのコンタクトテーマの連作「Не будите спящих джиннов」は現在でも評価が高い。

特に長編「Смерш-2」(1994)はおおよそ200万部が売れた作品だが、SF読者の関心を翻訳SFからロシア語作品へと取り戻したという点で大きな役割を果たした。2009年までにすでに50作の長編を発表し、ゴロワチョフの著作全体で2006年までに合計2000万部が売れた。各SF大会では数多くの功労賞を受賞しているが、個別の作品に対する賞は少ない。1992年に出版社の「Змей Горыныч」

から賞を贈られ、その後も 1995 年にはアルマダ社「Армада」、2003 年にはエクсмо社「Эксмо」から表彰された。2004 年にはアエリータ賞を受賞。

ロスコンなどの各 SF コンヴェンションでは創作講座の講師を勤めるなどして活躍している。また、2005 年に編んだアンソロジー「Серебряный век фантастики」は 60 年代から 70 年代のソビエト SF の代表作を収めたもので、グレブネフのような古い世代の作家からストルガツキイ兄弟、ミハイロフ、ラリオノワ、サフチェンコ、シェフネルといった 60 年代の作家たち、ジチンスキイ、シテルンなど後続の作家に加え、現在では忘れられた作家であるミハイル・ブホフの作品も選ぶなど見識を示した。

## ゴンチャロフ ウラジスラフ・リヴォヴィチ

Гончаров, Владислав Львович(1970～)

サンクト・ペテルブルグの批評家。スヴェルドロフスクに生まれた。スヴェルドロフスク国立医科大学とウラル国立教育大学に入学するが、卒業はしなかった。1992 年から 1993 年にかけてエカテリンブルグで発行されていたファンジン「Икар」の編集に協力した。1996 年にサンクト・ペテルブルグに移った。ワシーリイ・ウラジーミルスキイとともにファンジン「Анизотропное Шоссе」を発行したのち、旺盛な評論活動を展開した。ファンタジーの分野に造詣が深く、ハエツカヤの評価にも大きな役割を果たした。近年は映画の方に関心が移っている。

## ザヴゴロドニイ ポリス・アレクサンドロヴィチ

Завгородний, Борис Александрович(1950～)

ロシアの SF ファンダムの伝説的人物であり、歴史的な SF 大会であった 1991 年のヴォルガコンの主催者。つねに「ソ連のファン番号 1 番」«советский фэн №1»と紹介される。また、ソ連で初のファンが選出する組織的な SF 賞であるヴェリーコエ・コリツォ賞（1982 年創設）を運営したひとりでもあった。ヴェリーコエ・コリツォ賞は各地のファンダムごとに投票権を持っていたが、ザヴゴロドニイはそうしたファンダムを束ねる存在であった。

ヴォルゴグラードで SF ファンクラブ「Ветер времени」を主催し、アメリカの SF 情報誌『ローカス』にロシア SF の紹介記事を執筆したことでも知られる。

1990 年代に入ると、積極的に出版界へも進出し、当時はまだ駆け出しであった「第四の波」の作家たちの本を小部数ながら手がけた。英米 SF のロシアへの紹介者としても精力的に活動し、サイバーパンクを積極的に紹介した。出版人としては経済的な成功は得られなかったが、彼の存在なくしては現代のロシア SF の世界はありえなかったであろう。これらの功績に対して 1994 年と 2001 年の 2 度にわたり歴遍者賞の小賞が与えられた。

2000 年にセルゲイ・ザイツェフと共作で初めての長編「Рось квадратная, изначальная」を発表した。

## サガバリヤン ルスラン・パルナヴァゾヴィチ

Сагабалиян, Руслан Парнавазович(1951～)

アルメニアの SF 作家。エレヴァンに生まれ、エレヴァン国立大学文学部を卒業。さらにモスクワで映画シナリオを学ぶ。1975 年から 1982 年にかけてはエレヴァンの雑誌「Литературная Армения」の編集者として働いた。小説はアルメニア語とロシア語で執筆する。SF へのデビュー作は短編「Два таланта」（1967）である。マレフカのセミナーにも参加した。ほかに短編「Аукцион」（1978）、作品集に「Самый красивый в мире динозавр」（1990）がある。

90 年代以降は小説の発表はほとんどしていないが、2004 年に長編「Тень отца Гамлета」が刊行された。

## サパーリン ヴィクトル・ステパノヴィチ

Сапарин Виктор Степанович(1905～1970)

ソ連時代の小説家。モスクワ生まれ。1926 年から新聞や雑誌の記者として働く。第二次世界大戦に従軍後、短編「Чудесный вибратор」（1946）で SF 界にデビューした。また、1953 年末に雑誌「Вокруг света」の編集長に任命され、SF 作品にも紙面を割くようになった。1961 年からは「Вокруг света」の特別号として『イスカーチェリ』『Искатель』を定期的に刊行し、SF や冒険小説の発表の舞台を設けた。

初期の作品は「Удивительное путешествие」（1949）や作品集「Новая планета」（1950）などがある。これらの作品は、遠未来ではなく近未来もしくは現前の社会における発明を描くなど、典型的な「近い標的論」「теория ближнего прицела」に属している。

1950 年代末から未来の共産主義社会を舞台にしたユートピア的な連作を執筆するようになった。これらの作品は「Суд над Танталусом」（1962）に収録されている。エフレモフの『アンドロメダ星雲』などとは異なり、短編の連作形式で未来社会を描くと言う手法はストルガツキイ兄弟やグレイヴィチに通じるものがあるが、ストルガツキイ兄弟ほど高い評価を与えられているわけではない。

## ザハルチェンコ ワシーリイ・ドミトリエヴィチ

Захарченко, Василий Дмитриевич(1915~1999)

ソ連時代の編集者。ペトログラードに生まれ、モスクワで育つ。モスクワエネルギー大学、ゴリキイ文学大学を卒業し、第二次世界大戦に従軍した。1943年には詩を発表した。1950年半ばからソビエト平和擁護委員会の執行部に入る。

1949年に科学雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》の編集部に入り、1950年代前半から、長きにわたって編集長を勤め、多くのSF短編に誌面を割いた。しかし、1984年にクラークの『2010年宇宙の旅』の掲載をめぐるトラブルで編集長職を解任された。1992年からは雑誌《Чудес и приключения》の編集長も務めた。

## ザビルコ ヴィタリイ・セルゲエヴィチ

Забирко, Виталий Сергеевич(1951~ )

ウクライナのドネツクのSF作家。ドネツク州のアルテムフスクに生まれる。ドネツク国立大学の化学学部を卒業した。その後、研究所に研究員として勤めたりしたが、1994年から2000年にかけては出版社《Отечество》に勤めた。

SFへのデビューは早く、1972年に短編《Сторожевой пес》が科学啓蒙雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》に掲載された。その後、1980年代にはマレエフカのセミナーや全ソ新進SF作家創作協会《ВТО МПФ》のセミナーに参加していた。1980年代後半から作品が各種雑誌などに掲載されるようになり、1991年には2冊の短編集《Вариант》と《Тени сна》が刊行されたが、ここに収録された作品のなかにはすでに70年代前半に執筆された作品も含まれるなど、作品が世に出るまでに時間がかった作家の一人である。

比較的伝統的なSFを書く作家であるが、他の主要な作品に中編《Ловля млечника на живца》(1995)などがある。1998年に第一長編《Все пули мимо》を発表。2000年以降には中短編よりも長編を多く発表するようになってきている。ほかの作品としては長編《Слишком много привидений》(2002)、長編《Антропогенный фактор》(2005)、長編《Мародер》(2006)などがある。

## サフチェンコ ウラジーミル・イワノヴィチ

Савченко, Владимир Иванович(1933~2005)

「第三の波」を代表するSF作家のひとり。ポルタワで生まれ、モスクワエネルギー大学卒業後は電気技師として働いた。10歳にして《Как лиса Фрица к партизанам привела》という作品を書き、《Мурзилка》という雑誌に掲載された。SFへのデビューは1955年の短編《Навстречу звездам》である。その後はキエフに移った。

作品集《Черные звезды》(1960)で注目を集めたが、科学的テーマを扱いつつも「近い標的論」《теория ближнего прицела》の作品群とは決定的に異なっていた。短編《Вторая экспедиция на Странную планету》(邦題『プロクシマ目指して』)(1960)は当時のロシアSFにとっては異色の作品と評価された。初期の短編では《Пробуждение профессора Берна》(邦題『ベルン教授のめざめ』)(1956)も有名である。その後も一貫してハードSFに意欲的に取り組み、特に長編《Открытие себя》(1967)はさらに推理小説的要素を加え、アイロニーに満ちた筆致で、1960年代のソビエトSFを代表する傑作とされる。その後もこの傾向を発展させ、中編《Тупик》(邦題『袋小路—四つの屍体についての哲学的推理』)(1972)や中編《Испытание истиной》(1973)、中編《Жил-был мальчик》(1979)などの作品を発表した。1980年代に入ってから執筆を続けたが、かつての輝きは失われたと言われる。最後の長編は《Должность во Вселенной》(1992)である。

## サフノフスキイ イーゴリ・フェドヴィチ

Сахновский, Игорь Фёдорович(1958~ )

エカテリンブルグの小説家。オレンブルグ州のオルスクに生まれる。ウラル国立大学を卒業した。その後、出版社や雑誌《Уральский следопыт》、ソ連科学アカデミーのウラル支部、出版社《Наука》の支局で働いた。1988年に詩集《Взгляд》を出版。小説では、最初の長編《Насущные нужды умерших》(1999)が文芸誌『ノーヴィイ・ミール』《Новый мир》に掲載され、2000年のアポロン・グリゴリエフ賞にノミネートされる。現在はエカテリンブルグ在住で、商品広告誌《Я покупаю》の編集長も務めた。

連作短編《Счастливы и безумцы》がコンクール《Русский декамерон》で2003年に優勝し、知名度を得る。その後、同タイトルの短編集が2005年に刊行される。しかし、SF界で注目を集めたのはスリラー的長編《Человек, который знал все》(2007)が2008年のカタツムリ賞長編部門を受賞したことによる。この長編はボリシャヤ・クニーガ賞やロシア・ブッカー賞の最終候補作にも名を連ねるなど話題を呼び、映画化もされている。その後も執筆活動は旺盛で、長編《Заговор ангелов》(2009)や短編集《Незаконный рассказ о любви》(2009)などがある。

## ザヤツ ウラジーミル・アポリナリエヴィチ

Заяц, Владимир Аполлинариевич(1949~2002)

キエフのSF作家。キエフ医科大学を卒業し、1972年から小説を発表する。初めて発表されたSF

作品は短編「Были стартого касмогатора」(1978)である。ウクライナ語とロシア語で作品を執筆した。1980年代にはマレフカのセミナーにも参加した。80年代を中心に、ユーモア SF や諷刺 SF の分野で50余りの中短編を残したが、ソ連崩壊後には筆を折った。晩年はイエメンで医師として勤務していた。作品集として「Машина забуття」(1982)や「Темпонавти」(1986)がある。

## サロマトフ アンドレイ・ワシリエヴィチ

Саломатов, Андрей Васильевич(1953～)

モスクワの小説家、画家。世代的には「第四の波」に属するが、寡作な作家であるため、真価が認められたのは1990年代末になってからのことであった。

モスクワ地質調査専門学校を卒業できず、モスクワ芸術大学に入って絵画の道に進んだが、その後も文学活動に入るまでに職を転々と変え、クリミアで絵を描いたり、劇場で小道具係になったりと紆余曲折を経た。

マレフカのセミナーに参加して80年代末には一部でその名が認められたが、発表したのは児童向けのSFであった。一風変わった中年ロボットのゴーシャが活躍するシリーズを収めた作品集「Наш необыкновенный Гоша」(1994)が初めての単行本である。その後も児童向けのSFに力を注ぎ、未来の少女と異星人の友だちが騒動を起こすツイツェロンのシリーズは非常に高い評価を受けた。これらの功績が評価され、すぐれた児童SFの作家に与えられるアリサ賞を2001年のロスコンで受賞した。

一方、中編「Синдром Кандинского」(1994)で文芸誌『ズナーミャ』「Знамя」の賞を受賞し、主流文学界でも認められたが、この作品はパリで単行本化されたものの国内での単行本の出版に恵まれず、作家本人はその後独自の道を歩んだ。この作品は麻薬中毒者を主人公にした幻想的で陰惨な物語である。1999年の遍歴者賞を受賞した代表的短編「Праздник」(邦題『祝宴』)(1998)は、週末にお客を家に呼んでパーティーをする男の一夜の物語であるが、実はそのお客というのは男が空気を吹き込んだ人形であり、男は口を利く人形に囲まれて楽しい時間を過ごすというとても奇妙な作品である。

2000年頃から再び小説への創作意欲が高まり、哀感とユーモアが漂う中編「В будущем году я стану лучше」(2001)で2002年の遍歴者賞とフィリグラニ賞を受賞。この作品のストーリーは、恋人にふられた若者が三つの願いを魔神にかなえてもらうが、並行世界で体験する若者の冒険は、もとの世界のふられた恋人によく似た名前のお客のかごに入れられたりするというもので、つねにやるせなさがつきまとう。

このほかに中編「Г」(1991)、短編「Мыс дохлой собаки」(1994)、ホラー短編「Кузнечик」(1992)、2007年のカタツムリ賞受賞作である短編「Серый ангел」(2006)、手足のない人が住む地下世界へ迷い込んだ男を普通に書きたくないと語っている。近年はもっぱら「Парамониана」のシリーズ短編を執筆している。

2003年によく初めの大人向けの作品集「Проделки Джинна」が出版され、「Синдром Кандинского」(2003)、「Кокаиновый сад」(2004)と立て続けに作品集が出された。近年はアニメのシナリオなども書いており、プレイチョフ原作のアニメ「День рождения Алисы」(2008)のシナリオ執筆も一部担当した。

## シェフネル ワジム・セルゲエヴィチ

Шефнер, Вадим Сергеевич(1915～2002)

サンクト・ペテルブルグを代表する詩人、小説家。ペトログラードに生まれ、父の死後は火夫や工場勤めをして苦勞した。父の家系は代々帝政時代には将校となっており、スターリンの大粛清の時代には逮捕を恐れて一切の家族の資料を処分したりした。1936年から詩を発表し始め、第二次世界大戦中に詩作を発表して評価を得る。詩作は亡くなる直前まで続け、文芸誌『ネヴァ』「Нева」には定期的に新作が掲載されていた。

1960年代に入ると、突如、SFへ関心を持つようになり、抒情的で奇妙な作品を次々と発表し始めた。SFへのデビュー作は短編「Скромный гений」(邦題『内気な天才』)(1963)である。さらに、エフレモフの『アンドロメダ星雲』、ストルガツキ兄弟の「Полдень, XXII век」と並び称されるユートピアの小説の長編「Девушка у обрыва」(1964)を発表した。この他にも5つの「не」をもつ男、すなわち、不器用、鈍感、平凡、不運、不器量の5つを備えた男を主人公にしたユーモア中篇「Человек к пятью не, или Исповедь простодушного」(1967)や中編「Круглая тайна」(1970)などがある。

後期の長編「Лачуга должника. Роман случайностей, неострожности, нелепых крайностей и невозможностей」(1982)も意に反して実験に参加させられて寿命が延びてしまい、20世紀から23世紀まで生きた男の運命をユーモアとペーソスあふれる筆致で描いた有名な作品である。この作品で1982年のヴェリコーエ・コリツォ賞を受賞した。ほかに中編「Рай на взрывчатке」(1984)も有名である。サンクト・ペテルブルグを代表する、非常に読者から愛された作家であり、今もその作品の輝きは色あせていない。

ベラ・クリューエフの回想によれば、穏やかな人柄であったが、人と話している最中にもシェフネルは別の世界を見ているようであったという。SF界への功績に対し、1999年に遍歴者賞の功労者部門、2000年のアエリータ賞を受賞した。非SFの長編「Сестра печали」(1968)や自伝的作品の短編「Бархатный путь」(1995)も評価が高い。



## ジェマイチス セルゲイ・ゲオルギエヴィチ

Жемайтис, Сергей Георгиевич(1908～1987)

1960年代の「第三の波」を支えたモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の名編集者。ニコラエフスク＝ナ＝アムールのリトアニアからの移民の家に生まれた。高等教育は受けられなかったが、極東の各地でコルホーズのトラクター運転手をしたり、太平洋艦隊に入るなどして過ごした。第二次世界大戦には志願して従軍。1943年にソ連共産党に入党。モスクワへ移り、1950年から小説を発表し始めた。SFへのデビュー作は児童向けのSF《Алеша Перец в стране гомункулюсов》(1959)である。

小説の実作数は多くないが、海洋SFと宇宙SFを得意とした。代表作は近未来の共産主義社会でのイルカとのコンタクトを描いた中編《Вечный ветер》(1970)である。

モロダヤ・グヴァルジヤ社では1958年からSF部門での編集に携わり、エフレモフらを担当した。穏やかな人柄で作家からの信頼は厚く、年鑑アンソロジー『ファンタスタチカ』《Фантастика》や「現代ファンタスタチカ叢書」《Библиотека современной фантастики》や「ソビエトファンタスタチカ叢書」《Библиотека советской фантастики》などの叢書を刊行し、ロシアSFの基礎を築いた。同僚のペーラ・クリューエワとともに60年代のSFの出版界を代表する編集者であった。1973年に編集部を追われ、年金生活に入った。

SF以外の作品に極東を舞台にした長編《Клипер «Орион»》(1973)、長編《Не очень тихий океан》(1976)、戦争を題材としたものとして《Бешеный тигр》(1965)、《Зеленая ракета》(1965)などがある。

## シチェプトニョフ ワシーリイ・パヴロヴィチ

Щенетнев, Василий Павлович(1955～)

ヴォロネジの小説家、医師。モルドバに生まれ、ヴォロネジ医科大学を卒業。SFへのデビューは1991年の短編《Ночная Стража》だが、さほどの評判は取らなかった。中編《Седьмая часть тьмы》と短編《Позолоченная рыбка》がそろって1999年のカタツムリ賞を受賞し、彼の名を一躍有名にした。ほとんど実績のない作家がダブル受賞したので非常に意外な選出であった。

紙の媒体ではあまり作品が掲載されず、2000年以降もウェブ上での作品発表が続いたが、ロシア革命後の内戦期を舞台にした6つの中短編で構成される推理小説的な長編《Тайная игра》(2010)など、作品の執筆は続けている。

## シチェルバク＝ジュコフ アンドレイ・ヴィクトロヴィチ

Щербак-Жуков, Андрей Викторович(1969～)

モスクワのSF作家。本来の姓はシチェルバク(Щербак)のみ。モスクワに生まれ、クラスノダールへ移って中等教育までの時期を過ごす。その後はクバン国立大学生物学部で学び、さらに、全ロシア国立映画大学で映画シナリオを学ぶ。現在はモスクワ在住。デビュー作は短編《Все идет к лучшему...》(1986)で、地方紙《Комсомолец Кубани》に掲載された。短編の名手として知られ、短編集《Сказка о странной любви》(1993)で1994年のスタート賞を受賞、1997年のインタープレスコンのショートショート部門を《Сказка про маленькую планету и сексуальную революцию》(1997)で受賞している。テレビや広告関係の仕事が本業である。評論活動も精力的におこない、書評紙《Книжное обозрение》や書評紙《Ex Libris》で活躍した。エヴゲーニイ・ハリトーノフとの共著《На экране - чудо》(2003)はSF関係のロシアの映像作品について彼らが書いた文章と映像作品リストを載せた重要な文献。自らが編集を担当したオリジナル・アンソロジー《5-я стена》(2002)はディヴォフやグロモフ、ゲヴォルキャンなどの作品を30編近く収めた巨大アンソロジーで、2003年のロスコンで特別賞を受賞した。

作品数が多いわけではなく、なかなか一般的な人気を得られてはいないが、短編《Сказка о самом нелепом оборотне》(2006)で2007年のインタープレスコン賞ショートショート部門を再び受賞。健在ぶりを示した。

## シチェルバコフ アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ

Щербаков, Александр Александрович(1932～1994)

1970年代に活躍したSF作家、翻訳家、詩人。ロストフ・ナ・ドヌーに生まれたが、父母は粛清の犠牲となり、父は銃殺、母は収容所へ送られた。母が釈放されたのは第二次世界大戦後のことであった。オデッサで学び、その後、レニングラード電気工業大学で学んだ。1978年まで研究所に技術者として勤めた。1959年に詩人としてゴリキイ文学学校へ入ろうとしたが、「人民の敵」の子とされたために入ることができなかった。SFへのデビューは1964年の詩編《Вселение во Вселенную》である。初めて発表したSF短編は《Операция «Звезды»》(1972)である。1970年代にはボリス・ストルガツキイのセミナーにも参加し、中編《Змий》(1976)を朗読した。この他の代表作に破滅SFの中編《Сдвиг》(1978)がある。1983年にはユーロコンで同名の作品集《Сдвиг》(1982)が表彰された。寡作ではあったが70年代後半から80年代にかけて良心的な創作活動をおこなった作家のひとりである。

翻訳家としても著名で、キャロル『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』の翻訳で知られる。ハインラインの『月は無慈悲な夜の女王』の翻訳に対し、1994年の遍歴者賞とベリャーエフ記念賞

を受賞。没後の1995年にもユーロコンでSFの翻訳に対して表彰された。

## シチェルバコフ ウラジーミル・イワノヴィチ

Щербаков, Владимир Иванович(1938~2004)

モスクワの作家、編集者。モスクワエネルギー大学で学ぶ。SFへのデビューは1964年の短編「Крагер」であった。科学雑誌『技術青年』(Техника - молодежи)の編集部に勤めたあと、1970年代後半にモロダヤ・グヴァルジヤ社(Молодая гвардия)に入り、SF部門の前編集長ユーリイ・メドヴェーデフの後を継いで編集部を牛耳った。ストルガツキイ兄弟らと対立し、新しいSFの動向に関心を示さず、多くの若い作家のデビューを遅らせ、自分の身边に派閥を形成した。

モロダヤ・グヴァルジヤ社のSF出版の独占が崩れ始めた1980年代末から神秘主義にのめりこみ、SFから離れた。作品に長編「Семь стихий」(1980)や長編「Чаша бурь」(1985)がある。

## シチョゴレフ アレクサンドル・ゲンナジエヴィチ

Щеголев, Александр Геннадьевич(1961~)

サンクト・ペテルブルグの小説家。モスクワ生まれ。システムエンジニアとしてレニングラード航空機械器具製造高等専門学校で勤める。ボリス・ストルガツキイのセミナーに参加し、1988年から小説を発表。短編「Дождик」(1988)が雑誌「Литературный Киргизстан」に掲載されてSF界にデビューした。アレクサンドル・チューリンと共作で90年代初めに多くの作品を発表し、サイバーパンクの第一人者とみなされた。1992年から専業作家となる。チューリンとの共作「Клетка для буйных」(1991)が1993年にスタート賞を受賞。ほかにチューリンとの共作は中編「Сеть」(1992)などがある。しかし、チューリンとのコンビは90年代半ばに完全に解消された。作品集に「Мания ничтожности」(1992)、「Свободный Охотник」(1997)がある。

その後はファンタスティカの要素を加えたミステリやスリラーを書くようになった。中編「Ночь навсегда」(1993)が1995年のカタツムリ賞を受賞。その後、しばらく目立った活躍はなかったが、2000年代に入り、ヴィクトル・トチノフと共作で長編「Новая инквизиция」(2003)を発表し、カムバックした。映画のノヴェライゼーションであるスリラー長編「Жесть」(2006)は評判となり、続編として長編「Как закалялась жесть」(2007)が書かれた。近年は若手作家の養成にも携わっている。次第に幻想的な作風が強まっているが、近作に長編「Львиная охота」(2002)、2007年のボルデン賞受賞作である短編「Хозяин」(2006)、短編「Черная сторона зеркала」(2012)などがある。

## ジチンスキイ アレクサンドル・ニコラエヴィチ

Житинский, Александр Николаевич(1941~2012)

シンフェローポリ出身のサンクト・ペテルブルグを代表する小説家、詩人、劇作家。父は海軍に所属してパイロットをしていた。父の勤務の関係で、モスクワなど各地を転々とし、1954年にはウラジオストクに移る。極東工業大学に入学したが、のちに転学してカーニン記念レニングラード工業大学を卒業。1970年代半ばから小説を発表し始め、1970年代末から専業作家となる。最初のSF的作品である中編「Эффект Брумма」(1973)は「Студенческий меридиан」誌に掲載された。狭義のSF作家であるとはみなされていないが、ボリス・ストルガツキイとも強い関係を持っている。

出版人としても精力的な活動を行い、オンデマンド出版のゲリコン・プリュスという個人出版社を立ち上げ、2002年に創刊されたサンクト・ペテルブルグのSF専門誌『ボルデニ・21世紀』誌「Полдень, XXI век」では中心的役割を果たしているが、この雑誌は「ボリス・ストルガツキイの雑誌」と表紙に冠されている。『ボルデニ・21世紀』誌ではエス・ヴィチツキイ(ボリス・ストルガツキイ)の新作を掲載したほか、ブローニン、オー・サンチェス、ブイコフら狭義のSFの枠内には入らない「奇妙な味」の作家たちに光を当てている。

SF小説としての代表作は中編「Лестница」(1980)、中編「Хеопс и Нефертиги」(1980)、「Снюсь」(1981)、タイムトラベルものの傑作中編「Часы с вариантами」(1985)といった中編であるが、このほかに、9階建ての高層アパートが急に空を飛んで別の場所に着地するという奇想天外な設定の長編「Потерянный дом」(1987)は彼の主要作品とされ、ドミートリイ・ブイコフもこの作品からの影響を語っている。中編「Спросите ваши души」(2005)は2006年のカタツムリ賞を受賞。ロシアで流行中のブログサービス、ライブジャーナルを素材に取り入れた長編「Flashmob! Государь всея Сети」(2007)は2008年のアーベール賞を受賞した。

1980年代にはロシアのロックにも精力的に関わり、そのときの経験をもとに長編「Путешествие рок-дилетанта」(1990)を執筆した。

## シテルン ボリス・ゲダリエヴィチ

Штерн, Борис Гедальевич(1947~1998)

「第四の波」を代表する作家の一人。その才能は同世代のなかでも特に注目され、キエフに生まれ、オデッサ大学に進んだ。ボリス・ストルガツキイにシテルンはSF版『オデッサ物語』が書けるかもしれないと評されたほどである。

1975年の短編「Психоз」でSFへのデビューを果たしたが、その後長きにわたり、作品の発表の機会に恵まれることはなかった。1974年から始まったボリス・ストルガツキイの作家セミナーにも参加し、そこでストリャロフやリバコフらと知り合う。ここで受けた影響は非常に決定的だったよ

うで、ボリス・ストルガツキイを生涯にわたってSFの師と仰いだ。

1980年代にモスクワのマレエフカのセミナーにも参加したが、ボリス・ストルガツキイのセミナーの厳しい雰囲気と比べれば、その印象は余り芳しくなかったようで、彼の作家としての矜持がうかがえる。また、ブラシケヴィチやボリス・ストルガツキイへあてた手紙からは、彼の作家としての誇りと作品を発表することへの渴望が感じ取れる。

初期から一貫してユーモア短編を得意としたが、典型的な短編作家であった。なかでもどこか間の抜けたベル・アモールとその相棒の反抗的なロボット、スタビリザートルが活躍する《Чья планета?》(1985)を第一作とするベル・アモールシリーズは作者の代表作となった。ベル・アモールシリーズ以外にも傑作が多く、人工知能の助けを借りてチェスの世界チャンピオンになった主人公の物語を描く中編《Безумный король》(1983)は特に傑作で、人工知能のくせに非常に気分чивらがあるところが面白い。その他にも、短編《Производственный рассказ No.1》(1987)が1987年のヴェリーコエ・コロツォ賞を受賞した。ほかに中編《Записки динозавра》(1990)はシテルンの最高傑作として名高い。

ベル・アモールのシリーズ以外に《Сказки Змея Горныча》のシリーズがあるが、これは1995年のカタツムリ賞と遍歴者賞受賞作である短編《Кашей бессмерный – поэт бессов》(1993)や1997年のカタツムリ賞受賞作である中編《Да здравствует Нинель!》も含めた全8編の中短編からなる。

作品集として《Чья Планета?》(1987)、《Рыба любви》(1991)、《Записки динозавра》(1995)、《Остров Змеиний》(1996)などがあるが、いずれも完成度が非常に高い作品集である。長編を期待されながらも執筆が進まず、生前に発表された長編はプーシキンを扱った長編《Эфиоп》(1997)のみだが、この長編は1998年のカタツムリ賞と遍歴者賞を受賞した。この長編は、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』に始まったファンタスチカの一つの時代が、シテルンのこの長編で終わったとまで高く評価された。

死後には未完に終わったベル・アモールものの長編《Вперед, конюшня!》(2002)が刊行された。

シテルンの作品はイリフ&ペトロフのユーモア作品とブルガーコフのファンタジーの伝統を継いでいるが、師であるストルガツキイ兄弟の影響を見逃すことはできない。

## シドロウヴィチ アレクサンドル・ヴィクトロヴィチ

Сидорович, Александр Викторович(1960～)

サントク・ペテルブルグの高名なSFファン。インタープレスコンの主催者。1970年代から精力的にファン活動を行い、80年代末にはいくつものファングループの中心的存在となっていた。1991年のインタープレスコンの創設に関わり、以後、一貫してインタープレスコンの主催者であり続けている。作家やファンたちの間では、インタープレスコンのことをシドルコンと呼ぶこともある。インタープレスコンはスポンサーからは距離を置いて運営されているが、これもシドロウヴィチの思いによるところが大きい。1995年の遍歴者賞小賞受賞。1999年にはイワン・エフレモフ賞を受賞した。2010年にはヴィタリイ・ブグロフ賞を受賞。2000年から出版社《Лениздат》のSF部門での編集長を務める。

## シニーツィナ リュドミラ・アレクセエヴナ

Синицына, Людмила Алексеевна(1947～)

小説家。ドゥシャンベに生まれ、タジキスタン国立大学文学部を卒業した。その後は劇場や文書館、新聞で働き、雑誌《Наука и жизнь》の編集者となる。

SF作品としての代表作に中編《Пробный ящик》(1979)や中編《Белое пятно》(1984)、中編《Кривой четверг》(1987)がある。1980年代にはマレエフカのセミナーにも参加した。近年は雑誌《Дружбы народов》を中心に非SFの作品を発表している。

## シニーツィン アンドレイ・チモフェエヴィチ

Синицын, Андрей Тимофеевич(1961～)

モスクワの評論家、ファン、エージェント。モスクワエネルギー大学を卒業し、自らも出版社《ТП》の経営に携わる。ドミートリイ・バイカーロフとはいいコンビで、ふたりで多数の評論を発表している。特にアーエステー社《АСТ》から刊行されるオリジナル・アンソロジー『ファンタスチカ』《Фантастика》に寄せていた各年の総括文は手際よくまとめられ、非常に興味深いものであった。中でも2001年のロスコン評論部門で金賞を獲得した評論《Ровесники фантастики》(2000)や2002年のロスコン評論部門で銀賞を獲得した《Континент》(2001)などが特に有名である。

出版人としてはアーエステー社の《Классика отечественной фантастики》のシリーズをバイカーロフとともに担当し、1960年代の「第三の波」の世代の作品を再度世に送った。SF関係のエージェントとしても活躍している。2008年のユーロコン開催に合わせて刊行されたコンタクトテーマの書き下ろしアンソロジー《Спасти чужого》と《Убить чужого》の編者を担当し、成功を収めた。

## シニャーキン セルゲイ・ニコラエヴィチ

Синякин, Сергей Николаевич(1953～)

ヴォルゴグラードの作家。ノヴォゴロド近郊の町に生まれたが、1965年にヴォルゴグラードへ転居。兵役後も内務省畑を歩き、1999年まで勤めた。ヴォルゴグラードのSFファン活動に積極的に参加

し、80年代末から小説を書き始めた。SFへのデビュー作は1988年の中編「Шагни навстречу」であり、1990年には初の単行本「Трансгалактический экспресс」が刊行された。1991年には作品集「Лебеди Кассиды」も出版されたが、その後はSFの執筆から遠ざかった。

しかし、久しぶりに発表された歴史改変ものの中編「Монах на краю Земли」(1999)が2000年のインタープレスコン賞とカタツムリ賞、アーベール賞を受賞し、シニャーキンの名は一躍高まった。主人公が架空のソ連史を翻弄され、無実の罪で収容所へ入れられたりしながら波乱万丈の人生を送るなかで最後に迎える哀しい結末は読者の大きな反響を呼んだ。

長編はあまり執筆しないが、その後はコンスタントに作品を発表し、中編「Кавказский пленник」(2001)で2002年のカタツムリ賞を受賞している。中編「Полукровка」(2005)はナチス時代の歴史改変もので、近年の歴史改変小説の収穫と言われている。近年の作品として、ファンタジーの中編「Тайная война в Лукоморске」(2008)、中編「Младенцы Медника」などがある。ほかに作品集「Пространство для человечества」(2004)などがある。

## シニャフスキイ アンドレイ・ドナトヴィチ

Синявский, Андрей Донатович(1925～1997)

モスクワ生まれの小説家、批評家。モスクワ国立大学文学部を卒業した。1952年に「ゴリキイの長編『クリム・サムギンの生涯』と19世紀末から20世紀初頭のロシア社会思想史」という題目で修士論文を提出する。その後は世界文学研究所やモスクワ国立大学のジャーナリスト学部勤めのかたわら、1950年代末から文芸誌『ノーヴィイ・ミール』「Новый мир」を中心に評論を活発に発表する。1959年以降はアブラム・テルツ(Абрам Терц)の筆名で国外でも小説や評論を密かに発表する。テルツ名義で書かれた作品に中編「Суд идет」(邦題「審問」)(1956)や短編「Пхенци」(邦題「プヘンツィ」)、短編「Ты и я」(邦題「おまえとわたし」)、短編「В цирке」(邦題「サーカスにて」)などがある。また、評論「Что такое социалистический реализм?」(邦題「社会主義リアリズムとは何か」)(1956)もきわめて辛辣でしかも知性的な評論である。1960年には、後に大著『全体主義芸術』で知られる研究者イーゴリ・ゴロムシクとの共著でピカソ論も発表した。

しかし、1965年に作家ユーリイ・ダニエルとともに逮捕され、1966年2月に公開裁判で7年間の徒刑に処すとの判決を受けた。この事件は文学者に対する弾圧として国際的にも大きな反響を引き起こした。1971年に釈放された後、1973年にフランスへ亡命し、ソルボンヌ大学で教鞭をとった。

SFにも造詣が深く、ゴリキイの伝統を受け継いで、実作者としては幻想的な要素の強い作品を多く残した。代表的作品に1961年にフランスで刊行された作品集「Фантастические повести」や1964年にアメリカで刊行された長編「Любимов」(邦題「リュビモフ」)がある。また、1960年には当時のソビエトSFの新作を取り扱った評論「Без скидок」を発表し、イワン・エフレモフの長編「Андромеда星雲」をめぐって当時繰り広げられていた論争を受け、旧世代のネムツォフの作品を批判し、エフレモフを擁護する論陣を張った。

亡命後も執筆意欲は旺盛で、中編「Крошка Цорес」(1980)や長編「Спокойной ночью」(1984)を発表した。

評論家としての活躍も目覚しく、プーシキンを取り扱ったエッセイ「Прогулки с Пушкиным」(邦題「プーシキンとの散歩」)(1975)はほかの亡命者との間にも激しい論争を巻き起こした。他の評論にゴリキイを取り扱った「В тени Гоголя」(1975)がある。アネクドート研究の先駆者としても知られる。

## シャイニャン カリーナ・セルゲエヴナ

Шайнян, Карина Сергеевна(1976～)

モスクワのSF作家。グロズヌイで生まれたが、生後まもなく北サハリンへ移る。モスクワ国立大学の心理学部を卒業し、数年間スクールカウンセラーとして働いた。現在はモスクワ在住。短編「Банка, полная динозавров」(2002)でデビューし、主として短編を舞台に活躍している。主な作品に短編「Корм для пеликанов」(2003)、ロスコンのルキヤネンコの創作セミナーで一等となった短編「Рыба-говорец」(2004)がある。短編「Теремок」(2005)は2006年のポルトガルでサフチェンコ記念賞を受賞した。

ドミートリイ・コロダシと共作した作品がいくつかあり、短編「Затмение」(2006)は高評価を受けた。作品集「Жизнь чудовищ」(2009)は、共作とそれぞれの単独作品も含めて一冊にまとめたものである。コロダシと共作した短編「Жемчуг по крови」(2009)で2010年のロスコン中短編部門金賞を受賞した。

第一長編「Долгий путь на Бимини」(2010)の発表後は長編はシェアワールドものしか発表していないが、短編は執筆を続けている。

## ジャチェンコ マリナ・ユリエヴナ

Дяченко, Марина Юрьевна(1968～)

## ジャチェンコ セルゲイ・セルゲエヴィチ

Дяченко, Сергей Сергеевич(1945～)

現代ロシアSFを代表する夫婦共作のキエフの小説家。夫セルゲイはキエフ生まれ。キエフ医科大学を卒業し、修士課程へ進んだ。テレビ映画やドキュメンタリー映画のシナリオライターであり、

精神科医でもある。マリナもキエフ生まれ。キエフ舞台芸術大学を卒業し、演劇スタジオに勤めた。もとは俳優である。

SF へのデビュー作はヒロイックファンタジーの長編《Привратник》(1994)である。この本はウクライナのすぐれた SF 作品に与えられるフルスターヌイ・ストール賞を受賞し、1996年のユーロコンの新人賞も受賞した。その後発表する作品は一作ごとに作家の成長を示し、長編《Ритуал》(1996)、長編《Скрут》(1997)、長編《Ведьмин век》(1997)、長編《Пещера》(1997)を次々と発表して人気を博したが、長編《Казнь》(1999)で2000年の遍歴者賞を受賞しその名声は揺るぎないものになった。このときは遍歴者賞の長中短編全ての部門にジャチェンコの作品がノミネートされていた。その後も勢いはとどまることを知らず、長編《Армагеддон》(2000)は2001年のカタツムリ賞とシグマ=エフ賞を受賞、長編《Магам можно все》(2001)も2001年のズヴォズヌイ・モスト賞を受賞、代表的長編《Долина совести》(2001)はまたしても、2002年のカタツムリ賞とシグマ=エフ賞、さらに、アーペーエス賞、ズヴォズヌイ・モスト賞を受賞、長編《Пандем》(2003)は2004年のロスコン金賞を受賞した。長編《Варан》(2004)は2005年のロスコン銀賞受賞。このほかに2000年のズヴォズヌイ・モスト賞を受賞した、オルジヤワレンチノフと共作した長編《Рубеж》(2001)や中編《Корни камня》(1999)などがある。

短編はあまり書かず、どちらかと言えば、中編より長い作品を好むが、中編《Горелая башня》(1998)で1999年のインタープレスコン賞を受賞、短編《Баскетбол》(2001)で2002年のカタツムリ賞を受賞、中編《Зоопарк》(2003)で2004年のシグマ=エフ賞、中編《Уехал славный рыцарь мой...》(2004)で2005年のロスコン金賞とシグマ=エフ賞を受賞している。短編《Император》も2010年のカタツムリ賞を受賞した。

このほかに、ストルガツキイ兄弟の『収容所惑星』をフォードル・ボンダルチュク監督が映画化した際にはシナリオの執筆を担当した。

ジャンルの約束事にはあまりとらわれず、やや破調の文体で心理描写に冴えを見せる情感の強い作風であったが、長編《Vita Nostra》(2007)は、16歳の少女が奇妙な専門学校に入学し、次第に人間ではない存在へと変わっていく姿を、母子の葛藤、恋人との人間関係の変化を織り交ぜるなど、青春小説的な要素も加えてしつとりと語ったもので、堂々とした構成を持つ一方で、個々の描写については非常に細やかな魅力を持ったすぐれた作品である。この長編は非常に大きな話題を呼び、2007年のズヴォズヌイ・モスト金賞、2008年のロスコン長編部門金賞、2008年のシグマ=エフ賞、2008年のフリグラニ賞を受賞した。

近作に長編《У зла нет власти》(2008)や、2010年のフリグラニ賞長編部門受賞作《Цифровой, или Brevis est》(2009)と2011年のインタープレスコン賞長編部門受賞作《Мигрант, или Brevi finietur》(2010)は《Vita Nostra》の続編である。

## シャフ ゲオルギイ

Шах, Георгий(1924~2001)

本名はゲオルギイ・ホスロエヴィチ・シャフナザーロフ(Георгий Хосроевич Шахназаров)でゴルバチョフの側近として活動した政治家、未来学者。バクーに生まれ、第二次世界大戦に従軍後、アゼルバイジャン国立大学の法学部を卒業。その後、プラハの《Проблема мира и социализма》誌の編集部勤務し、やがてソ連共産党中央委員会に入った。SFへのデビュー作は《И деревья, как всадники...》(1972)である。

作品数は多くないが、破滅テーマの長編《Нет повести печальнее на свете...》(1984)がある。このほかいくつかの中短編を残した。

## シャリーモフ アレクサンドル・イワノヴィチ

Шалимов, Александр Иванович(1917~1991)

タンボフ生まれの地質学者、小説家。レニングラード鉱山大学を卒業後、数々の遠征隊に参加し、第二次世界大戦にも従軍した。のちにレニングラード鉱山大学に戻って教鞭をとり、ポーランド、キューバでも教えた。小説は1956年から執筆を始め、SFへのデビュー作は短編《Ночь у мазара》(1959)である。

作風は自然科学的テーマを扱ったごくオーソドックスなものであるが、精緻な科学的描写にすぐれていると評される。短編《Охотники за динозаврами》(1962)や海洋 SF の中編《Тихоокеанский кратер》(1967)が有名である。

執筆は70年代に入ってからでも旺盛で、アンチユートピア的な中編《Приобщение к большинству》(1975)や核戦争後の世界を描いた中編《Стена》(1982)もある。

## シャルガノフ アレクサンドル・ミハイロヴィチ

Шалганов, Александр Михайлович(1955~ )

モスクワの SF 専門誌『イエースリ』《Если》の編集長。ドネツクに生まれ、1968年にモスクワに移った。モスクワ国立教育大学では児童文学の理論を学んだが、1979年からジャーナリストとして活躍。1985年に『文学新聞』《Литературная газета》紙上で交わされた当時のソビエト SF に関する紙上討論にも編集部として積極的に関わっていた。

1991年に『イエースリ』の創刊に参加。以後、編集長として敏腕ぶりを発揮し、『イエースリ』は現代まで刊行を続ける雑誌のなかでは、もっとも古く、息の長い専門誌となった。1998年の遍歴

者賞編集者部門を受賞。

## ジュラヴリョーフ ワレンチナ・ニコラエヴナ

**Журавлева, Валентина Николаевна(1933～2004)**

1960年代の「第三の波」を代表する作家のひとり。夫はSF作家のゲンリフ・アイトフ。バクーに生まれ、アゼルバイジャン医科大学の薬学部を卒業。SFへのデビュー作は1958年の短編「Сквозь время」と短編「Эксперимент 768」であった。

宇宙への進出と自然に打ち克つ人間の姿を高らかに謳い上げたその作風は、ある意味で典型的なソビエトSFと言える。海底での地殻の改造を描く短編「Человек, создающий атлантиду」（邦題『アトランティス創造』）（1959）、短編「Капитан звездолета «Полос»」（邦題『宇宙船ポリュス号の船長』）（1960）、短編「Летающие во Вселенной」（1963）、「Придет такой день」（1968）などが代表作である。70年代になると小説の執筆はほとんどなくなったが、後期の作品としては短編「Некий Морган Робертсон」（1980）などがある。

## シュール エフィム・レオニドヴィチ

**Шур, Ефим Леонидович(1948～2013)**

ベラルーシの編集者。モギリョフ州のチャウスイに生まれる。1971年にベラルーシ国立大学を卒業し、1973年から1990年までミンスクの雑誌「Парус」の編集部を務めた。1990年にロシア語圏で最初期のSF専門誌『ファンタクリム・メガ』を創刊したメンバーのひとりとなり、のちに編集長となる。チャドヴィチ&ブライデルやサロマトフ、ブリチョフ、ルキヤネンコ、ブルキン、リュバコフ、ウスペンスキイ、ルキーン、グロモフらの代表作となる中短編を数多く採用し、サイバーパンクをはじめとした英米SFの翻訳紹介も進めた。また、ビジュアル面を重視した誌面は当時としては斬新なものであり、ロシア語で書かれた中短編の発表媒体としてきわめて重要であった。

その功績により1994年の遍歴者賞の編集者部門を受賞したが、『ファンタクリム・メガ』の発行部数が乱高下し、1995年に経営が破綻。1998年に1号だけ発行部数1500部で復活したが、ついに廃刊となった。

## ジリン ヴィクトル・パヴロヴィチ

**Жилин, Виктор Павлович(1946～1986)**

レニングラードのSF作家。タルトゥに生まれたが、1956年にレニングラードへ移った。レニングラード機械工科大学を卒業。ボリス・ストルガツキイのセミナーの精力的なメンバーとして活躍し、その人柄はみなから愛された。SFへのデビュー作は短編「Абсолютный гороскоп」（1983）である。

惜しくも早世したが、没後に発表された中編「День свершений」（1987）は当時、非常に高い評価を得た作品であった。

## シレツキイ アレクサンドル・ワレンチノヴィチ

**Силецкий, Александр Валентинович(1947～)**

モスクワ生まれの小説家。現在はベラルーシのミンスク在住。1963年に短編「«Галактик Шуз» из космоса」でSFにデビューしたが、再び精力的に小説を発表し始めるのは1980年代になってからのことである。全ソ国立映画大学を卒業後は「Земля и Вселенная」や「Наука и религия」といった雑誌の編集部勤務。1989年に同じくSFを書くナターリヤ・ノヴァシ(Наталья Новаш)と結婚。90年代半ばにミンスクへ移る。

1980年代のモスクワのマレフカのセミナーで頭角を現し、短編を得意としたが、ブラッドベリに通じるリリカルな作品と評された。代表作に抒情SF短編「Пыльная дорога, звездные дожди」（1981）や8年間黙ったままで、自分をシェイクスピアだと思ひこむ男の姿を描いた短編「Глиняные годы」（1988）などがある。当時の若手作家のなかではもっとも有望とされ、全ソ新進SF作家創作協会「ВТО МПФ」にも目をつけられて作品集「Тем временем где-то...」（1989）が刊行された。

80年代の活躍に比して、1990年代に入ってからSF界ではあまり作品を発表せず、現在に至っている。2002年に久しぶりに刊行された作品集「Завоеватель планет」の質は本領を發揮したものとは認められてはいない。近年では、久々の短編「Антраша」（2007）がSF専門誌『イエースリ』に掲載されたほか、長編2本を収めた「Дети, играющие в прятки на траве」（2009）が刊行されている。この本はベラルーシのSF作家の作品を刊行するシリーズの1冊として刊行されたものである。

## ジンチュク アンドレイ・ミハイロヴィチ

**Зинчук, Андрей Михайлович(1951～)**

サンクト・ペテルブルグの劇作家。さまざまな職を経験した後、1980年から全ソ国立映画大学でシナリオを学ぶ。狭義のSF作家ではないが、児童劇「Вперед, Котенок!」（1979）などで知られる。SFは1973年から書き始めた。ボリス・ストルガツキイのセミナーにも参加。中編「Не хочу быть двоечником!」（1988）が代表作である。主な著作に作品集「Очень」（2003）がある。

## スイチ エヴゲーニイ・ユリエヴィチ

Сыч, Евгений Юрьевич(1949～ )

クラスノヤルスクの SF 作家。ゴーリキイ文学大学を卒業。マレエフカのセミナーに参加した。デビュー作は短編《Знаки》(1986)である。作品集《Параллели》が1987年に刊行された。ほかに中編《Еще раз》(1989)、中編《Трио》(1990)などがある。ラザルチュークとは同郷であったが、1980年代後半には編集者としてたびたびラザルチュークの作品に難癖をつけて刊行を許さなかった。モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》に近い作家として、80年代には作品を発表していたが、90年代に入ると SF 界の表舞台から去った。

## スヴィリドフ チムール・ゲオルギエヴィチ

Свиридов, Тимур Георгиевич(1956～ )

タシケントに生まれる。父は作家のゲオルギイ・イワノヴィチ・スヴィリドフ(Георгий Иванович Свиридов)である。グネーシン音楽大学とモスクワ国立大学のジャーナリスト学部で学ぶ。SF へのデビュー作は中編《Спасатель》(1984)である。マレエフカのセミナーには1983年から85年にかけて参加し、バベンコの指導を受けた。1987年には長編《Агент Омега-корпуса》を雑誌《Урал》に発表した。1991年にカナダのバンクーバーへ移住。ロシアには2004年に戻り、長編《Миры Непримиримых》(2008)などを発表している。

80年代には武術にも関心を持ち、SFではないが、長編《Призраки в горах》(1990)を発表した。また、80年代末には占星術師パーヴェル・グロバに関する記事を雑誌や新聞に執筆し、《Школа Глоба》(1989)などの著作をグロバとの共著で発表した。

## スヴェルジン ウラジーミル

Свержин, Владимир(1965～ )

ウクライナのハリコフの SF 作家。本名はウラジーミル・イゴレヴィチ・フィデリマン(Владимир Игоревич Фидельман)である。1981年に学校を放校処分されるが、工場でしばらく働いて、勤労学生として学校を卒業した。兵役に服した後にハリコフ国立大学歴史学部に入る。紋章について非常に博識である。1997年にファンタジー長編《Закон Единорога》や長編《Ищущий битву》を発表して SF 界で注目された。歴史改変の要素も含むファンタジー作品を得意とする。そうした作品がシリーズ化され、《Институт экспериментальной истории》ものとして2013年までに19作の長編を発表するなど人気を保っている。

## ズヴァギンツェフ ワシーリイ・ドミトリエヴィチ

Звягинцев, Василий Дмитриевич(1944～ )

スタヴロポリ在住の SF 作家。グロズヌイに生まれ、スタヴロポリで医学を修め、医師となる。軍医としてサハリンで勤めたあと、スタヴロポリに戻って10年間内務省などで働いた。1987年に SF に短編《Уик-энд на берегу》でデビューした。

1990年代初頭のロシア SF を代表する長編《Одиссей покидает Итаку》(1992)によって広く知られるようになり、この作品は1993年のインタープレスコン賞とアエリータ賞を受賞した。タイムパトロールの設定を使ったこの小説は90年代初頭に特に流行した歴史改変のジャンルに属するが、彼がこの作品を執筆したのは1978年から1983年にかけてのことであった。

その後も同一設定の長編群を次々と発表し、すべてを総称して《Одиссей покидает Итаку》としているが、2013年までに執筆した長編18作全てがこのシリーズに属している。長編《Бульдоги под ковром》(1992)、長編《Разведка боем》(1996)、長編《Андреевское братство》(1997)、長編《Хлопок одной ладонью》(2006)などがある。遍歴者賞選考委員のひとり。

## スカランジス アント

Скаландис, Ант(1960～ )

1990年代に活躍した SF 作家。本名のアントン・ヴィクトロヴィチ・モルチャノフ(Антон Викторович Молчанов)でも評論活動多数。マレエフカのセミナーの中心人物であった。モスクワに生まれ、メンデレーエフ記念モスクワ化学技術大学を卒業後、小説家、出版人としての道を歩む。テキスト社《Текст》でも宣伝広報の役にあたった。

諷刺を含んだごく短い短編を得意とし、最初の作品集《Ненормальная планета》は1989年に出版され、注目を集めた。第一長編《Катализ》は1991年から1993年にかけて雑誌に発表された後、加筆されて1996年に単行本化された。

また、1997年からはハリイ・ハリソンと共作してハリソンの長編『死の世界』の続編を書き、商業的な成功を収めた。最近では編集者として各出版社で勤めるかわら、テレビ関係の仕事が多くなっており、小説の新作は少なくなっている。

ストルガツキイ兄弟の詳細な評伝の力作《Братья Стругацкие》(2008)は、ストルガツキイ兄弟を研究する者にとっては必読の文献であり、非常に大きな話題を呼んだ。ファンの反応も様々ではあるが、2008年のズヴォズヌイ・モスト賞の評論部門と2009年のカタツムリ賞評論部門を受賞した。

アンソロジストとしても活躍し、ユーモア SF アンソロジー「**Наши в космосе**」(2001)の編集にも関わる。サロマトフやエトールエフ、フルーモフなどかなり渋い作家の作品を収録した。この好評に気をよくしてユーモア SF アンソロジーの第二弾「**Наши в городе**」(2001)を刊行したが、突如、路線を変更して恐怖 SF アンソロジー「**Наших бьют**」(2001)を編纂する。しかし、シリーズはこれで打ち切りとなった。

## スキリュク ドミートリイ・イゴレヴィチ

Скирюк, Дмитрий Игоревич(1969～ )

ペルミ州のベレズニカに生まれる。兵役後、ペルミ国立大学を卒業したが、その後はいくつもの職を転々とした。そのかたわら精力的にファン活動と執筆を続けた。2000年から2001年にかけては、ファン魂があふれる書評でも非常に活躍した。2000年にファンタジー長編「**Осенний лис**」を発表し、2000年のズヴォズヌイ・モストの新人賞を受賞。この作品は「**Жуга**」というシリーズに発展し、長編「**Драконовы сны**」(2001)、長編「**Руны судьбы**」(2002)、長編「**Кукушка**」(2005)を発表したが、いずれも評価は高い。さらに、ロックとホラーを融合させた異色の長編「**Блюз черной собаки**」(2006)もかなり高い評価を得ている。ほかに短編集「**Парк Пермского периода**」(2002)などがある。ロックに関するエッセイを収めた「**Другой Rock-And-Roll**」(2008)という著作もある。

## スコレンコ ティム

Скоренко Тим(1983～ )

モスクワの SF 作家。ミンスクに生まれ、ベラルーシ工業大学で内燃機関について学び、卒業後は自動車工場で働く。2009年に退職してモスクワに移住し、編集者となる。

小説は2006年から精力的に執筆し始め、インターネット上のコンクールなどに登校していた。ルキヤネンコやワレンチノフの長編講座にも参加した。2008年に短編「**Каталог Киллинсби**」などが雑誌に掲載されてデビューを果たした。長編「**Ода абсолютной жестокости**」(2010)が2010年のセレブリャナヤ・ストレラ賞の新人賞部門を受賞したが、一躍、出版界の注目を集めることになったのは第二長編「**Сад Иеронима Босха**」(2010)が2011年のカタツムリ賞を受賞してからである。731部隊を扱った未来 SF 長編「**Законы прикладной эвтаназии**」(2011)、長編「**Легенды неизвестной Америки**」(2012)を発表し、若手作家の代表格として読者から注目を集めている。

## スタロビネツ アンナ・アリフレドヴナ

Старобинец, Анна Альфредовна(1978～ )

ロシアのステイーヴン・キングとの異名も取る女性作家。モスクワ生まれ。モスクワ国立大学文学部で学ぶ。同時通訳からウェイトレス、ピラ貼りまで雑多な職業を経験し、大学卒業後は「**Время новостей**」紙に勤め、ジャーナリストになる。

代表作に長編スリラー「**Убежище 3/9**」(2006)のほか、ナショナルベストセラー賞にノミネートされた作品集「**Переходный возраст**」(2005)と作品集「**Резкое похолодание**」(2008)、「**Икарова железа**」(2013)がある。

ホラー的手法を使いこなす作家が少ない中で、これからの活躍が期待される。2009年のモスクワ映画祭特別賞を受賞した芦野芳晴監督の長編アニメ『**ファースト・スクワッド**』をもとにした長編「**Первый отряд. Истина**」(2010)も手がけた。

## ストリャロフ アンドレイ・ミハイロヴィチ

Столяров, Андрей Михайлович(1950～ )

サンクト・ペテルブルグを代表する作家のひとりであり、「第四の波」でもっとも輝かしい活躍をした人物。レニングラード国立大学で生物学(発生学)を専攻し、研究者としても長らく勤めたあと、ボリス・ストルガツキイの作家セミナーで大きな影響を受けて作家として歩み始める。SFには1984年に短編「**Сурки**」でデビューした。

1986年中編「**Мечта Пандоры**」以降、注目を集めるようになり、次々と作品が各種アンソロジーなどに掲載された。ストルガツキイ兄弟の直系の後継者であるとみなされたこともあった。作者の第一作品集は「**Аварийная связь**」(1988)であるが、どういうわけか第二作品集「**Изгнание беса**」(1989)ですぐれたデビュー作品に与えられるスタート賞を受賞した(1990年)。中編「**Изгнание беса**」(1988)と中編「**Телефон для глухих**」(1989)により、1988年、89年のヴェリーコエ・コリツォ賞を連続受賞し、短編「**Некто Бонапарт**」(邦題「**ボナパルト某**」)(1989)などの作品により、名声はゆるぎないものになった。

1990年代初頭からターボリアリズム運動を提唱し、ラザルチューク、リュバコフ、ペレーヴィンらとともにロシアの SF 界を席卷した。この時期にロシアの SF は、「**Нау-チナヤ・ファンタスタカ**」(「**科学的ファンタスタカ**」)や「**Эсээф**」(「**НФ**」)ではなく、単に「**ファンタスタカ**」(「**ファンタスタカ**」)と呼ばれるようになってきた。当時の作品である長編「**Альбом идиота**」(1992)、1993年のカタツムリ賞を受賞した「**Монах под луной**」(1993)、サンクト・ペテルブルグを舞台に、現実よりもリアリティのある「**絶対テキスト**」を綴る友人の作家のテキストに巻き込まれていく主人公たちの姿を描いた中編「**Ворон**」(1992)などはストリャロフの創作の頂点に位置している。この時期も短編「**Маленький серый ослик**」(1992)で1994年の遍歴者賞、中編「**Послание к коринфянам**」(1992)で



1994年の遍歴者賞、短編「До света」(1995)で1996年の遍歴者賞を受賞。その作風はミステリー的手法を使いながら黙示録的世界観を展開するもので、どこか神秘的な薄ら寒いスリラーという趣をたたえている。

その後、次第に作風を変え、主流文学へ接近したなどと言われながらも、ファンタジーへの関心を示した「Боги осенью」(1999)やホラーに近い「Наступает мезозой」(2000)など多様な傾向を試みている。しかし、近年はSFファンダム内でも熱心に読まれているとは言えなくなってしまった。近作に短編「Мелодия мотылька」(2008)、中編「Мир иной」(2009)、長編「Не знает заката」(2005)などがある。

論争家としても非常に有名で、1994年のインタープレスコンではモロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」系列の作家との長年にわたる闘争と英米からの大量の翻訳作品の流入という状況を念頭に置きながら、低級な文学とどう対峙していくかを訴えかけたものであった。シェフネルの作品集「Девушка у обрыва」(2002)の巻末に寄せた文章「О счастливых людях」もすぐれた文章である。

## ストルガツキイ アルカージイ・ナタノヴィチ

Стругацкий, Аркадий Натанович(1925~1991)

## ストルガツキイ Борис・ナタノヴィチ

Стругацкий, Борис Натанович(1933~2012)

20世紀後半のロシア文学を代表するSF作家。兄アルカージイはバトゥーミに生まれる。父はレニングラード包囲戦のさなか、市外から脱出するときに事故死した。アルカージイは大学で日本語を学び、極東で通訳業務に携わる。アルカージイは日本文学の翻訳家としても活躍し、上田秋成、芥川龍之介、『義経記』などの翻訳がある。1955年に兵役を終えた後にモスクワへ移った。弟のボリスはレニングラードに生まれた。レニングラード国立大学で天文学を学び、ブルコヴォ天文台に勤めた。兄弟が合作するようになったのは1958年のことであった。アルカージイのデビュー作はレフ・ペトロフと合作した中編「Пепел Бикини」(1958)である。兄弟での作品のデビュー作は短編「Извне」(1958)である。

初期にはエフレーモフの強い影響を受け、宇宙へ乗り出す人類の姿をとらえたユートピア的志向の強い作品群を書いていた。中編「Страна багровых туч」(1959)は兄弟の出世作となった。この時期の他の作品には、中編「Путь на Амальтею」(1960)、中編「Попытка к бегству」(1962)、中編「Стажеры」(1962)などがあるが、なかでも、中短編群からなる連作「Полдень, XXII век」(1962、1967年増補改訂)はストルガツキイ兄弟の創作史のなかで非常に大きな位置を占めている。後年のマクシム・カンメラエ三部作「Обитаемый остров」(邦題『収容所惑星』)(1971)、「Жук в муравейнике」(邦題『蟻塚の中のかぶと虫』)(1980)、「Волны гасят ветер」(邦題『波は風を消す』)(1986)も「Полдень, XXII век」のシリーズの設定を引き継いでいるが、これらの後期の作品群では、ストルガツキイ兄弟自身が初期の作品世界とはまったく別の世界観を展開させたことは非常に興味深い。

初期の作品としてはほかに、ネヴィル・シュートの同名小説が原作の破滅SFの映画『渚にて』に影響を受けたと言われる、カタストロフに見舞われた惑星の悲劇を描く中編「Далекая Радуга」(邦題『ラドガ壊滅』)(1963)、中編「Хищные вещи века」(1965)などがある。

初期の作品群からの転機となったのは長編「Трудно быть богом」(邦題『神様はつらい』)(1964)と「Понедельник начинается в субботу」(邦題『月曜日は土曜日に始まる』)(1965)である。前者は中世の世界の段階にとどまる異星の文明に対して、より高度な文明の代表者である地球人たちがどのような対応、干渉をすることができるかという問題を扱ったもので、コンタクトテーマの変種であるが、すでに文明化への素朴な信頼は消えようとしている。後者は、兄弟が辛辣なユーモアとドタバタを組み合わせることで、現代の問題を現代の世界のなかに描く手法を身につけた作品として注目される。『月曜日は土曜日に始まる』はイリフ&ペトロフ以来のユーモア文学の流れにも位置づけられ、直接の続編である「Сказка о тройке」(邦題『トロイカ物語』)(1968)やストルガツキイ兄弟の最高傑作とされる「Улитка на склоне」(邦題『そろそろ登れカタツムリ』)(1966、68)、「Гадкие лебеди」(邦題『みにくい白鳥』)(1972)ではさらにその技法が洗練されて発展させられたが、この三作はいずれも国内では不幸な運命をたどり、『トロイカ物語』が掲載されたイルクーツクの『Ангара』誌「Ангара」の編集長ユーリイ・サムゾノフは解雇され、『そろそろ登れカタツムリ』も発禁処分を受けた。さらに、『みにくい白鳥』は国内では発表できなかったところ、作者たちの知らぬ間に1972年に国外で出版されたため、国内での兄弟の立場が危ういものとなった。この時期の他の主要な作品として、ウェルズの『宇宙戦争』のきわめてアイロニカルな続編版と目される、いそいそと火星人に胃液を提供する地球人の姿を描いた中編「Второе нашествие марсиан」(邦題『火星人第二の来襲』)(1967)、雪山のホテルで起こる怪事件を描いた中編「Отель «У погибшего альпиниста»」(邦題『幽霊殺人』)(1970)、コンタクトテーマの中編「Мальши」(抄訳の邦題『リットルマン』)(1971)、中編「Парень из преисподней」(邦題『地獄から来た青年』)(1974)などがある。

ストルガツキイ兄弟の世界的なものとしたのは、タルコフスキイによって映画化された中編「Пикник на обочине」(邦題『ストーカー』)(1972)である。ハードボイルドな主人公の人物像と兄弟がそれまでに洗練させてきた饒舌な人物造形、非妥協的な作品展開は作品に非常に高い完成度を与えている。とりわけ「黄金の球」を前にした小説の最後の場面は異常な緊張感の高まりを見せ、多くの解釈をいまなお呼んでいる。

一連の発禁処分、1960年代後半から作品の発表の舞台が狭められていることを感じ取ったストルガツキイ兄弟は生涯をかけた長編「Град обреченный」(邦題『滅びの都』)の執筆に取りかかり、

1972年頃には完成させたが、ダンテの『神曲』を下敷きに、全体主義と文化の運命について考察したこの作品を発表する可能性は作者自身も全くないと考え、原稿が捜査当局に押収されて散逸するのを防ぐためにコピーを作り、信頼できる人間に託して将来の発表の機会を待った。実際に作品が雑誌に掲載されたのは1988年であり、単行本化は1989年まで待たなければならなかった。

ストルガツキイ兄弟は作品の発表の機会が狭まった後も執筆を続け、ソクーロフによって『日蝕の日々』として映画化された「За миллиард лет до конца света」(邦題『世界終末十億年前』)(1977)や『蟻塚の中のかぶと虫』、『波は風を消す』、長編「Отягощенные Злом, или Сорок лет спустя」(1988)などの力作を発表した。

その一方で、1974年からボリスはサンクト・ペテルブルグで若い作家のためにセミナーを開催し始めた。作品の発表の機会はまったく見こめない状況であったが、発表できる時期が来るのを待ちながら、そのときに備えて作家としての資質を磨きあう場として、このセミナーは後続の作家に非常に大きな影響を与えた。シテルン、ロギノフ、ストリャロフ、リュバコフ、ヴェレルといった、1980年代から90年代のロシア・ファンタスチカの新しい潮流である「第四の波」を牽引する作家がこのセミナーに集った。

ファンからも非常に愛された作家であり、1981年にソ連で初めて開催されたSF大会である、第1回目のアエリータでもアエリータ賞を受賞。『波は風を消す』、『みにくい白鳥』、『滅びの都』で、ヴェリーコエ・コロツォ賞長編部門を1987年から1989年まで3年連続で受賞した。

2000年からドネツクのスタルケル社「Сталкер」がストルガツキイ兄弟の11巻全集を刊行し始めた。ストルガツキイ兄弟の作品を研究するファングループ「リュデヌイ」《Люденый》が主として編集作業に当たったもので、現在のところもっとも信頼できるテキストとされている。しかし、全集刊行後に、ボリス・ストルガツキイが新作長編を発表したため、急遽、第12巻が補遺として刊行された。

ちなみに、「リュデヌイ」《Люденый》の名は『波は風を消す』の設定からとられたものである。兄弟で合作する一方で、単独で作品を発表することもあった。アルカージイはエス・ヤロスラフツェフ(C. Ярославцев)の筆名で中編「Дьявол среди людей」(1993)や短編「Подробности жизни Никиты Воронцова」(1984)などを発表した。

1991年にアルカージイが亡くなった後もボリスは執筆活動を続け、エス・ヴィチツキイ(C. Витицкий)の筆名で長編「Поиск предназначения, или Двадцать седьмая теорема этики」(1995)を発表し、1996年のインタープレスコン賞と遍歴者賞を受賞。その後はもう小説は書かないと言明していたにもかかわらず、2003年には長編「Бессильные мира сего」をサンクト・ペテルブルグの出版社アムフォラ社「Амфора」から刊行した。ボリス自身による自作へのコメントを収めた回想録的作品「Комментарии к пройденному」も注目される。これは、タルコフスキイによる『ストーカー』の映画化の際のエピソードや過去の作品に対する言及や当時の状況などが、非常に詳しく書かれた興味深い文献であり、ストルガツキイ兄弟のファンにとっては楽しみの尽きない著作である。この回想録的文章はスタルケル社から刊行された全集に分載されていたものだが、2003年に単行本化された。

自らのホームページでは読者からの質問に返事を書き続けており、非常に興味深い。2002年には「ボリス・ストルガツキイの雑誌」で冠されたファンタスチカの専門誌「Полдень, XXI век」の創刊号に序文を寄せ、ソ連崩壊後の新しい状況のなかで、商業主義と競争する現代のロシア・ファンタスチカの姿について内心を吐露した。また、カタツムリ賞や遍歴者賞、アーベーエス賞など自らが大きな役割を持つSF各賞での目利きぶりを生かして、現代のファンタスチカ界に強い影響を与えている。

## スニエーゴフ セルゲイ・アレクサンドロヴィチ

Снегов, Сергей Александрович(1910~1994)

オデッサ生まれのSF作家。本名はセルゲイ・ヨシフォヴィチ・シテイン(Сергей Иосифович Штейн)である。大学では物理学を学ぶが哲学にも興味を抱く。21歳のときにウクライナ教育人民委員部の指示で、大学での勉強を続けながらも、哲学講座を担当する。しかし、マルクス・レーニン主義からの逸脱であるとみなされて哲学講座は中止となる。その後、レーニングラードへ移り、工場で技師として働く。しかし、1936年に逮捕されて収容所へ送られ、後にノリリスクで原爆開発にも携わることになった。1945年に釈放され、1956年にカーニングラードへ移る。SFへのデビュー作は中編「Тридцать два обличья профессора Крена」(1964)である。

当時のソ連では珍しかったスペースオペラ「Люди как боги」(邦題『銀河の破壊者』)(1966)、「Вторжение в Персей」(邦題『ペルセウス座侵攻』)(1968)、「Кольцо обратного времени」(邦題『逆時間の環』)(1977)が代表作であるが、スペースオペラの衣をまといながら、共産主義的ユートピアの理想を追求したきわめて独特な作品として高く評価された。その後、SF界での功績が認められ、1984年のアエリータ賞を受賞している。本格的な作風で、多くの中短編を残したが、代表作に中編「Посол без верительных грамот」(1977)がある。80年代にはマレエフカやダブルディでおこなわれた作家セミナーの講師も務めた。

没後にもSF長編「Диктатор」(1996)、長編「Хрононавигаторы」(1996)が刊行されている。「Диктатор」は没後刊行ながらも傑作との呼び声も高い。SFではないが、波乱の生涯を振り返った回想形式による長編「Книга бытия」(2007)がカーニングラードの出版社から刊行された。

## スヒノフ セルゲイ・ステファノヴィチ

Сушинов, Сергей Стефанович(1950～ )

児童 SF 作家、翻訳家。モスクワ航空大学で学ぶ。マレエフカのセミナーに参加。ポール・アンダーソンやハミルトン、ゼラズニイの翻訳者としても知られる。1981年に短編「Возвращение на звезды」でデビューする。ほかに短編「Дворник」(1986)が有名である。90年代後半からはアレクサンドル・ヴォルコフの「Волшебник Изумрудного города」やハミルトンのスターウルフシリーズの続編を執筆したりするなど、ファンライターとしての活動も旺盛である。

## スミルノフ アレクセイ・コンスタンチノヴィチ

Смирнов, Алексей Константинович(1964～ )

Санクト・ペテルブルグの小説家。医師として勤めたのち、小説を書き始める。2000年にアレクサンドル・ジチンスキイが経営するグリコン・プリュス社「Геликон-Плюс」から短編集「Нагюр Морт」を出版。同じ年、パリの出版社「Стегоскоп」から「Ядерный Вий」を出版した。

2004年にアムフォラ社「Амфора」から作品集「Лето Никогда」を出版し、ホラー的要素が強い作品集として注目を集めた。

作品の多くがウェブ上に公開されているが、今後の活躍が楽しみな作家である。

## スラヴニコワ オリガ・アレクサンドロヴナ

Славникова, Ольга Александровна(1957～ )

モスクワの小説家。スヴェルドロフスクに生まれ、ウラル国立大学ジャーナリスト学部を卒業後、技術者としても働いた。1987年から雑誌「Урал」で編集者として勤務。1998年からはエカテリンブルグの新聞「Книжный клуб」の編集長も勤めた。1999年にはその紙上で数多くのSF関係の記事を執筆。ロシア・ブッカー賞の一次選考などのスタッフも務めた。SF大会アエリータの運営にも携わった。

狭義のSF作家とはみなされていないが、幻想的な要素の強い作品を書いている。長編「Стрекоза, увеличенная до размеров собаки」が1997年のブッカー賞のショートリストに入り、中編「Бессмертный」(2001)で注目された。ウラルを舞台に近未来の政変を描いた長編「2017」(2006)が広い読者層に大きな反響を巻き起こし、2006年のブッカー賞を受賞したが、この作品はSFファンにも歓迎され、2007年のロスコンでは主流文学とファンタスティカとの関係について発言した。他に鉄道を舞台に取った作品集「Любовь в седьмом вагоне」(2008)、作品集「Вальс с чудовищем」(2007)などがある。鉄道ものの短編「Русская пуля」(邦題『超特急「ロシアの弾丸」』)は幻想的要素も含む好編。

## スリュサレンコ セルゲイ・セルゲエヴィチ

Слюсаренко, Сергей Сергеевич(1955～ )

キエフ在住のSF作家。ミンスク生まれ。ハリコフ大学で物理学を学ぶ。2003年に短編「Воля к полету」がキエフのSF専門誌『レアリノスチ・ファンタスティキ』「Реальность фантастики」に掲載されてSF界にデビューした。2005年には長編「Тактильные ощущения」を発表した。まだまだ新進作家であると思われていたが、2009年に発表した長編「Кубатура сферы」は、コンピューターゲーム「S.T.A.L.K.E.R.」の世界を舞台にしたシェアワールドものの作品でありながら、2010年のロスコン長編部門で金賞を受賞し、大きな反響を呼んだ。

## ズロトニコフ ロマン・ワレリエヴィチ

Злотников, Роман Валерьевич(1963～ )

オブニンスク在住のSF作家。軍役経験も長かったが、1992年から2004年までオブニンスクの警察関係の研修所に勤めた。1998年に長編「Шпаги над звездами」でSFにデビューした。この作品は「Мир вечного」というシリーズの一編となり、ほかに長編「Восставший из пепла」(2000)などが書かれた。アクションや冒険小説の要素をふんだんに盛り込んだ典型的なポエヴィク「боевик」の作家である。その後は長編「Обреченный на бой」(1999)などからなるシリーズ「Трон」や、長編「Виват император!»(2001)などからなる「Империя」シリーズなど、いくつものシリーズを併行して書き分け、共著も含めると2013年までにすでに56の長編を発表するほどの人気作家となっている。

## セミョーノワ マリヤ・ワシリエヴナ

Семенова, Мария Васильевна(1958～ )

Санクト・ペテルブルグの小説家。ロシア・ファンタジーの創始者とされる。1976年にレニングラード航空機械器具製造高等専門学校に入学してコンピューター技術を学び、1982年に卒業した。その後、技師として勤めながらも小説を書いていたが、ソ連時代の出版事情も災いして発表までには長い時間を要し、単行本としては「Лебеди улетают」(1989)がデビュー作である。1992年にはСанクト・ペテルブルグの出版社セヴェロ・ザパド社「Северо-Запад」に翻訳家として入社し、出版界に身を置くことになった。生活のためもあるが、ハードのコナンシリーズの作品や多くの英米フ

ファンタジーの作品の翻訳に手を染めた。セミョーノフの言葉によれば、そうした英米ファンタジーの作品には飽き足りない思いもあったようである。

1995年にアズブカ社「Азбука」から発表した古代ロシアを舞台にしたヒロイックファンタジー長編「Волкодав」が驚異的な成功を収め、ロシアではファンタジーの一大ブームが巻き起こった。続編として長編「Волкодав. Право на поединок」(1997)を発表した後はこのシリーズからしばらく遠ざかり、ミステリ三部作の「Скунс」シリーズ(1997～99)などに手を染めたりしていた。2003年に再び続編「Волкодав. Звездные пути」と「Волкодав. Самоцветные горы」の2冊の長編を発表し、さらに外伝的作品をドミートリイ・テデエフ(Дмитрий Тедеев)と共に発表したりしている。「Волкодав」以外の作品もやはり同傾向のヒロイックファンタジーのシリーズものの長編が中心であるが、「Волкодав」ほどの評価を得ているものはない。ファンタジー作品集として「Валькирия」(1995)や「Викинги」(1996)などがある。また、2000年以降は、フェリクス・ラズモフスキイとの共作で「Кудеяр」や「Ошибка」(2012)といったシリーズ作品の長編を発表している。

2005年、その功績に対してアエリータ賞が贈られた。

## ゼレンスキイ ボリス・ヴィタリエヴィチ

Зеленский, Борис Витальевич(1947～2004)

ベラルーシのミンスクの SF 作家、翻訳家。スローニムの軍人の家に生まれる。ベラルーシ国立大学の数学部で学び、プログラマーとして生計を立てる。ペレストロイカ後は職を転々とし、冷凍食品の貨物の警備員として各地を走り回った。マレエフカと全ソ新進 SF 作家創作協会(ВТО МПФ)のセミナーに参加した。

SF へのデビューは短編「Адепты адаптации」(1984)で果たし、さまざまな媒体に20以上の中短編を発表した。「Весь мир в амбаре」(1988)は比較的有名である。これらの作品は「Вечный пасьянс」(1990)に収められた。ミンスクの出版社エリダン社「Эридан」にも数年間務め、ミンスクの SF 界の中心的人物としての活躍が期待されたが、1993年以降はほとんど筆を折った。2004年に急死。死後、未完に終わった長編「Атака извне」(2005)がロギノフによる編集を経て刊行された。

## ソコロワ ナターリヤ・ヴィクトロヴナ

Соколова, Наталья Викторовна (1916～2002)

評論家、小説家、エッセイスト。オデッサ生まれ。ゴーリキイ文学大学で学び、1950年代半ばから作品を発表し始めた。晩年は文芸誌「Вопросы литературы」誌に回想記などを発表していた。SF 作家としては、中編「Захвати с собой улыбку на дорогу」(邦題『旅に出る時ほほえみを』)(1964)で知られる。ほかに中編「Пришедший оттуда」(1965)などがある。

## ゾニス ユリヤ

Зонис, Юлия(1977～)

グルジアのルスタヴィに生まれる。1992年までモルドバで過ごし、モスクワ国立大学の生物学部で学ぶ。イスラエルでも学んだあと、ロンドンへ移り、カナダのトロント大学へ移る。短編映画の撮影やシナリオの執筆もしている。デビュー作は短編「Любовь и голуби」(2004)で SF 誌『Порог』に掲載された。短編「Дворжак」(2005)で2006年のポルトガル賞短編部門を受賞、短編「Ме-ги-до」(2008)が2009年のカタツムリ賞短編部門を受賞するなど、今後の活躍が期待される新進作家である。2010年に初の単独長編「Дети богов」(2010)を発表した。

## ソボレフ セルゲイ・ワシリエヴィチ

Соболев, Сергей Васильевич(1975～)

リベツクの評論家、ファン。リベツクに生まれ、リベツク国立大学で歴史を専攻。1997年からファンジン「Семечки」をアレクセイ・カラワエフ(Алексей Каравасев)とともに発行し、精力的に書評をおこなうほか、書誌の整理にも努めている。「Крот」という小出版社を持ち、1999年から2009年までに20冊以上の書籍および小冊子を僅少数ながら刊行している。とりわけ注目される刊行物は、ウラジーミル・ポクロフスキイの作品集「Георге, или Одеятинадцативековивание」(2001)や「Пути-Пучи」(2009)、アーラ・クズネツォワのストルガツキイ研究書「Стругацки и критика. Рецепция творчества братьев Стругацких в критике и литературоведении: 1950-1990-е гг.」(2009)などである。

評論「Альтернативная история: пособие для хронохичхайкеров」(2006)で2007年のカタツムリ賞を受賞した。

## ゾリチ アレクサンドル

Зорич, Александр

ヤナ・ウラジミロヴナ・ボツマン(Яна Владимировна Боцман)(1973～)、ドミトリー・ヴァチエスラヴォヴィチ・ゴルデフスキイ(Дмитрий Вячеславович Гордецкий)(1973～)の共作による筆名。現代ロシア SF を代表する作家のひとり。ともにウクライナのハリコフ生まれで、同じ学校で学び、ハリコフ国立大学を卒業。ボツマンは宗教学、ゴルデフスキイは古代の東洋文化を研究した。現在

は専業作家になっている。

コンビを結成したのは1991年にさかのぼるが、デビューは1994年の短編《Хэллоуин》で果たした。1997年から三部作《Пути звезднорожденных》を発表し、スペースオペラ、戦争SF、ファンタジーと様々なジャンルにまたがって書き続け、人気作家となった。

スペースオペラ、戦争SFのジャンルに属する長編《Завтра Война》(2003)とさらに何責のない続編《Без пошады》(2005)で一躍、プロからの評価も高まった。第3作の長編《Время – Московское!》(2006)は2007年のバストコン賞を受賞した。スペースオペラの復活という意味でも、このシリーズはロシアSFのゼロ年代の潮流の中で里程標的作品である。

デビュー当初は長編中心であったが、2000年頃から中短編の執筆に力を入れ始めた。第一作品集《Ничего святого》(2005)は高く評価された。2004年に発表された表題作の中編は著者が自薦する作品である。同書所収の中編《Топоры и лотосы》(2003)、中編《Мы неразделимы》(2004)も力作との呼び声が高い。プーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』をモチーフにした中編《Дети Онегина и Татьяна》(2006)で2007年のフィリグラニ賞を受賞した。ローマ時代を扱った歴史小説《Римская звезда》(2007)も新境地を切り開いた作品として評価が高い。

2010年以降は再び執筆の中心を長編に移し、クリム・ジューコフやセルゲイ・チェリャエフらと共作で作品を発表している。年に4作程度のペースで長編を発表しており、非常に多作である。

## ソローキン ウラジーミル・ゲオルギエヴィチ

Сорокин Владимир Георгиевич(1955～)

現代ロシア文学を代表する作家のひとり。モスクワ近郊のブイコヴォ生まれ。モスクワのグブキン記念石油ガス大学を卒業後、雑誌《Смена》の編集部に入るが、コムソモールへの加入を拒否したことが原因で解雇される。ブックデザインや絵画を手がけ、70年代には非公式芸術集団モスクワ・コンセプチュアリズムの活動に参加した。

小説は70年代末から執筆を始めた。初期長編《Норма》(1983)、長編《Очередь》(1983)、長編《Роман》(1989)は、小説の物語性という点ではなく、小説の約束事を明快に打ち破る点に重点が置かれている。こうした実験的な作風のため、ソ連崩壊までは作品が国内では出版されず、90年代に入ってからポストモダニズムの潮流の重要な作家として一部の批評家から高い評価を与えられ始めた。

長編《Голубое сало》(邦題『青い脂』)(1999)は、ソ連崩壊後に混乱したロシアの文芸出版が落ち着きを取り戻してきた時点で新作として発表された。2008年のロシアを舞台に、ロシアの古典作家のクローンを製作して小説を執筆させるという奇想天外なSF的アイデアが、食欲、性欲、健康などきわめて即物的な関心に沿って展開する。怪しげなカルト教団の教義の描写とも相まって、身もふたもない作品世界が繰り広げられるが、こうした描写が読者の喝采を浴びると同時に、2002年には親プーチン派の青年団体から内容が猥褻だとして告訴されるなど、別の読者の憤激を引き起こした。

2000年以降のソローキンはストーリーに物語性を取り入れ始め、長編《Лед》(2002)に始まる長編三部作や、長編《День опричника》(邦題『親衛隊士の日』)(2006)は、奇想天外なストーリーやアブノーマルな描写、政治的風刺はあるが、初期作品と比較すればはるかに読みやすくなっている。中編《Метель》(2010)はプーシキンやツルゲーネフ風の19世紀ロシア文学の古典的文体で描写され、一般読者からの評価も非常に高い。

SFファンのソローキンに対する態度は、一般読者と同じく、絶賛と全否定の両極に分かれることが多い。初期の《Норма》の文体実験(登場人物が苦境を訴える手紙を何通も送りつけても何の反応もなく、その結末として文体が崩壊し、最後にはaaaaaaaaaaaaaという叫びがひたすら続く)を好むファンにとっては、SF的アイデアの有無はあまり問題ではない。また、ソローキンは一般的な意味での文体の洗練を追求していないため、ソローキンの文章を評価する声は少ない。SF界には奇想天外なアイデア自体はあふれているので、物語性やSF的アイデアがあれば必ずしも評価されるというわけではない。結局は多才多芸なソローキンに何を求めるかという問題だと言えよう。

## ソンツェフ ロマン・ハリソヴィチ

Солнцев, Роман Харисович(1939～2007)

クラスノヤルスクの詩人、小説家、劇作家、編集者。カザン国立大学を卒業後、ゴリキイ文学大学で学ぶ。1962年から作品を発表する。1965年からは職業作家となり作家同盟へ加盟した。

詩集としては《Скажи сегодня》(1979)、《Волшебные годы》(1997)などが有名である。

ヴィクトル・アスタフィエフが参加して1993年に創刊されたクラスノヤルスクの文芸誌《День и Ночь》の編集長として長らく活躍し、ラザルチュークやウスペンスキイといったクラスノヤルスクの小説家たちの作品を掲載した。1994年にはラザルチュークの長編《Солдаты Вавилона》やウスペンスキイの長編《Там, где нас нет》、ペレーヴィンの評論《Зомбификация》を掲載し、1995年の遍歴者賞編集者部門を受賞した。

## ダシコフ アンドレイ・ゲオルギエヴィチ

Дашков, Андрей Георгиевич(1965～)

ハリコフのSF作家。ハリコフに生まれる。ハリコフ航空大学を卒業し、電子機器製造研究所に勤めた。

ファンタジー長編《Отступник》(1993)がハリコフの出版社《Основа》から刊行されたアンソロジー

一「Сумерки мира」に収められてデビューする。このアンソロジーには同じハリコフの作家であるオルジの長編も収録されていた。ベレジノイにはムアコックに似た作風と評された。その後、カラストロフ後に科学技術が衰退した地球での冒険を描くファンタジー三部作「Звезда Ада」シリーズが1996年にエクсмо社「Эксмо」から刊行されて流行作家の仲間入りをする。以降も90年代後半には長編を発表していた。暗鬱な傾向の作品が多く、ホラー長編「Собиратель костей」(2001)は評価が高い。近年は中短編の執筆が多くなり、アンソロジーなどに作品を寄せることが多い。短編「Эхо полярия»(2008)などがあるほか、10年ぶりの新作長編「Плод воображения»(2011)を発表した。

## ダニフノフ ウラジーミル・ポリソヴィチ

Данихнов, Владимир Борисович(1981～)

新進気鋭のSF作家。ノヴォチェルカスクに生まれ、南ロシア国立工業大学に進み、企業で技術者として働いていた。現在はロストフ・ナ・ドヌー在住。長編「Братья наши меньшие»(2005)がアエステータ社「АСТ」から刊行された。多重世界を舞台にした作品世界における宇宙飛行士の内宇宙を、非常に複雑な構成で描いた長編「Чужое»(2007)は一部の評論家たちから激賞されるも、広範な読者層を得るには至っていない。しかし、潜在的にはベストセラー作家になるとの期待も寄せられている作家であり、新しいセンスが感じられる有望な作家である。このほかにアルチョム・ペログラゾフ(Артем Белоглазов)と共作した長編「Живи!»(2008)も一部で高い評価を受けている。2008年のユーロコンで新人賞を受賞。長編「Девочка и мертвецы»(2010)も高い評価を受け、読者からの反響は非常に大きかった。今後の活躍が非常に期待される作家のひとり。

## チェクマエフ セルゲイ・ウラジミロヴィチ

Чекмаев Сергей Владимирович(1973～)

モスクワの若手作家。2001年から小説の執筆をはじめ、2002年に短編「Вопрос веры」がSF誌『Борог』「Порог」に掲載されてデビューした。その後、2004年まで30余りの短編を雑誌やアンソロジーなどに発表した。同じ年に2冊の長編「Везуха」と「Аанфема」を発表し、若手の有望作家として認められる。その後の作品に長編「Бремя стагнатора»(2006)などがある。

アンソロジー「Антигеррор 2020」などの編集により、2012年のロスコン編集者部門を受賞した。

## チェシコ フョードル・フョードロヴィチ

Чешко, Федор Федорович(1960～)

ハリコフのSF作家。オルジ、ダシコフ、ザビルコらとともに90年代以降のウクライナのロシア語SF作家の一翼を担う。考古学の発掘調査や工場労働者などさまざまな職を経験する。ハリコフ工業大学を卒業し、石炭化学関係の研究所に勤める。1991年に短編「Ночь вольчих песен」でデビューし、いくつかの短編はオルジやダシコフの作品とともにアンソロジー「Сумерки мира」(1993)にも収録された。長編第一作「В канун Рагнаради」はオルジの編集で刊行された「Живущий в последний раз»(1992)に収録された。ほかに長編「Посланик Бездомной Мглы»(1997)や長編「Урман»(2005)などがある。

## チェルトコフ アンドレイ・エヴゲニエヴィチ

Чертков, Андрей Евгеньевич(1961～)

1980年代から90年代を代表するSFファンのひとり、編集者。セヴァストーポリに生まれ、ニコラエフ教育大学を卒業。1980年代からSFファンとして活動。1982年にニコラエフでファンクラブ「Арго」を創設する。いくつものファンジンの編集に携わったが、とりわけ有名なのが、『オヴェルサン』「Оверсан»(1988～89)と『インテルコミ』「Интеркомь»(1991～94)である。『オヴェルサン』に掲載された1989年のダブルティのセミナーをめぐるセルゲイ・ペレスレーギンらとの鼎談は若き日のルキヤネンコやワシリエフ、ペレーヴィンらへの言及も見られ、非常に興味深い資料となっている。

1990年にレニングラードに移り、セルゲイ・ベレジノイらとともに出版活動にも積極的に関与した。テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」に入り、叢書「ストルガツキイ兄弟の世界」「Миры братьев Стругацких」では編集者として活躍し、ストルガツキイ兄弟の作品世界事典なども編集するほか、ストルガツキイ兄弟の作品世界を舞台にした、新作中短編をラザルチュークやルイバコフら現代作家に競作させたアンソロジー「Время учеников»(1996)は、その後も3巻まで続編が出されるヒット作となった。サイバーパンクのロシアへの紹介者としても有名である。

また、インターネット書店オズンの創設期の運営にも深く関わったが、2001年頃に疎遠になった。2000年以降はSF評論からは距離を置き、映画関係の仕事に携わったりしていたが、「Время учеников」の新シリーズ「Возвращение в Арканар»(2009)の編集を手がけた。

## チャドヴィチ ニコライ・トロフィモヴィチ

Чадович, Николай Трофимович(1948～2011)

## ブライデル ユーリイ・ミハイロヴィチ

Брайдер, Юрий Михайлович(1948～2007)

ベラルーシのミンスク在住のコンビの作家。チャドヴィチはミンスク近郊の町で生まれたあと、大学卒業後はトロリーバスの運転手として働いた。1990年から98年にかけてはミンスクの出版社エリダン社「Эридан」の編集者としても働いた。ブライデルもミンスク郊外のジェルジンスクという町で生まれ、警官として働いた。ふたりは常にコンビで多くの作品を生み出している。マレエフカのセミナーの常連の参加者で、1980年代末から専業作家となった。SFへのデビューは1983年の短編「Нарушитель」である。

初期の作品は作品集「Поселок на краю Галактики」(1989)と「Ад на Венере」(1991)にまとめられた。中編「Телепатическое ружье」(1989)とファンタジー的な長編「Евангелие от Тимофея」(1991)は特に注目された。「Евангелие от Тимофея」はミンスクのSF専門誌『ファンタクリム・メガ』「Фантаkrim-МЕГА」に最初は掲載され、翻訳SFに席捲されていたロシアのSF市場に再び活気をもたらした。また、「Между плахой и секирой」(1998)で遍歴者賞ジャンル賞のヒロイックファンタジー部門を受賞している。

90年代半ばからは中短編から長編に完全に移行し、「Дисбат」(2000)、「Между плахой и секирой」(2001)、「Щепки плахи, осколки секиры」(2001)、「Жизнь Кости Жмуркина, или Гений злонаправной любви」(2001)などを発表した。

ブライデルは2005年に病を患い、そのまま2007年に亡くなった。

## チュプリニン セルゲイ・イワノヴィチ

Чупринин, Сергей Иванович(1947～)

批評家、編集者。文芸誌『ズナーミャ』「Знамя」の編集長。アルハンゲリリスク州のヴェリスクで生まれた。ロストフ大学を卒業後、編集者としてのキャリアを重ね、1976年から89年までは『文学新聞』「Литературная газета」で文筆を振るった。1989年から文芸誌『ズナーミャ』に移り、1993年から編集長となる。著作として「Оттепель: Страницы русской советской литературы. 1953-1956」(1989)などがある。

幅広い視野から文学全体を見る独自の姿勢を保ち、ファンタスチカにも理解がある。評論「Еще раз к вопросу о картографии вымысла」(2006)ではファンタスチカのなかのさまざまなサブジャンルの動向が分析されている。このほか、現代文学で活躍する作家たちの伝記や各文学賞、文芸雑誌、出版社などの情報を便覧形式にまとめた「Русская литература сегодня. Путеводитель」(2003)は好評を博した。さらに、現代の文芸潮流を同じような形式にまとめたのが、「Русская литература сегодня. Жизнь по понятиям」(2007)であるが、文芸誌の編集長としてさまざまな潮流を見てきたせいとか、ある意味では粘り強く、ある意味ではシニカルな独特の著作になっている。

## チューリン アレクサンドル・ウラジミロヴィチ

Тюрин, Александр Владимирович(1962～)

ロシアのサイバーパンクを代表する作家。オデッサ生まれ。1967年にレニングラードに移り、レニングラード海洋高等専門学校を卒業。1985年からボリス・ストルガツキイのセミナーに参加した。1988年に雑誌「Костер」にアレクサンドル・シチョゴレフと共作した中編「Клетка для буйных」を発表してSFにデビューした。同名の作品集が1992年のスタート賞を受賞し、将来を大きく囑望された。

その後もやはりシチョゴレフと共作した中編「Сеть」(1992)や単独で発表した長編「Фюрер Нижнего Мира」(1996)、中編「Топор гуманиста」(1996)、「Космика」という未来史シリーズに属する諸作など、次々と作品を発表したが、本業のプログラマーの仕事の関係で90年代にケルンへ移住し、作品の発表は減った。しかし、2002年頃から再び執筆を始め、長編「Вооруженное восстание животных」(2003)、「Человек технозойской эры」(2008)などを発表した。

1997年のストランニクでブルース・スターリングがサイバーパンクはすでに消滅したと述べたのに対し、スターリングはすでに力を使い果たしたかもしれないが、サイバーパンクの文学的生命はまだ続いていると反論した。

## チョールヌイ イーゴリ・ヴィタリエヴィチ

Черный, Игорь Витальевич(1964～)

ウクライナの批評家。大学教授。ハリコフ在住。スコヴォロダ記念ハリコフ国立教育大学を卒業。2000年頃からウクライナのキエフやハリコフへロシア・ファンタスチカの拠点の一部は移り始めたが、そのウクライナを代表するSF批評家のひとりである。18世紀後半から19世紀前半の歴史小説が専門で、ザゴスキンやブルガーリンについての研究もある。また、現代のSFにも関心が旺盛で、エレナ・ペトウホワ(Елена Петухова)との共著「Современный русский историко-фантастический роман」(2003)は、現代ロシアの歴史改変小説を本格的に論じた研究書である。著者によれば、歴史改変小説はさらに二つの下位分類に分けることができる。すなわち、歴史上の出来事が改変される「альтернативная история」と、歴史上の出来事は改変されないが、その出来事は実は異星人が関係

していたから起きたという風に来事事の解釈が変わってしまう「криптоистория」の二種類に分類が可能である。この視点をもとに、19世紀のザゴスキンのブルガーリンらの作品から分析を始め、二種類それぞれの系譜をたどりながら、ズヴァギンツェフの「Одиссей покидает Итаку」やラザルチューク&ウスペンスキの「Посмотри в глаза чудовищ」、ワレンチノフの「Око Силы」、リュバコフの「Гравилет «Цесалевич»」など1990年代のロシアSFの代表的歴史改変小説まで研究の対象は及ぶ。

アーエスター社「АСТ」の年鑑アンソロジー「Фантастика」には何度も評論を寄稿しているが、評論「Mater et magistra」（「Фантастика 2001」所収）はシテルンやジャチェンコ、オルジラウクライナの作家がロシアのファンタスティカにどういった位置を占めたかについて簡単に紹介したものである。

## ディヴォフ オレグ・イゴレヴィチ

Дивов, Олег Игоревич(1968～ )

モスクワ生まれの小説家、ジャーナリスト。父はトレチャコフ美術館の絵画の修復技術を専門としていた。若い頃からジャーナリズムに関心を持ち、モスクワ国立大学のジャーナリスト学科に入学。兵役後、ジャーナリストとして活動したが、広告やコピーライターの仕事も手がけた。

1997年に戦争SFの長編「Мастер собак」でSFにデビュー。シリーズ化して長編を次々と発表した。SF界には2000年のバストコン賞を受賞した長編「Выбраковка」（1999）、2001年のフィリグラニ賞を受賞した長編「Толкование сновидений」（2000）、2002年の遍歴者賞を受賞した長編「Саботажник」（2001）で大きな反響を巻き起こし、冒険小説のプロットに社会的考察を加えたその実力が認められた。さらに、長編「Ночной смотрящий」で2004年のズヴォズヌイ・モスト賞、2005年のロスコン金賞を受賞した。

デビュー当初からしばらくは長編専門であったが、2000年頃から中短編に関心を持ち始め、精神的に執筆している。中編「Предатель」（2001）が2002年のシグマ=エフ賞を受賞、中編「Закон лома для замкнутой цепи」（2002）が2003年のインタープレスコン賞とロスコン金賞を受賞。中編「К-10」も2004年のロスコン金賞を受賞。代表的短編「Параноик Никанор」で2003年のインタープレスコン賞とシグマ=エフ賞を受賞した。これらの作品の多くを収めた作品集「К-10」（2003）が注目される。さらに中編「У Билли есть хреновина」（2005）は2006年のロスコン中短編部門の金賞とインタープレスコン賞、シグマ=エフ賞を受賞し、非常に評価が高い。短編「Стояние на реке Москве」（2007）では2008年のフィリグラニ賞短編部門を受賞、短編「Мы идем на Кюрасао」（2007）では2008年のロスコン金賞を受賞。短編「Стрельба по тарелкам」（2009）は2010年のロスコン中短編部門金賞と2010年フィリグラニ賞短編部門を受賞。ほかに2007年のボルトル賞中編部門受賞作の「Храбр」（2006）、2004年フィリグラニ賞中編部門受賞作の皮相な宇宙SF「Эпоха великих соблазнов」（2003）、2011年のロスコン長編部門金賞、2011年フィリグラニ賞長編部門受賞作「Симбионты」（2010）、長編「Объекты в зеркале заднего вида」（2013）などがある。ステレオタイプ的な登場人物を屈折した筆致で描くきわめてアイロニカルな作家である。

近年はSF界に対しても非常に舌鋒の鋭い評論を執筆している。「Окончательный диагноз, или Соболезнования патологоанатома」（2007）はSF専門誌『イエスリ』「Если」に発表されたもので、2000年以降の新進作家の潮流を取り扱ったものである。

## ディモフ フェリクス・ヤコヴレヴィチ

Дымов, Феликс Яковлевич(1937～ )

1970年代から80年代にかけて活躍したSF作家。本名はフェリクス・ヤコヴレヴィチ・スルクス（Феликс Яковлевич Суркис）。レニングラードに生まれ、レニングラード工科大学を卒業した。SFへのデビュー作は『Пайкаль』「Байкаль」誌に掲載された短編「Загадочная гравюра」（1968）である。ボリス・ストルガツキの開いた作家セミナーの中心的なメンバーとしてセミナーの初期から活躍し、将来を嘱望されたが、全ソ新進SF作家創作協会「ВТО МПФ」が設立されるとその誘いに乗り、若い世代との確執の末に1989年にボリス・ストルガツキのセミナーから離れた。「ВТО МПФ」が企画したパヴロフとシレツキイとディモフの3人の作品が合本となったアンソロジーに作品を寄せたが、そこに収められた作品は彼の最良の作品とは言えなかったと指摘される。

初期の作品に中編「Перекресток, или Сказка о Тави」（1974）、中編「Школа」のほか、児童向けの作品として「Аленкин астероид」（1981）がある。

アーバンファンタジー風の作品で知られ、作品集に「Полторы сосульки」（1989）があるが、「ВТО МПФ」の失墜後は作品の発表の機会を失い、SFの表舞台からは去り、出版界や子供向けの詩の分野で活動を続けた。2005年に写真主義的な長編「Шесть дней」を発表し、これはボリス・ストルガツキの序文つきで刊行された。

## ティリン ミハイル・ユリエヴィチ

Тырин, Михаил Юрьевич(1970～ )

カールガのSF作家、ジャーナリスト。カールガ州のメシチェフスクに生まれた。パウマン記念モスクワ高等技術専門学校に入学したが、カールガ教育大学へ移った。卒業後、カールガの内務局に勤めたが、2001年にジャーナリズム界に復帰し、現在は専業作家である。

SFへのデビューは1996年の短編「Малые возможности」であった。1997年の初の単行本「Тень покровителя」は独特な雰囲気を持った作品として注目され、スタート賞を受賞。中編「Истукан」（1998）は宇宙商人が何とか乗員を確保して旅立った宇宙旅行の騒動を描くユーモア作品である。サイバー



パンク的長編《Фантомная боль》(1998)が第一長編。長編《Желтая линия》(2002)はアクション的要素と社会批判が一体になった点が評価された代表作。同じような経歴のデヴィョフと並んで当時注目された。その後の執筆数は決して多くはないが、長編《Кладбище богов》(2009)や長編《Легионы хаоса》(2011)を発表し、中堅作家として活躍している。

## テンドリャコフ ウラジーミル・フョードロヴィチ

Тендряков, Владимир Федорович(1923~1984)

1960年代から70年代にかけて活躍した小説家。ヴォルゴグラード州のマカロフスカヤ村に生まれた。第二次世界大戦には従軍したが重傷を負う。戦後、全ソ国立映画大学に入学したが、ゴーリキイ文学大学へ転学し、1951年に卒業した。1955年から専業作家となり、長編《Тугой узел》(邦題『難関』)(1956)、宗教問題を扱った中編《Чудотворная》(邦題『奇跡の聖像』)(1958)、長編《Тройка, семерка, туз》(邦題『激流』)(1961)で、当時のソビエト社会を鋭く描く作家として名声を得る。

1963年にユートピア的傾向の中編《Путешествие длиною в век》を発表し、非SF作家のSF的作品としてSF界からも注目される。没後の1987年にはアンチユートピア的作品の長編《Покushение на миражи》も発表された。

## トゥピーツィン ユーリイ・ガヴリロヴィチ

Тупицын, Юрий Гаврилович(1925~2011)

モスクワ郊外に生まれる。第二次世界大戦に従軍し、戦後は空軍高等専門学校で学び、空軍で勤務。カチン航空専門学校で教鞭をとる。SFには短編《Красный мир》(1969)でデビューする。代表作に宇宙SFの長編《В дзбрых Даль-Гея》(1978)がある。伝統的な作風であったが、70年代から80年代にかけて活躍した。ほかに長編《Дальняя дорога》(1984)、短編《На восходе солнца》(邦題『夜明け』)(1971)などがある。

## ドゥビニャンスカヤ ヤナ・ユリエヴナ

Дубинянская, Яна Юрьевна(1975~ )

キエフのSF作家。フェオドシアに生まれる。クリミア芸術学校を卒業し、その後リヴィウ国立大学に入学するも、しばらくしてキエフジャーナリスト大学に移った。ウクライナ語で精力的に執筆をおこない、1999年に第一作品集《Три дні у Сиренополі》が刊行されてデビューした。近年はロシア語での作品の発表が増えてきており、長編《За горизонтом сна》(2003)、長編《Проект «Миссури»》(2005)、長編《Гаугразский пленник》(2006)などで地歩を固めた。長編《H2O》(2008)でSF界以外の読者層にも名前を知られるようになる。長編《Глобальное потепление》(2009)では2010年のカタツムリ賞を受賞。ほかに短編《Шарашка》(2008)などがある。長編《Сад камней》(2011)、長編《Пансионат》(2013)を発表し、今後の展開が注目される作家のひとりである。

## トチノフ ヴィクトル・パヴロヴィチ

Точинов, Виктор Павлович(1966~ )

サンクト・ペテルブルグの作家、評論家。レニングラード生まれ。レニングラード航空機械器具製造高等専門学校を卒業し、軍需産業関係の企業で働く。2000年からスリラー的SFの執筆意欲が高まり、2002年から2007年までボリス・ストルガツキイのセミナーに入っていた。長編《Пасть》(2003)でデビューし、2003年のユーロコンで新人賞受賞。ほかに長編《Царь Живых》(2003)、アレクサンドル・シチョゴレフと共作した長編《Новая никвизация》(2003)などを発表し、ホラー的、幻想的要素の強い作家として知られている。

近年は長編《Родительский день》(2007)が話題を呼んだほか、短編《Ночь накануне юбилея Санкт-Петербурга》(2004)がマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン冒険』のオマージュになっているとして高い評価を受けた。ほかにファンタジー中編《Полкоролевства в придачу》(2006)、スティーヴンソンの『宝島』を素材にした長編《Остров без сокровищ》(2013)の評価が高い。

## ドニェプロフ アナトーリイ・ペトロヴィチ

Днепров, Анатолий Петрович(1919~1975)

「第三の波」を代表する作家の一人で、サイバネティックスへの関心が深く、ハードSFの旗手として知られた。本名はアナトーリイ・ペトロヴィチ・ミツケヴィチ(Анатолий Петрович Мицкевич)。ドニェプロフスクに生まれ、第二次世界大戦時には赤軍の諜報部の将校として活躍した。戦後は科学啓蒙雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》で働いたりしていた。SFへのデビューは《Кораблекрушение》(1958)である。

アイデアを中心に組み立てた短編に傑作が多く、短編《Крабы идут по острову》(邦題『カニが島を行く』)(1958)は自己進化する兵器と島で戦うことになった主人公を描く鮮烈な作品である。このほかにも中編《Глиняный бог》(邦題『粘土の神』)(1963)や短編《Формура бессмертия》(1962)が有名である。

## ドミトルーク アンドレイ・フセヴォロドヴィチ

Дмитрук, Андрей Всеволодович(1947～)

キエフの作家。キエフ国立大学歴史学部を卒業。ウクライナ語でも執筆する。ラジオ番組やテレビ番組の制作にも関わり、1970年には映画のシナリオ作家となる。1993年にはテレビ局 УТ-1 の番組《Свічачо. Реальність неможливого》を担当。古代史ミステリーなどを手がける。

小説のデビュー作は短編《Подсолнухи》(1961)である。初めて発表された SF 作品は短編《Ошибка》(1966)である。1967年にはウクライナ語で作品集《Велика місія цивілізаторів》が刊行された。70年代から80年代にかけて精力的に短編を発表した。70年代末からモロダヤ・グヴァルジヤ派に接近し、中編《Ночь молодого месяца》(1979)などを発表した。ほかにアトランティスものの中編《Морская пена》(1987)がある。作品集に《Ночь молодого месяца》(1984)、《Следы на траве》(1990)がある。

ソ連崩壊後は作品の執筆が減り、ロシアの出版社から刊行されることは少ないものの、長編《Битва богов》(1996)や長編《Смертеплаватели》(2008)などを発表している。

## ドミトレフスキイ ウラジーミル・イワノヴィチ

Дмитревский, Владимир Иванович(1908～1978)

レニングラードの批評家、小説家。小説は1927年から写実主義的な作品を発表していたが、1950年代末から評論家エヴゲーニイ・ブランジスの影響を受け、SFに興味を抱き、共同で多数の評論を発表するようになった。SF批評がまだ少なかった60年代初頭から活躍し、のちの評論にも非常に大きな影響を与えた。ブランジスとの共著《Через горы времени》(1963)はイワン・エフレーモフ論として知られる彼らの代表作である。

## ドリングо Борис・アナトリエヴィチ

Долинго, Борис Анатольевич(1955～)

エカテリンブルグの SF 作家。ウズベキスタンのコーカンドに生まれる。父は軍医であった。1975年にスヴェルドロフスクへ移り、ウラル国立大学で学ぶ。その後は技師として働いていた。SFへのデビュー作は短編《Возможны варианты》(1990)であるが、その後は長らく沈黙し、2001年に長編《Мир терпа》と長編《Круглые грани Земли》を発表して本格的に作家活動を始める。ほかに長編《Странник поневоле》(2008)などを発表している。

2002年からSF大会アエリータの運営の責任者を務めており、若手作家の作品を集めた作品集を刊行したりしている。2008年にヴィタリイ・ブグロフ賞を受賞した。

## ドルガリ セルゲイ・アレクサンドロヴィチ

Другаль, Сергей Александрович(1927～2011)

エカテリンブルグの SF 作家。現在はカザフスタンにあるジャムベイトに生まれる。幼年時代はサラトフ、ミンスク、クルスクを転々とした。1936年には父が「人民の敵」として逮捕される。ハバロフスクやモスクワで鉄道輸送関係の技術を学んだ。SF小説は余技として書いているが、1966年に初めてのSF小説《Право выбора》を発表した。

最初の作品の後、10年ほど沈黙したが、1970年代後半から80年代中頃にかけて短編で活躍する。ほとんどの作品は雑誌《Уральский следопыт》に掲載された。短編《Заяц》(1984)や短編《Тигр проводит вас до гаража》(1977)、中編《Василиск》(1986)などの作品からなるエコロジーSFのシリーズと短編《Реабилитация》(1978)、短編《Возвращение в колыбель》(1984)、短編《Пропаля Тишка》(1984)などからなるコンタクトテーマのシリーズで知られている。ほかに唯一の長編《Язычники》(1989)がある。

アエリータの常連参加者で、1992年には作品集《Василиск》(1990)に対してアエリータ賞が贈られた。

## トルスキノフスカヤ ダリヤ・メイェロヴナ

Трускиновская, Далия Мейеровна(1951～)

ラトビアのリガ在住の作家。ピョートル・ストゥッチカ記念ラトビア大学文学部を卒業。作家としての経歴は長く、1974年に詩人として作品を発表して以来、執筆を続けている。1981年にはファンタジー小説《Запах янтаря》がリガでの雑誌『Даугава』《Даугава》に掲載され、同作品を表題にした作品集《Запах янтаря》が1984年に出版された。それ以来、主にファンタジーを中心として、歴史小説や恋愛小説、ミステリーなど幅広く手がけている。全ソ新進SF作家創作協会《ВТО МПФ》のセミナーに参加した。

ファンタジーの長編を精力的に発表し、《Люс-А-Гард》(1995)や《Королевская кровь》(1996)、《Жалобный Маг》(2001)、《Нереал》(2001)などの作品がある。1998年に一部が発表されたファンタジー長編《Шайтан-Звезда》は、第二部の発表の機会になかなか恵まれずにいたが、2006年に完全版で刊行され、2006年のズヴォズヌイ・モスト賞、2007年のポルタル賞を受賞するなど高い評価を受けた彼女の代表作である。長編《Дурни вавилонские》(2010)の評価も高い。

また、読者からの支持も厚く、短編《Сумочный》で2001年のシグマ=エフ賞、翌年も短編

「Кладонискатели」で同賞を連続受賞した。

日本の怪談を書くのが彼女の悲願であり、中編「Монах и кошка」(1996)は源頼政の鶴退治に題材をとった作品である。

近年は歴史小説を精力的に発表しており、18世紀を舞台にした長編「Чумная экспедиция」(2006)、17世紀モスクワを舞台にした長編「Деревянная грамота」(2007)などで新境地を開いている。

1991年にはアレクサンドル・ポルィンニコフによって中編「Обнаженная в шляпе」(1990)が映画化された。

## ドロズド エヴゲーニイ・アヌフリエヴィチ

Дрозд, Евгений Ануфриевич(1947～)

ミンスクのSF作家。ベラルーシ国立大学数学部を卒業し、プログラマーとして研究所で働く。1980年代にはマレエフカやダブルティのセミナーにも参加した。1989年から93年にかけては全ソ新進SF作家創作協会「ВТО МПФ」のメンバーとして各セミナーにも精力的に参加した。デビュー作は短編「Эффект присутствия」(1984)である。

作品はもっぱら中短編で、短編「Скорпион」(1988)や短編「В раю мы жили на суше」(1990)などが代表作。作品集として「Тень над городом」(1992)、「Дни прошедшего будущего」(2009)がある。

## ナウメンコ ニコライ・アンドレエヴィチ

Науменко, Николай Андреевич(1959～)

アーエスター社「АСТ」の編集者。モスクワ理工科大学を卒業後、技術者として働いた。1991年にアーエスター社に入社し、1993年から編集長を務める。「Звездный Лабиринт」などSF部門のレーベルをいくつも立ち上げて軌道に乗せたSF出版界の功労者。2001年に年鑑アンソロジー『ファンタスタチカ』「Фантастика」の発刊などに対して遍歴者賞編集者部門を受賞した。

翻訳家としても活躍し、ダン・シモンズ『ハイペリオン』の翻訳により1996年の遍歴者賞翻訳部門を受賞した。

## ナウーモフ イワン・セルゲエヴィチ

Наумов, Иван Сергеевич(1971～)

モスクワ生まれのSF作家。モスクワ無線電気オートメーション工科大学で光学を学んだ。2006年にはゴリキー文学大学でも学んだ。現在は危険物を運搬する仕事についている。1990年代初めから詩作を始め、1995年には詩集「Plejo / Музыка — это сны」(ロシア語、英語、エスペラント)を出した。SFへのデビューは短編「Сто одно」(2005)である。その後、ウェブコンクールを含めて雑誌などに精力的に作品を発表している。

短編集「Обмен заложниками」(2008)にはこの間に発表された主要な中短編が収録され、新進の短編作家として注目を集めた。短編「Сан Конг」(2008)で2009年のロスコン中短編部門銅賞を受賞した。中編「Мальчик с саблей」(2010)も高い評価を受けている作品。

## ナザレンコ ミハイル・ヨシフォヴィチ

Назаренко, Михаил Иосифович(1977～)

キエフのSF評論家、ファン。キエフに生まれ、キエフ国立大学文学部を卒業し、サルティコフ＝シチェドリンの研究などをしてきた。2000年頃から評論を精力的に発表し、ジャチェンコの作品集の巻末に多数解説を寄せるなど、評論家としても活躍。これらの解説文はのちに「Реальность чуда」(2005)として一冊にまとめられた。キエフのSF専門誌『レアリノスチ・ファンタスタチキ』「Реальность фантастики」に執筆した評論も高い評価を受けている。SF大会ポルタルの運営にも関わる。

数は少ないながらも小説も執筆し、中編「Остров Цейлон」(2009)は2010年のカタツムリ賞中編部門を受賞した。ほかに短編「Новый Минотавр」(2000)などがある。

## ナザロフ ヴャчесラフ・アレクセエヴィチ

Назаров, Вячеслав Алексеевич(1935～1977)

ソ連時代のSF作家、詩人。オリョールに生まれる。モスクワ国立大学ジャーナリスト学部を卒業後、クラスノヤルスクのテレビ局で働く。1960年に詩集「Сирень под солнцем」を刊行し、1964年には第二詩集「Соната」を刊行する。SFには短編「Нарушитель」が1968年に雑誌『エニセイ』「Енисей」に掲載されてデビューする。その後は病気を患って苦しんだが、作品集「Вечные паруса」が1972年に刊行されるなど当時はかなりの注目を集めた。ほかに中編「Зеленые двери Земли」(1977)などがある。

## ナザロフ ワジム・ポリソヴィチ

Назаров, Вадим Борисович(1965～ )

Санクト・ペテルブルグの出版人。カーニングラードに生まれ、レニングラード国立大学ジャーナリスト学科を卒業し、カーニングラードの地方紙で勤めた。その後、1989年に出版社セヴェロ・ザパド社「Северо-Запад」の立ち上げに関わったが、1995年にアズブカ社「Азбука」を新に立ち上げて移籍する。ファンタジーレーベル「Русская fantasy」の刊行により、1997年に遍歴者賞編集者部門を受賞した。さらに1999年には1998年に設立されたアムフォラ社「Амфора」に移って、ボルヘス、コルタサル、村上春樹、マクス・フライの作品らを刊行し、パーヴェル・クルサーノフ、イリヤ・ストゴフ(Илья Стогофф)らを世に送った。

小説の執筆もおこない、長編「Круги на воде」(2001)などの作品がある。

## ニキタイスカヤ ナターリヤ・ニコラエヴナ

Никитайская, Наталья Николаевна(1943～ )

Санクト・ペテルブルグの小説家。ヴォログダの軍医の家庭に生まれる。1945年に一家はレニングラードへ移った。学生時代は演劇に情熱を傾け、レニングラード国立演劇音楽映画大学を卒業。女性小説の第一人者として社会活動も旺盛に行っている。

小説の執筆は1972年から始めた。SFへのデビュー作は1978年に執筆された中編「Бог троицу любит」である。この中編はブランジスが編集したアンソロジー「Белый камень Эрлени」(1982)に「Солнце по утрам」というタイトルで掲載された。タイトルの変更は編集者に聖書の語句を変更するようにと要請されたからだという。主な作品集に「Будь ты проклят, любовь моя」(2002)がある。

ボリス・ストルガツキイのセミナーには1978年から参加した。有力な参加者のひとりであり、そのエッセイ「Никогда не говорите: «Я пишу...»」(1995)はセミナーの様子を伝える貴重な資料となっている。作家のボリス・ニコリスキイは夫である。

## ニキーチン ユーリイ・アレクサンドロヴィチ

Никитин, Юрий Александрович(1939～ )

モロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」の一派に属した人気SF作家。ハリコフに生まれたが、学校を卒業後は極北地域で後流しなどをしたり、極東の調査隊に加わったりした。ウクライナへ戻ると、1965年から小説の執筆を始め、SFへはユーモアSFの短編「Где же справедливость, коллеги?»(1967)でデビューした。その後、モスクワへ移り、モロダヤ・グヴァルジヤ社の編集部と結びつきを深め、権勢をふるった。ソ連時代の著作には、歴史小説長編「Золотая шпага」(1979)、作品集「Человек, изменивший мир」(1973)などがある。

モロダヤ・グヴァルジヤ社が力を失った後、1990年代初頭に出版社「Змей Горыныч」を立ち上げ、当初は翻訳SFも出版していたが、やがて自分の作品ばかりを出すようになった。すでに50作を超える長編を発表するなど作品は数多いが、水準はおしなべてそう高くないものと評価されている。そのなかでも人気を保ち、ベストセラー作家のひとりである。代表作にのちにシリーズ化された長編「Трое из Леса」(1993)や長編「Князь Владимир」(1998)などがある。

また、回想録「Мне - 65」(2004)を発表している。ボリス・ストルガツキイやブルイチョフによるすぐれた回想作品もすでに発表された中でこのことであったが、批評家のウラジーミルスキイには酷評されている。

## ニコラエンコ アレクサンドル・イワノヴィチ

Николаенко, Александр Иванович(1958～2007)

モルドバのSFファン。チラスポーリのファンクラブ「Альтаир」の創設者。1980年代から90年代初頭にかけてソ連国内の各地のSF大会やユーロコンに精力的に参加し、その名をよく知られた。

## ニコリスキイ ボリス・ニコラエヴィチ

Никольский, Борис Николаевич(1931～2011)

Санクト・ペテルブルグの作家、編集者。レニングラードに生まれ、戦時中は中央アジアへ疎開していたが、1944年8月にレニングラードへ戻った。1949年にゴーリキイ文学大学へ入学。カーニンで働き、その後は徴兵されたが、1956年末にレニングラードへ再び戻り、「Костер」や「Аврора」といった雑誌関係の仕事をしていた。1984年から文芸誌『ネヴァ』「Нева」の編集長となり、現在に至っている。

小説家としては1951年にデビューした。第一作品集は「Полоса препятствий」(1963)。ファンタスティック要素を作品に取り入れることにも熱心で、長編「Бунт」(1987)はこの傾向の代表作とされる。児童向けの作品も多数執筆し、「Солдатская школа」(1982)、「Армейская азбука」(1988)などの作品集がある。

80年代後半にはグラスノスチにも積極的にに関わり、1989年から1991年にかけては最高会議代議員を務めた。小説家ナターリヤ・ニキタイスカヤは妻。

## ヌデリマン ラファイル・イリイチ (エリエヴィチ)

Нудельман, Рафаил Ильич(Эльевич)(1931～ )

1960年代に活躍した評論家。スヴェルドロフスクに生まれ、オデッサ大学を卒業。物理学を専攻し、1960年から67年までは理論物理学を教えた。サミズダートの雑誌「Евреи в СССР」(1974～75)の刊行に参加し、1975年にはイスラエルへ亡命した。亡命後は「Сион」(1976～78)や「22」(1978～94)の雑誌を主導した。

SF評論では60年代後半の一時期にアリアドナ・グロモフとともに評論を執筆し、注目を集めた。アリアドナ・グロモフと共作したSF長編「В институте Времени идет расследование」(1973)もある。グロモフと共訳したレム『天の声』などの翻訳もある。

## ネクラースフ セルゲイ・ウラジミロヴィチ

Некрасов, Сергей Владимирович(1970～ )

モスクワの批評家。カメンスク＝ウラリスキイに生まれ、モスクワ国立大学へ入学。理学部を卒業したが、哲学へ転じた。1990年代初頭から批評活動を開始し、ペレーヴィンやストルガツキイ兄弟について切れ味の鋭い評論を書いた。特に「Героем становится любой. Вокруг повести Виктора Пелевина«Омон Ра»」(1992)は有名である。現在もSF専門誌『イエースリ』に評論を時折寄稿している。1960年代の「第三の波」の作家を扱った叢書「Классика отечественной фантастики」の刊行後に書かれた評論「Поколение мечты」(2002)は60年代のソビエトSFについての要領のよい解説となっている。

## ネクラースフ エカテリーナ・ウラジミロヴナ

Некрасова, Екатерина Владимировна(1977～ )

サンクト・ペテルブルグの小説家、モデル。ボリス・ストルガツキイのセミナー出身の作家としては最若手に属する。「Богиня бед」(2003)、「Когда воротимся мы в Портленд」(2003)の二冊が立て続けに刊行されて注目を集めたがその後は目立った活躍はしていない。

## ネムツォフ ウラジミール・イワノヴィチ

Немцов, Владимир Иванович(1907～1994)

カザンツェフとともに「第二の波」を代表する作家。エピファニに生まれ、モスクワ国立大学文化人類学部で学んだが、卒業はしなかった。無線技術に夢中になり、雑誌や新聞に投稿。ガステフに迎えられて発明に従事した時期もある。第二次世界大戦に従軍。1945年にソ連共産党へ入党。1920年代から作品を発表し、文学グループ「Рабочая вагара」に所属した。SFへのデビュー作は「Сто градусов」(1945)である。

その後、「Шестое чувство」(1946)や「Три желания」(1948)、「Тень под землей」(1954)といった作品集を次々と刊行、長編「Семь цветов радуги」(1950)を発表し、「近い標的論」(теория ближнего прицела)のドグマに合致した有望かつ忠実な作家としてSF界に君臨したが、作品の水準は高いものではない。50年代後半からは作家同盟の党委員会の書記代理をつとめ、権勢を振るった。

60年代に入って、エフレーモフやストルガツキイ兄弟にSF界の地位を奪われてからは新しい世代の作家を敵視し、『イズヴェスチヤ』紙「Известия」に評論「Для кого пишут фантасты?»(1966)を寄稿するなどして、ストルガツキイ兄弟の作品に激しい攻撃を加えた。ストルガツキイ兄弟ら「第三の波」の作家たちを支持していたベーラ・クリューエワによってモロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」への立ち入りを禁じられた時期もある。

しかし、モロダヤ・グヴァルジヤ社が保守化した70年代に出版界に復帰を果たし、70年代後半から著作が再刊されるようになった。晩年の作品に長編「Когда приближаются дали...」(1975)などがある。

## ノヴァク イリヤ

Новак, Илья(1971～ )

キエフのSF作家。本名はアンドレイ・レヴィツキイ(Андрей Левицкий)。キエフ国立大学文学部を卒業した。SF誌『Порог』「Порог」の2001年の第1号に掲載された短編「Атмосфера」でデビューする。その後、アンソロジーや雑誌に短編を発表していたが、ファンタジー長編「Клиники сверкают ярко」を2004年に発表して長編デビューを果たす。2005年からはファンタジーシリーズ「Аквадор」の長編の発表を開始して読者の注目を集める。コンピューターゲームの世界設定を借りた「S.T.A.L.K.E.R.」シリーズの常連執筆者でもある。

## バイカーロフ ドミートリイ・ニコラエヴィチ

Байкалов, Дмитрий Николаевич(1966～ )

モスクワの編集者、ファン。パウマン記念モスクワ高等技術専門学校を卒業。1980年代後半から活発にファン活動を展開し、現在はSF専門誌『イエースリ』「Если」の編集者として手腕を発揮している。特に映画関係に強い。

アンドレイ・シニーツィンとはいいいコンビで、アーエステー社「ACT」の年鑑アンソロジー『ファンタスタチカ』《Фантастика》のシリーズには共同でほとんど毎回のよう時評を執筆していた。特に《Ровесники фантастики》と《Континент》は有名な評論である。2002年にヴィタリイ・ブグロフ賞を受賞。

また、編集者として、シニーツィンとともに、アーエステー社から刊行されている、1960年代の「第三の波」の作家を扱った叢書《Классика отечественной фантастики》の編集に参加。ビレンキンやガンソフスキイなどソ連崩壊後のSFファンにはなじみの薄い作家の紹介にも尽力した。

モスクワのファンダムを中心人物でもあり、ロスコンの開催にも深く関わっている。

## パヴロフ セルゲイ・イワノヴィチ

Павлов, Сергей Иванович(1935～)

1980年代に活躍したモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の系列の看板SF作家。ウクライナのベルジャンスクに生まれ、モスクワ建築工科大学で学び、1962年にクラスノヤルスクへ移った。非鉄金属の専門家として中央アジアや北極、シベリアへの各種の調査旅行にも同行。シベリアに長く暮らしたが、現在はモスクワ在住。

SFへのデビューは短編《Банка фруктового сока》(1963)である。長編《Лунная радуга》(1978～83)が特に有名で、モロダヤ・グヴァルジヤ社の作家たちによってストルガツキイ兄弟を超える作家の登場として大きく喧伝されたが、そこまでの水準のものではない。この作品で1985年のアエリータ賞を受賞。ほかに中編《Акванавты》(1968)やコンタクトテーマの短編《Чердак Вселенной》(1971)、短編《Амазония, ярланг «Восточный»》(1987)などがある。ソ連時代に非常に大きく扱われた作家ではあるが、作品数はさして多くはない。作家としてもモロダヤ・グヴァルジヤ社の凋落と運命を共にした感がある。SF界での功績に対し、2009年のロスコンで表彰された。

## ハエツカヤ エレナ・ウラジミロヴナ

Хаецкая, Елена Владимировна(1963～)

Санクト・ペテルブルグを代表するファンタジー作家のひとり。ロギノフ、セミョーノフ、ジャチェンコらと並んでロシアにファンタジーというサブジャンルを確立した。

レニングラード国立大学のジャーナリスト学科を卒業したあと、出版社などに勤務しながら小説を書き始めた。1993年にロビン・フッドものの長編《Меч и радуга》でデビューしたが、このときはメダライン・シモンズ(Мэделайн Симонс)という英米風の筆名を使っていた。Санクト・ペテルブルグの出版社セヴェロ・ザバド社《Северо-Запад》はトルキン、ル＝グウィン、ゼラズニイらの作品に交えてこの長編を刊行したが、このことからファンタジー作家としてのハエツカヤに寄せられた期待の高さがうかがえよう。この作品で1995年のジエラントコンの大賞を受賞した。また、ファンタジー長編《Завоеватель》(1996)は非常に高い評価を受けた。

キリスト教を背景とした中世ヨーロッパが舞台のファンタジーを特に得意とし、《Мракобес》(1997)で1998年のカタツムリ賞を受賞。このほかにも《Голодный грек, или Старнствия Феодула》(2002)、《Бертран из Лангедок》(2003)、《Дама Тулуза》(2003)といった長編を続々と発表した。なかでも、Санクト・ペテルブルグをバビロンに見立てたアーバン・ファンタジーのシリーズが注目されるが、そのなかの一編となる中編《Прах》は、愛人を何人も残して死んだ男の死体がどういうわけか腐敗せず、妻が部屋で死体の番をしていたが、愛人たちが結託して死体を勝手に運び出して埋葬するという強烈な話であり、2003年の遍歴者賞を受賞した。長編に傾きがちなファンタジー作家のなかにあつて、短編も精力的に手がけ、きめのこまかい丹念な描写を重ねる作風は貴重である。

2004年には彼女のさまざまな傾向の作品を集めた5巻選集が刊行され、非常に注目を集める作家である。この5巻選集の構成については、第1巻がアーバン・ファンタジーのバビロンもの、第2巻に長編《Завоеватель》、第3巻に長編《Меч и радуга》、第4巻に歴史小説、第5巻は過去から未来までのさまざまな時代を描いた作品群を収めたものになっている。

近年では長編《Царство Небесное》(2005)、レールモントフを取り上げた長編《Мишель》(2006)、長編《Византийская принцесса》(2007)、短編集《Тролли в городе》(2009)、長編《Нелегал》(2011)などを発表している。SF連作《Звездные гусары》(2008)で2009年のフィリグラニ賞長編部門を受賞。ヴィクトル・ベニコフスキイ(Виктор Беньковский)との共同で執筆した長編《Анахрон》(1999)も評価が高い。また、書評家としても精力的に活動している。

このほかに複数のペンネームを使ってファンタジー長編を多数執筆している。そうしたペンネームにダグラス・ブライアン(Дуглас Брайан)、ウラジミール・レンスキイ(Владимир Ленский)、ダリヤ・イヴォルギナ(Дарья Иволгина)、エレナ・トルスタヤ(Елена Толстая)などがある。さらには、コナンシリーズの続編も多数執筆している。

## ハザーノフ ポリス

Хазанов, Борис(1928～)

ミュンヘン在住の亡命作家。本名はゲンナージイ・モイセエヴィチ・ファイブソヴィチ(Геннадий Моисеевич Файбусович)。レニングラードに生まれる。モスクワ国立大学の文学部で学ぶが、1949年に反ソ宣伝の疑いで逮捕された。1955年に仮釈放され、1961年にカーニン医科大学を卒業し、医師となる。のちに編集者となり、1976年から81年にかけては雑誌《Химия и жизнь》誌の編集部勤務。ライプニッツの書簡の翻訳にも携わる。自分の作品をサミズダートやタミズダートで発表

していたが、1982年に西ドイツへ亡命した。その後、ミュンヘンでロシア語の雑誌「Страна и Мир」(1984～92)の編集に携わった。この時期の代表作に中編「Я воскресение и жизнь」(1981)などがある。

狭義のSF作家ではないが、作品集「Нагльфар в океане времен」(1993)がテキスト社「Текст」のアルファ・ファンタスティカ叢書の一巻として刊行されたことで注目を集めた。21世紀に入ってから執筆活動は旺盛で、長編「К северу от будущего」(2004)、作品集「Пока с безмолвной девой」(2005)や長編「Вчерашняя вечность」(2008)などがあり、近年はロシアでも再評価の機運が高まっている。

## バソフ ニコライ・ヴラドレノヴィチ

Басов, Николай Владленович(1954～)

ウクライナの人気作家。ウクライナ東部のルガンスク州のカジエフカに生まれる。1961年にモスクワへ移る。モスクワ化学機械製造専門学校で学んだ。その後は軍需産業の企業に勤めるが、機械の修理工として全国を飛び回っていた。1987年から創作セミナーに顔を出すようになり、1990年からは翻訳やゴーストライターのような仕事もした。

1995年からファンタジーシリーズ「Мир Логар」の発表を開始し、アルマダ社「Армада」とエクсмо社「Эксмо」の看板作家となった。1995年からのファンタジーブームに乗って、アクションの要素を取り入れたポエヴィク「боевик」を次々と発表し、流行作家となった典型的な作家のひとり。ほかに「Мир вечного полдня」シリーズなど。すでに20冊以上の長編を執筆している。

## バチロ アレクサンドル・ゲンナジエヴィチ

Бачило, Александр Геннадьевич(1959～)

モスクワの作家。ノヴォシビルスク州イスキチムに生まれる。ノヴォシビルスク電気工科大学を卒業後、仕事のかたわら小説を書き始めた。マレエフカのセミナーなどにも参加した。SFには1983年に短編「Элемент фантастичности」でデビューした。1999年からモスクワ在住。

デビュー後は比較的発表の機会に恵まれていた。1988年にはイーゴリ・トカチェンコ(Игорь Ткаченко)との共著で科学啓蒙的作品「Путешествие в таинственную страну, или Программирование для мушкетеров」を発表し、この作品をもとに1990年に中編「Пленники Черного Метеорита」が書かれた。ほかに中編「Помочь можно живым」(1989)も評価の高い作品である。1992年からクラブ「Контора Братьев Дивановых」に所属。

テレビ番組のシナリオ作家として活躍し、「О.С.П.-Студия」、「Несчастный случай」の番組に携わった。テレビシリーズの「Простые истины」、「Театральная академия」のシナリオ作家の一員である。90年代は小説の執筆は減っていたが、ファンタジー長編「Незаменимый вор」(1999)を発表した後には、再び少しずつ小説の執筆をするようになった。近作に長編「Академонгородок」(2004)があり、新境地を開いたと言われる。

## パナスコ エヴゲーニイ・ヴィクトロヴィチ

Панаско, Евгений Викторович(1946～2003)

ソ連時代のSFファン、小説家。スタヴロポリのファンクラブ「КЛЮФ」の代表をつとめた。トビリシに生まれ、クイビシエフ航空大学に学んだ。その後、レニングラード国立大学で再度学んだ後にスタヴロポリへ移った。「Молодой ленинец」紙などに編集者としてつとめる。マレエフカのセミナーに参加。作品集に「Десант из прошлого」(1991)がある。

## パナセンコ レオニード・ニコラエヴィチ

Панасенко, Леонид Николаевич(1949～2011)

ウクライナのSF作家。ヴォルィーニ州の村に生まれ、ルーツィクで学校に通う。1972年にドニエプロペトロフスクへ移り、新聞「Днепр вечерний」や出版社「Промінь」で編集者として勤務した。1974年にキエフ国立大学のジャーナリスト学部を卒業。在学中からSFの執筆を始め、最初に発表されたSF短編「Повернення «Прометей»」(1965)はウクライナ語で書かれた。ロシア語で初めて発表した作品は短編「Поливит」(1976)である。1978年にはウクライナ語の作品を収めた作品集「Мастерская для бессмертных」が刊行された。

1988年にシンフェローポリの出版社「Таврид」の編集長に選ばれ、その後、シンフェローポリへ移住した。

小説家としては主として1980年代に活躍し、長編「Садовники Солнца」(1981)、中編「Место для Журавля」(1983)、短編「Проходная пешка, или История запредельного человека」(1981)といった作品を発表した。抒情的な作風で知られたが、ソ連崩壊後はほとんど作品を発表していない。

## パノフ ワジム・ユリエヴィチ

Панов, Вадим Юрьевич(1972～)

ゼロ年代を代表するモスクワのファンタジー作家。モスクワ航空大学に入学。学生時代は演劇に打ちこむ。2001年に魔界のモスクワを舞台にしたファンタジー長編「Войны начинают неудачники」でデビューし、その後も同一世界が舞台の長編群を次々と発表し、読者の爆発的な人気を獲得した。

2013年までに16冊の長編が刊行されている。このシリーズは「Тайный Город」と名づけられ、ゼロ年代を代表するアーバンファンタジーとなった。アンソロジー「Правила крови」(2004)には「Тайный Город」以外のファンタジー作品も収められている。作品集「Таганский перекресток」(2006)におさめられた作品も評価が高い。

2011年から始まった「Герметикон」シリーズも好評で、2013年までにすでに4作の長編が発表されている。

## バベンコ ヴィタリイ・チモフェエヴィチ

Бабенко, Виталий Тимофеевич (1950～)

モスクワの作家、編集者。1980年代から90年代初頭にかけて「第四の波」の理論的支柱として大活躍したSF界の功労者のひとり。モスクワに生まれる。モスクワ国立大学経済学部を卒業。雑誌「Вокруг света」の編集部で働く。SFへのデビューは短編「Купите тройню!」(1973)で果たした。初期の短編「Бер」(1976)などの作品は実験性に富み、1960年代のソ連SFの方向性とは大きく異なっていた。バベンコはSFの可能性を大きくとり、オーウェル、カフカ、ホフマン、ブルガーコフらの流れに立つ新しいファンタスチカを構想し、「第四の波」の理論的支柱となった。

1980年代に入ると、モスクワのマレエフカで開催された作家養成セミナーでも主導的な役割を果たした。若き日のペレーヴィンもバベンコに作品を送ったことがある。

1988年に設立された協同組合形態の出版社テキスト社「Текст」の創設にも積極的にかかわった。テキスト社はソ連末期から各地で起業された新しい出版社のなかでもひとときわ精力的に出版事業を展開し、民間の出版社のなかでも最初期のものにあたり、出版史上も重要な出版社である。ファンタスチカの出版に関しては、1991年にアルファ＝ファンタスチカという叢書を作り、新しい波のSF小説を世に出した。エス・ヤロスラフツェフ(アルカージイ・ストルガツキイ)の「Дьявол среди людей」、ボリス・ハザーノフの「Нагльфар в океане времен」、イスカデルの「Кролики и удавы」、バベンコ自身の短編集「Приблудяне」などが刊行されたが、なかでもペレーヴィンの初の作品集である「Синий фонарь」の刊行は特筆に値する。バベンコ自身の弁によれば、アルファには「オールタナティヴ」「альтернативная」、「前衛」「авангардная」、「冒険趣味」「авантюрная」、「優美」「авангажная」の意が込められていたという。ストルガツキイ兄弟の全集を初めて刊行したのもテキスト社の大きな功績のひとつである。

90年代に入ると小説の執筆はほとんどやめてしまったが、出版人としての活動は継続し、90年代後半にはワグリュス社「Вагрюс」の編集部に移籍し、引き続きペレーヴィンらの作品を刊行している。

小説としての代表作は諷刺、皮肉をきかせた有名な中編「Игоряша Золотая Рыбка」(1985)、中編「ТП」(1989)があるが、これらの作品は当時のSF界の内幕を当てこすったという側面も強いと言われる。ほかの代表的な作品に中編「Встреча」(1986)や長編ミステリ「Нуль」(1996)、エッセイ集「Земля – вид сверху」(2009)がある。

## バラブハ アンドレイ・ドミトリエヴィチ

Балабуха, Андрей Дмитриевич(1947～)

サンクト・ペテルブルグの批評家、小説家。1961年からSFに興味を持ち、ワルシャフスキイが開いていた雑誌「Звезда」のファンクラブを訪問した。その後、ゴールが指導していたレニングラードの作家組織のSF・科学啓蒙部門の大会にも参加。1966年にSFラジオドラマ「Время кристаллам говорить」のシナリオ執筆に参加する。SFへのデビュー作は数学者ガロアを主人公とした歴史改変ものの短編「Аппендикс」(1968)である。70年代初頭には職を転々としたが、1974年から職業作家となる。中短編を中心に執筆。作品集「Люди кораблей」(1983)はストルガツキイ兄弟の大きな影響下にあると言われる。ほかに唯一の長編として海洋SF「Нептунува арфа」(1986)がある。90年代に入ると小説の執筆はほとんどおこなっていない。

1970年から批評に精力的に取り組む、同じくレニングラード在住のブリチコフらとともに活躍し、ハインラインの研究に取り組むほか、90年代以降も、ロギノフやリュバコフらの作品集にも文章を寄せて理解を示した。また、1983年からはブリチコフとともに若手作家のための創作スタジオを開いて若い作家を後援した。ストルガツキイ兄弟やブリチコフら60年代に活躍した「第三の波」と後続のストリャロフやリュバコフら80年代に台頭した「第四の波」の狭間の世代に属し、アレクサンドル・シチュエルバコフやプラシケヴィチ、ミレルらと同様、創作以外に批評や翻訳を広く手がけた。これらの功績に対し、1992年のイワン・エフレーモフ賞と1993年のペリャーエフ賞が贈られた。

## ハリトーノフ エヴゲーニイ・ヴィクトロヴィチ

Харитонов, Евгений Викторович(1969～)

現代ロシアを代表するSF評論家、ファン、詩人、編集者、書誌学者。モスクワ郊外の町に生まれた。モスクワ国立教育大学を卒業。地元の新聞社や学校の教師としてつとめたのちに、雑誌「Библиография」の編集部を務めた。1990年代初めには多くのファンジン編集した。当初は小説家への道を志し、短編「Солнечные люди」を1984年に発表し、その後もいくつかの短編や詩を発表したが、本人によれば力の限界を感じたとのことである。現在はSF専門誌『Июньскри』「Если」に移り、新しい作家の才能を見抜くことで知られ、小説部門の編集者として活躍している。

評論「В мирах бездны голодных глаз」で1997年のインタープレスコン賞を受賞。ロシアにおけるユートピア文学について、18世紀から1990年代の現代までを視野に入れて記述した評論「Русское



поле» утопий》(2002)はブリチコフやレヴィチの先行研究を踏まえたうえで、1940年代後半の「第二の波」の作品群やストルガツキの《Полдень》シリーズやシェフネルら1960年代の作品にも目を向けた力作である。

非常に好奇心の旺盛な人物であり、アンドレイ・シチュエルバク＝ジューフとの共著《На экране – чудо》(2003)はアニメも含めたロシアにおけるSF映画の紹介を試みたもので、作品タイトルのアルファベット順に監督などのスタッフ、受賞歴などが整理されている事典形式の本である。

## ハルィムバッジャ イーゴリ・ゲオルギエヴィチ

Халымбаджа, Игорь Георгиевич(1933~1999)

1970年代から90年代にかけて活躍したロシアSF界を代表する評論家、書誌学者、ファン。タンボフ州のコトフスクに生まれる。カザン国立大学を卒業。スヴェルドロフスクに拠点を置いて活動し、ファンクラブ《Радиянт》では中心的な役割を果たした。1992年から93年にはファンジン《Икар》を編集。ヴィタリイ・ブグロフと共にソ連初のSF大会「アエリータ」の開催に尽力。また、スタート賞の創設にあたって指導的役割を果たした。1991年のエフレーモフ記念賞を受賞。没後に1999年の遍歴者賞評論部門を《Фантастический самиздат》(1998)で受賞した。この評論はソ連時代とソ連崩壊後のファンジンの歴史についてまとめながら、ファン運動の必要性がどこにあったかを浮かび上がらせる好論である。

圧倒的な蔵書で知られ、埋もれていたSF的作品を掘り起こした功績は計り知れない。ブグロフとともに《Фантастика в русской дореволюционной литературе》や《Советская довоенная фантастика》などの書誌一覧を編集した。

小説もときおり執筆していた。デビュー作は《Волшебные бутсы》(1963)である。

## パルノフ エレメイ・イウドヴィチ

Парнов, Еремей Иудович(1935~2009)

→エムツェフ ミハイル・チホノヴィチの項を参照。

## ピシチェンコ ヴィタリイ・イワノヴィチ

Пищенко, Виталий Иванович(1952~ )

モスクワの小説家、出版人。ノヴォシビルスクに生まれ、チラスポーリで育った。ノヴォシビルスク農業大学を卒業し、地元の雑誌に就職。1980年からノヴォシビルスクのクラブ《Амальтея》に出入りした。1987年から88年にかけて雑誌《Сибирские огни》の責任者を務めた。SFには短編《Равные возможности》(1981)でデビューした。作品集として《Баллада о встречном ветре》(1989)や《Разлом времени》(2002)などがある。

コムソモールの指導者も務め、モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》との関係も利用して出版界へ乗り出した。1988年に一種の作家組織として全ソ新進SF作家創作協会《ВТО МПФ》(《Всесоюзное творческое объединение молодых писателей-фантастов》)を組織し、作家セミナーを開催して約百冊の本を出版したが、作家の育成という面ではさほどの成功を取めなかったと言える。活動費用の問題もあり、ユーリイ・メドヴェーデフやウラジーミル・シチュエルバコフらとの関係が切れなかったのがSF関係者の不信を招いた。ストルガツキ兄弟を非難するメドヴェーデフの怪文書というべき中編《Проген》(1988)を《ВТО МПФ》が刊行していたアンソロジーシリーズ《Румыбы фантастики》に掲載して出版したのが致命傷となった。

1989年には《ВТО МПФ》の本部をチラスポーリへ移した。1992年夏からはレベジのもとで報道担当官をつとめる。さらに1995年には沿ドニエストル作家同盟を組織し、代表を務めた。2001年からモスクワへ移る。

1996年に《ВТО МПФ》を離れ、2002年からはモスクワの出版社ヴェーチェ《Вече》の編集部に入り、ブラシケヴィチやコジネツ、サロマトフらの作品を刊行した。2003年にはファンタスタチカ・冒険小説評議会を設立し、代表の座についたが、ルキヤネンコなどの多くの作家は同調しなかった。組織者としての才能は広く認められているが、実作者や編集者としての力はそれには及ばないとの評価である。

## ビレンキン ドミートリイ・アレクサンドロヴィチ

Биленкин, Дмитрий Александрович(1933~1987)

「第三の波」を代表する短編作家。モスクワに生まれ、モスクワ国立大学で地質学を学び、『コムソモリスカヤ・ブラウダ』紙《Комсомольская правда》や《Вокруг света》誌で働いた。SFへのデビューは短編《Откуда он?》(1958)である。

初期にはハードSFの旗手として脚光を浴びたが、のちに心理的なテーマを掘り下げた短編を得意とするようになった。火星の登山家を描いた短編《Марсианский прибой》(1966)やコンタクトテーマの短編《Проверка на разумность》(邦題『知性テスト』)(1972)は有名である。

一方で、生物学的、生態学的なテーマも手がけ、短編《Давление жизни》(邦題『生命の圧力』)(1970)や短編《Художник》(1967)など数多くの短編を残した。この傾向の作品として、家畜に理性を与え、子ども向けの友だちとして街に放っている未来社会を舞台にした短編《Город и Волк》(1970)も高く評価されている。

心理学者のポリノフを主人公としたシリーズは特に有名で、中編「Десант на Меркурий」（邦題『水星着陸』）（1967）やスペースオペラの形式をとった中編「Космический бог」（1967）などがあるが、ブリトジョフのパヴリシン医師のシリーズの先駆ともみなされている。

長編は一種の破滅ものである「Пустыня жизнь」（1984）ただひとつであり、この長編もかなり短めのものだが、長編作家としては成功しなかった。

モスクワのSF界の中心人物として大きな影響力を持ち続け、80年代にはマレエフカのセミナーの講師としても活躍した。

## ピロジニコフ ウラジーミル・イワノヴィチ

Пирожников, Владимир Иванович(1948～)

ジャーナリスト、小説家。ペルミ国立大学文学部を卒業し、1974年からは記者として働く。マレエフカのセミナーにも参加した。1990年に出版社「Урал-Пресс」を設立し、編集長となる。1995年からはフリーの記者となる。小説は余技として執筆しただけだが、中編「На пажах небесных」（1983）、中編「Небрежная любовь」（1989）、中編「Пять тысяч слов」（1988）などの評価が高い。

## Быков Дмитрий Львович(1967～)

Быков, Дмитрий Львович(1967～)

モスクワの若手の作家、詩人。モスクワ国立大学のジャーナリスト学科を卒業後、新聞各紙や雑誌等に勤めたり寄稿したりしていた。1985年から「Собеседник」紙に勤めた。

ペレーヴィンの評論家としても有名だが、2000年頃から小説家としても有名になった。長編「Оправдание」（2001）、1918年の正書法の改革を題材にした長編「Орфография」（2003）、長編「Эвакуатор」（2005）、エッセイ集「Блуд труда」（2003）などを次々と発表している。2004年のアーベエス賞を「Орфография」で受賞し、SF界からも注目を集める存在となったが、その後も「Эвакуатор」が2006年のカタツムリ賞とアーベエス賞を受賞。2007年に発表したアンチユートピア的長編「ЖД」もSFファンが大喜びで読んでいた。長編「ЖД」は2007年のフィリグラニ賞とアーベエス賞を受賞した。「ЖД」の世界を舞台にした短編シリーズ「ЖД-рассказы」（2007）があり、その中の一編「Отпуск」（2007）で2008年のボルタル賞短編部門を受賞。さらに長編「Списанные」（2008）は2009年のカタツムリ賞を受賞、長編「Икс」（2012）は2013年のアーベエス賞を受賞した。長編「Остронов, или Ученик чародея」（2010）は、2011年のナツィオナーリヌイ・ベストセラー賞やポリシャヤ・クニーガ賞の読者投票部門を受賞するなど、一般読者からの評価も得て、現代ロシア文学を代表する存在として認知された。本人もSFには強い関心を持っており、サンクト・ペテルブルグのSF専門誌『ボルデニ・21世紀』誌「Поддень, XXI век」に寄せた巻頭言は非常におもしろい。2007年のボルタルにはゲストとして参加した。

このほかにパステルナークの評伝「Борис Пастернак」（2005）はモロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」の偉人伝シリーズの一冊として刊行されてベストセラーとなり、2006年のポリシャヤ・クニーガ賞とナツィオナーリヌイ・ベストセラー賞を受賞している。マスコミへの露出も多く、体制批判のデモにも参加するなどの活動も旺盛に行う。詩人としての評価も高い。

## Фирсов Ураジーмил・ニコラエヴィチ

Фирсов, Владимир Николаевич(1925～1987)

ソ連時代のSF作家。カールガに生まれ、のちにモスクワへ移る。モスクワ印刷大学で学び、1949年から外国語研究所に入って働き、のちに出版社ミール社「Мир」へ移る。これらの編集部で外国のSFや科学啓蒙ものの紹介に携わった。

SFには短編「Уже тридцать минут на Луне...」（1966）でデビューした。没後に作品集「Звездный эликсир」（1987）が刊行された。ユーモア短編「Кенгуру」（1975）が邦訳されている（邦題『カンガルー』）。

## Филенко Эвгэней・イワノヴィチ

Филенко, Евгений Иванович(1954～)

ペルミ出身の作家。軍人の家に生まれた。SFへのデビューは、ストルガツキイ兄弟の作品世界に影響を受けた、1964年の短編「Космический десант」で果たし、非常に早熟であったが、その後は沈黙した。1976年にペルミ国立大学の経済学部を卒業。70年代後半には合唱にも参加。1979年から1980年にかけては空手を習っていたという。ルカーシンとともにペルミのファンクラブ「Рифей」の精力的なメンバーとして80年代は活動した。

1983年のマレエフカのセミナーの参加者の一人で、80年代にいち早く才能を認められて作品の多くが各種アンソロジーなどに収められた。70年代末から書きためられたユーモア短編のシリーズが収録された作品集「Сага о Тимофееве」（1988）や長編「Шествие динозавров」（1991）とストルガツキイ兄弟の「Поддень」シリーズに連なる「Галактический консул」の連作が代表作である。「Галактический консул」のシリーズの作品として、長編「Эпицентр」（1987）や長編「Гнездо Феникса」（1999）がある。他に中編「Дарю вам этот мир」（1990）も評価が高い。

1990年代に入ると、ソ連崩壊後の状況に対応することができず、次第に作品の発表が減ったが、「Галактический консул」の系列に属する長編「Бумеранг на один бросок」（2006）で2007年のカタツ

ムリ賞を受賞した。系列以外の作品として、長編《Отсвет мрака》(2002)、長編《Шестой моряк》(2011)がある。

## フォミチェフ アレクセイ・セルゲエヴィチ

Фомичев, Алексей Сергеевич(1970～ )

アクション主体のポエヴィク《боевик》のジャンルで活躍する人気作家。リャザンに生まれ、通信技術を学ぶ。格闘技も学び、プロのボディガードとして働く。2002年に発表した第一長編《Пусть бог не вмешивается》が人気を博し、「Оборотень」シリーズとして、2007年までに7冊の長編が刊行されている。2006年に発表した中編《След отражения》以降は、別のシリーズ《Отражения》の執筆も開始しており、現在のところ、「Услышать эхо》(2007)と《Ответить эху》(2008)の二冊の長編が発表されている。

## ブクシャ クセーニヤ・セルゲエヴナ

Букша, Ксения Сергеевна(1983～ )

Санクト・ペテルブルグ国立大学経済学部にて在学中から小説を発表し注目を集める。大学卒業後はビジネス誌《Эксперт. Северо-Запад》で記者として働いた。その後もビジネス界で仕事を続けている。2001年から2002年にはモスクワの作家セミナーへ参加し、小説家レオニード・ユゼフォヴィチの指導を受けた。作品集《Аленка-партизанка》(2002)がアムフォラ社《Амфора》から刊行されて注目される。ほかに長編《Дом, который построим мы》(2004)、短編集《Мы живем неправильно》(2009)などがある。SFの本流ではないが、ジチンスキイやドミートリイ・ブイコフなどSFの周辺にいる作家たちから高い評価を受けている。

## ブグロフ ヴィタリイ・イワノヴィチ

Бугров, Виталий Иванович(1938～1994)

ハルィムバッジヤとともに1970年代から80年代を代表するSFファン、編集者。SFの書誌学者としても活躍し、圧倒的な蔵書量でSF書誌学の基礎を築いた。この方面での業績に《Советская фантастика: Книги 1917-1975 гг.》(1979)や《Погребенные в периодике(1945-1976)》(1980)がある。特に革命前のSFの作品への造詣が深く、その文章は《В поисках застрявшего дня. О фантастике всерьез и с улыбкой》(1981)や《1000 ликов мечты》(1988)にまとめられた。

北部ウラルの町に生まれ、ウラル国立大学文学部を卒業後、スヴェルドロフスクに移り、学校教師となった。1966年から長年にわたり、雑誌《Уральский следопыт》のSF部門の編集をつとめ、1981年にソ連ではじめて開催されたSF大会アエリータの開催とアエリータ賞の設立にも尽力した。雑誌《Уральский следопыт》がソ連時代にSF界で中心的役割を果たしたのはブグロフの力によるところが大きい。雑誌《Уральский следопыт》はSF専門誌がないなかで、SF作家の新人発掘に大きな役割を果たした。

死後、彼の業績をしのいで、すぐれたファンダムの活動家に対して送られるヴィタリイ・ブグロフ賞が設立された。

## ブシコフ アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ

Бушков, Александр Александрович(1956～ )

クラスノヤルスク在住の人気作家。高等教育を受けず、郵便配達夫など職を転々とした末に職業作家となる。第一作の中編《Варяги без приглашения》(1981)が創設されたばかりの1981年のヴェリコエ・コロツォ賞を受賞して作家として順当なスタートを切った。しかし、次第に民族主義的傾向を強め、ソ連時代にはモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の系列の作家に連なった。80年代から精力的に作品を発表し、作品集《Страна, о которой знали все》(1989)、作品集《Дождь над океаном》(1990)がある。

しかし、1991年以降は作品を発表する機会を失い、小説の執筆を離れた。ブシコフが小説界に戻ってくるのは1995年のことである。翻訳文学のブームが終わり、ロシア語作家による小説が求められていた時代に、ブシコフは再発見され、冒険小説とファンタジーの長編作家として再生を果たした。冒険小説作家としては長編《Бешеная》(1995)や《На то и волки》(1995)を発表し、ベストセラー作家となった。1995年にマリヤ・セミョーノワの長編《Волкодав》がベストセラーとなり、ロシア・ファンタジーの大ブームが起きると、ブシコフも長編《Анастасия》(1990)などが再版されて、ヒーリックファンタジーの作者として認められた。なかでもスタニスラフ・スヴァエロフを主人公としたシリーズが特に有名で、そのシリーズの一編である長編《Рыцарь из ниоткуда》(1996)と《Летающие острова》(1996)で人気を確立した。1990年代以降のロシアでもっとも読まれている作家のひとりである。

近年も執筆量は衰えを知らず、2009年までに発表した長編の数は60を超えるが、SFよりも歴史読物に比重を移している。2006年までに著作全体では3000万部以上が発行されている大ベストセラー作家である。SF各賞にノミネートされることもなく、コンヴェンションに顔を出すこともない、ある意味では孤高の作家である。

## フヌトジノフ アンドレイ・アラトヴィチ

Хуснутдинов, Андрей Аратович(1967～ )

アルマ・アタの小説家。フェルガナで生まれ、カザフスタン国立大学文学部を卒業し、執筆を始める。1991年にアンソロジー「Необъятный двор」に短編がいくつか掲載されてデビューするが、その後は作品をあまり発表せずに過ごした。ジチンスキイによって見出され、2002年からサント・ペテルブルグのSF専門誌『ポルデニ・21世紀』誌「Полдень, XXI век」に中短編が掲載されるようになった。奇妙な味わいを残す作品が多く、SFファンにもなかなか受け入れられなかったが、中編「Столовая гора」(2007)は一部の評論家やファンから高い評価を受け、注目を集める存在となる。長編「Гугенот」(2008)も話題を呼んだ。

## プホフ ミハイル・ゲオルギエヴィチ

Пухов, Михаил Георгиевич(1944～1995)

モロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」派の作家のひとり。トムスクの数学者の家庭に生まれる。1967年にモスクワ理工科大学を卒業、1972年には物理数学の分野で修士号を取得し、研究者としても活躍した。

SFへのデビュー作は短編「Охотничья экспедиция」(1968)である。モロダヤ・グヴァルジヤ派の作家としては比較的良心的な立場の人間として知られた。代表作として短編「Человек с пустой кобурой」(1977)や宇宙SFの中編「Корабль Роботов」(1982)などがある。作風は初期には科学技術的な側面を重視したが、後年にはモロダヤ・グヴァルジヤ派の影響下に入り、侵略テーマの短編「Семя зла」(1981)には排外的な態度が見受けられると指摘される。ほかにコンピューターゲームを題材にした短編「Истинная правда」(1985)や月世界でのソ連の宇宙飛行士の姿を描いた中編「Путь к Земле」(1985)も評価が高い。長編は書かず、80年代後半からは執筆量が落ちた。

1979年からは科学啓蒙雑誌『技術青年』「Техника - молодежи」のSF部門を指導。クラークの『楽園の泉』や『2010年宇宙の旅』の掲載にこぎつけた。

ルイス・キャロル『スナーク狩り』の翻訳なども手がけた。

## フライ マクス

Фрай, Макс

画家のスヴェトラーナ・ユリエヴナ・マルティンチク(Светлана Юрьевна Мартыничик)(1965～)のペンネームだが、文学作品を手がける際は同じく画家のイーゴリ・ヴィクトロヴィチ・スチョーピン(Игорь Викторович Степин)(1967～)と共同で作業することもあった。SF小説、アンソロジーの編集など多岐にわたって活躍している。

スヴェトラーナ・マルティンチクはオデッサに生まれ、オデッサ大学の文学部へ入学した。ふたりが共同で創作を始めたのは1987年のことで、架空の世界ホマンを描く断片のインストールのシリーズ「Мир Хомана」が芸術家としての業績では有名である。1993年にモスクワへ移った。

デビュー作の長編「Лабиринт」(1996)は折からのファンタジーブームに乗り、大ベストセラーとなった。90年代後半のファンタジーブームを牽引したシリーズのひとつである。その後も続編として「Темная сторона」(1997)、「Волонтеры вечности」(1997)、「Неваждения」(1997)が矢継ぎ早に発表され、総称して「Лабиринт Ехо」と呼ばれるシリーズで一躍ベストセラー作家の地位に上り詰めた。大人のためのおとぎ話とでも言うべき作風であるが、短期間に発表された続編はしばしば自己模倣、単調、無葛藤と評されることもある。このシリーズは2000年以降も書き続けられ、「Хроники Ехо」と題された長編は2004年から2013年までに8作の長編が発表され、人気を保っている。ほかに短編集「Сказки и истории」(2004)がある。

近年は実作者としてよりは、出版物の企画の立案者としての立場が強まり、サント・ペテルブルグのアムフォラ社「Амфора」を拠点に多くの企画を世に送っている。2003年からは「Русские инородные сказки」というアンソロジーを編者としても活躍し、ドミートリイ・ゴルチェフ(Дмитрий Горчев)、ウラジーミル・ベレージン、オリガ・ルーカス(Ольга Лукас)、ユリヤ・ゾニスなどの新進作家たちに発表の機会を提供している。

## ブライデル ユーリイ・ミハイロヴィチ

Брайдер, Юрий Михайлович(1948～ )

→チャドヴィチ ニコライ・トロフィモヴィチの項を参照。

## プラシケヴィチ ゲンナージイ・マルトヴィチ

Прашкевич, Геннадий Мартович(1941～ )

ノヴォシビルスク在住の小説家、詩人、エッセイスト。ソ連時代から活躍するベテラン作家。エニセイ郡のピロフスコエ村に生まれる。トムスク国立大学を卒業後、ウラルや極東での地理学の調査隊などに加わった。サハリン総合科学研究所の火山研究室で働く。SFへのデビューは1957年の短編「Остров Туманов」ときわめて早熟であった。初の単行本は「Такое долгое возвращение」(1968)であるが、これはSFではない。

SF以外に冒険小説、歴史小説などのジャンルでも活躍したが、SFでの代表作は1970年代から書

き継がれた、推理小説的要素も強い「Записки промышленного шпиона」のシリーズのほか、生き残ったプレシオザウルスとの遭遇を描く「Великий Краббен」(1983)も有名である。作品集として「Разговоранное чудо」(1978)がある。ほかに中編「Школа гениев」(1979)などがある。

1990年代半ばに、一時期 SF から遠ざかり、推理小説的要素の強い作品「Пятый сон Веры Павловны」(アレクサンドル・ボグダン(Александр Богдан)と共作)(2001)や歴史小説「Секретный дьяк」(1999)を書いていたが、2000年頃から、90年代に SF から遠ざかった作家の再評価が進むようになり、その流れのなかで SF 界に復帰した。中編「Белый мамонт」(2003)で2004年のカタツムリ賞と遍歴者賞を受賞。カタツムリ賞との相性がいいのか、2005年には中編「Территория греха」(2004)、2007年にも中編「Русский струльдбруг」で同賞の受賞を果たしている。2004年には新作長編「Кормчая книга」を発表した。ほかに中編「Золотой миллиард」(2005)、中編「Дыша духами и туманами」(2005)がある。アレクセイ・カルーギンと共作した長編「Деграданс」(2007)も話題を呼んだ。

回想記の名手としても有名で、SF 専門誌『イエスリ』「Если」の求めに応じて書かれた「Малый бедкер по НФ」(2002)は2003年の遍歴者賞、シグマ=エフ賞、アーベエス賞を受賞した。この回想記ではシテルンとの交流も詳しくつづられ、ロシア SF 史の豊富なエピソードを伝えている。キエフの SF 専門誌『レアリノスチ・ファンタстичеки』誌「Реальность фантастики」に連載された評論をもとにした「Красный сфинкс」(2007)はオドエフスキイからシテルンまで48人の作家について紹介したもので、現代の SF 初心者にロシア SF 史の入門書的な著作として読まれている。この著作は2007年のズヴォズヌイ・モスト賞、2008年のベリャエフ賞、ポルデン賞、カタツムリ賞評論部門などを受賞した。

1994年から1997年にかけて文芸誌「Проза Сибирь」の編集長もつとめた。

## ブランジス エヴゲーニイ・パヴロヴィチ

Брандис, Евгений Павлович(1916～1985)

1960年代を代表する SF 評論家。ジュール・ヴェルヌの研究においては世界的に名を知られた。モスクワに生まれ、レニングラード国立大学を卒業。その後、研究生活に入った。

SF 研究としては、ドミトレフスキイとの共著「Через горы времени」(1963)がエフレーモフの創作を扱った古典的著作として知られる。その他も「Советский научно-фантастический роман」(1959)や、ドミトレフスキイとの共著になる「Мир будущего в научной фантастике」(1965)があるが、現在ではその批評は現代の感覚との隔たりを感じさせる。

また、1960年代にはレニングラードを拠点として、SF 批評を育成するべく奮闘した。

## ブリチコフ アナトーリイ・フョードロヴィチ

Бритиков, Анатолий Федорович(1926～1997)

代表的なロシア SF 史家。ウクライナのバフムートで生まれた。1950年にオデッサ大学の文学部を卒業し、「Черноморская коммуна」紙で働いた。レニングラードに移り、当時流行し始めた SF に興味を持ち、ロシア SF 史に関する記念碑的著作「Русский советский научно-фантастический роман」(1970)を発表した。ロシア SF の起源から1960年代までを概観したこの著作はいまなお、叙述のバランス、正確な記述、巻末文献の詳細さで価値を失っていない。没後に刊行された著作「Отечественная научно-фантастическая литература: Некоторые проблемы истории и теории жанра」で2001年にカタツムリ賞と遍歴者賞を贈られた。しかし、この著作は100部しか刊行されなかった。

バラブハとともにレニングラードの批評界を主導し、ベリャエフ、ボグダーノフ、エフレーモフらの創作を取り上げ、70年代、80年代を通じて活躍した。

## ブリイガ セルゲイ・アレクセエヴィチ

Булга, Сергей Алексеевич(1953～)

ミンスクの SF 作家。ベラルーシ工業大学を卒業し、1981年にはゴスキノ付属のシナリオ作家養成課程を卒業し、1982年から1983年にかけてはベラルーシフィルムでシナリオ作家として、1983年から1986年にかけては映写技師として働いた。1986年から1995年にかけてはベラルーシフィルムのアニメスタジオの局長を勤める。1995年以降はミンスクの児童向け新聞「Зорька」の文学欄の編集を担当している。

短編「Туман」で1980年にデビューした。SF へのデビュー作は短編「Украденный остров」(1985)である。80年代後半からは精力的に短編を発表し、ミンスクを代表する SF 作家となったが、90年代後半には執筆量が減少した。作品集としてミンスクのエリダン社「Эридан」から出た「Бродяга и фез」(1991)がある。長編第一作は1997年の「Железный волк」であるが、2000年以降に再び精力的に作品を発表しており、長編「Чужая корона」(2004)は2005年のイワン・エフレーモフ賞を受賞した。

## ブリイチョフ キール (キリル)

Булгачев, Кир(Кирилл)(1934～2003)

ストルガツキイ兄弟と並んでソビエト時代を代表するモスクワの SF 作家。映画のシナリオライターとしても著名で、1982年にソ連邦国家賞を受賞した。SF のほかに科学啓蒙ものの著作も多数。

本名はイーゴリ・フセヴォロドヴィチ・モージェイコ(Игорь Всеволодович Можейко)。モスクワに生まれ、モスクワ外国語大学卒業後、ビルマに赴き、通訳として働いた。1959年にビルマから帰ってきたのち、修士課程で東洋学を専攻し、ビルマ史を研究した。SFへのデビューは1965年の短編「Долг гостеприимства」である。専門の研究も続け、1981年に博士号を取得した。

ブリュチョフの名を高めたのは、1970年代からずっと書き継がれた、宇宙をまたにかけて冒険する21世紀の少女アリサ・セレンニョワを主人公にした連作である。アニメ化、テレビ映画化も数多くされ、作者自身によってシナリオ化されたものも多い。この連作が児童文学界に与えた影響も大きく、ロスコンではすぐれた児童向けのSFの作者に対して、アリサ賞が贈られている。一方で、ソ連崩壊という社会の激変のなかで、作品で描かれた主人公像が時代錯誤的なものとなったとの指摘もあるが、作品に対する読者からの支持は現在でも非常に高い。デビュー後すぐに書かれた短編「Девочка, с которой ничего не случится」(邦題『何事も起こらない娘の話』)(1965)がシリーズ第一作である。このほか、のちに『第三惑星の秘密』というタイトルでアニメ化された中編「Путешествие Алисы」(1974)、中編「День рождения Алисы」(1974)、中編「Сто лет тому вперед」(1978)などが名高い作品である。このほか数多くのシリーズ作品が「Миллион приключений」(1982)、「Девочка из будущего」(1984)、「Непоседа」(1985)、「Пленники астероида」(1988)、「Новые приключения Алисы」(1990)といった作品集に収められている。

また、田舎町のヴェリーキイ・グスリヤールを舞台にした連作も重要である。この連作は60を超える短編から構成されているが、おとぎ話の再話のようなものから、とぼけた宇宙人の訪問のエピソードまで、バラエティーに富んだ連作となっている。この連作もアリサのシリーズと同様、書き継がれるにしたがって陳腐化したとの指摘があるが、中編「Перпендикулярный мир」(1989)ではペレストロイカ後の世界を反映させて、新境地を開いたと評された。

児童向けの作品に代表作が多いと見られているが、大人向けの作品もオーソドックスな作風で手堅い。パヴルィシ医師を主人公とした宇宙小説のシリーズは有名で、短編「Снегурочка」(1973)や中編「Великий Дух и беглец」(1972)や中編「Закон для дракона」(1975)、中編「Белое платье Золушки」(邦題『シンデレラの白い服』)(1980)がある。パヴルィシ医師シリーズの長編「Поселок」(1988)はブリュチョフの最高傑作と謳われる。また、長編「Последняя война」(1970)は他の惑星を舞台にした核破壊ものである。中世ロシアを舞台に文明化の活動をおこなう遠未来の歴史家の活動を描いた中編「Похищение чародея」(1979)も名高い。

90年代に入っても新作の発表を続け、短編「О страхе」(1992)で1993年のカタツムリ賞を受賞している。また、ロシア革命前夜を舞台にした歴史改変小説の長編「Река Хронос」(1992)でも健在ぶりを示し、ポリシェヴィキに対しては厳しい批判的姿勢を示した。最晩年の作品に短編「Золотые рыбки снова в продаже」(2002)などがある。

自伝「Как стать фантастом」(2003)もSF史上の貴重な資料である。

## ブルキン ユーリイ・セルゲエヴィチ

Буркин, Юлий Сергеевич(1960～)

トムスク在住のSF作家、ロック・ミュージシャン。トムスク国立大学文学部を卒業後も地方の雑誌などで働く。SFへのデビューは1988年、ミンスクで出ていた雑誌「Парус」に掲載された短編「Пятна грозы」である。

とりわけ、1994年に発表された作品集「Бабочка и Василиск」は収録作品と関係した作者の歌を収めたCDが付いており、音楽と文学の融合の試みとして注目を集めた。ルキヤネンコとも親交が深く、共作した長編「Остров Русь」(1997)もある。単独で発表した長編「Цветы на нашем пепле」(2000)は2001年の遍歴者賞を受賞した。

ミュージシャンとしての活躍も旺盛で、1994年にはアルバム「Vanessa io」を発表した。ハリコフで開かれるコンヴェンションであるズヴォズヌイ・モストでウラジーミル・ワシリエフらとともにライブ演奏をおこなったこともある。

2000年から2002年にかけては、トムスクでウラーニヤというSFコンヴェンションを主催していた。

## ブルソノフ ユーリイ・ニコラエヴィチ

Бурсонов, Юрий Николаевич(1970～)

SF作家。ブリャンスク州の小さな町に生まれる。スモレンスク医科大学には二度入学したが卒業できず、記者として働く。1999年にヴィクトル・ブルツェフ(Виктор Бурцев)名義で長編「Алмазные нервы」(ヴィクトル・コセンコフと共作)を発表し、2001年のアエリータで新人賞を受賞する。このシリーズは三部作となり人気を博した。2003年の長編三部作「Числа и знаки」が出世作。シェアワールドものの「Этногенез」シリーズの一編である長編「Революция」(2009)は大津事件を背景にした歴史SFである。

初期はさまざまなスタイルの短編も精力的に執筆し、短編「Мессия должен умереть」(2001)や短編「Все золотистое」(2003)などの作品で注目された。こうした短編は作品集「Чудовищ нет」(2006)に収録されている。

## フルーモフ ウラジーミル・ミハイロヴィチ

Хлумов, Владимир Михайлович(1952～ )

モスクワの天体物理学者、SF作家。小説は余技として書いている。本名はウラジーミル・ミハイロヴィチ・リプノフ(Владимир Михайлович Липунов)である。極東で生まれ、モスクワ国立大学へ進み、天体物理学を専攻する。いまなお現役の科学者である。SFへのデビューは1984年の短編「Кулповский меморандум」であるが、この作品も注目を集めた。1986年のダブルティのセミナーではアンチユートピアものの中編「Санаторий」(1988)が大きな注目を集めた。

初の単行本は「Старая дева Мария」(1997)だが、80年代末から小説を書き続けていた。長編「Мастер дымных колец」(2000)は1989年から1991年にかけて執筆されていたものだが、さめた認識を持つ歴史改変小説と評されている。ほかにユーモア短編「Мезозойская история」(1992)も有名である。執筆から発表までに結果として相当の時間が経過してしまったことが惜まれる。

## フレイシマン ユーリイ・ゲルショヴィチ

Флейшман, Юрий Гершович(1961～ )

SFの書誌学者、評論家。レニングラードに生まれ、無線技術を学んだ。1982年からファン活動を開始し、ストルガツキイ兄弟の作品のファングループ「リュデヌイ」(«Люденый»)の一員となる。ストルガツキイ百科事典「Энциклопедия Стругацких」(1999)の刊行に対して、2000年にはワジム・カザコフ、アレクセイ・ケルジンとともにカタツムリ賞を受賞した。

## プロゾロフ アレクサンドル・ドミトリエヴィチ

Прозоров, Александр Дмитриевич(1962～ )

娯楽長編SFを量産する人気作家。レニングラードに生まれる。大学卒業後はプログラマーやバス運転手、整備士として働く。1992年からバラブハの創作セミナーで学ぶ。SFには短編「Окно для пришельца」(1992)でデビューした。1995年から96年にかけては新聞「Час Пик」の記者として活躍した。

1996年に中編「Совесть вне памяти」を発表するもまだ目立った存在ではなかったが、1998年に長編「Цитадель」をネット・ブリクリ(Нэт Прикли)名義でセヴェロ・ザパド社「Северо-Запад」から発表すると、その続編も次々と執筆して発表するようになった。本名で歴史ファンタジー長編「Земля Мертвых」(2003)を発表して人気が高まり、さらに2004年からヒロイックファンタジーシリーズ「Веду»に属する長編「Слово война」を発表して広範な人気を得た。2009年までにこのシリーズに属する長編を他の作家との共作も含めると15作書いている。

## プローニン イーゴリ・エヴゲニエヴィチ

Пронин, Игорь Евгеньевич(1968～ )

モスクワの作家。全口通信制金融経済専門学校を卒業し、エコノミストとしてモスクワの銀行関係の官庁に勤めた。1998年から小説を書き始めた。

中編「Мао」(2000)はウェブ上の新聞「Вечерний Гондольер」に掲載後に評判を呼び、紙媒体ではサンクト・ペテルブルグのSF専門誌『ボルデニ・21世紀』誌「Полдень, XXI век」の2002年第2号に掲載された。その後、2003年にはノルマン・セイモン(Норман Сеймон)名義で、アメリカのSF作家スターリング・ラニエルの「Hiero Desteen」シリーズのオリジナル続編シリーズ「Мир Иеро Стерлинга」の中の数編の長編を発表、同じようにコリン・ウィルソンの「スパイダー・ワールド」シリーズの続編である「Мир пауков」にも、2002年から2004年にかけて長編を何作も発表、アレクサンドル・プロゾロフと共作した「Паутина Зла」(2004)、ストルガツキイ兄弟の小説「ストーリー」をもとにしたコンピューターゲームからスピンオフしたシリーズ「S.T.A.L.K.E.R.」ものの長編「Дезертир」(2007)を発表し、人気作家となっている。

一方で、長編「Свидетели Крысолова」(2004)、長編「Нашествие」(2005)などの単独作品も発表を続けている。長編「Отраженные」(2007)で2008年の遍歴者賞サイエンスファンタジー部門を受賞している。

## ブロヒーン ニコライ・ミハイロヴィチ

Блохин, Николай Михайлович(1949～ )

ロストフ・ナ・ドヌーの小説家、SFファン。代表作に短編「Реплики」(1983)、「Пятна на шарике」など。ヤクボフスキイの主宰するファンクラブ「Притяжение」の一員として活動。マレフカのセミナーにも参加した。

## ペガソフ ニコライ

Пегасов, Николай(1977～ )

SF情報誌『ミール・ファンタстички』「Мир фантастики」の編集者。モスクワ国立大学歴史学部を卒業した。ドイツ語と英語の翻訳などをした後、出版界に入り、ホビーゲーム社「Хобби-игры」やアーエスター社「АСТ」などで編集者としてテーブルゲームや書籍の出版に携わる。2003年に『ミール・

ファンタスチキ』誌を創刊して編集長となり、2008年2月まで編集長を務めた。『ミール・ファンタスチキ』誌はビジュアル面を重視し、アニメ、ゲーム、映画などの記事を前面に押し出した雑誌であり、発行部数も3万部を超えるなど、SF情報誌としてはかなり大きい刊行部数を誇る。2007年に横浜で開かれたワールドコンにも参加した。

## ベスソノフ アレクセイ

Бессонов, Алексей(1971～)

ハリコフのSF作家。本名はアレクセイ・イゴレヴィチ・エナ(Алексей Игоревич Ена)。ハリコフの医師の家に生まれる。スペースオペラの長編《Ветер и сталь》(1996)がエクсмо社「Эксмо」から刊行されてデビューし、これが三部作化されて流行作家となる。さらに矢継ぎ早に同一世界が舞台の長編群を発表して現在に至っている。

## ペトロシヤン マリアム

Петросян, Мариам(1969～)

アルメニアの画家。小説家。アルメニアのエレヴァンに生まれた。1989年からアルメニアフィルムのアニメ部門で働き、その後、いったんはモスクワに出てソユズムリトフィルムで2年間働くも、1995年に再びアルメニアフィルムに戻って、2007年まで勤めた。

2009年に発表された大作《Дом, в котором...》がベストセラーになり、2009年のポリシャヤ・クニーガ賞のインターネットによる読者投票部門で1位に選ばれたが、SF界からも注目を集め、2010年にはサフチェンコ記念賞を受賞。この作品は、SF的な小道具が表に出ているわけではないが、マジックリアリズムの傑作として高く評価されている。小説はこの1作しか発表していない。

## ベニーロフ エヴゲーニイ・セミヨーノヴィチ

Бенилов, Евгений Семенович(1957～)

小説家、数学教師。モスクワ生まれ、モスクワ理工科工業大学を卒業する。科学アカデミー海洋学研究所で勤めた。1990年から国外に移り、97年まではオーストラリアにいたが、その後もイギリス、アイルランドを転々とする。

SFには1997年に長編《Человек, который хотел понять все》でデビューし、ロシア・ブッカー賞にもノミネートされた。アンチユートピアものの長編《1985》(2003)は読者の大きな反響を呼んだ。

## ベネジクトフ キリル・スタニスラヴォヴィチ

Бенедиктов, Кирилл Станиславович(1969～)

ミンスク出身の小説家。モスクワ国立大学で歴史を専攻した。1990年にミンスクの雑誌《Парус》に短編《Даргавс, город мертвых》を発表してSFにデビューを果たした。その後は目立った活躍はなく、10年ほど文学から離れていたが、ベルギーに留学したり、韓国などの国外で働いたりしていた。現在はモスクワ在住。

2001年に初の長編《Завещание ночи》が出版されたあと、SF界に復帰し、世界的なパンデミックで人口が激減して国際秩序が大きく変貌した2053年の未来社会を舞台に、中央アジアに建設された巨大な隔離用の壁を破壊しようとするテロリストや人種主義的国家指導者の忌まわしい目論みなどが渦巻く巨編《Война за Асгард》(2003)で2004年のカタツムリ賞と遍歴者賞を受賞して一躍SF界の表舞台へと飛び出し、大きな反響を呼んだ。2004年のユーロコンの新人賞も受賞した。同一世界が舞台の長編《Путь шута》(2005)もある。

ファンタジーの作品もあり、作品集《Штормовое предупреждение》(2004)もそうした系列の作品を収めている。ファンタジー中編《Восход шестого солнца》(2004)で2005年のフィリグラニ賞中編部門を受賞した。また、《Война за Асгард》シリーズの短編《Точка Лагранжа》(2006)で2007年のフィリグラニ賞を受賞した。

近作には、複数の作家によるシェアワールドのシリーズ《Этногенез》に属する長編《Блокада. Охота на монстра》(2009)がある。

## ペホフ アレクセイ・ユリエヴィチ

Пехов, Алексей Юрьевич(1978～)

2000年以降のファンタジー界で絶大な人気を誇る作家。モスクワ生まれ、歯科を学ぶ。子どものころからSFが好きだったが、2001年から本格的に執筆を始め、デビュー作となる長編ファンタジー三部作《Хроники Сиаль》(2002～2003)が爆発的な人気を呼び、流行作家となる。その後も精力的に作品を発表し、長編《Под знаком Мантикоры》(2004)は2005年のボルタルでサフチェンコ記念賞を受賞。さらに妻であるエレナ・ブィチコワ(Елена Бычкова)とナターリヤ・トゥルチャニノワ(Наталья Турчанинова)との共作によるアーバンファンタジーシリーズ《Киндрэт》を2005年から発表し、2006年には遍歴者賞のアーバンファンタジー部門を受賞した。



## ベラシ アレクサンドル・マルコヴィチ

Белаш, Александр Маркович(1961～ )

## ベラシ リュドミラ・ウラジミロヴナ

Белаш, Людмила Владимировна(1963～ )

夫婦共作の SF 作家。夫のアレクサンドルはリャザンに生まれる。ともにリャザン医科大学を卒業し、現在はペンザで働く。職業は医師。

ノチノイ・ヴェテル(Ночной Ветер)の筆名で 1990 年代にも作品をいくつか発表していたが、大量に未発表の作品を書きためていた。ウェブ上のコンクールで作品を応募したりしていたが、入選しても大きな話題とはならなかった。

2002 年に長編《Война кукол》を発表、三部作となり、注目された。さらに《Капитан Удача》シリーズも 2004 年から発表している。商業的な成功はあまり得られていないが一部では非常に高い評価を受けている。

## ベリヤーニン アンドレイ・オレゴヴィチ

Белянин, Андрей Олегович(1967～ )

ユーモアファンタジー長編を量産する流行作家。アストラハンに生まれた。ヴラーソフ記念アストラハン芸術学校の美術教育学科で学ぶ。1990 年には詩集《Набросок тушью》を刊行。流行作家となつた後も詩集《Пастух медведей》(2003)を発表している。

ユーモアファンタジーの長編《Меч без имени》で 1997 年にアルマダ社《Армада》からデビューし、のちにこの作品は三部作に発展した。さらに同じくユーモアファンタジーの三部作《Джек Сумасшедший король》(1999)で人気を博した。ユーモアファンタジーシリーズ《Тайный сыск царя Гороха》は 1999 年から開始され、2009 年までに 7 作の長編が書き継がれる人気シリーズとなった。

## ペルヴーシン アントン・イワノヴィチ

Первушин, Антон Иванович(1970～ )

サンクト・ペテルブルグの SF 作家。イワノヴォに生まれ、ムルマンスクでも過ごした。サンクト・ペテルブルグ工科大学ではタービンの製法を専攻。1988 年にレニングラードに移り、バラブハとブリチコフの指導する文学セミナーに入った。SF は 1986 年から書き始め、1990 年に短編《Иванушка и автомат》でデビュー。1993 年にはボリス・ストルガツキイのセミナーに参加した。

近年は宇宙開発秘史とでも言うべきジャンルを開拓し、《Битва за звезды. Космическое противостояние》(2004)など多くの著作を発表し、現代ロシアでは特異なジャンルとして注目を集めている。同傾向の著作として《Королев против фон Брауна. Демоны большой войны》(2007)などがあるが、《Завоевание Марса. Марсианские хроники эпохи Великого Противостояния》(2006)で 2007 年のアーベーエス賞評論部門を受賞している。また、評論活動も旺盛で、2006 年からキエフの SF 専門誌『レアリノスチ・ファンタстички』誌《Реальность фантастики》に断続的に執筆した評論《10 мифов о советской фантастике》で 2009 年のインタープレスコン賞評論部門を受賞した。

近年はハード SF の旗手として宇宙 SF を中心に精力的に執筆している。長編《Звезда》(2007)、中編《Небо должно быть нашим!》(2007)や 2011 年のフィリグラニ賞を受賞した中編《Почтальон сингулярности》(2010)が注目されている。

## ベルコワ ニーナ・マトヴェエヴナ

Беркова, Нина Матвеевна(1925～2003)

モスクワの編集者、小説家。モスクワ国立大学卒業。出版社《Детская литература》に勤め、1960 年代にはストルガツキイ兄弟らの作品を精力的に手がけて世に送った。ストルガツキイ兄弟が作品を発表しにくい時代にも彼らを援助した。

80 年代に入ると、マレエフカとダブルルティのセミナーの主催者側である作家同盟の一員としてセミナーを援助した。ベルコワが編集した SF アンソロジーに《Орion》(1988)、《Гей》(1990)などがある。特に後者はストルガツキイ兄弟、バベンコ、ブランケヴィチ、リュバコフ、ストリャロフ、ロギノフ、ディモフ、シレツキイらの作品を収めた評価の高いアンソロジーである。

ソ連崩壊後もロッキード社《Локид》やエクсмо社《Эксмо》の編集部に入るなどして活躍した。2000 年にはその功績に対してイワン・エフレーモフ賞が贈られた。

## ペルモフ ニーク

Перумов, Ник(1963～ )

本名はニコライ・ダニイロヴィチ・ペルモフ(Николай Данилович Перумов)。ルキヤネンコと並んでロシアで最も人気のあるファンタジー作家のひとり。レニングラードに生まれ、レニングラード工業大学を卒業後、分子生物学の分野で研究所に勤めていた。

1970 年代末から小説を書いていたが、初の単行本は 1993 年にスタヴロポリで刊行された《Нисхождение тьмы, или Средиземье 300 летспустя》である。これはペルモフがトールキンの『指輪物語』の原書を手し、その世界に熱中して趣味的に書いていた作品であった。さらにこの作品は

発展して三部作「Кольцо тьмы」のシリーズとなり、長編「Черное копые」(1993)がサンクト・ペテルブルグのセヴェロ・ザバド社「Северо-Запад」社から刊行されて、広い読者の熱狂的な支持を得てペルモフは一躍有名となった。マリヤ・セミョーノワと並んで、翻訳に席捲されていたファンタジー長編の分野を、ロシア語の世界に移植したという点で、後続の作家に与えた影響は非常に大きい。1995年頃からのファンタジーブームの後押しも受けて流行作家となり、1995年から1997年にかけて共作も含めて長編を11作も発表した。しばしば自己模倣に陥っているとの指摘を受けている。しかし、ロシアの出版界においては商業的に成功する作品のひとつの典型として受け止められている。

ロギノフと共作した長編「Черная кровь」(1997)やルキヤネンコと共作した長編「Не время для драконов」(1997)もある。

現在はアメリカ在住で、生物学の研究者としての仕事もしながら執筆活動を続けている。近年は1998年から始めたシリーズ「Летописи Разлома」に属する作品が中心となっている。2004年のユーロコンでも表彰されるなどヨーロッパを代表する人気作家である。

## ペレーヴィン ヴィクトル・オレゴヴィチ

Пелевин, Виктор Олегович(1962～)

現代ロシア文学を代表する作家のひとり。モスクワに生まれ、モスクワエネルギー大学で電気工学を専攻し、兵役後に文学を志した。1980年代後半に雑誌「Наука и религия」に出入りし、そこでグヴォルキヤンと知り合い、チェスなどをする仲となった。この時代にすでに東洋思想、神秘思想への関心が見られた。また、1989年のダブルティのセミナーへは参加しなかったが、原稿をバベンコに渡していた。それ以前からバベンコの主催するセミナーにも参加していた。ダブルティのセミナーで披露された作品は短編「Ухряб」(1991)と短編「День бульдозериста」(1991)であった。これらは諷刺、グロテスクの作品として参加者に強い印象を残した。これらの人脈から言っても、ペレーヴィンは紛れもなくファンタスティカの作家であったと言える。デビュー作は短編「Колдун Игнат и люди」(1989)である。

発表する短編は非常に高い評価を受け、賞を続々と受賞した。短編「Реконструктор」(1990)は1990年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞、中編「Затворник и Шестипалый」(邦題『世捨て男と六本指』)(1990)は1990年の「黄金の球」賞を受賞、中編「Принц Госплана」(1991)(邦題『ゴスプランの王子さま』)は1991年のヴェリーコエ・コリツォ賞と1993年のインタープレスコン賞を受賞、短編「Бубен верхнего мира」(邦題『天界のタンバリン』)(1993)は1993年のヴェリーコエ・コリツォ賞、中編「Омон Ра」(邦題『宇宙飛行士 オモン・ラー』)(1992)は1993年のインタープレスコン賞、彼の最高傑作と謳われる長編「Чапаев и Пустота」(邦題『チャパーエフと空虚』)(1996)は1997年の遍歴者賞を受賞した。長編「Жизнь насекомых」(邦題『虫の生活』)(1993)や中編「Желтая стрела」(邦題『寝台特急 黄色い矢』)(1993)、短編「Ника」(邦題『ニカ』)(1992)も評価が高い。また、評論「Зомбификация」(初出は1990年、ニューヨークの「Новый журнал」誌、1994年に「День и ночь」誌に再掲)で1995年の遍歴者賞を受賞した。

第一作品集「Синий фонарь」(1991)は発売後直ちに売り切れ、1992年のロシア・ブッカー賞の小賞を受賞したが、この本はバベンコが指導するテキスト社「Текст」のアルファ・ファンタスティカシリーズの一冊として出された。90年代半ばには当時の新しいファンタスティカの潮流を表すキーワードとしてラザルチュークらが掲げた「ターボリアリズム」の代表的作家とみなされていた。夢や幻想に包まれた多重世界や並行世界を織り込んだ複雑な作品世界は、一方で作品中の清新な感覚と相まって独特の魅力を生み出している。90年代初頭には、ストリャロフ、リュバコフ、ラザルチューク、ヴェレルと並んでSFファンに高い支持を受けたが、「第四の波」の作家たちが80年代からおこなってきた試みのある意味で完成させたのがペレーヴィンであったと言える。

90年代末から作品の発表がやや減っているが、長編「Generation П」(1999)で2000年のカタツムリ賞を受賞した。その後、作品集「ДПП(NN)」(2003)を発表。さらに、長編「Священная книга оборотня」(2004)もベストセラーとなったが賛否両論を巻き起こした。ほかに長編「Шлем ужаса」(邦題『恐怖の兜』)(2005)、長編「Empire V」(2006)、作品集「П5」(2008)、長編「t」(2009)、作品集「Ананасная вода для прекрасной дамы」(2010)、長編「S.N.U.F.F.」(2011)、長編「Бэтман Аполло」(2013)がある。近年の作品は初期のペレーヴィンの作品の愛好者には物足りないと思われる面もあるが、同時代の素材と強く関わる彼の小説は新しい読者も獲得し続けている。

## ベレジノイ セルゲイ・ワレリエヴィチ

Бережной, Сергей Валерьевич(1966～)

サンクト・ペテルブルグ在住の評論家、編集者、ファン。セヴァストーポリに生まれ、1984年に地元のファングループに参加した。1988年に同郷のアンドレイ・チェルトコフとファングループ「Атлантис」を創設。伝説的なファンジン『オヴェルサン』「Оверсан」を発行した。その後もアンドレイ・ニコラエフとともに編集したファンジン『シジフ』「Сизиф」(1990～91)やアンドレイ・チェルトコフと編集した『インテルコミ』「Интеркомь」(1991～94)など1980年代末から90年代初頭にかけてSFファンダムをリードした。1989年に発表した評論「Сколько стоит фэн?»は、モロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」のユーレイ・メドヴェーデフが執筆したストルガツキイ兄弟を誹謗中傷する作品を「ВТО МПФ」が刊行したことに対して、「ВТО МПФ」の倫理性を鋭く問いかけた有名な評論である。

また、ラザルチュークらの作品を取めたアンソロジー「Z.E.T.」(1992)を刊行し、主としてラザルチュークの作品を中心として論じながら、ターボリアリズム運動の論客となった。その後、編集に携わった『ドヴェスチ』《Двести》(1994～96)もファンジンとしては最高水準の非常に質の高い雑誌であった。

1994年にサントク・ペテルブルグに移り、テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」に勤めた。さらにインターネット書店オゾン設立にかかわり、ウェブ上にも書評を多数執筆するなど大きな役割を果たしたが、2001年頃にオゾンを離れた。2004年から2007年にかけてはサントク・ペテルブルグの出版社アムフォラ社「Амфора」で編集者として勤めた。

インターネット上でのSFの展開に乗り出した最初期の人物で、ネットニュース「Курьер SF」を発行。また、F I D O時代にも積極的にSFのニュースを流し、閲覧者の質問に回答するなどして、幅広く活躍した。自分のサイト「Взгляд из дюзы」でも速報性の高いニュースを数多く掲載していた。

近年はSF文学よりも映画に関心を移しているが、自らもセルゲイ・ストレレツキイ(Сергей Стрелецкий)の筆名で短編を発表したりしている。

## ベレージン ウラジーミル・セルゲエヴィチ

Березин, Владимир Сергеевич(1966～)

モスクワの小説家。モスクワ国立大学理学部を卒業後、ケルン大学でも学んだ。批評家として出発したが、1996年から文芸誌『ノーヴィイ・ミール』《Новый мир》などに小説を発表し始める。長編「Свидетель」(1998)で文芸誌『ズナーミャ』《Знамя》の賞を受賞し、評価を高めた。作品集に「Свидетель」(2001)などがある。1998年から2003年にかけて書評紙「Exlibris НГ」紙に勤める。

近年ではSF専門誌『イエスリ』《Если》に短編も寄せており、活躍の場をSFのジャンルに移しつつある。

## ベレージン フョードル・ドミトリエヴィチ

Березин, Федор Дмитриевич(1960～)

ドネツク在住のSF作家。主としてアクションを主体としたボエヴィク「боевик」のジャンルで活躍する。2001年に長編「Встречный катаклизм」がエクсмо社「Эксмо」から刊行されてデビューする。さらに、続編となる長編「Параллельный катаклизм」(2002)を発表し、2005年から「Война 2030」の長編三部作を発表して人気を博す。シリーズ以外の作品では長編「Пепел」(2001)などがある。

## ペレスレーギン セルゲイ・ポリソヴィチ

Переслегин, Сергей Борисович(1960～)

サントク・ペテルブルグの批評家、社会学者。「第四の波」の理論的支柱として活躍した。レニングラードに生まれ、レニングラード国立大学理学部を卒業し、その後は法人システムのなかでの情報の伝達等の研究をしていた。1996年から1999年にかけてはロストラストで金融関係の仕事に就いていた。社会学、情報工学の立場からさまざまな団体に所属している。

SF評論については、1980年代から精力的に活動を始め、評論集「Око Тайфуна」で1996年のカタツムリ賞、遍歴者賞とインタープレスコン賞を受賞。これは「第四の波」の歴史的な意義に取り組んだ評論集で非常に注目される。

テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」から刊行されたストルガツキイ兄弟の作品集「ストルガツキイ兄弟の世界」《Миры братьев Стругацких》には、巻末に社会学と未来学を組み合わせた独自の視点を持つ評論を寄せたが、ストルガツキイ兄弟の世界の解説というよりは、ペレスレーギン自身の思想が前に出た文章になっている。この功績で1999年のカタツムリ賞を受賞した。

近年の著作としては、第二次世界大戦のノンフィクション「Тихоокеанская премьера」(2001)や地政学的著作「Самочувствие игры на мировой шахматной доске」(2006)がある。評論集「Возвращение к звездам: Фантастика и эволюция」(2010)で2011年のカタツムリ賞評論部門を受賞した。

## ポクロフスキイ ウラジーミル・ワレリエヴィチ

Покровский, Владимир Валерьевич(1948～)

オデッサ生まれの小説家。モスクワ航空大学へ進み、原子力を学んだ。卒業後はクルチャトフ記念原子力研究所に勤務した。1983年からは「Наука в СССР」誌や「НТР」紙の編集部で勤めた。当初はリアリティックな小説を書いていたが、1979年に短編「Что такое «не везет»?」でSFにデビュー。モスクワのマレエフカのセミナーで才能を認められ、「第四の波」の作家のなかでもひととき洗練されたスタイルの持ち主と言われる。代表的作品として、理性を持った爆弾が人間に開発されるも戦争が終わって無用となり、人間たちに狩られていく姿を描いた短編「Самая последняя в мире война」(1984)、入植後に地球との接触が疎遠になった遠宇宙の惑星を舞台に、現地の知的生命体との交流と適応の問題を、ストルガツキイの作品にも通ずる「進歩官」の問題意識とからめながら取り扱った、コンタクトテーマの中編「Время Темной Охоты」(1983)、致死性の伝染病と闘う特殊な職業につく主人公たちのやり切れない葛藤を華麗な文体と複雑な構成で描き、当時のロシア・ファンタスタチカ界での最高傑作との呼び声もある中編「Ганцы мужчин」(1989、完全版1991)、惑星を入植可能な状態にテラフォーミングする作業に携わる特殊部隊内の人間模様を鋭く描いた中編「Парикмахерские ребята」(1989)とその続編となる中編「Метаморфоза」(1992)、長編「Дождли на

Ямайке» (1998) などがある。

しかし、水準の高い作品を発表しながらも作品が本にまとめられる機会がなく、初の作品集《Планета отложенной смерти》が出たのは1998年のことであった。「第四の波」の作家にはこうした傾向が多く見られるが、ボクロフスキイはとりわけ本が出ない作家であった。2001年にリベツクの小出版社《Крот》から出版された作品集《Георгес, или Одевятнадцативекование》は300部しか刷られなかった。《Крот》からは2009年にも長編《Пути-Пучи》が刊行された。この作品では、各時代の預言者とその影に潜む迫害者との対決のエピソードが時代を超えて綴られ、現代の奇妙な新興宗教を舞台に成就しない愛のモチーフが描かれる。2013年には長編《Персональный детектив》が発表されたが、これも中央の出版社ではなく《Крот》社から出版され、初版は50部という非常に僅少な部数しか印刷されていない。

1990年代前半から中頃にかけて小説の発表が途絶える時期があったが、時空が不一致となった夢の世界で本来の恋人のいる世界を探す男の物語を描いた短編《Люди сна》(1997)で1998年の遍歴者賞短編部門を受賞、30歳代半ばの一定の年齢になると、なぜか見知らぬ男に殺され、また人生を何度もやり直す羽目になる男の運命を描いた短編《Жизнь Сурка, или Привет от Рогатого》(2004)で2005年のシグマ=エフ賞を受賞するなど、寡作ながら発表する作品は高い評価を受けている。短編《Перед взрывом》(2008)は、地球温暖化の対策のために部分的に核爆弾を投下するという状況下でいったん疎開したものの、親族が殺されてしまい、投下の一日前に故郷の町へ戻る少年少女の姿を描いたもので、陰惨ではあるが力強い印象を残す。

## ポトウパ アレクサンドル・セルゲエヴィチ

Потупа, Александр Сергеевич(1945~2009)

ミンスクで活躍した編集者、作家、実業家。セヴァストーポリの軍人の家庭に生まれる。モスクワ国立大学理学部を卒業し、その後はミンスクに移る。研究者として働きながら、1977年には初の単行本である科学ノンフィクション《Бег за бесконечностью》がモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》から刊行された。1988年からミンスクの雑誌《Парус》の誌面で未来学的な読物のコーナーを担当した。この雑誌を基盤として出版社エリダン社《Эридан》を立ち上げ、90年代初めのSF出版界をリードした。エリダン社《Эридан》はSF専門誌『ファンタクリム・メガ』《Фантаkrim-МЕГА》の定期的刊行のほか、ハインラインやハワードなどの作品集の刊行も精力的に手がけ、モスクワの出版社からも注目を集める存在であった。

小説の執筆も手がけ、主な著作に作品集《Ловушка в цейтноте》(1990)などがあるが、90年代半ば以降は小説の執筆はおこなわず、法律関係の仕事に携わった。2001年からはベラルーシ経営者連合会の会長も務めた。

## ポドーリヌイ ロマン・グリゴリエヴィチ

Подольный, Роман Григорьевич(1933~1990)

モスクワの編集者、小説家。モスクワ国立大学で民俗学を専攻。科学啓蒙雑誌『ズナーニエ・シーラ』《Знание – сила》の編集部に入り、20年以上にわたって腕をふるった。1956年から執筆活動を開始し、短編《Мореплавание невозможно》(1962)でSFにデビューした。60年代中頃からモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の年鑑アンソロジー『ファンタスチカ』《Фантастика》の編集も何度かつとめた。

科学読物のジャンルでは多作であったが、小説家としては大きな活躍をしたわけではなかった。一方で、『ズナーニエ・シーラ』誌の編集者として、70年代、80年代のストルガツキイ兄弟の苦境を支え、リュバコフやラザルチュークらの作品を掲載して、「第四の波」を準備した功績は大きい。SF作品に短編《Потомки делают выводы》(1966)などがある。中編《Четверть гения》(1970)は現代では忘れられた作品だが、四人で役割を分担することで一つの天才を生み出すという独特なアイデアを描いた傑作である。

## ポリソフ ウラジーミル・イワノヴィチ

Борисов, Владимир Иванович(1951~ )

翻訳家、評論家。アバカン在住。アレクサンドル・ルカーシンは小学校入学時の同級生である。1980年9月にアバカンでファンクラブ《Гонгури》を組織。月に1~2回のペースでレムやストルガツキイ兄弟を語る会やテーマ別の討論会などを開催した。メンバーにはブシコフもいた。また、《Гонгури》の児童向けの支部として《Центавр》を組織した。ストルガツキイ兄弟のファンとして高名であり、ストルガツキイ兄弟のファングループ「リュデヌイ」《Люденый》の中心的存在である。また、ガーコフ編のSF百科事典にも執筆者として関わり、「第三の波」の作家の項のほとんどを手がけた。ごく簡便ではあるが、古今東西の非常に幅広い人物を収録した、SF人名事典《Фантастика: кто есть кто》をウェブ上に発表している。ポーランドSFの翻訳家としても著名である。

## ポリヌイフ アレクサンドル・ゲンナジエヴィチ

Больных, Александр Геннадьевич(1954~ )

戦史ものの作品で知られる作家。タリンで生まれたが、のちにスヴェルドロフスクに移る。ウラ

ル工業大学を卒業。1970年代末にはクラペーヴィンが主催していたクラブに出入りし、文学活動を始める。1982年に短編「Браконьеры」でデビューする。マレエフカのセミナーにも参加した。また、中編「Костер для скорпиона」(1986)や中編「Жил-был вор」(1989)、諷刺的作品を収めた作品集「Император республики」(1990)を発表し注目を集める。ほかにファンタジー長編「Железный замок」(1995)を発表するなど、90年代半ばにはファンタジーを執筆していたが、その後はSFから離れ、1996年からは戦史もののジャンルへ移行した。

## ポレシチューク アレクサンドル・ラザレヴィチ

Полещук, Александр Лазаревич(1923~1979)

「第三の波」に属する作家。作品数は少ないが、いくつかの特色ある作品を残した。ドニエプロペトروفスクに生まれ、ハバロフスク教育大学で物理数学を修め、物理教師となった。SFへのデビュー作は長編「Звездный человек」(1957)である。

児童向けのSF中編「Великое дело, или Удивительная история доктора Механикуса и его собаки Альмы」(1959)は高い評価を受けた。中編「Ошибка Алексея Алексева」(1961)は人工の極小世界を創造しようとする主人公の姿を描いた。ほかに短編「Тайна Гомера」(邦題『ホメロスの秘密』)(1963)がある。

## ボンダレンコ スヴェトラナ・ペトロヴァ

Бондаренко, Светлана Петровна(1959~ )

ストルガツキイ兄弟の作品のファングループ「リュデヌイ」「Людени」の中心人物。2000年にドネツクのスタルケル社から刊行され始めたストルガツキイ兄弟の11巻全集の編集にあたっては中心的役割を果たした。テキスト校訂に当たってはボリス・ストルガツキイの協力のもと、ストルガツキイ兄弟の残した草稿や雑誌版との照合をおこない、現在のところもっとも権威のある全集とみなされている。

さらに全集の刊行後は、異稿を編集して「Неизвестные Стругацкие」の刊行を開始、作品の年代順に、それぞれの異稿や草稿を示し、コメントを加えた興味深い読み物となっている。第1巻と第2巻に対して、2006年のアーベエス賞が授与され、第3巻に対して、2007年のインタープレスコン賞評論部門が贈られた。現在はストルガツキイの手紙や創作ノートを編集した本の刊行にも携わっている。

## マジン アレクサンドル・ウラジミロヴィチ

Мазин, Александр Владимирович(1959~ )

ザポロジエで生まれる。レニングラード工科大学を卒業した。1994年に初の長編「Потрясатель тверди」をセヴェロ・ザパド社「Северо-Запад」から発表した。1996年にファンタジー長編「Трон императора」がアズブカ社「Азбука」とテラ社「Терра」から刊行される。さらに同様に長編「Инквизитор」(1996)をアズブカ社とテラ社から刊行。この作品はシリーズ化もされ、出版界に足がかりを築く。三部作の歴史ファンタジーシリーズ「Русский орел」に属する長編「Варвары」を2001年に発表し、人気を集める。同じく歴史ファンタジーシリーズ「Варяг」を2001年から刊行し始め、歴史ファンタジーの人気作家として活躍を続ける。

## マルティノフ ゲオルギイ・セルゲエヴィチ

Мартынов, Георгий Сергеевич(1906~1983)

1960年代の「第三の波」の先駆者。ベラルーシのグロドノという町に生まれ、14歳から働き、25歳のときにレニングラードへ移った。第二次世界大戦に従軍した。

SFへのデビュー作であり、代表作である中編「220 дней на звездолете」(1955)は、「近い標的論」「теория ближнего прицела」の作品群とは異なり、近未来を舞台にしながらも宇宙への志向を強く持った壮大なスケールの作品であり、エフレモフの『アンドロメダ星雲』に先立つ作品として注目される。その後も続編が書かれ、近世と火星への宇宙旅行を空想した三部作「Звездоплаватели」(1960)として刊行された。

他にもユートピア的な志向を明らかにした二部作「Калисто」(1957)、「Калистяне」(1960)や同傾向の長編「Гианэя」(1963)などがある。

## ミハイロフ ウラジミール・ドミトリエヴィチ

Михайлов, Владимир Дмитриевич(1929~2008)

ストルガツキイ兄弟、ブリチョフらとともに「第三の波」を代表する作家のひとり。モスクワのSF界の中心人物。モスクワに生まれたが、両親が逮捕されたために親戚を頼って1945年にリガに移り、リガのラトビア大学法学部で学んだ。検察庁に勤め、大学卒業後は雑誌「Далзис」の編集部でしばらく働いた。1963年からは新聞「Литература ун максла」紙の編集部に入ったが、数年後に編集部を追われた。ラトビア作家同盟の顧問なども務めたが、1980年代末にはペレストロイカ期を代表する雑誌「Даугава」に「Даугава」の編集長になり、ストルガツキイの『みにくい白鳥』を掲載した。SFへのデビューは1962年中編「Особая необходимость」である。

60年代後半から精力的に作品を発表し、宇宙小説の分野では特に力を発揮した。作品集《Ручей на Япете》(邦題『ヤベトの邂逅』)(1971)などがある。代表的中編《Исток》(1972)は、主人公が遠未来の、技術から解放されて子供のための遊戯場と化した地球を訪れる。この時期に発表した作品によって、ハードSF、本格SFの第一人者との評価を受けた。

「第三の波」の作家たちの多くが70年代に執筆量を減らしたのに対し、ミハイロフの筆は次第に円熟味を増していった。長編《Дверь с той стороны》(1974)は、宇宙船の乗組員が自分たちの世界とは切り離された別の世界へ行き、そこで出会った閉鎖的社会を心理学的、社会学的に考察したとされる作品である。さらにウリデミル艦長を主人公にした二部作の長編《Строж брату моему》(1976)と《Тогда придите, и рассудим》(1983)も高い評価を受けた。《Строж брату моему》では、さまざまな時代の代弁者からなる宇宙船の乗組員たちが他の惑星で文明化の活動を繰り広げるが、そこには1968年のチェコ事件の影響もうかがわれるとの指摘もある。続編の《Тогда придите, и рассудим》(1983)では主人公は銀河系的規模のふたつの超理性的存在と出会い、引き起こされた核エネルギーの実験が全世界の物理法則に影響を及ぼしてしまう姿が描かれ、80年代を代表する作品との評価を受けている。

90年代以降も新作を非常に精力的に発表し続けた。未来から過去へ時間が逆流した世界で死からよみがえった男の人間関係と心理を描いた中編《Не возвращайтесь по своим следам》(1991)は非常に評価が高い力作である。イスラム教を受容したロシアを描く歴史改変SFの長編《Вариант «И»》(1997)や破壊が迫りつつある世界の危機を知ったひとりの人間の冒険を描いた長編《Тело угрозы》(2003)などがある。中編《Путь Наюгиры》(1999)は2000年の遍歴者賞を受賞した。晩年も精力的な執筆を続け、生涯現役を貫いた。

## ミハノフスキイ ウラジーミル・ナウモヴィチ

Михановский, Владимир Наумович(1931～)

ウクライナのハリコフ出身の小説家、詩人、劇作家。ハリコフに生まれ、ハリコフ国立大学の物理数学科を卒業し、ハリコフ航空大学やハリコフ国立大学で教鞭をとる。その後、モスクワへ移る。SF以外にも冒険小説や歴史小説も執筆。SFへはウクライナ語で書かれた短編《Загадка》(1962)でデビューした。最初のSF作品集もやはりウクライナ語作品を収めた《На траверсе Бегы Лиры》(1963)である。ロシア語での第一作品集は《Тайна одной лаборатории》(1964)である。

おもに中短編で活躍しその作品は100近くにのぼるが、時局に敏感と言われ、モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》に接近し、70年代には各種アンソロジーに彼の作品が多く収録されたが、今日の評価はさほど高くない。長編には《Шаги в бесконечность》(1973)、《Самое таинственное убийство》(1999)がある。

## ミレル アレクサンドル・イサーコヴィチ

Мирер, Александр Исаакович(1927～2001)

モスクワのSF作家、批評家。モスクワ国立大学に入学するも卒業できなかった。SFへのデビュー作は1965年の短編《Будет хороший день!》である。1991年からはテキスト社《Текст》の編集部に入った。

小説の代表作は侵略テーマの長編《Дом Скитальцев》であるが、執筆は60年代に始まり、当初は《Главный полдень》(1969)として一部が発表されていたものの、1976年に《Дом Скитальцев》となり、最終的に完成されたのは1991年のことであった。この小説は丹念な描写で後続の作家に大きな影響を与えた。中編《У меня девять жизней》(1969)も有名である。

小説家としては1960年代後半から70年代初頭にかけて活躍したが、70年代に入ると評論により力を注ぎ、アレクサンドル・ゼルカロフ(Александр Зеркалов)の筆名でミハイル・ブルガーコフの研究書やストルガツキイ兄弟論など多くのSF評論を書いた。主著として《Евангелие Михаила Булгакова》(1988)や《Этика Михаила Булгакова》(2004)があり、《Евангелие Михаила Булгакова》は執筆当初は国内では出版されなかったが、アメリカなどで出版され、誠実かつ独自の分析として影響力を持った。

70年代半ばから長らく新作小説の執筆からは遠ざかっていたが、晩年には作風を変えた長編《Мост Верразано》(1998)を発表し、世間を驚かせた。

## ミロヴィドフ ボリス・アレクサンドロヴィチ

Миловидов, Борис Александрович(1950～1995)

翻訳家、批評家、書誌学者。レニングラードに生まれた。翻訳SFの書誌の充実に力を入れ、《Советская библиография》誌に精力的に発表。1990年頃からの翻訳ブームを支えた。

また、ユーリイ・フレイシマンと共に編んだ書誌《Фантастика, изданная в Ленинграде (1955-1988)》(1990)も著名である。

## メエロフ アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ

Мееров Александр Александрович(1915～1975)

SF作家。ロケット技師。ハリコフに生まれる。化学を学んだ後に、1930年代にはジェット推進研究グループの一員として活躍した。1937年に逮捕され、拷問を受けて収容所へ送られる。釈放後

はレニングラードに移った。

本格的な SF の第一作である長編《Защите 240》(1955) はさほど高い評価を受けなかったが、1962 年に発表された長編《Сиреневый кристалл》(1965) はコンタクトテーマの佳品として注目された。この一編によってソ連の SF 界に名を残した。ストルガツキ兄弟の『世界終末十億年前』の登場人物である物理学者スニエゴヴォイのモデルとも目されている。

## メドヴェーデフ ユーリイ・ミハイロヴィチ

Медведев, Юрий Михайлович(1937～ )

1970 年代半ばから 80 年代にかけてモロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の SF 部門の責任者として権勢を振るった編集者、作家。クラスノヤルスクに生まれ、モスクワのゴーリキイ文学大学を卒業した後、科学啓蒙雑誌『技術青年』《Техника - молодежи》、雑誌《Москва》、『コムソモールスカヤ・ブラウダ』紙《Комсомольская правда》といった雑誌や新聞社の編集部を渡り歩き、モロダヤ・グヴァルジヤ社に入社した。SF へのデビューはユ・クズネツォフ(Ю. Кузнецов)名義で書いた短編《Размышления над книгой》(1960) である。

1970 年代前半にセルゲイ・ジェマイチスやベーラ・クリューエワら 60 年代に活躍した編集者を追い出し、モロダヤ・グヴァルジヤ社の SF 部門を掌握したあとは SF 出版を牛耳るようになり、ストルガツキ兄弟とも激しく対立し、新しい世代の台頭を抑圧した。80 年代のある会合でメドヴェーデフが登場したときにルイバコフやストリャロフから猛然と反発を受け、退場へ追いこまれたこともある。短編《Оскар» (1977) はアンドレイ・タルコフスキへの、中編《Протеи》(1988) はストルガツキ兄弟への密告文書のようなものとみなされている。中編《Протеи》の発表後は SF ファンから激しい抗議を受けた。

70 年代後半からは愛国主義的傾向を強め、神秘主義、オカルティズムの要素の強い作品も書いたが、SF 的な要素がきわめて薄いにもかかわらず、どういいうわけか自分をエフレーモフの後継者と信じ、《Школа Ефремова》の一員とみなした。

1980 年代後半からは、ロシア SF の古典作品集の刊行に力を注ぎ、1990 年から 2000 年にかけて、全 20 巻に及ぶ叢書《Библиотека русской фантастики》を企画編集した。この叢書は中世文学から 20 世紀にいたるロシア SF の古典的作品を収録したもので、従来の文学史からは抜け落ちていた作家の作品が数多く収録されている。

## メリニク ワシーリイ

Мельник, Василий(1972～ )

エクスマ社《Эксмо》の編集者。また、ワシーリイ・ミジャン(Василий Мидянин)の筆名では本格的な SF 小説の中短編を発表し、ワシーリイ・オレホフ(Василий Орехов)の筆名では冒険アクションの要素の強い SF 作品を発表する。モスクワ生まれ。モスクワ国立出版大学を卒業し、記者や編集者として仕事をする。2000 年から 2002 年にかけてはツェントルポリグラフ社《Центрполиграф》の SF 部門に勤めた。2002 年から 2003 年にかけては SF 専門誌《Звездная дорога》の副編集長も務めた。エクスマ社から刊行されている年刊アンソロジー《Русская фантастика》、《Фэнтези》、《Городская фантастика》といったシリーズを担当し、アーエスター社《АСТ》に先行されていた SF アンソロジー市場をエクスマ社が奪い返すのに成功した。また、アンソロジーの刊行を通じて SF 中短編の発表の舞台を出版界のなかで確保したことは彼の大きな功績である。

2000 年からミジャン名義での作品を発表し始め、先鋭的な作風の新進作家として注目される。中編《Что делать, Фауст. Прогулка》(2007) の評価が特に高く、2008 年のアストレヤ賞を受賞。ほかに中編《Московские джедаи》(2007) などの作品がある。2007 年からはコンピューターゲーム《S.T.A.L.K.E.R.》の舞台を借りたノヴェライゼーションのシリーズを仕掛け、自らもオレホフ名義で長編《Зона поражения》(2007) と長編《Линия огня》(2008) を発表。《S.T.A.L.K.E.R.》ブームの火付け役となった。

## ヤクボフスキイ ミハイル・アリベルトヴィチ

Якубовский, Михаил Альбертович(1950～ )

ロストフ・ナ・ドヌーの著名な SF ファン。1970 年代後半からファン活動を始め、ファンクラブ《Притяжение》を主宰。1981 年にペルミのセミナーへ参加し、精力的に各地の SF ファンクラブとの交流を始める。1982 年にはロストフ・ナ・ドヌーでファンクラブのセミナーを開催した。これはピリニユスやユジノサハリンスクのファンクラブも参加する大規模なものとなった。

1988 年 3 月に、新たに創設された全ソ SF ファンクラブ会議の評議員に選出される。1989 年には一種の配本事業である《Фонд фантастики》をセルゲイ・ピチュツキイ(Сергей Битюцкий)とともに始め、テクスト社《Текст》などが刊行した小説を各地の SF ファンクラブに配本した。ピチュツキイとともに 80 年代 SF ファンダムを回想した《Мы не одни!》(2001) はファンの生々しい姿が伝わるロシア SF ファンダムの貴重な資料である。

## ヤグポワ スヴェトラナ・ウラジミロヴナ

Ягупова, Светлана Владимировна(1942～ )

ウクライナのシンフェローポリの小説家。クラスノダールに生まれるが、すぐに家族はアルメニ

アに疎開した。1961年にシンフェローポリへ移り、シンフェローポリ教育大学を卒業し、学校教師や記者として働く。1965年に短編「Привет из Созвездия Лебедя」を発表し、SF界にデビューする。1977年には中編「Зеленый дельфин」が単著として刊行された。さらに1979年にも作品集「Феномен Табачковой」を発表した。叙情的な作品を得意とする。1980年代を中心に活躍し、1980年からはシンフェローポリで創作講座「Фантавры」を指導した。

ほかに長編「Феникс」(1988)や短編「Берегиня」(1984)などがあるが、ソ連崩壊後はSF小説の筆を折り、児童文学の分野に力を注いだ。1993年からは児童文学専門の作品集「Крымуша」の編集にあたった。

2002年に児童向け作品「Сердоликовый ларчик, или приключения Крымуши в стране Фантаврии」を発表し、その後も作品集「Крылатая лошадка」(2006)を発表するなど、創作を再開している。

## ヤンコフスキイ ドミートリイ・ワレンチノヴィチ

Янковский, Дмитрий Валентинович(1967～)

モスクワのSF作家。セヴァストーポリに生まれたが、世界各地を放浪し、エジプトや日本にいたこともある。ツェントルポリグラフ社「Центрполиграф」などで編集者として働いたのち、1999年にデビューした。ファンタジーからハードSFまで幅広く書き分けるが、長編作家として活躍している。代表作に第三次チェチェン戦争が終結した後の近未来を舞台とした長編「Рапсодия гнева」(2000)や第三次世界大戦後に残された生物兵器をめぐる長編「Правила подводной охоты」(2003)がある。

## ユタノフ ニコライ・ユリエヴィチ

Ютанов, Николай Юрьевич(1959～)

サンクト・ペテルブルグの小説家、出版人。サンクト・ペテルブルグの出版社テラ・ファンタスタチカ社「Terra Fantastica」の社長。レニングラード国立大学を卒業後、ブルコヴォ天文台の研究員として働いた。1987年から出版事業に乗り出し、ラトヴィアのリガで協同組合方式の「Слово」という出版社を立ち上げた。1990年には出版センターとして「Corvus」の設立に関わった。1991年にテラ・ファンタスタチカ社を設立し、「第四の波」の作家たちの著作を次々と出版した。80年代からボリス・ストルガツキイのセミナーに参加した。

1996年からインタープレスコンから遍歴者賞を独立させて「Конгресс фантастов России」を開催。この大会はストランник Странник（「遍歴者」の意）の通称で呼ばれる。これはテラ・ファンタスタチカ社が一貫して主催している大会で、ファンではなくプロのための大会を標榜し、遍歴者賞はロシアのネビュラ賞を目指したと言われた。

出版業としては、1997年から、ストルガツキイの作品世界事典も含むストルガツキイ兄弟の作品集「ストルガツキイ兄弟の世界」「Миры братьев Стругацких」を刊行したのが特筆に価する。

テラ・ファンタスタチカ社は90年代中頃にはストリャロフ、エトーエフ、チェルトコフ、ベレジノイ、ペレスレーギンらサンクト・ペテルブルグのほとんどのSF関係者が何らかの関わりをもつ、非常に求心力のある出版社であり、サンクト・ペテルブルグのSF界の中心であった。

2001年からは出版社「Петербургский писатель」の代表となり、小部数ながら、コネツキイ、シェフネル、ガルキナ、カテルリ、グラーニン、ストリャロフ、ルイバコフ、ジチンスキイなどサンクト・ペテルブルグの文学者のポケットサイズの作品集を刊行しており、これも注目される。

小説家としては寡作であるが、短編「Аманжол」(1996)は1997年のカタツムリ賞を受賞した。作品集に「Оборотень」(1990)や「Путь обмана」(1996)がある。

## ユーリエフ ジノヴィイ・ユリエヴィチ

Юрьев, Зиновий Юрьевич(1925～)

諷刺を得意とした60年代のSF作家。本名はジャーマ・ユドヴィチ・グリーンマン(Зяма Юдович Гринман)。ベラルーシのヴィテプスクの村に生まれ、第二次世界大戦に従軍。戦後、モスクワ外国語大学を卒業し、英語教師を勤めた。SFへのデビューは中編「Финансист на четверенках」(邦題『四つ足になった金融王』)(1964)で果たした。映画のシナリオ作家としても活躍した。1988年には妻と共に英字雑誌「Inside Russia Guide」を創刊し、13年以上刊行を続けた。

1982年に長編「Дарю вам память」(1980)でアエリータ賞を受賞。長年にわたる功績に対して2007年にはロスコンで功労賞が贈られた。

## ラザルチューク アンドレイ・ゲンナジエヴィチ

Лазарчук, Андрей Геннадьевич(1958～)

「第四の波」を代表する作家であり、先鋭性と大衆性を兼ね備えた作家としてターボリアリズムの中心的存在であった。クラスノヤルスク出身。クラスノヤルスク医科大学を卒業し、蘇生術の専門医として勤務。最初に活字になったのは1978年に「Медик」に掲載された詩のパロディーである。小説家としては、1983年に短編「Единственная дорога」が『クラスノヤルスクイ・コムソモーレツ』紙「Красноярский комсомолец」に掲載される。雑誌初出の作品は破滅SFものの短編「Экслибрис」(1985)である。ドゥブルティイのセミナーにも参加したが、注目すべきまったく新しい存在であるとシテルンに認められた。しかし、1980年代のクラスノヤルスクのSF界はコラベリニコフやブシ



コフ、スィチなどモロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」の作家が有力であり、ラザルチュークの作品は地元では認められなかった。2000年にクラスノヤルスクからサント・ペテルブルグに移住した。

1980年代後半から90年代前半にかけて、同時代の作家のなかでももっとも精神的に作品を発表し、新しい才能の登場として歓迎された。短編「Священный месяц Ринь」（1991）で1992年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞。

80年代後半から七つの長中短編からなる連作「Опоздавшие к лету」の執筆にとりかかり、そのうちの一編である中編「Мост Ватерлоо」（1990）などを発表した。二重三重もの多層世界を執拗に描く、非常に複雑な構成を持つ大作だが、世界に翻弄される登場人物の姿を非情に描ききったロシア SF の歴史的傑作である。また、第二次世界大戦ものの歴史改変長編「Иное небо」（1993）で1994年の遍歴者賞、「Опоздавшие к лету」の一編である長編「Солдаты Вавилона」（1994）で1995年のカタツムリ賞、ウスペンスキイと共作した、ニコライ・グミリョフを主人公にしたやはり歴史改変ものの壮大な長編「Посмотри в глаза чудовищ」（1997）で1998年のインタープレスコン賞を受賞した。「Посмотри в глаза чудовищ」もロシア SF 史上に残る傑作とされる。しかし、「Посмотри в глаза чудовищ」の続編として、やはりウスペンスキイとの共作で書かれた長編「Гиперборейская чума」（1999）は前作ほどの成功を収めることはできなかった。

このほかにも現在もなお評価の高い長編「Транквилиум」（1996）や「Кесаревна Отрада между славой и смертью」（1998、2002年完全版刊行）、「Штурмфогель」（2000）といった長編を発表している。長編「Все, способные держать оружие」（1997）は「Иное небо」を改稿して再構成した作品だが、やはり、第二次世界大戦を舞台にした歴史改変小説である。中編「Там вдали, за рекой...」（1996）も評価の高い作品である。

典型的な長編型の作家で短編は稀にしか書かないが、クレムリンのなかで生き続けるレーニンのもとを遠征で訪れた児童を待ち受ける無残な運命を語る短編「Мумия」（邦題『ミイラ』）（1991）は1994年のインタープレスコン賞とカタツムリ賞を受賞。短編「У кошки четыре ноги...」（2002）は2003年のカタツムリ賞を受賞した。

近年はイリーナ・アンドロナチと共作して長編「За право летать」（2002）、「Сироты небесные」（2003）、「Малой кровью」（2005）を発表しているが、これはハインラインなどを意識した近未来を舞台にしたスペースオペラである。最近では映画のノヴェライゼーションにも手を染め、「Жара」（2006）や「Параграф-78」（2006）がある。近作に中編「Мы, урус-хан」（2006）、長編「Абориген」（2009）、長編「Спираль」（2011）、イエスの生涯を扱った長編歴史小説「Мой старший брат Иешуа」（2009）がある。

近年はロスコンなどで若手作家向けのセミナーの講師を務め、ドミートリイ・コロダンやカリーナ・シャイニャン、アレクサンドル・シラーエフ（Александр Силаев）、イリーナ・バフチナ（Ирина Бахтина）など若手作家の作品を収めたアンソロジー「Предчувствие «шестой волны»」（2007）を編集した。

## ラザレワ ナターリヤ

Лазарева, Наталья(1951～)

モスクワの小説家。モスクワエネルギー大学を卒業。技師として働き始めるが、のちに記者となり、『Знание – сила』や『Техника – молодежи』といった科学啓蒙雑誌のために働いていた。

1980年代にはマレエフカのセミナーに参加し、ビレンキンやヴォイスクンスキイの指導を受ける。小説もときおり発表していたが、2006年に初の作品集「Сон」が刊行され、幻想的な要素も含む作品として一部で高い評価を受けた。

## ラティニナ ユリヤ・レオニードヴナ

Латынина, Юлия Леонидовна(1966～)

モスクワの経済ジャーナリスト、小説家。父は詩人、母は文芸評論家の家庭に生まれる。1988年にゴリキイ文学大学を卒業した。経済ジャーナリストとしても活躍を続け、その方面の豊富な知識を生かしたスリラーとして長編「Охота на изюбря」（1999）などがある。

SFのジャンルでは長編「Сто полей」（1996）が代表作であるが、これは「Вейская Империя」というシリーズに属する。このシリーズに属する作品として、長編「Дело о лазоревом письме」（1999）や長編「Инсайдер」（1999）などがある。これらのシリーズ作品の成功のおかげで90年代後半にはかなり注目を集めたが、2000年以降はSF界ではさほど注目を集める存在ではなくなっている。近年では長編「Нелюдь」（2007）などを発表している。

## ラトケヴィチ エレオノーラ・ゲンリホヴナ

Раткевич, Элеонора Генриховна(1961～)

リガのファンタジー作家。リガに生まれる。1984年にラトビア国立大学生物学部を卒業し、学校教師などの職につく。ファンタジー中編「Ближе смерти и дальше счастья」（1991）でデビューする。中長編を収めた作品集「Наемник Мертвых Богов」が1996年に刊行される。「魔法と剣の物語」の本道を歩むような作風で、長編ファンタジー「Деревянный меч」（1997）で非常に人気を集めた。その後、この続編となる長編が2冊刊行されている。多作な作家ではないが、ほかに長編「Таэ эккейр!」

(2003)、長編《Ларе-и-т'аэ》(2004)がある。

## ラーピン ボリス・フョードロヴィチ

Лапин, Борис Федорович(1934~2005)

イルクーツクの作家。モロダヤ・グヴァルジヤ社《Молодая гвардия》の系列の作家のひとり。イルクーツクに生まれ、イルクーツク国立大学文学部を卒業後、長年にわたりドキュメンタリー映画の編集者として働いた。1952年に最初の短編《Мы встретимся здесь завтра》が最初のSF的作品とされる。初期のほかの作品に、短編《Вся мудрость мира》(1966)がある。しかし、その作品水準はおしなべて高くは評価されていない。中編《Первая звездная》(1973)が代表作とされる。作品集に《Кратер Ольга》(1968)や《Под счастливой звездой》(1978)がある。90年代以降はSFからは離れ、ミステリや普通小説を執筆した。

## ラリオノフ ウラジーミル・アレクサンドロヴィチ

Ларионов, Владимир Александрович(1956~ )

ロシアのファンタスティカ界を代表する精力的なSFファン。おもしろいものを見つける能力が抜群で、彼が現われるところがロシア・ファンタスティカ界でもっともおもしろいところである。1985年にソスノヴィ・ボールでファンクラブ《ФанТОР》を立ち上げ、多くの作家の知遇を得た。1989年にはソスノヴィ・ボールでファンツール 89 という地方コンヴェンションを開いたが、これはこの地域では初めてのコンヴェンションであった。1991年のインタープレスコンの運営にも参加。ソスノヴィ・ボール在住。

長年にわたって培われた豊富な人脈をいかしたインタビューには定評がある。そうしたインタビューを収めた《Беседы с фантастами. Интервью разных лет》(2008)がある。書評集《Фантастика нулевых лет》(2012)により、2013年のインタープレスコン賞評論部門を受賞。ゼロ年代にはウクライナのSF専門誌であるキエフのSF専門誌『レアリノスチ・ファンタстички』誌《Реальность фантастики》の編集者としても活躍した。

## ラリオノワ オリガ・ニコラエヴナ

Ларионова, Ольга Николаевна(1935~ )

サンクト・ペテルブルグを代表するSF作家のひとりで、「第三の波」を代表する作家。本名はオリガ・ニコラエヴナ・チデマン(Ольга Николаевна Тидеман)。レニングラードに生まれ、レニングラード国立大学の理学部を卒業後、技師として勤めた。SFへのデビュー作は《Киска》(1964)である。2000年からモスクワの親戚のもとへ移る。

アイデアを重視する作風が多かった1960年代前半の傾向とは異なり、いち早く文学性の高い作品を目指した。長編《Леопард с вершины Килиманджаро》(1965)は「第三の波」を代表する作品のひとつである。メロドラマ的な物語の枠を使いながら、地球の全人類の死の日付が記された未来の文書を手に入れた宇宙船の物語が展開される。60年代の作品は作品集《Остров мужества》(1971)に収められた。70年代は作品の発表の機会が少なくなり、第2作品集が出版されるのは1981年の《Сказка королей》まで待たなければならなかった。

70年代以降も短編を中心に作品を発表し続け、《Соната звезд. Анданте》(1981)や《Соната моря》(1985)などソナタシリーズの短編は有名である。このシリーズの成功で1987年のアエリータ賞を受賞した。

スペースオペラの長編《Чакра Кентавра》(1988)も読者の人気を博した。90年代に入っても作品の発表は続け、長編《Евангелие от Крэга》(1998)、長編《Лунный негодярь》(2005)などがある。

## リヴァドヌイ アンドレイ・リヴォヴィチ

Ливадный, Андрей Львович(1969~ )

娯楽冒険SF小説長編を量産する人気作家。プスコフ在住。1980年代から執筆を始め、1992年には父に資金提供してもらって作品集《Планета Голубых Дьяволов》を刊行した。23世紀から29世紀の未来史シリーズ《История Галактики》に属する作品を1997年から発表し始めた。2013年までに発表した長編は60を超えるなど驚異的な速度で執筆を続けている。

## リャプノフ ボリス・ワレリヤノヴィチ

Ляпунов, Борис Валерьянович(1921~1972)

書誌学者、評論家、小説家。モスクワに生まれる。モスクワ航空大学を卒業し、記者として働く。1946年の段階ですでに19世紀末から1945年にかけて出版された欧米とソ連のSFの文献目録《Научная фантастика》を編纂していたが、そのまま出版できず、改訂版が1958年に出版された。さらにSF評論《В мире мечты》(1970)を刊行した。これは手際よくSFの歴史についてまとめた好著である。没後にその改訂版《В мире фантастики》(1975)が刊行された。ベリャーエフの作品集の刊行に当たっても尽力した。

## リュバコフ ヴャчесラフ・ミハイロヴィチ

Рыбаков, Вячеслав Михайлович(1954～ )

「第四の波」の中心的な作家。レニングラードに生まれ、レニングラード国立大学で東洋学を修めた。ボリス・ストルガツキイのセミナーに参加し、SFへのデビューは短編「Великая сушь」(1979)で果たした。ボリス・ストルガツキイとはきわめて近い関係にあり、核戦争後の地球を描くロプシヤンスキイの映画『死者からの手紙』のシナリオもボリス・ストルガツキイと共作した。ロプシヤンスキイの映画『みにくい白鳥』のシナリオも、監督と共同で執筆している。

リュバコフは同世代の「第四の波」の作家のなかでも、もっとも早くから注目され、高い評価を受けた作家であった。破滅後の世界でつる狂気を描いた短編「Зима」(1987)、破滅後の世界と救世主の到来について描いた中編「Первый день спасения」(1986)、やはり破滅を間近に控えた小集団が敵の追及を逃れて砂漠を渡ろうとする際の芸術と芸術家の運命を描いた短編「Носитель культуры」(1989)(邦題『文化を担うもの』)など、ソ連崩壊を前にして黙示録的なテーマを繰り返して取り上げた。そのほかにも掌編ながら強い印象を残す「Ветер и пустота」(1988)、中編「Доверие」(1989)、中編「Не успеть」(1989)、70年代前半には原案が書かれていた中編「Вода и кораблики」(1992)などがある。

1990年代に入ると長編へ移行した。作者自身も愛好する、愛をテーマとして取り上げた長編「Очаг на башне」(1990)は心理描写などに冴えを見せた秀作で、後に書かれた「Напротив человек」(1997)、2001年のアーベエス賞を受賞した「На чужом пиру」(2000)とともに三部作をなす。さらに、最高傑作との呼び声も高い長編「Дерни за веревочку」は1997年のカタツムリ賞長編部門を受賞している。

歴史改変ものを得意とし、スターリンらソ連の指導者たちがもっと賢明で人道的であった世界を描く短編「Давние потери」(1989)のほか、ロシア革命も世界大戦も起きなかった世界で、寛容な帝政が現在まで存続しているユートピア的な改変世界を舞台にしたミステリ仕立ての代表的長編「Правила Цесалевича」(1993)は1993年のヴェリーコエ・コリツォ賞、1994年のインタープレスコン賞、カタツムリ賞を受賞した。

短編の発表は少なくなったが、歩行中に交通事故にあった主人公が死の直前に時間の感覚が伸び、過去を追憶しながら思いを語る短編「Смерть Ивана Ильича」(1997)で1998年のインタープレスコン賞を受賞、短編「Возвращения」(2000)で2001年のカタツムリ賞を受賞している。

評論活動も旺盛で、「Кружась в поисках смысла」で1995年のカタツムリ賞を受賞している。評論やインタビューを収めた「Напрямую」(2008)も注目される。

また、ホルム・ヴァン・ザイチック(Хольм Ван Зайчик)というオランダ出身の中国史家が残した小説を翻訳したという設定で、イーゴリ・アリーモフとともに「ユーラシア・シンフォニー」「Евразийская симфония」シリーズの長編「Дело жадного варвара」(2001)、「Дело независимой дервищей」(2001)、「Дело полку Игореве」(2001)、「Дело Лис-оборотней」(2001)を立て続けに四作刊行し、2002年のインタープレスコン賞を受賞。歴史改変に遊戯性を加え、大きな話題となった。続編に「Дело победившей обезьяны」(2003)、「Дело судьи Ди」(2003)、「Дело непогашенной луны」(2005)がある。

近年では執筆量が落ちているが、長編「На будущий год в Москве」(2003)や長編「Звезда Полюнь」(2007)、長編「Се, творю」(2010)などの作品がある。中編「Стажеры как предчувствие」(2009)は2010年インタープレスコン賞中編部門を受賞。

## ルカーシン アレクサンドル・パヴロヴィチ

Лукашин, Александр Павлович(1951～ )

ペルミのファンクラブ「Рифей」(1978～92頃)のメンバー。クラブには作家のエヴゲーニイ・フイレンコもいた。書誌学者。ハカス自治州の小学校に通ったが、ウラジーミル・ボリスフは入学時の同級生である。1968年にトムスク国立大学に入学したが、卒業はしなかった。1976年にペルミ国立大学を卒業した。その後、ペルミの新聞社や出版社で編集者として活動。

1981年にペルミで開催されたセミナー「平和と人間性のシンポのためのファンタスチカ」に地元のファンとして参加し、ロストフ・ナ・ドヌーのファンであるヤクボフスキイらと交流した。

アレクサンドル・ベリャエフの研究として知られ、長らく再版されなかった作品も加えたベリャエフ選集の発行に尽力した。

## ルキーン エヴゲーニイ・ユリエヴィチ

Лукин, Евгений Юрьевич(1950～ )

ヴォルゴグラード在住の作家。現代ロシア・ファンタスチカを代表する作家のひとり。オレンブルグの俳優の家に生まれ、ヴォルゴグラード教育大学を卒業後、学校教師をしたり工場勤めをしたりした。1980年から1990年まで地方紙「Волгоградская правда」で働く。詩人、歌手としても活躍したが、1975年から妻リュボーフィ・アレクサンドロヴナ・ルキーナ(Любовь Александровна Лукина)(1950～1996)とコンビを組んで作品を書き始め、1981年に短編「Каникулы и фотограф」でデビューした。作品では、独特の卑近で卑小な小市民の姿が描かれ、1980年代にすでに短編の名手として認められた。

読者、プロ双方からの評価が非常に高い作家であり、1986年のヴェリーコエ・コリツォ賞を「Не верь глазам своим」(1986)で受賞したのを皮切りに数多くのSF賞を受賞している。しかし、1980

年代には作品集は刊行されなかった。

1990 年前後には中編を精力的に執筆した。この時期の中編《Миссионеры》(1989) は非常に名高い作品である。中編《Сталь разящая》(1992) もこの時期の彼らの代表作である。中編《Вторжение》(1990) は 1990 年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞した。

1994 年にコンビを解消し、エヴゲーニイがソロで作品を発表するようになった。ソロになってからの活躍はさらにめざましく、1996 年には中編《Там, за ахероном》(1995) でインタープレスコ賞とカタツムリ賞を受賞。1998 年にも中編《Тупапау, или сказка злой жене》(1997) で再びインタープレスコ賞とカタツムリ賞を受賞。2004 年には中編《Чушь собачья》(2003) でインタープレスコ賞とポルタル賞を受賞。

1990 年代後半には長編の執筆にも意欲を見せた。初の長編は《Разбойничья злая луна》(1997) であるが、この後も続々と長編を発表した。代表的長編であるグロテスク・ファンタジー《Катали мы ваше солнце》(1998) は 1999 年のインタープレスコ賞を受賞、社会風刺を利かせた長編《Зона справедливости》(1998) も 1999 年のカタツムリ賞を受賞、長編《Алая аура протопарторга》(2000) も 2001 年のインタープレスコ賞を受賞するなど、90 年代後半からその勢いは止まることがなかった。

しかし、彼の本領はやはり長編ではなく中短編にあると見られている。短編《Словесник》(1996) で 1997 年のインタープレスコ賞と遍歴者賞をダブル受賞、仕事中毒が犯罪とされる社会でのひとりの男の有様をグロテスクに綴った短編《В старане заходящего солнца》(1999) (邦題『日の沈む国で』) は 2000 年のインタープレスコ賞、カタツムリ賞、遍歴者賞の三冠を達成した。2001 年も《Приснившийся》(2000) でインタープレスコ賞の短編部門を受賞し、短編の名手の名をほしいままにしている。

彼はイリフ&ペトロフの衣鉢を継ぐ作家とみなされることもあるが、そのユーモアはなかなか辛辣で、朝起きると超能力が身についていた男も仕事に遅刻するなど、日常生活の規範から逃れられない執着心の強い小市民を容赦なく描く。その一方で中長編になると確かな構成員を見せ、非常に緊迫感のある力強い作品を描く。

幻想的な中編《Чушь собачья》(2003) は 2004 年のインタープレスコ賞とポルタル賞を受賞。連作長編《Портрет Кудесника в юности》(2004) は 2005 年のインタープレスコ賞とアーベーエス賞を受賞したが、短編作家としての素質を生かしながら長編に仕立てたこの作品は作家の代表作となりそうである。さらに続編の作品集として《Штрихи к портрету кудесника》(2005) が刊行されている。これらの作品は《Алая аура протопарторга》と同一の世界が舞台となっている。近年の SF 賞の常連で、中編《Бытие наше дырчатое》(2007) は 2008 年のポルタル賞、カタツムリ賞、シグマ=エフ賞、ロスコン銀賞、フィリグラニ賞、アストレヤ賞などを受賞、中編《Лечиться будем》(2008) は 2009 年のシグマ=エフ賞キール・ブリュショフ記念部門、ロスコン銀賞、アーベーエス賞、フィリグラニ賞を受賞、中編《С нами бот》(2008) は 2009 年のシグマ=エフ賞、ロスコン金賞、ポルタル賞、インタープレスコ賞、アストレヤ賞などを受賞。短編《Чичероне》(2009) は 2010 年のインタープレスコ賞を受賞。中編《Педагогическая поэма второго порядка》(2012) と短編《Призраки》(2012) により 2013 年のインタープレスコ賞の中編部門と短編部門をダブル受賞。中編《Аренда》(2013) は 2014 年ロスコンの中短編部門を受賞。あまりにも数多くの賞を取り過ぎて、近年の SF 賞はルキーン、ディヴォフ、グロモフらでほとんど占められていると指摘を受けるほどである。

2002 年にはこれまでの功績が認められ、アエリータ賞を受賞した。また、評論活動も旺盛で、評論《Декрет об отмене глагола: манифест партии национал-лингвистов》(1997) で 1998 年のインタープレスコ賞、カタツムリ賞を受賞した。

## ルキヤネンコ セルゲイ・ワシリエヴィチ

Лукьяненко, Сергей Васильевич(1968～ )

現代ロシア SF を代表する作家であり、もっとも人気のある作家。カザフスタンのカラタウの医師の家系の家に生まれ、アルマ・アタ国立大学で精神医学を修めた。しかし、早くから SF に目覚め、1988 年からの 2 年間に 8 つの中編と 40 の短編を書いたという。SF へのデビューは短編《Нарушение》(1988) で、アルマ・アタの《Заря》という雑誌に掲載された。

その後は新聞社や SF 雑誌《Чудеса и диковины》の編集部などに勤めていたが、作品集《Атомный сон》(1992) が 1993 年のスタート賞を受賞し、さらに、ゴードディングの『蠅の王』を連想させると評され、作家自身はクラビーヴィンに捧げると述べる長編《Рыцари Сорока Островов》(1992) で読者の注目を集めた。1994 年から専業作家となり、「Принцесса стоит смерти」、《Планета, которой нет》、《Стеклоанное море》の三編からなる三部作《Лорд с планеты Земля》(1994) や二部作《Линия грез》(1996) と《Императоры иллюзий》(1996) からなるシリーズ《Императоры иллюзий》が非常に人気を博した。サイバーパンクの傾向が強いと目される長編《Лабирин отражений》(1997) とその続編《Фальшивые зеркала》(1999) は読者の支持も高く、彼の作品のなかでもっとも評価の高い部類に入る。《Фальшивые зеркала》は 2000 年のインタープレスコ賞長編部門を受賞した。

ヒロックファンタジー、スペースオペラ、サイバーパンクなど器用にさまざまな傾向の作品を書き分けるが、読者からの支持が非常に高い作家であり、投票で選ぶ賞では無類の強さを発揮する。

ベクマンベドフ監督による映画も大きな話題を呼んだ代表的長編《Ночной дозор》(1998) (邦題『ナイト・ウォッチ』) は 1999 年の遍歴者賞を受賞したが、これは一概にどれが善か悪かを識別しがたい複雑な均衡状態での光と闇の闘争を壮大なスケールで描きながら、一方では敵味方入り乱れた緻密な駆け引きが魅力的な作品である。ウラジーミル・ワシリエフと共作した続編《Дневной Дозор》

(2000) (邦題『デイ・ウォッチ』) も人気を博し、さらに続編「Сумеречный дозор」(2003) と最終編「Последний дозор」(2005) が書かれて四部作となった。しかし、それで完結せず、2012 年には新作長編「Новый дозор」が発表された。

このほかに長編「Спектр」(2002) は、2003 年のインタープレスコン賞、カタツムリ賞、遍歴者賞、ロスコン金賞、ズヴォズヌイ・モスト賞、シグマ=エフ賞と実に 6 つの賞を受賞するという非常に高い評価を受けた。近作の長編「Черновик」(2005) も非常に人気が高く、続編として長編「Чистовик」(2007) が書かれた。オンラインゲーム「Starquake」のノヴェライゼーションとして書かれた長編「Конкуренты」(2008) も新展開として注目される。ファンタジー長編「Недотепа」(2009) もある。

短編にも力を注ぐ作家であり、日本ものの歴史改変短編「Фугу в мундире」(1993) (邦題『未調理のフグ』) は 1995 年のインタープレスコン賞を受賞、ファンタジー短編「Слуга」(1995) でも 1996 年のインタープレスコン賞を受賞、コンタクトテーマの短編「Вечерняя беседа с господином особым послем」(邦題『特別大使との夕暮れの会談』) (2000) は 2001 年の遍歴者賞を受賞した。短編「От судьбы」(2001) も 2002 年のインタープレスコン賞、短編「Кровавая оргия в марсианском аду」(2004) でも 2005 年のインタープレスコン賞を受賞するなどインタープレスコン賞との相性は非常によい。短編「Сердце снарка」(2005) では 2006 年のシグマ=エフ賞、フィリグラニ賞を受賞。短編は長編に比べるとストレートな展開が光っている。

共作も数多く、ユーリイ・ブルキンと共作した長編三部作「Остров Русь」(1997) やニーク・ペルモフとの共作長編「Не время для драконов」(1997) などがある。

近年は創作のペースを意識的に落とし、多くても年に 2 冊までと決めているようだが、新しい作家の養成にも力を入れ、モスクワの SF 界の中心的存在となっている。

## ルキヤノフ アレクセイ

Лукьянов, Алексей(1976～ )

サンクト・ペテルブルグの小説家。ペルミ州の農村で育ち、ソリカムスキイ教育大学で学ぶ。軍役後はさまざまな職についたが、現在は鉄工作業員として働いている。2000 年に雑誌「Уральский новь」に作品が掲載されて作家デビューを果たした。

歴史改変の要素を含む代表的中編「Спаситель Петрограда」(2004) が、2006 年に同作品が表題作の作品集としてアムフォラ社「Амфора」から刊行されると読書界に非常に大きな反響を巻き起こし、2006 年の新プーシキン賞を受賞した。中編「Глубокое бурение」(2008) で 2009 年のカタツムリ賞を受賞。中編「Высокое давление」(2010) により 2011 年のカタツムリ賞も受賞した。

## ルコジャノフ イサイ・ボリソヴィチ

Лукодянов, Исai Борисович(1913～1984)

→ヴォイスクンスキイ エヴゲーニイ・リヴォヴィチの項を参照。

## ルデンコ ボリス・アントノヴィチ

Руденко, Борис Антонович(1950～ )

モスクワの小説家。モスクワ自動車鉄道大学を卒業し、技術者として軍需産業で働く。その後は警官として 16 年間勤めていたが、さらにジャーナリストに転じ、「Наука и жизнь」誌に入った。SF へのデビューは 1978 年の短編「Вторжение」であり、科学啓蒙雑誌「技術青年」「Техника - молодежи」に掲載された。

その後、マレエフカのセミナーに参加し、ヴォイスクンスキイの薫陶を受け、SF 小説を書いていたが、1989 年に推理小説に転じた。ミステリでの代表作として、長編「Всегда в цене」(1994)、長編「Исполнитель」(1995)、長編「Смерть откладывается на завтра」(1995) のほか、多数の著作がある。ミステリ界でも 90 年代半ばにはかなりの人気を博した。

2003 年から SF 専門誌「Иеусри」(「Если」) の勧めで再び SF に手を染め、短編「Без проблем!」(2003) や中編「Перекресток」(2005) などいくつかの中短編を書いている。2005 年には初の SF 長編「Те, кто против нас」が出版された。

## ルバノフ アンドレイ・ヴィクトロヴィチ

Рубанов, Андрей Викторович(1969～ )

モスクワの小説家。モスクワ国立大学ジャーナリスト学部を卒業し、新聞記者や建設労働者、運転手や警備員などさまざまな職を経験する。1999 年から 2000 年にかけてはチェチェンで働く。2005 年に長編「Сажайте, и вырастет」を発表してデビューを果たす。22 世紀のモスクワを舞台にしたアンチユートピア的長編「Хлорофилия」(2009) は SF 界でも大きな反響を呼んだ話題作である。その続編の「Живая земля」(2010) や長編「Боги богов」(2011) の評価も高い。

## ルービナ ディーナ・イリイニチナ

Рубина, Дина Ильинична(1953～ )

イスラエル在住の小説家。ウリツカヤやスラヴニコワなどと並んで、ロシア語の現代女性文学を代表する作家のひとり。ハリコフ生まれの父がタシケントに疎開していた両親のもとへ戻ったとき

に、ポルタヴァ生まれの母と出会って結婚して生まれた。タシケント音楽院を卒業。1978年から1984年にかけてはウズベキスタン作家同盟付属の文学団体で働く。1990年にイスラエルへ移住。移住後はロシア語新聞の「Наша страна」の付録紙「Пятница」の編集にも携わった。現在はイスラエルのマアレ・アドゥンミーム在住。

小説家として、雑誌『ユーノスチ』「Юность」に掲載された短編「Беспокойная натура」(1971)でデビューする。1980年に作品集「Когда же пойдет снег...?」がタシケントで出版される。1990年代後半から小説を精力的に執筆し始めた。タシケント時代を題材にした長編「На солнечной стороне улицы」(2006)が小説家としての代表作。SF作家ではないが、長編「Почерк Леонардо」(2008)が2009年のポルトガル賞を受賞してSF界からも注目を浴びた。

## ルリエ サムイル・アロノヴィチ

Лурье, Самуил Аронович(1942～)

サンクト・ペテルブルグの随筆家、批評家。スヴェルドロフスクに生まれる。レニングラード国立大学文学部を卒業した。学校教師などをしたのち、1966年からは文芸誌『ネヴァ』「Нева」の編集部に入る。著作に長編小説「Литератор Писарев」(1987)がある。1993年にズヴェズダ賞、1997年にヴァセムスキイ賞を受賞している。

文芸誌『ネヴァ』「Нева」の編集部に長らく勤め、ストルガツキイ兄弟の作品の掲載に関わったほか、ボリス・ストルガツキイのセミナーの作家たちを後援し、1990年代初めから中頃にかけてはストリャロフやリュバコフを高く評価し、多くの作品を誌面に掲載した。エッセイストとしての活躍も多く、「Толкование судьбы」(1992)、「Разговоры в пользу мертвых」(1997)、「Муравейник」(2002)などがある。批評家として非常に尊敬を集める存在である。近作にエッセイ集「Такой способ понимать」(2007)がある。

## レヴァ イーゴリ・ユリエヴィチ

Ревва, Игорь Юрьевич(1965～)

バクーのSF作家。バクーに生まれ、高等教育は受けずに記者として働く。2002年に作品集「Возвращение」と長編「Последнее заклятие」が刊行されてデビューを果たす。これらの作品はシリーズ化され、ほかに長編「Сила Бессмертных」(2003)などがある。

## レヴィチ フセヴォロド・アレクサンドロヴィチ

Ревич, Всеволод Александрович(1929～1997)

1970年代から80年代を代表するSF評論家。モスクワ生まれ。モスクワ国立大学文学部を卒業。学校教師を経て、『文学新聞』「Литературная газета」、雑誌「Литературное обозрение」、雑誌「Советский экран」の編集者として働いた。さらに全ソビエト映画芸術宣伝部長、モスクワ映画センター長なども勤めた。短編「Tet-a-tete」(1964)でSF界にデビューしたが、創作はほとんどおこなわなかった。1970年代から各種年鑑アンソロジーなどに評論を寄稿し、SF評論家としての地位を築く。ストルガツキイ兄弟の作品に関してはよき理解者として接した。一方で、モロダヤ・グヴァルジヤ社「Молодая гвардия」の専横に対しては激しく抵抗した。

ロシア革命期から90年代にいたるまでのロシアSFの歩みを描いた評論「Перекресток утопий」(1998)は非常にすぐれた著作であり、ときに「60年代人」的だと評されることもあるが、特に1930年代から1960年代にかけての時期の記述は精彩に富んでいる。

## レゴスタエフ アンドレイ・アナトリエヴィチ

Легостаев, Андрей Анатольевич(1961～)

本名はアンドレイ・アナトリエヴィチ・ニコラエフ(Андрей Анатольевич Николаев)。レニングラードの労働者の家庭に生まれる。レゴスタエフは小説家としてのペンネームであり、ファン活動や編集者として活動するときは本名を使う。幼少期からのSFファンで、趣味が高じて作家となった。1988年にレオニード・レズニク(Леонид Резник)とともにボリス・ストルガツキイのセミナーに参加し、ファンジン『イズメレーニエ・エフ』「Измерение Ф」を発行、アレクサンドル・シドロヴィチらと知り合う。1990年にレズニクがイスラエルへ移住したことをきっかけにファンジンは改名され、「СИЗИФ」となった。この雑誌を基盤として、インタープレスコンやカタツムリ賞の創設に深く関わった。

1994年からはベレジノイとともに伝説的なファンジン『ドヴェスチ』「Двести」の編集に携わったが、4号出したところで、レゴスタエフは編集から手を引いた。

SFへのデビューは短編「Железные мышцы」(1990)である。その後、ファン活動を続けながら、90年代中頃からファンタジー長編に手を染めた。1998年のインタープレスコンで長編三部作「Наследник Алвисада」(1997)に対し、新人賞が与えられた。

## レザノワ ナターリヤ・ウラジミロヴナ

Резанова, Наталья Владимировна(1959～)

ニージニイ・ノヴゴロドのSF作家、ファン。ゴーリキイに生まれ、ゴーリキイ大学の文学歴史

学部を卒業。ゴーリキイのテレビ局や出版社に勤めた。1980年代末から作品の発表を始め、ノートンやムアコック、デュ・モーリアの翻訳も手がけた。ニューニイ・ノヴゴロドのファンクラブ「Параллакс」を主宰し、1990年から94年にかけてはフロクス社「Флокс」の編集者としてSF出版の分野で活躍し、ゴロワチョフやミハイロフの著作を刊行した。1994年から2002年にかけてはニューズレター形式のファンジン「Славная подруга」を発行。書評家としても活躍している。

90年代後半からは本格的に長編も発表し始め、「Последняя крепость」(1999)で2000年のスタート賞を受賞。ほかに長編「Кругом одни принцессы」(2005)、短編「Тигры Вероны」(2008)などがある。

## ロイフェ アレクサンドル・ミハイロヴィチ

Ройфе, Александр Михайлович(1967～)

モスクワの編集者、評論家、小説家。モスクワ無線電気オートメーション工科大学を卒業。書評紙「Книжное обозрение」の編集部に1993年から2002年まで勤め、SF部門の責任者として活躍した。ロイフェが編集部にいた時代の「Книжное обозрение」紙はSF界の動向を知るうえでも非常に重要な資料であったし、影響力も大きかった。また、多くのSFファンを筆者として起用し、書評や記事の執筆の機会を与えた。

2002年からSF誌「Звезная Дорога」の編集長となったが、この雑誌は商業的には大きな成功を収めることはできなかった。

1999年の遍歴者賞を編集部部門で受賞。2001年にはヴィタリイ・ブグロフ賞も受賞した。近年はウェブ上に氾濫する海賊版テキストに対抗する手段として、信頼できる電子テキストの商品化を企画し、ウェブサイト「Публикант.ru」の運営に携わったりしている。

## ロギノフ スヴァトスラフ・ウラジミロヴィチ

Логинов, Святослав Владимирович(1951～)

「第四の波」を代表する作家。ロギノフはペンネームで、本来の姓はヴィトマン(Витман)。レニングラードで育ち、レニングラード国立大学で化学を学んだあと、技師や荷役などさまざまな職についた。ボリス・ストルガツキイのセミナーには1974年の創設当初からの参加者であり、めきめきと力をつけた。1980年代にはマレエフカのセミナーにも参加した。

「第四の波」の作家のなかでは認められたのが比較的早く、短編「Цирюльник」(1983)は1983年のヴェリーコエ・コリツォ賞を受賞した。この作品も含めて、中世を舞台にしたファンタジー的作品を得意とするほか、ショートショート(ミニアチュール)の名手としても知られ、1998年にはインタープレスコ賞のショートショート部門を短編「Антиникотиновое」で受賞している。しかし、単行本が刊行されたのは1990年になってからのことであった。

また、早くからホラーやファンタジーといった領域に関心を寄せた作家でもある。短編「Дом у дороги」(1991年の作品集に収録)はロシアにおけるホラー短編としては先駆的作品とも言われ、ファンタジー短編「Старж Перевала」(1988)は一種のサイエンスファンタジーだが、『指輪物語』などがロシア語に翻訳されて大衆的な人気を得る以前の段階のものとして注目される。

1995年のインタープレスコ賞長編部門、ベリヤーエフ賞などを受賞した「Многорукый бог далайна」(1995)はロシア独自のファンタジーを創造した点で画期的な作品であった。四方を壁に囲まれた閉鎖的な沼沢の世界ラインで繰り広げられる善悪の神の闘争のなかで、悪の神に虐げられるばかりの住民のなかから沼地を陸地に変えるという特殊な能力を持つひとりの英雄が誕生し、世界の秩序に挑戦しながら遍歴を続けるというこの長編は英米のSFとは異質のファンタジーとなったが、後続のロシアのファンタジー作品と比べても今なおその独創性が際立っている。その独創性は彼自身の無神論的な気質から来ている部分も多いと考えられる。

その後も歴史SFの長編「Колодезь」(1996)、長編「Картежник」(2000)などを発表。2003年には宗教色を排して死後の世界を描いた「Свет в окошке」で遍歴者賞長編部門を受賞し、再び脚光を浴びた。その後の作品に長編「Россия за облаком」(2007)がある。長編へ移行した作家が多い「第四の波」の作家のなかでは精力的に短編の執筆を続け、サンクト・ペテルブルグのSF専門誌『Полдеニ・21世紀』誌「Полдень, XXI век」などに現在も作品を多く発表している。短編「Лес господина графа」(2005)で2006年のインタープレスコ賞を受賞。短編「Барская пустошь」(2006)で2007年にもインタープレスコ賞を受賞した。中編「Ось мира」(2010)は2011年のインタープレスコ中編部門を受賞。

スペースオペラへの関心も強く、長編「Имперские ведьмы」(2004)などがある。ほかに、ニーク・ペルモフと共作した長編「Черная кровь」(1996)もある。

ファンタジーに関しては一家言をもっており、評論「Русское фэнтези-новая золушка」で1999年のインタープレスコ賞を受賞した。

## ロソホワツキイ イーゴリ・マルコヴィチ

Росоховатский, Игорь Маркович(1929～)

キエフの作家、詩人。ウクライナのシボルという町に生まれ、キエフ教育大学言語文学部へ進んだあとに科学ジャーナリストとして活躍した。1954年に詩人として出発したが、1958年に最初のSF短編「Море, бушующее в нас」(1958)を発表した。

60年代初頭に活躍した他の作家と同様に、自然科学的テーマを取り上げるハード SF の旗手として注目を浴びた。代表的短編《Встреча в пустыне》(邦題『砂漠の出会い』)(1961)は砂漠に現われた立像をめぐる、情感豊かなコンタクトテーマの作品。ほかに短編《Объект «Б-47»》(1961)や短編《Ураган》(1976)などがある。

サイバネティクスに関心を持ち、この方面での啓蒙的著作もある。中編《Гость》(1979)もこのテーマを、ユーモアをまじえて扱ったもので、映画化もされた。

## ロマネツキイ ニコライ・ミハイロヴィチ

Романецкий, Николай Михайлович(1953～)

サンクト・ペテルブルグの SF 作家、編集者。レニングラード工科大学を卒業。技師として長らく働いていたが、1985年からボリス・ストルガツキイのセミナーに参加。その後、マレエフカやドゥブルティのセミナーにも参加した。SF へのデビューは1987年に短編《Третье имя》で果たした。1989年から専業作家。主な長編に《Убьем в себе Додолю》(1996)、《Везунчик》(2001)などがある。

旺盛なファン活動で知られ、1999年からはアーベールエス賞の選考委員も務め、サンクト・ペテルブルグの SF 専門誌『Бордени・21世紀』誌《Полдень, XXI век》の編集にも携わっている。同誌に掲載していた評論をまとめた評論集《Тринадцать мнений о нашем пути》(2009)で2010年のカタツムリ賞とインタープレスコン賞の評論部門で受賞。2010年のイワン・エフレモフ賞も受賞した。

## ワシリエフ ウラジーミル・ニコラエヴィチ

Васильев, Владимир Николаевич(1967～)

ニコラエフ出身の SF 作家、歌手。愛称ヴォーハ(Воха)。もともとは熱心なファンで、ヒロイックファンタジーからサイエンスファンタジー、サイバーパンク、スペースオペラまであらゆるジャンルにまたがって小説を執筆している。1987年に短編《12 минут каждую неделю》がニコラエフの地方紙《Ленинское племя》に掲載されてデビューした。1991年には中編《Без страха и упрека》がヴォルゴグラードで出版された。1996年に初のヒロイックファンタジー長編《Клиники》が刊行された。当初はサイバーパンクの影響を受け、中編《Сердца и моторы》(後に《Горячий старт》と改題)(1997)などを書いた。

ルキヤネンコのヒット作《Ночной дозор》の続編としてルキヤネンコと共作した《Дневной дозор》(2000)で2001年のロスコン金賞を受賞した。連作《Ведьмак из Большого Киева》はファンからの支持も高い。第一作品集《Абордаж в киберспейс》(1997)のほか、《Смерть или слава》(1998)、《Волчья натура》(1999)や《Черная эстафета》(1999)といった長編がある。グロモフと共作した長編《АНТАРКТИДА ONLINE》(2004)で2005年のカタツムリ賞を受賞。近作にスペースオペラ長編《Никто, кроме нас》(2005)などがある。現在はモスクワに移っている。SF 界での功績に対して2009年のアエリータ賞を受賞した。

長編《Охота на дикие грузовики》(1997)の世界を舞台にしたサイエンスファンタジーの《Большой Киев》シリーズが読者の熱い支持を受けるようになっており、中短編集として《Ведьмак из Большого Киева》(2003)と《Ведьмачье слово》(2009)が刊行されている。現在ではこれが彼の代表作とみなされている。

ミュージシャンとしての活動も行っており、ズヴォズヌイ・モストではコンサートが開かれたこともある。

## ワトーリン ドミートリイ・セルゲエヴィチ

Ватолин, Дмитрий Сергеевич(1973～)

ロシア SF の巨大情報サイト「ルースカヤ・ファンタスチカ」《Русская фантастика》の管理者。スヴェルドロフスク生まれ。モスクワに移り、1996年から「ルースカヤ・ファンタスチカ」を主宰。ストルガツキイ兄弟やブリュチョフ、ルィバコフ、ロギノフ、ゴロワチョフ、グロモフ、ルキヤネンコ、ワシリエフなどの公式ホームページのほか、作品の電子テキストや各種評論、コンヴェンションの写真やレポートなど莫大な量の文献、資料を総合的に集めた統合サイトを構想し、世界各国にミラーサイトが設けられるまでに育て上げた。その功績に対し、2000年の遍歴者賞など、いくつもの賞が授与されている。

## ワフタンギシヴィリ イラクリイ・ニコラエヴィチ

Вахтангишвили, Ираклий Николаевич(1958～)

グルジア生まれの SF ファン、編集者。トビリシでファン活動をした後、1988年からは全ソ SF ファンクラブ会議の代議員に選出される。当時は全ソ新進 SF 作家創作協会《ВТО МПФ》との関わりを強めて活動した。ソ連崩壊後はキエフに移住。2003年からキエフの SF 専門誌『Реальность фантастики』誌《Реальность фантастики》を刊行し、編集長を務めたが、2009年夏に彼が体調を崩すと雑誌も休刊してしまった。この雑誌はモスクワの SF 専門誌『イエースリ』《Если》、サンクト・ペテルブルグの SF 専門誌『Бордени・21世紀』誌《Полдень, XXI век》と並んで勢いのあるファンタスチカ専門誌であっただけに休刊が惜しまれる。



## ワルシャフスキイ イリヤ・ヨシフォヴィチ

Варшавский, Илья Иосифович(1908~1974)

ユーモアと機知にあふれる作風で「第三の波」を代表する短編作家。ソビエト SF というよりも英米 SF に近いセンスを持つと当時から評された。その容貌も手伝って、ベーラ・クリューエワからは「海の狼」と呼ばれた。

キエフで生まれたが、1920年代初めにペトログラードへ移った。商船に乗り込み、その後も技師として工場に勤めた。若い頃は俳優も志し、フェクスに出入りしていたこともある。妻は極東共和国の大統領アレクサンドル・クラスノシチョーコフの娘であり、オシップ・ブリークの養女となったルエラである。第二次世界大戦時は幼児期に頭部を負傷したときの影響で前線送りを免れたが、レニングラードからの移送時にラドガ湖で船が沈み、泳いで岸までたどり着くもドイツのスパイと疑われて銃殺寸前の危うい場面に陥り、結局、逮捕されて1949年までアルタイに送られた。釈放後はレニングラードへ戻り、勤めていた工場へ復帰した。

小説に手を染めたのは早く、各地の航海体験などを基にして、1929年にニコライ・アリジム(Николай Альдим)名義で、ニコライ・スレプニョフ(Николай Слепнев)と実兄のドミートリイ・ワルシャフスキイ(Дмитрий Варшавский)と共作した「Вокруг света без билета」を発表した。その後は文学活動から遠ざかっていたが、1962年にロボットものの短編「Роби」で突然、SF界に現われた。

文学活動への復帰後は次々と短編を発表し、その数は100近くにのぼる。靴にごく短い短編を入れて持ち歩いていたらしく、当時レニングラードに滞在していたレムが、ワルシャフスキイのかばんにはあらゆる欧米のSFが入っていると驚いたという逸話もある。欧米のSFで使われた設定やアイデアを再利用しながら洗練させるスタイルを武器にした。代表作として短編「Петля гистеризиса」(1968)、主な作品集に「Молекулярное кафе」(1964)、「Человек, который видел антимир」(1965)、「Солнце заходит в Дономаге」(1966)などがある。短編「Гревожных симптомов нет」(邦題『憂慮すべき徴候なし』)(1964)短編「В атолле」(邦題『環状珊瑚島』)(1965)や短編「Фиапка」(邦題『すみれ』)(1966)などの評価が高い。

70年代初めからレニングラードで若手作家向けのセミナーを開いたが、この種のセミナーの指導者としてはワルシャフスキイが先駆者となった。ワルシャフスキイの死後、ボリス・ストルガツキイがレニングラードでセミナーを開くことになった。

## ワルタノフ ステパン・セルゲエヴィチ

Варганов, Степан Сергеевич(1964~ )

モスクワ国立大学で生化学を学ぶ。1994年からカナダのハリファックス在住。1988年に短編「Город Трора」が雑誌「Уральский следопыт」に掲載されてSF界にデビューした。ファンタジー中編「Белая дорога」(1990)は初期の作品のなかでは評価が高い。ロシア語によるファンタジーが少ない中での貴重な作品であった。

90年代半ばには作品の発表が途絶えていたが、1998年にサイエンスファンタジーの長編「Смерть взаимны」を発表し、再び脚光を浴びた。さらに同一設定の中短編を3作書き継ぎ、2002年には本格SF長編「Эй-Ай」を発表し、いずれも好評であったが、その後は再び作品の発表が途絶えた。10年の沈黙を破ってサイエンスファンタジーの長編「Маятник」(2012)を発表。2013年にも長編「Демоны Алой розы」を発表し、ともに高い評価を受ける。派手なアイデアや厳しいスタイルはないが、良質のファンタジーを書く作家として重要である。

## ワレンチノフ アンドレイ

Валентинов, Андрей(1958~ )

ハリコフ在住の小説家、評論家。歴史上の実在の人物を取り上げたファンタジー色の強い作品を書く。本名はアンドレイ・ワレンチノヴィチ・シマリコ(Андрей Валентинович Шмалько)。歴史学専攻の大学講師。1995年に「Преступившие」でデビューしたが、この小説はのちに三つの三部作、計九巻からなる歴史ファンタジーシリーズ「Око Силы」(1995~97)に組みこまれた。この作品は20世紀の歴史を再解釈したもので、偽史的作品的な代表的なものとしても取り上げられる。この開幕編の三部作で1997年のスタート賞とファンコン賞を受賞し、作家として順調なスタートを切った。

1999年にはオルジ、ジャチェンコらと共作した長編「Рубеж」を執筆。2005年にも同じ顔合わせで長編「Пентакль」を発表するなど、非常に執筆量は旺盛で、デビュー以来10年間で20余りの長編を発表している。近年ではオルジと共作した「Алюмен」シリーズ(2008~09)で長編「Механизм Времени」などを発表している。

本名で評論活動を非常に積極的に行っているが、ジャンル意識に強く訴えかける挑発的な鋭い論点のものが多く、ファンの支持も高い。2000年のズヴォズヌイ・モストでの講演をもとにした評論「Кто в гетто живет?」も有名である。